構井・阿弥陀堂遺跡

——茅野有料道路内埋蔵文化財発掘調査報告——

1983

茅野市教育委員会

構井・阿弥陀堂遺跡

——茅野有料道路内埋蔵文化財発掘調査報告——

1983

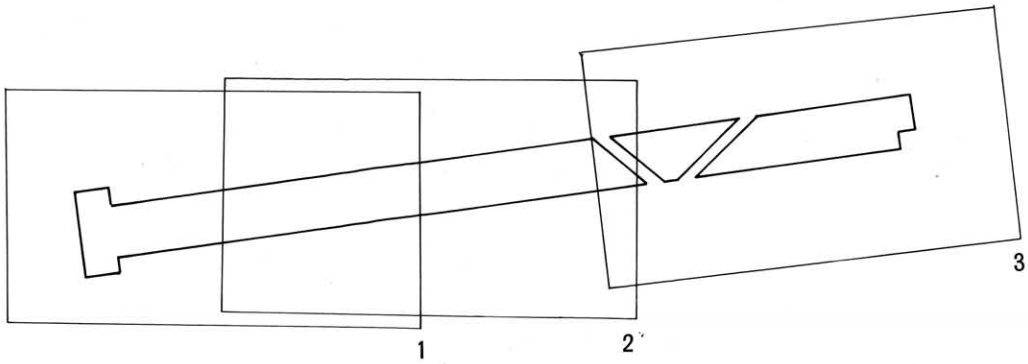
茅野市教育委員会

構井・阿弥陀堂遺跡周辺の空撮（1982年８月４日撮影）

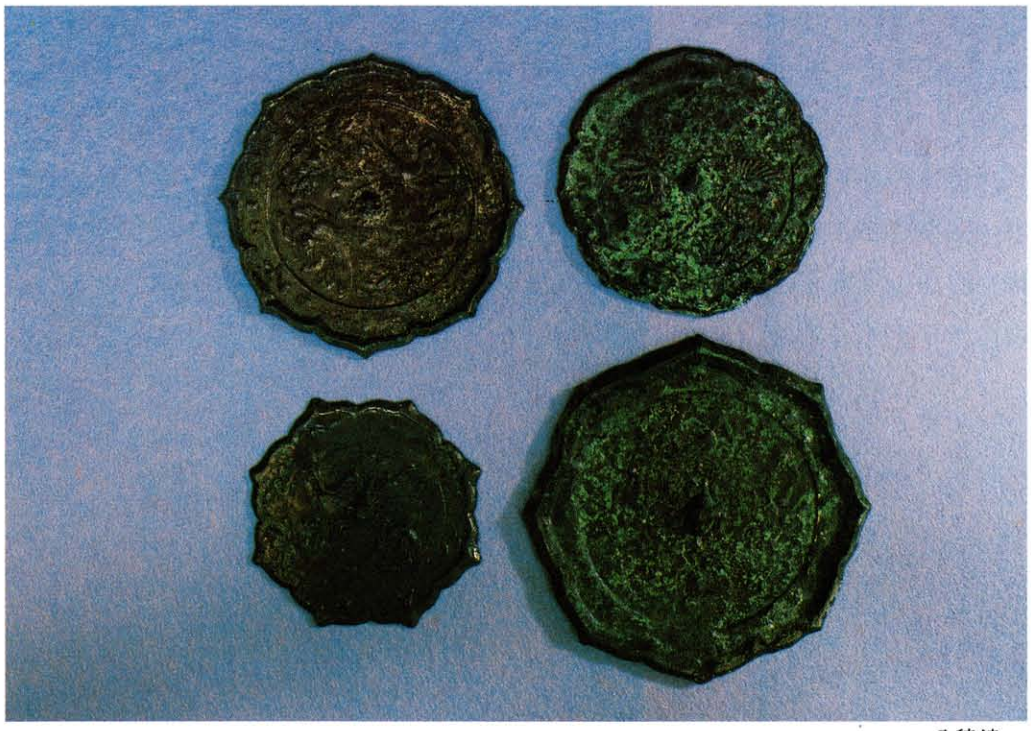
遺跡空撮写真　1

遺跡空撮写真　2

遺跡空撮写真　3



八稜鏡出土状態



八稜鏡

序

構井・阿弥陀堂の２遺跡の発掘調査は、中央高速道路と蓼科有料道路を結ぶ茅野有料道路の建設にともない、長野県道路公社・長野県諏訪建設事務所の委託をうけて市教育委員会が実施したものである。

遺跡は永明寺山裾から上川沖積地にかけての低位段丘面の水田地帯に立地し、遺跡の多い茅野市においても、このような立地環境をもつ遺跡の大がかりの発掘ははじめてであり、その成果は大いに期待されるところであった。前年度の予備調査により遺構の埋蔵は予測されるところであったが、発掘区全面から縄文時代中期・弥生時代・平安時代の住居址、土壙、溝状遺構等が発見され、この遺跡の重要性が改めて立証された。発掘は道路敷のみであったため、水田下に眠る遺構の全体像を把握することが不可能で、今後の解明にまつものもあったが、出土例の珍らしいとされる八稜鏡が４点も出土したことは、この地が古代史の上に重要な位置を占める証左として注目されるところである。古墳や牧、諏訪大社との関りの深いちの・宮川地区の調査は、従来工事等による偶然の発見にともなうものが多かったが、今回の発掘の成果は、茅野の古代史の空白をうめるものとして貴重な資料を提供したものといえよう。そして、この報告書が多くの方々に活用されて、今後の遺跡調査や文化財保護に役立つことを心から希うものである。

発掘にあたり工事主体者である県道路公社、諏訪建設事務所及び関係の皆様の深いご理解とご助力により、予定期間内に無事終了できたことを心からお礼申し上げたい。また、梅雨時から炎天下にかけての困難な発掘作業に従事していただいた調査団の皆様、そして遺物整理、出土品復元、報告書の作製にあたられた方々のご努力に対し深く感謝申し上げる。

昭和58年３月

茅野市教育委員会

教育長　小　島　与四男

例　言

1　本書は茅野有料道路及び都市計画街路建設に伴なう構井・阿弥陀堂遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は茅野市教育委員会が長野県道路公社、諏訪建設事務所より委託を受け行ったものである。

3　発掘調査は昭和57年5月24日から9月28日まで行い、出土品の整理及び報告書作成は昭和57年10月から昭和58年4月まで茅野市尖石考古館において行った。

4　発掘から報告書作成にいたる過程で、沢田正昭・宮坂光昭の諸氏に御教示を賜わった。また、遺物整理にあたっては宮坂篤夫・柳平嘉彦両氏の協力を得た。ここに記して深く感謝の意を表したい。

5　本書は宮坂虎次・守矢昌文で分担執筆し山田真子・樋口公男が補助した。
執筆と項目の関係は以下のとおりである。
宮坂虎次……第Ⅰ章・第Ⅱ章・第Ⅲ章・第Ⅵ章。
守矢昌文……第Ⅳ章・第Ⅴ章。

6　集石等の測量は中央航業株式会社に依頼し航空測量で行った。

7　出土品・諸記録は茅野市尖石考古館で保管している。

目　次

序　文
例　言
第Ⅰ章　調査経緯…… 1
第Ⅱ章　調査経過…… 2
第Ⅲ章　遺跡概観…… 7
第Ⅳ章　遺構および遺物…… 10
第1節　縄文時代の遺構と遺物…… 10
第2節　弥生時代の遺構と遺物…… 24
第3節　平安時代の遺構と遺物…… 51
第4節　中世・近世の遺構と遺物…… 124
第5節　構井遺跡の遺構と遺物…… 129
第Ⅴ章　調査の成果と課題…… 137
第1節　縄文時代中期後半の集落について…… 137
(1)　竪穴住居址について…… 137
(2)　集落立地について…… 138
第2節　弥生時代後期の集落について…… 138
(1)　竪穴住居址について…… 138
(2)　集落立地について…… 142
第3節　平安時代の出土遺物と集落…… 142
(1)　土器について…… 142
(2)　八稜鏡について…… 146
(3)　竪穴住居址について…… 148
(4)　集落立地について…… 149
第Ⅵ章　結　語…… 151

挿図目次

第１図　遺跡位置図…… 4
第２図　構井・阿弥陀堂遺跡発掘調査区図…… 5
第３図　遺跡を中心とした小字名図…… 6
第４図　構井・阿弥陀堂遺跡と周辺の遺跡…… 9
第５図　第１号住居址……11
第６図　第１号住居址出土土器……12
第７図　第１号住居址出土石器及び土製品……13
第８図　第18号住居址……14
第９図　第18号住居址出土土器……15
第10図　第18号住居址出土土製品……16
第11図　第18号住居址出土石器……16
第12図　第20号住居址……17
第13図　遺構外出土土器……18
第14図　遺構外出土石器(1)……20
第15図　遺構外出土石器(2)……21
第16図　遺構外出土石器(3)……21
第17図　遺構外出土石器(4)……22
第18図　第４号住居址……25
第19図　第４号住居址出土土器……26
第20図　第８号住居址……27
第21図　第８号住居址出土土器……27
第22図　第12号住居址……28
第23図　第12号住居址出土土器……29
第24図　第15号住居址……30
第25図　第15号住居址出土土器……31
第26図　第15号住居址出土石器……31
第27図　第16号住居址……32
第28図　第16号住居址出土土器 ……33
第29図　第16号住居址出土石器……33
第30図　第19号住居址……35

第31図　第19号住居址出土土器……36
第32図　第23号住居址……37
第33図　第23号住居址出土土器……37
第34図　第24号住居址……38
第35図　第24号住居址出土土器……39
第36図　第25号住居址……40
第37図　第25号住居址出土土器……40
第38図　第26号住居址……41
第39図　第26号住居址出土土器……42
第40図　第36号住居址……44
第41図　第36号住居址出土土器……45
第42図　第37号住居址……46
第43図　第37号住居址出土土器……46
第44図　壺棺（土壙２）……47
第45図　壺棺……48
第46図　遺構外出土土器……49
第47図　遺構外出土土製品……50
第48図　遺構外出土石器……50
第49図　第２号住居址……51
第50図　第２号住居址出土土器……52
第51図　第３号住居址……53
第52図　第３号住居址カマド……54
第53図　第３号住居址出土土器……55
第54図　第５号住居址……57
第55図　第６号住居址……58
第56図　第６号住居址出土土器……59
第57図　第６号住居址出土鉄製品……59
第58図　第７号住居址……61
第59図　第７号住居址出土土器……62
第60図　第７号住居址出土石製品……62
第61図　第９号住居址……63
第62図　第９号住居址出土土器……64
第63図　第９号住居址カマド出土石器……64
第64図　第10号住居址……66

第65図　第10号住居址出土土器(1)……68
第66図　第10号住居址出土土器(2)……69
第67図　第10号住居址出土土器(3)……70
第68図　第10号住居址出土鉄製品……71
第69図　第11号住居址……76
第70図　第11号住居址カマド……76
第71図　第11号住居址出土土器……77
第72図　第11号住居址出土鉄製品……78
第73図　第13号住居址……80
第74図　第13号住居址出土土器……81
第75図　第14号住居址……85
第76図　第14号住居址出土土器……85
第77図　第17号住居址……87
第78図　第17号住居址出土鉄製品……87
第79図　第21号住居址……88
第80図　第22号住居址……88
第81図　第22号住居址出土土器……89
第82図　第27号住居址……91
第83図　第27号住居址出土土器……92
第84図　第28号住居址……93
第85図　第28号住居址出土土器……94
第86図　第28号住居址出土鉄製品……94
第87図　第29号住居址……95
第88図　第29号住居址出土土器……96
第89図　第30号住居址……97
第90図　第30号住居址カマド……98
第91図　第30号住居址出土土器……98
第92図　第31号住居址……99
第93図　第32号住居址……100
第94図　第32号住居址出土土器……101
第95図　第33号住居址……102
第96図　第33号住居址出土土器……103
第97図　第33号住居址出土鉄製品……103
第98図　第34号住居址……105

第99図　第34号住居址出土土器…… 106
第100図　第34号住居址出土鉄製品…… 106
第101図　第35号住居址…… 106
第102図　建築址1…… 107
第103図　建築址2…… 108
第104図　建築址3…… 109
第105図　建築址4…… 110
第106図　柱穴列1…… 111
第107図　溝1・2・3・4…… 112
第108図　溝1出土土器…… 112
第109図　溝1・2・3・4の土層断面図…… 113
第110図　溝2出土土器…… 114
第111図　溝2出土和鏡・鉄製品…… 115
第112図　溝4出土土器…… 117
第113図　溝4出土和鏡…… 118
第114図　第1～28号土壙…… 119
第115図　第29～34号土壙…… 120
第116図　遺構外出土土器…… 122
第117図　暗渠遺構断面図…… 124
第118図　遺構外出土土器…… 125
第119図　遺構外出土石製品…… 128
第120図　遺構外出土古銭…… 129
第121図　第3号住居址…… 130
第122図　第3号住居址出土土器・石器…… 131
第123図　第4号住居址…… 132
第124図　第4号住居址出土土器…… 133
第125図　第1号住居址…… 135
第126図　第1号住居址出土土器…… 136
第127図　遺構外出土石器…… 136
第128図　弥生時代住居址の分類について…… 140
第129図　住居址内礫の散在状態（第16号住居址）…… 141
第130図　住居址長軸方向…… 142
第131図　出土墨書土器片…… 143
第132図　第Ⅲ期供膳形態分布図…… 145

第133図　第Ⅳ期供膳形態分布図…… 145
第134図　第Ⅴ期供膳形態分布図…… 146
第135図　建築址・柱穴列配置図…… 149

図版目次

図版1　遺跡全景
図版2　1　遺跡近景　2　遺跡近景
図版3　遺跡遺構全景1
図版4　遺跡遺構全景2
図版5　遺跡遺構全景3
図版6　遺跡遺構全景4
図版7　遺跡遺構全景5
図版8　遺跡遺構全景6
図版9　遺跡遺構全景7
図版10　遺跡遺構全景8
図版11　遺跡遺構全景9
図版12　遺跡遺構全景10
図版13　1　第1号住居址　2　三角壔形土製品出土状態
図版14　1　第18号住居址　2　第20号住居址
図版15　1　第4号住居址　2　第8号住居址
図版16　1　第12号住居址　2　第16号住居址
図版17　1　第19号住居址　2　第23号住居址
図版18　1　第24号住居址　2　第26号住居址
図版19　1　第36号住居址　2　第37号住居址
図版20　1　第37号住居址土器出土状態　2　壺棺（第2号土壙）
図版21　1　壺棺内土層状態　2　第2号住居址
図版22　1　第3号住居址　2　第7号住居址
図版23　1　第10号住居址　2　第11号住居址
図版24　1　第28号住居址　2　第29号住居址
図版25　1　第30号住居址　2　第32号住居址
図版26　1　第33号住居址　2　第34号住居址

図版27　1　第30号住居址カマド石組　　2　第33号住居址カマド石組
図版28　1　溝２内八稜鏡出土状態(遠景)　　2　溝２内八稜鏡出土状態(近景)
図版29　1　第30号住居址内八稜鏡出土状態(近景)　　2　溝２内礫検出の状態
図版30　1　溝３内礫検出の状態　　2　建築址４
図版31　1　土壙29～30　　2　構井第１号住居址
図版32　1　構井第３号住居址　　2　構井第４号住居址
図版33　出土土器・石器（縄文時代）
図版34　出土土器・石器（弥生時代）
図版35　出土土器（平安時代）
図版36　出土土器（平安時代）
図版37　出土土器
図版38　八稜鏡
図版39　1　青白磁器片　　2　天日陶器片
図版40　1　瀬戸系陶器片　　2　菊花皿
図版41　1　擂鉢片　　2　近世陶器片

第Ⅰ章　調査経緯

中央自動車道西宮線は、茅野市域においては遺跡の無い宮川・上川の氾濫による沖積地を横切り、八ヶ岳西南麓台地末端からのびる微高地形に立地する御射宮司遺跡を過ぎると、遺跡の多い山麓台地へ入る。これら諸遺跡の調査は中央道遺跡調査会により昭和53年に終了し、その後中央道工事は急ピッチで進捗して、昭和56年度３月に供用開始となった。

この中央道から蓼科・白樺湖方面に通ずる道路の開設は関係者の強い要望であったが、蓼科有料道路に接続する茅野有料道路（通称山の手バイパス）が計画され、57年９月には着工されることになった。

路線は宮川新井地籍から分岐して上川沖積地を東に進み、上原の段丘崖を断ち切り、国道20号線・国鉄中央線を横断して、永明寺山麓にひろがる沖積段丘面を蓼科有科道路へと達するものである。

遺跡分布図でみると、この路線は埋蔵文化財のないところであるが、これは、この一帯の開発が極めて早く、古くからの水田地帯で、地表からの観察では発見され難かったためである。近時諸開発により遺構・遺物が発見されて（永明中学校々庭・帝国通信工業KK敷地・国鉄官舎敷地）遺跡の埋蔵される可能性の極めて大きいことが判って来た。

昭和54年８月、県文化課丸山敞一郎指導主事が八ヶ岳西南麓遺跡分布調査のため来市の際にこのことについて話し合い、調査の必要が確認されていた。そして昭和55年に入り、県文化課・県道路公社・茅野市教育委員会の三者立合いにより現地調査を行うことが文化課より連絡された。

８月27日、県文化課臼田武正指導主事、茅野有料道路工事事務所長由井氏、宮沢所長補佐、茅野市教育委員会矢島社会教育課長、長田文化財係長、尖石考古館宮坂、茅野市建設課担当者により現地調査が行われた。当日も用地内の畑に遺物が散見されて発掘調査すべきことが再確認された。

試掘調査は昭和55年11月19日より12月５日まで県道路公社の委託を受けて茅野市教育委員会が行ない構井遺跡、阿弥陀堂遺跡の確認ができた。

この試掘調査の結果に基づき、調査を要する面積は約3,000㎡を対象とし昭和57年５月24日より本調査を実施した。

第II章　調査経過

本調査に先立ち昭和55年11月19日から12月５日に渡り試掘調査を実施した。調査は道路予定地全ての地域に地番ごとにＡ～Ｎとし、２ｍ×２ｍの試掘区を設定し遺構の有無の確認を行った。

本調査は試掘調査の結果より道路予定地大半に渡り遺構が存在する事より道路敷全てを発掘対象とした。構井遺跡については住宅等により遺跡の大半が破壊されており試掘の結果に基づき地番967-１を中心に調査を行った。

調査は道路センターを基線として設定し、北側よりＡ～Ｎとしてこれに直交する線を１～74とし２ｍ×２ｍのグリッドを設定した。地形の都合上地番2478-1～2485-5までをＩ区、地番2488-1をII区とした。構井遺跡については地番967－1にグリッドを設定し、グリッド設定は道路センターを基線として行いセンター杭№46を基点として１～13までを設定した。

５月25日より発掘作業を開始し７月２日までにＩ区の調査を終了し、II区の調査の継続して行ない全ての遺構検出終了後に測量の段取りとした。尚、遺構平面測量については大規模な集石を伴なう溝等の検出より航空測量を導入することにし実施した。

発掘調査日誌抄

昭和57年５月24日　(月)　構井・阿弥陀堂遺跡発掘調査の鍬入式を挙行する。

５月25日　(火)～29日　(土)　発掘区の表土剝ぎ作業を重機を導入して行なう。削除土層は第１層（耕作土）、第２層（水田床土）までとする。

５月31日　(月)　調査区Ｉ区にグリッド設定を行なう。

６月２日　(木)　発掘作業開始第３層（黒色土）の削除作業を進め遺構確認を行なう。

６月５日　(土)　グリッドＩ区28列付近までの第３層削除作業がほぼ完了し、住居址１号、２号、３号が確認される。

６月８日　(火)　１号住居址西壁床上より三角壔形土製品が出土する。

６月16日　(水)　10号住居址までの検出ができ10号住居址内より耳皿が出土する。

６月22日　(火)　Ｉ区Ｈ－37、38グリッドを中心に宋銭が５枚出土する。

６月29日　(火)　Ｉ区Ｈ－50グリッドを中心に集石を伴なう溝状の遺構を確認する。

６月30日　(水)　Ｉ区Ｈ－50グリッドの溝内より八稜鏡が１面出土する。

７月２日　(金)　26号住居址までの調査が終了する。

７月３日　(土)　調査区Ｉ区西側堰に分断される地番2488-1をII区としグリッド設定を行なう。

７月５日　(月)　II区の第３層剝ぎ作業を行ない遺構確認作業を行なう。

7月7日　(水)　II区より続々住居址が確認される。II区1号住居址から7号住居址まで。

7月10日　(土)　II区1号住居址覆土上より八稜鏡が3枚重なった状態で出土する。

7月14日　(木)　発掘現場にて構井・阿弥陀堂遺跡調査委員会開催。

7月16日　(金)　構井遺跡両角洋治氏宅庭を中心にグリッド設定を行なう。

7月21日　(水)　I区より遺構全体の清掃作業を開始し、航空測量に備える。

7月28日　(水)　航空測量の予定日であったが天候のため中止となる。夕方より夜半にかけて豪雨。

7月29日　(木)　昨日の豪雨により遺構は冠水状態となり終日排水作業に追われる。

7月31日　(土)　再度航空測量天候のために中止となる。

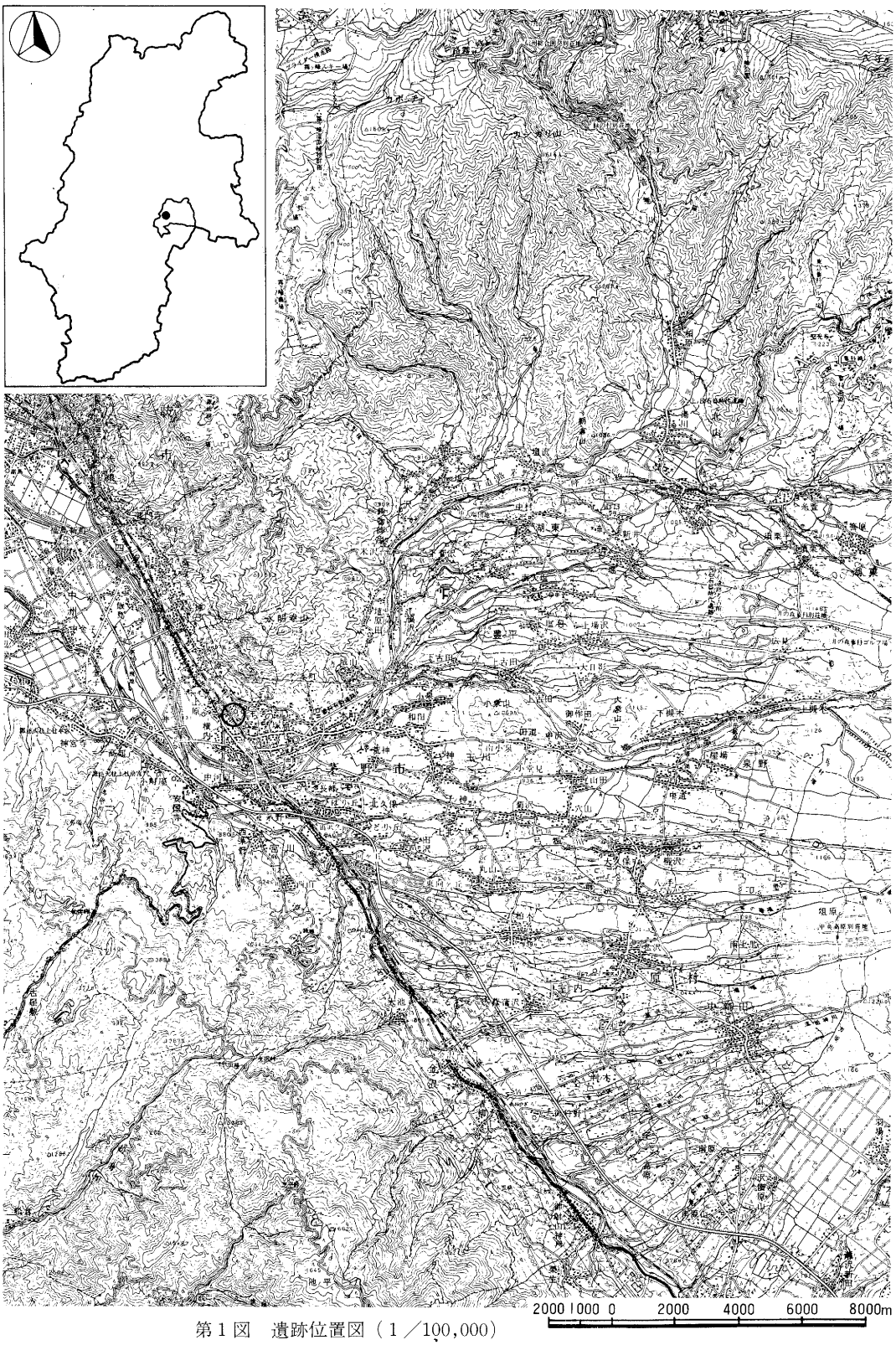
8月4日　(水)　航空測量を実施する。

8月5日　(木)　II区1号住居址よりカマド等の測量を実施する。

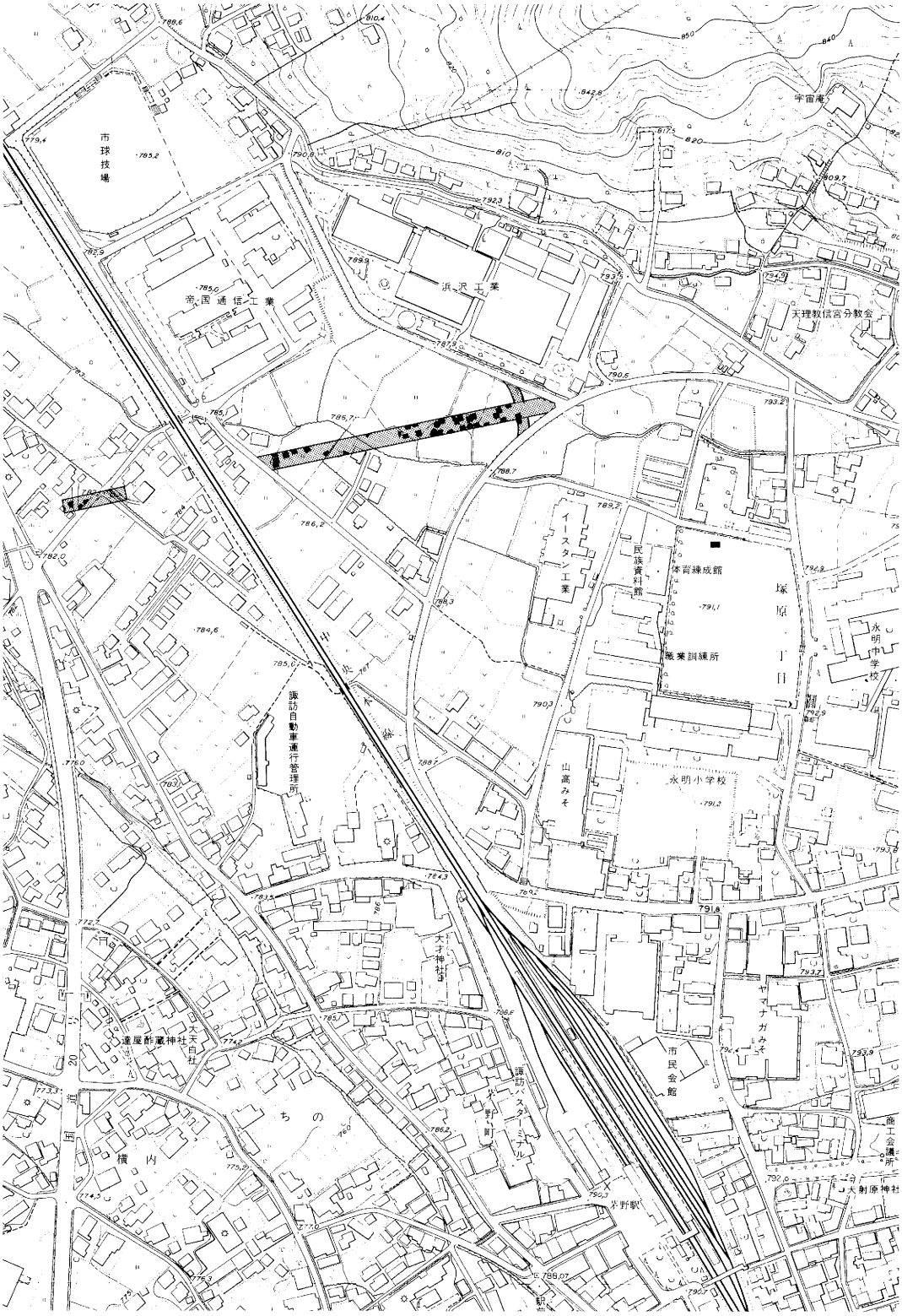
8月22日　(日)　市民を対象としての構井・阿弥陀堂遺跡見学会を行なう。参加者約80名。

8月26日　(木)　構井遺跡まで全ての遺構測量を完了する。

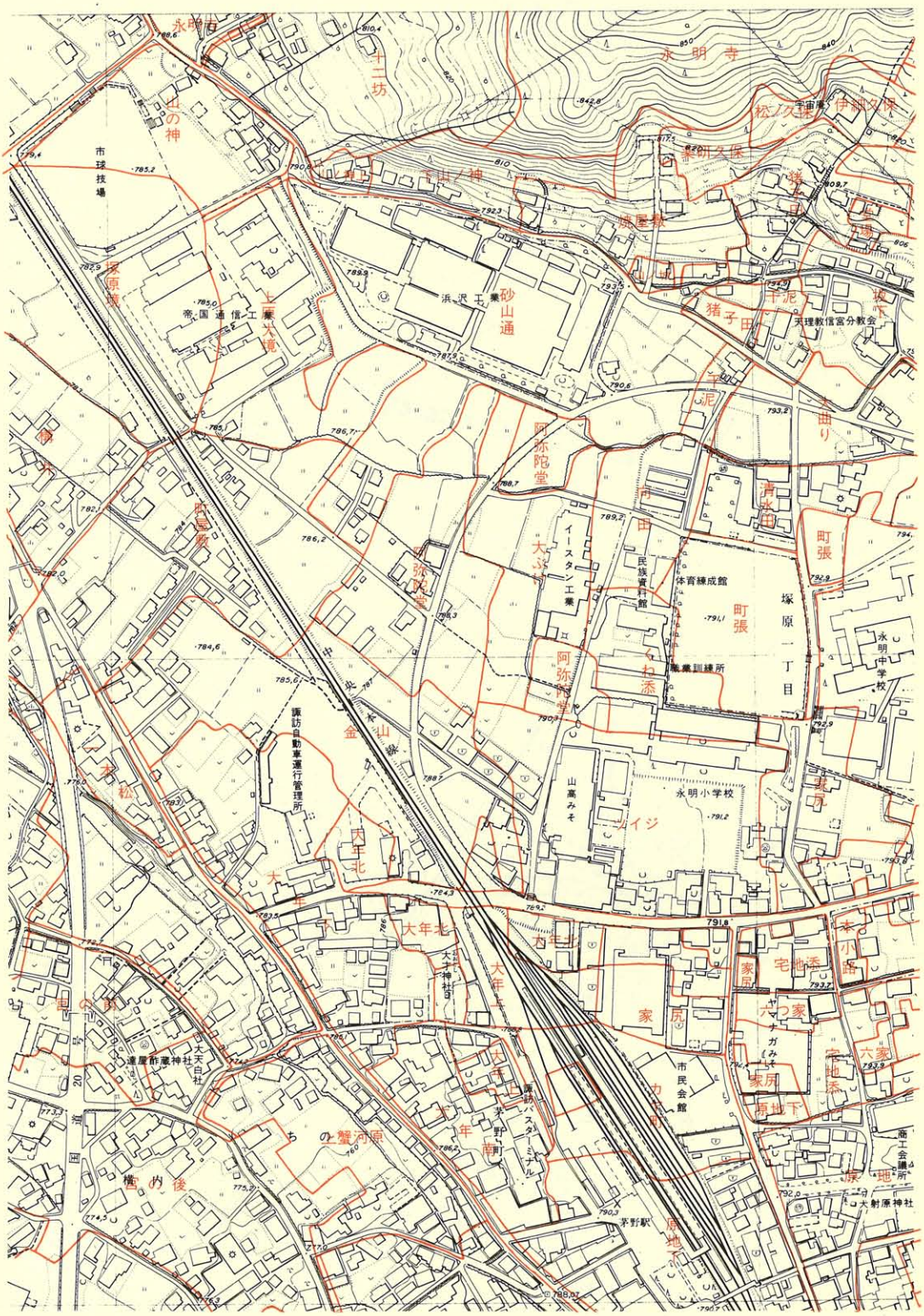
8月27日　(金)　現場より機材等を撤収する。



第１図　遺跡位置図（１／100,000）



第２図　構井・阿弥陀堂遺跡発掘調査区図（１／5,000）



第３図　遺跡を中心とした小字名図（１／5,000）

第Ⅲ章　遺跡概観

霧ヶ峯火山塊の南縁を形成する永明寺山（標高1,156ｍ）の山麓は、山裾より緩傾斜し、茅野駅の南約300ｍにおいて北東から北西にむきをかえて迂回する上川に達する。この地域は現上川河床に接する沖積段丘面で、茅野市の中心部をなす本町（矢ヶ崎）・塚原・上原の市街地が立地する。段丘面の西は一段下がって上川と宮川の氾濫原を形成し、肥沃な沖積地として水田地帯で、横内・中河原区が立地する。

茅野駅付近より上原にかけては段丘面と沖積面との間に段丘崖が発達し、その比高は調査地付近では約10ｍを計る。そして崖面は数段の石垣を築いて畑として利用されている。段丘崖から国道までの間約94ｍは住宅や施設が密集し、国道から国鉄中央線の間も宅地化が進み、140ｍの路線内に３戸の住宅がある。段丘崖からここまでは僅か緩傾斜しているが工事によりもとの地形はかなり変容しているものと思われる。国鉄中央線から東は水田地帯である。低い土手によって区切られた水田が段々をなし永明寺山の裾まで続いている。この間約230ｍで蓼科有料道路に通ずる市道に達する。

諏訪史第一巻によると、この付近から遺物の採集された場所として、築地（ついじ）、阿弥陀堂（あみだどう）が記録されている。築地は永明中学校庭一帯といわれ、ここからは弥生の住居址が発見されている。阿弥陀堂は今回調査の行なわれた水田地帯である。信濃史料にも遺跡分布地図にも記載されていないのは、水田地帯であったがために遺跡としての確認ができなかったものであろう。

永明寺山際のテラス状の台地には、一本椹・藤塚・十二坊・永明寺・柿ノ木平の諸遺跡が立地する。一本椹遺跡は昭和47年に発掘が行なわれ、縄文時代中期、弥生時代の住居址と古墳が発見された。他の遺跡も同じ性格の遺跡と推定されるが、段丘面に立地する遺跡との相違は今後に解明さるべき興味ある問題である。一本椹遺跡の上方、永明寺山腹には、釜石古墳・矢穴古墳・中矢穴古墳・西入古墳等の古墳群があり、塚原、上原の段丘面上の古墳としては大塚・姥塚・王経塚・塚の越古墳があげられるが、これら古墳構築の背景となったものが、この塚原・上原の段丘面に定着した稲作技術をもつ人達であったと考えられる。路線が段丘崖を断ち切る諏訪湖寄りには光明寺遺跡・葛井平遺跡が続くが、未発掘のため明らかでないが、弥生から土師・須恵の時代へと続くかなり大規模の遺跡と推定される。

中世に入り、上原は諏訪氏の城下町として栄え、近くに残る古い地名や寺社・伝承等と古記録など総合して考えると相当の規模の城下町が形成されていたようである。上原城の築城年代については詳かでないが、守矢家文書の守矢満実書留の文正元年（1466年）２月14日の条に「御頭上原諏訪安芸守信満勤仕候」とあるところから、室町時代には諏訪氏の一族がここを本拠としていた

ことが考えられる。当時においては今の塚原境は勿論、塚原区内にまで城下町が及んでいたものと考えられる。これは今に残る小字名、築地・ハツツケ田・阿弥陀堂等からも推考される。当時上原には八幡・九頭井・千鹿頭社を初め五山六坊、十二坊の建物があったといわれ、これは鎌倉時代において、諏訪氏は最も鎌倉方と関係深く、鎌倉になぞらえて上原八幡上原五山を建立したといわれる。五山のうち今に残るは極楽寺のみで、光明寺・永明寺・法明寺・金剛寺は、地名・字名・墓地名にその位置を止めている。

天文11年6月、諏訪頼重が武田信玄に攻略され、板垣信方（城代）の居館が上原城下の板垣平に築造され、のち武田氏は代官をおいて諏訪の統治にあたった。武田氏滅亡後天正年間諏訪頼忠は高島城（諏訪市茶臼山）に移り、政治文化の中心は自づと高島に移り、上原は衰退した。

路線が段丘面を通過する字名は、段丘崖から光明寺・構井（構居）・町屋敷・阿弥陀堂で、前三者は、現在の行政区上原に、阿弥陀堂は塚原区に属している。

1.地蔵堂(縄)　2.光明寺(縄・平)　3.永明寺(縄・平)　4.家の下(縄・平)　5.下蟹河原(古)　6.永明中グランド(弥)　7.一本椹(縄・弥・平)　8.原地(縄・平)　9.矢穴(縄・平)　10.棚畑(縄)　11.十二坊古墳　12.釜石古墳　13.一本椹古墳　14.藤塚古墳　15.矢穴古墳　16.中矢穴古墳　17.西入古墳　18.塚の越古墳　19.王経塚古墳　20.大塚古墳　21.姥塚古墳。

第4図　構井・阿弥陀堂遺跡と周辺の遺跡（1／20,000）

第Ⅳ章　遺構および遺物

第１節　縄文時代の遺構と遺物

縄文時代の遺構は１号、19号、21号住居址３軒で調査区東側を中心に検出された。全て中期後半に属するものである。遺物の出土量は弥生時代より多く、時期的には中期中葉より後期までのものが出土している。

第１号住居址（第５図、図版13）

検出状況　Ｈ－21グリッドに一括土器を発見し、これを中心に精査を進めプランの把握に努めた。住居址は約⅙ほど用地外にあるが炉址の位置及び東コーナー、西コーナー、北コーナーによりプランのあり方について確認できた。

遺構の構造　本址は東壁寄りに炉址を有する5.5ｍ×5.3ｍの隅丸方形に近いプランの住居址である。主軸はN34°Eであり、主軸線上に埋甕・炉址が設けられており、入口部は南西部を向く。

確認面が低く残存壁高は僅かであり、北壁側で18cmである。

主柱穴はP_1～P_4の４本柱であり、これにP_5～P_7が加わる。これらは24cm～12cmの深さを持つもので、ロームブロックを混入する褐色土により埋められていた。柱穴等の有り方より建て替えが行なわれたものと思われる。

床面は炉址南西側を中心に堅緻な部分が検出でき、他の部分についても割合堅緻でありほぼ水平に構築されている。

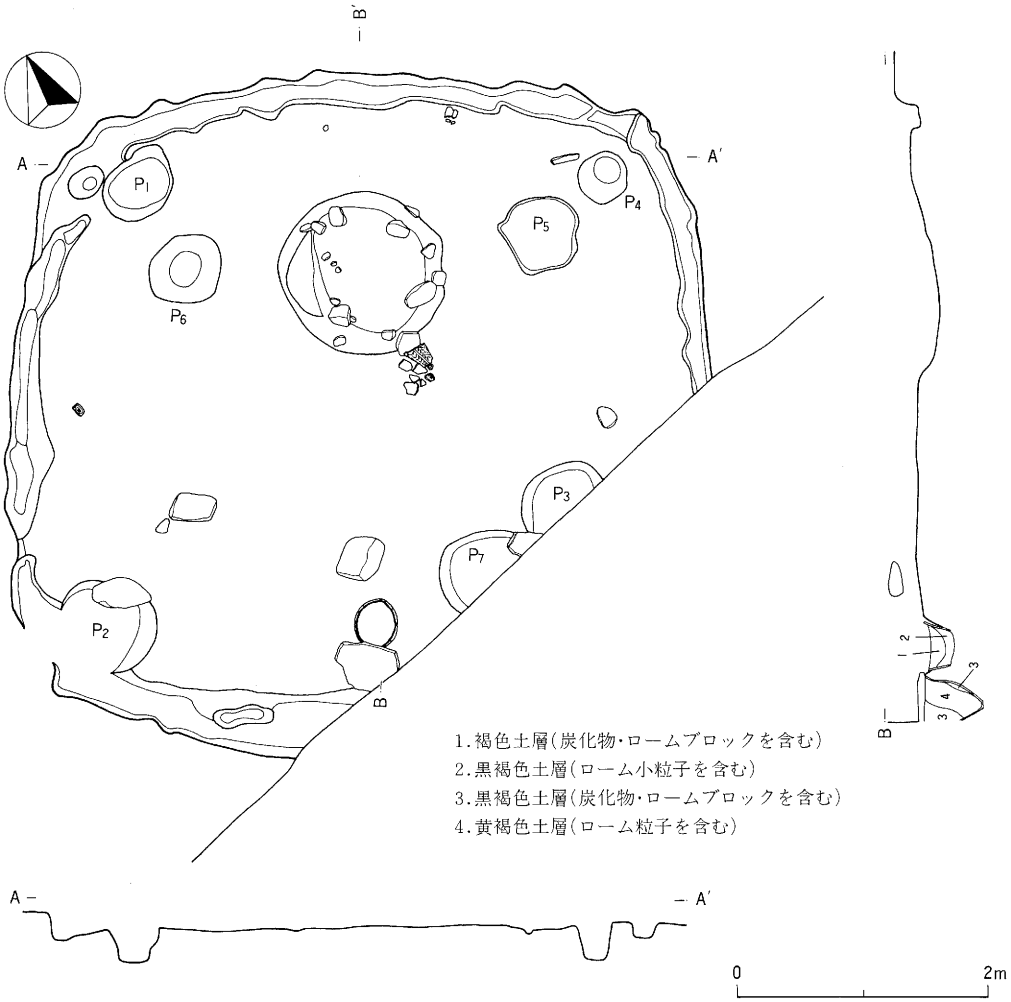
炉址は中央よりやや北東部へ寄った主軸線上に位置しており、床面を16cmほど円形に掘り込んでいる。炉石は抜き去られて、また焼土も掻き出された状態で遺存していなかった。

埋甕は主軸線上に並んで検出されている。埋甕No.１（第６図１）は胴下半欠損の甕形を呈する土器であり、正位の状態で床面とほぼ水平に設置している。埋甕内には、炭化物やロームブロック・ロームの小粒子を多量に含む褐色土、ロームの小粒子を含む黒褐色土が入り込んでいた。埋甕No.２（第６図２）は完形の甕形を呈するものであり、正位の状態で床面とほぼ水平に設置し、52cm×38cm、厚さ６cmの板状の石で蓋をしている。埋甕内にはローム粒子を多量に含む黄褐色土、炭化物・ローム粒子を含む黒褐色土が入り込んでいた。

遺物の出土状態　出土遺物は少なく、炉址を中心とした覆土中より若干の土器片が出土している。P_4内より磨製石斧が一点出土している。また住居北西壁付近床面直上より三角壔形土製品（第７図１）が出土している。

出土遺物（第６・７図、図版33）

本址よりの出土遺物は非常に少なく埋甕に用いられていた甕の他には覆土層内より８点深鉢破

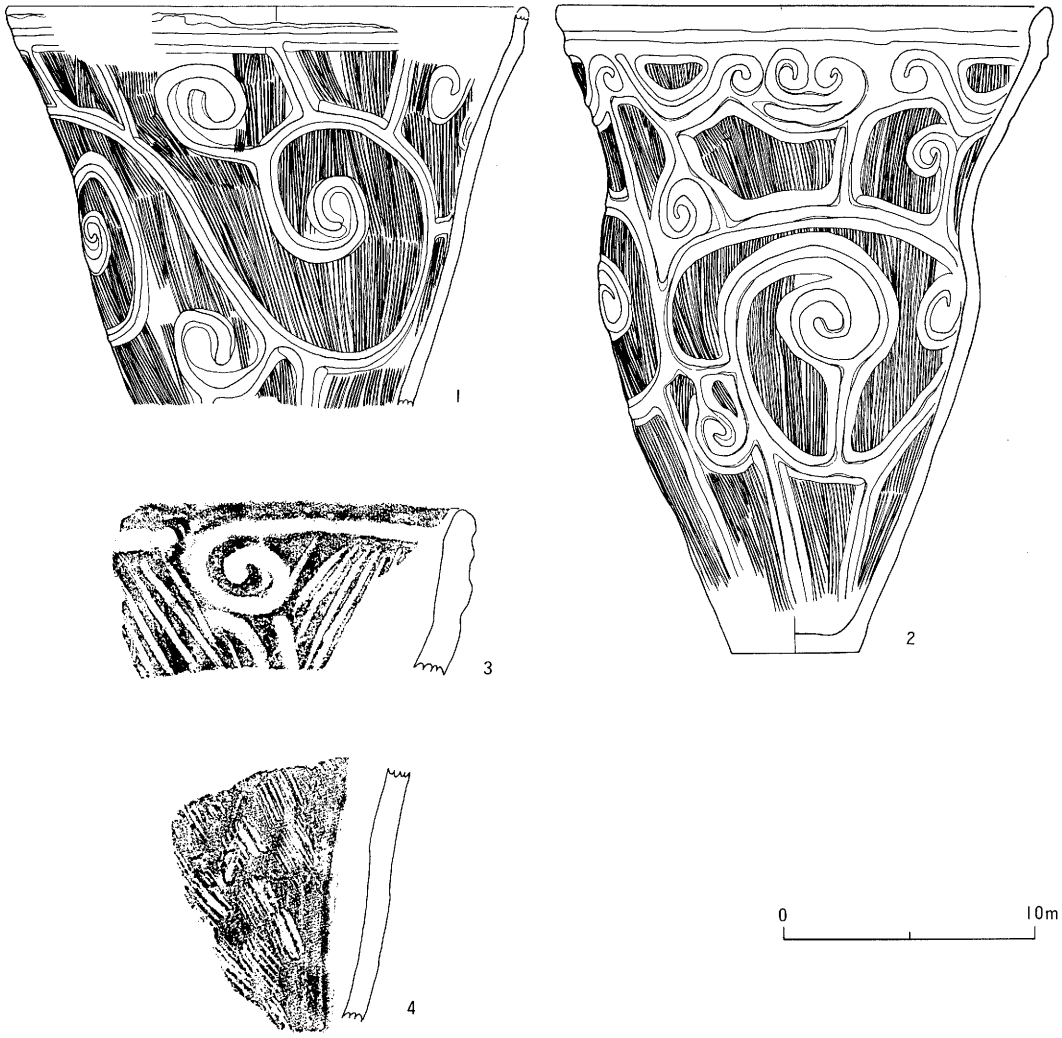


第５図　第１号住居址（１／60）

片が出土しただけである。この他に三角壔形土製品、磨製石斧、礫器が出土している。

土器　１は底部を欠損する。器形は口縁部が直線的に外反し、頸部のくびれが少なく、胴部上半が若干張り出す甕形を呈する。口縁部は一本の沈線がめぐり、胴部には右巻の低い隆帯による大きな渦巻文を４単位に構成し、その間を小さな渦巻文を配する。地文は櫛状工具による条線であり、施文後隆帯の脇をなぞる。内面はヘラ状工具により横位のナデが見られる。口径37cm、現在高28cm。

２の器形は口縁部が直線的に開き胴部上半が若干張り出す底部の非常に小さい甕形を呈する。口縁部は一本の沈線がめぐり、渦巻文を低い２本の隆帯で弧状に連結し、半円形状の区画を作り出している。胴部は右巻の低い隆帯による大きな渦巻文を４単位に構成している。地文は櫛状工



第６図　第１号住居址出土土器（１～２は⅙、３～４は⅓）

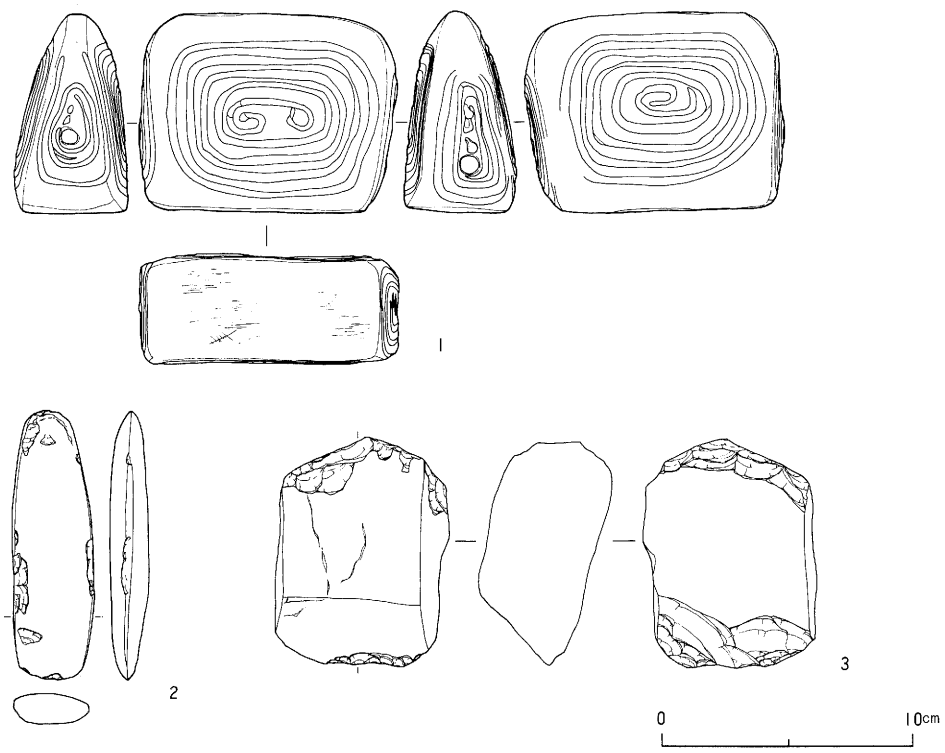
具による条線であり、施文後隆帯の脇をなぞる。内面は良く研磨され胎土・焼成共に良好である。口径35cm、器高46cm、底径９cm。

３は口縁部が直線的に開くものと思われる。口縁部には沈線による渦巻文と胴部へ垂下する沈線を配する。地文は沈線で埋めている。内部は横位のナデで、胎土中に砂粒を含む。

４は胴部に垂下する沈線を配するもので、地文は櫛状工具による条線を配する。

本址は埋甕よりみて曽利Ⅲ期に位置付けられよう。

土製品　1は三角壔形土製品で住居址北西壁付近床面上より出土したものである。形状は平面形が角の丸い長方形をなし、断面形は角の丸い二等辺三角形を呈する。底面は角の丸い長方形をなす。全面共ほぼ平らで、側面部より一孔が傾き貫通している。文様は両平面、両側面に断面Uの字形の沈線により渦巻形のものと、同心円形のものとが施されている。底面は施文されてはい



第７図　第１号住居址出土石器及び土製品（⅓）

ないが、細かな擦痕状の沈線が認められる。長さ10.3cm、高さ7.9cm、重量415ｇ、このような土製品の出土例は茅野市内に於いて上管沢[1]と中原遺跡[2]の二ヶ所よりの発見例が報告されている。

石器　２は粘板岩製の磨製石斧でP_4内より出土したものである。厚さはほぼ一定で刃部と基部が鋭い。基部は打撃痕が認められる。刃部は丸味を持ち、細かな刃こぼれ状の剥離が見られる。平面形状は若干胴部の張る短冊形に近い形を呈する。研磨の状態は器面剥離後全面に磨きをかけているが、剥離の全てにまでは及んではいない。

３は粘板岩製の縦長の礫を素材としている礫器である。断面は素材のままで一端が鋭く楔状を呈し、その縁辺に簡単な調整を加え刃部としている。基部には打撃痕が残る。

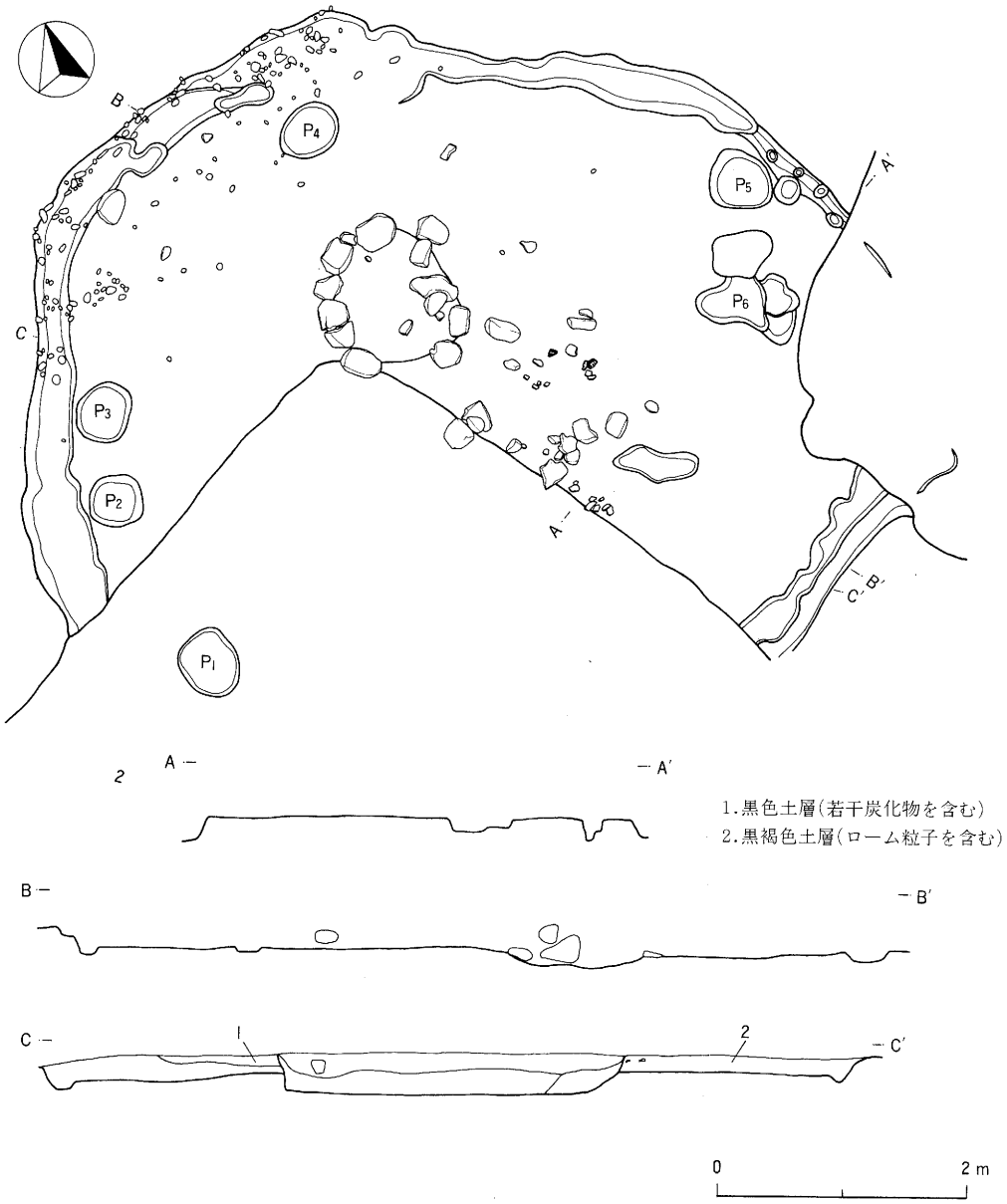
註(1)　鳥居龍蔵　1924　「諏訪史」第１巻　信濃教育会諏訪部会

(2)　宮坂英弐　1976　「福沢村の古代」　茅野市教育委員会

第18号住居址（第８図、図版14）

検出状況　本址は17号住居址精査中にその存在が明らかになった。住居址は南・東側を16号・19号住居址によって切られているが、残された部分よりプランのあり方については確認できた。

覆土は２層に分かれ、上部に若干炭化物を含む黒色土(第１層)が堆積し、床面上には、ローム粒子を含む黒褐色土(第２層)が堆積しこの土層内より土器等が出土した。



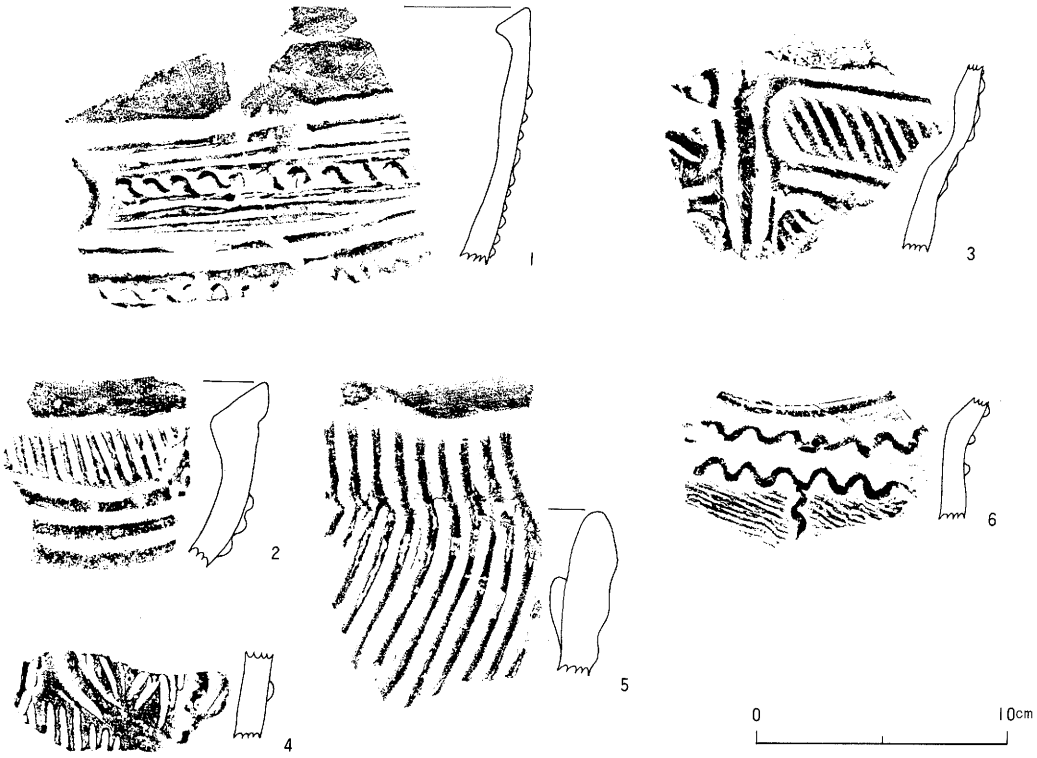
第８図　第18号住居址（1/60）

遺構の構造　本址は北壁寄りに炉址を有する6.6ｍ×5.3ｍの東西方向に長い隅丸方形に近いプランの住居址である。

北西側壁は地山礫層内に掘り込まれており明確でない。残存壁高は南壁側で18cmである。

柱穴はP_1～P_6が検出され、これらは20cm～29cmの深さを持つものである。

床面は住居址中央部はローム粒を含む黒褐色土を床としている。全体的に床面は堅緻で水平に構築されている。



第９図　第18号住居址出土土器（1/3）

周溝は20cm～30cmと割合幅広のものでほぼ全周する形をとる。

炉址は石囲い炉で北壁寄りに位置しており、床面に直径１ｍ、深さ８cmほどの円形の掘り方を持っている。炉石は東側が崩れているが、ほぼ遺存していた。遺存状態等より考えると河原礫の扁平な面を床面に長円形に配したものである。尚、内部に焼土の堆積は見られなかった。

遺物の出土状態　遺物は覆土内より土器片が若干出土しただけである。

出土遺物（第９～11図、図版33）

本址より出土した遺物は少なく、土器片16片、打製石斧２点であった。土器片は接合しないものがほとんどで、個体数にして約６個体分のものと考えられる。

土器　1は口唇内側に突帯を有し口縁が無文帯となり、その下に２段の横帯文をめぐらすものである。胴部は渦巻文を配するものと思われる。

２は口唇内側に突帯をもち、口縁部は２本の隆帯で弧状に連結し、半円形状の区画を作り出すもので、内部を沈線で埋める。

３は頸部が若干脹らみ一段の横帯文をめぐらすもので、胴部に垂下する隆帯を有する。横帯文内は斜状の沈線で埋める。

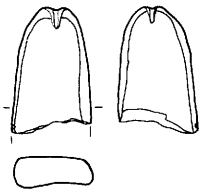
４は隆帯が波状に垂下しその間に隆帯が弧状に配されるものである。地文は「ハ」の字状の沈

線による。

5は口縁の内側に粘土紐を貼り付け突帯としている。施文は半截竹管による深く整然とした平行沈線を施している。

6は頸部の部分で「く」の字状に折れる。施文は頸部に2本の粘土紐を波状に配し、それより垂下する形で波状粘土紐を付ける。口縁部は半截竹管による平行沈線が弧状に施文されていたようである。地文は撚り糸が施される。

これらの土器よりみて本址は曽利II期に相当するものと考えられる。

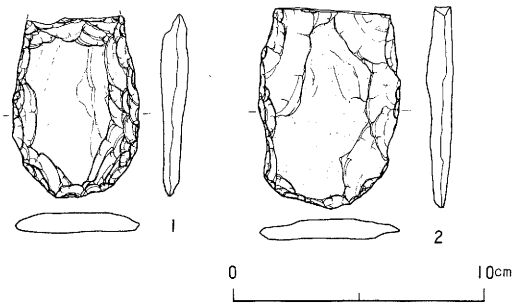


第10図　第18号住居址出土土製品(½)

土製品　1は土器片錘で住居址覆土内より出土した。半分を欠損しているが長楕円形を呈するものと思われる。整形は土器片側縁を研磨し形造り長軸方向に切り込みを持つ。短軸方向にも切り込みらしき痕跡が見られるが長軸方向のものに比べて貧弱である。現在長3.4cm、最大幅2.1cm、厚さ0.8cm、重量8g。

石器　1は粘板岩製で、平面形状は両側縁がほぼ平行で、刃部が丸味を持っている。基部を欠損している。器面には整理面を残している。現在長7.2cm、最大幅4.9cm、最大厚0.8cm、重量65gである。

2は粘板岩製で、両側縁が若干張るものである。刃部が丸味を持っている。基部を欠損している。器面に礫面を残しており、その一部が突出する。現在長8.0cm、最大幅3.5cm、最大厚0.8cm、重量73gである。



第11図　第18号住居址出土石器（⅓）

第20号住居址（第12図、図版14）

検出状況　本址はC－34グリッドを中心に黒色土の落ち込みが検出されたことにより、その存在が明らかになった住居址である。住居址中央部は明治時代の暗渠により攪乱され北東壁一部を19号住居址によって切られている。

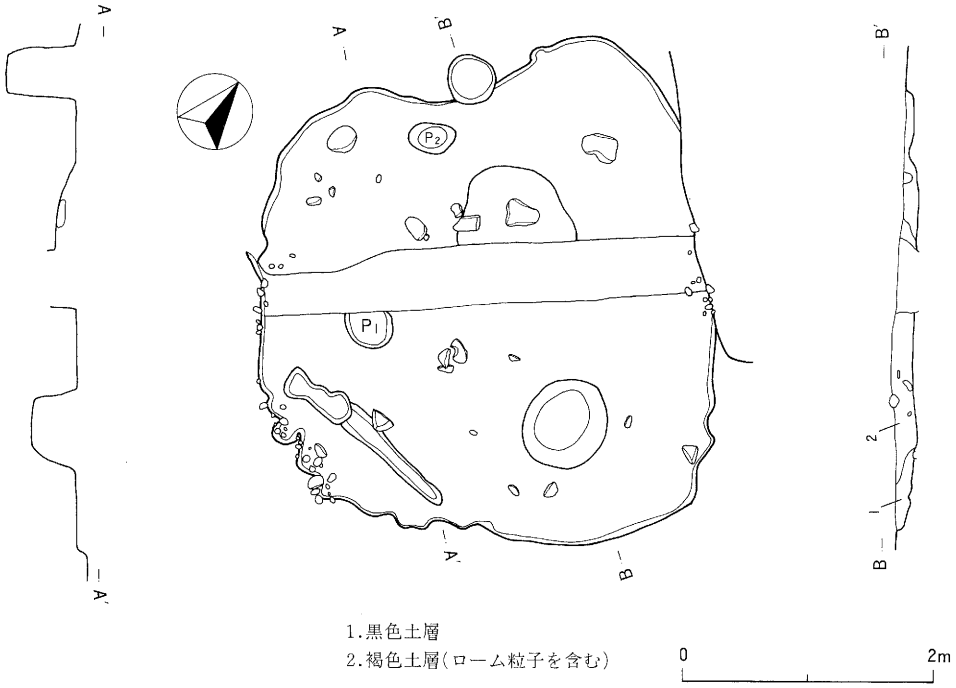
覆土は粘性のある黒色土(第1層)で、壁際にローム粒子を含む褐色土(第2層)が堆積する。

遺構の構造　本址は3.7m×3.6mと小さい住居址で、北・東コーナー部の張る台形に近い形の隅丸方形プランである。

壁の掘り方は不明確で残存壁高は8cmと残い。

柱穴はP_1、P_2が確認され深さ15cmほどのものである。

床面は軟弱で地山礫層内が直接床面となっている部分も見られ凹凸がある。また中央部に緩やかに傾斜する形で床は構築されている。



第12図　第20号住居址（1/60）

炉址は住居址中央部やや北壁寄りに設けられており、その½ほどを暗渠により壊されている。炉址の掘り方は径90cm、深さ14cmの緩やかな傾斜を持つ。炉の形態は石囲い炉と思われ、石囲いに用いられたと思われる河原礫を数個遺存していた。尚、炉址内には焼土の堆積は見られなかった。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。

住居址の形態等より考え縄文中期の住居址であると思われる。

遺構外出土遺物（第13～17図）

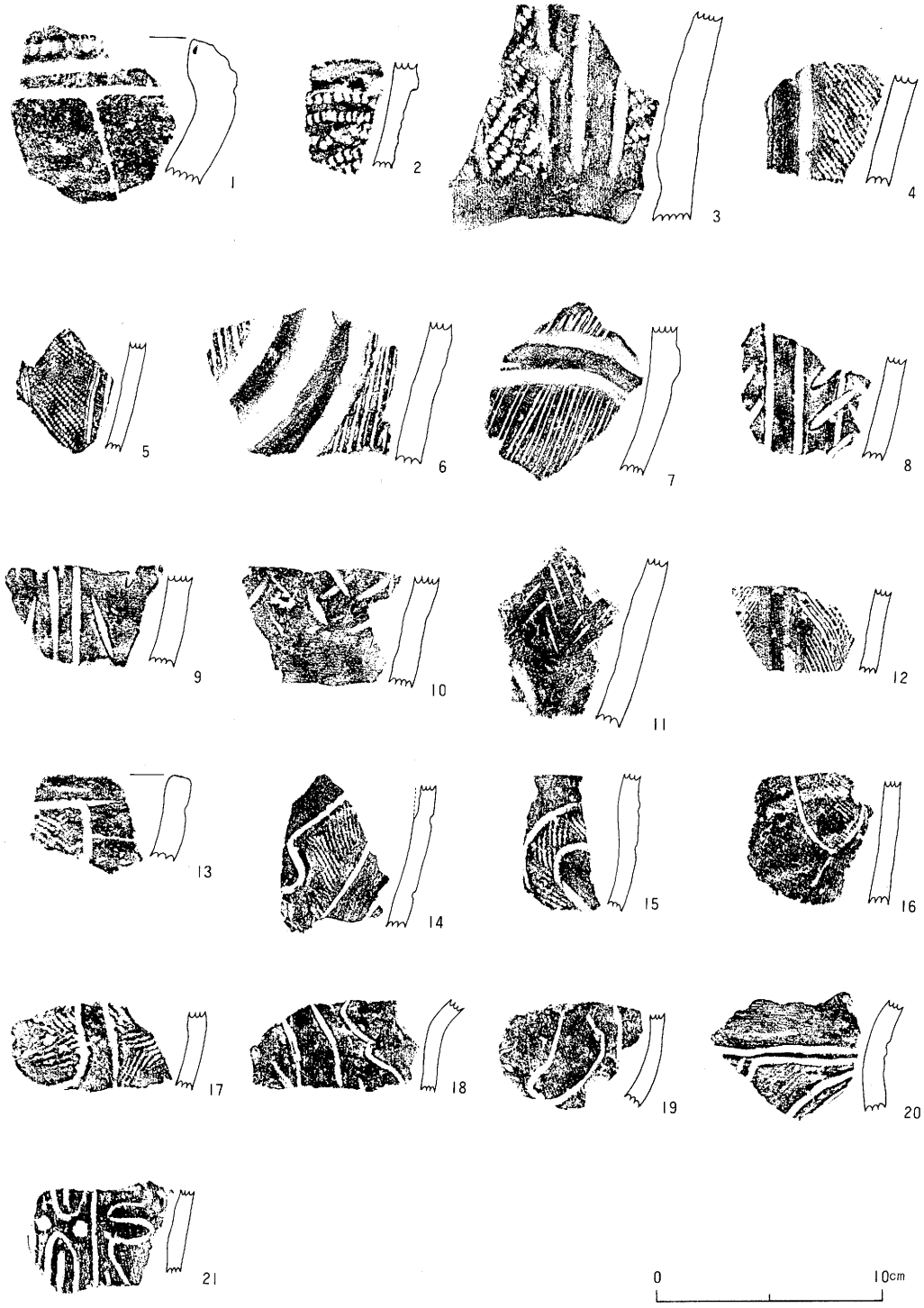
縄文時代の遺物は遺構に伴なわないものが割合多く、石器類等はそのほとんどが遺構外からのものである。

土器（第13図）

土器は全て破片で、中期～後期までのもので中期後半のものと後期初頭のものが主体を占める。細片が主体で個々の資料に於いて細かな型式認定は難しい。

第Ⅰ群（1～12）　中期の土器である。遺構外より出土した土器の約70%を占める。

第1類　ペン先状工具や箆状工具を施文具とした連続刺突文を特徴とするものである。口縁部が内彎するもの(1)がある。これらの特徴より新道式に相当しよう。（1・2）



第13図　遺構外出土土器（1/3）

第２類　地文にＬＲまたはＲＬの縄文を施文し沈線が垂下するもので、沈線区画内の縄文を磨り消すもの（3・4）と、そうでないもの(5)に分けられる。特徴等より加曽利Ｅ系に相当しよう。（３～５）

第３類　地文を条線状の沈線で埋め低い隆帯が渦巻き状で配され、隆帯脇はなぞりが入るもの。（６・７）

第４類　地文に篦状工具による「ハ」字状の沈線を施文するものである。垂下する沈線により区画される。（８～11）

第５類　地文に櫛状工具による斜状の沈線を施文するもので、垂下する低い隆帯で区画される。(12)

第３類から第５類まではその特徴等より曽利系の土器に相当する。

第Ⅱ群(13～19)　後期の土器である。出土量は中期のものよりも少量である。

第１類　地文にＲＬ、ＬＲの縄文を施文して沈線で曲線的構図を描くもので磨り消し縄文手法を用いる。(13～17)

第２類　地文はなく沈線により曲線的構図を描くものである。(18・19)

第１類・第２類はその特徴等より称名寺式に相当しよう。

第３類　地文を縄文とし、２～３条の沈線文を加えるものである。特徴等より堀之内Ⅰ式に相当しよう。

以上縄文時代の土器について述べてきたが、これらの出土分布を見た場合、中期の土器片は調査区東側範囲の割合広い範囲より出土している。これに対し後期初頭の土器は調査区東側範囲でもグリッドＢ－１～13、Ｃ－１～13より集中して出土する傾向を示す。

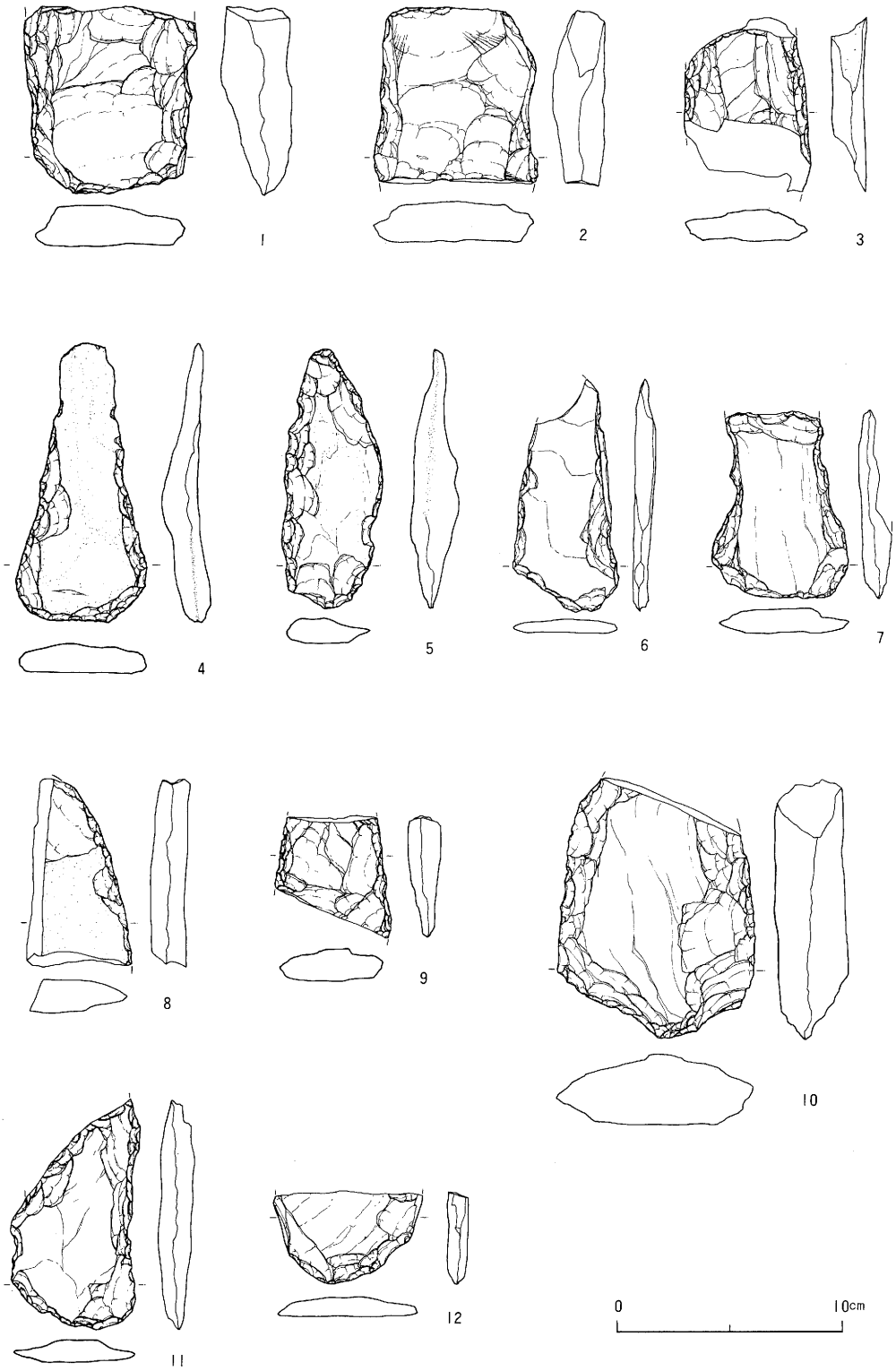
石器（第14～17図）

本遺跡より出土した石器の内石臼・砥石・横刃型石器を除き全てが縄文時代のもので、打製石斧、凹石がその主体をなす。

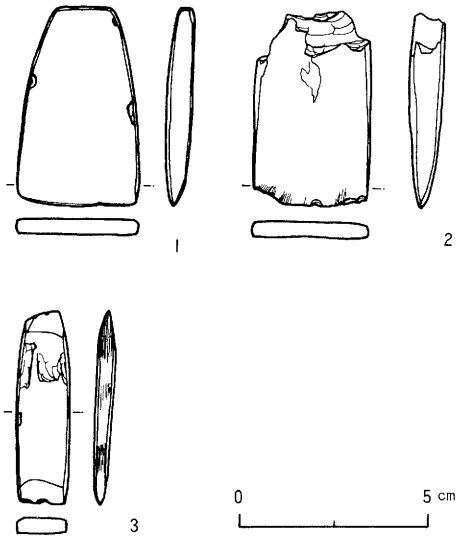
打製石斧(第14図)　遺構外より出土した打製石斧は13点である。出土地点は拡散しているが、特に分布を見た場合調査区東側の範囲より出土している傾向を示す。

打製石斧は完形品が少なく形態分類は難しい。従来通りの分類に従うと短冊形、撥形のものが存在した。

側縁部観、刃部観より分類すると、側縁部がほぼ平行状になる短冊形に近いものが３点、側縁部が「ハ」字形に広がる撥形に近いものが６点、不明のものが４点である。刃部形は刃部肩部が丸味をもち外彎するものが主体であるが、６のように刃部が斜状を呈するものもある。側縁が彎曲をなすものは４のみで背の部分を礫面の彎曲した面を用いている。11は再加工の痕跡を残すもので基部を欠損後折れた面を打面として加工を加えている。



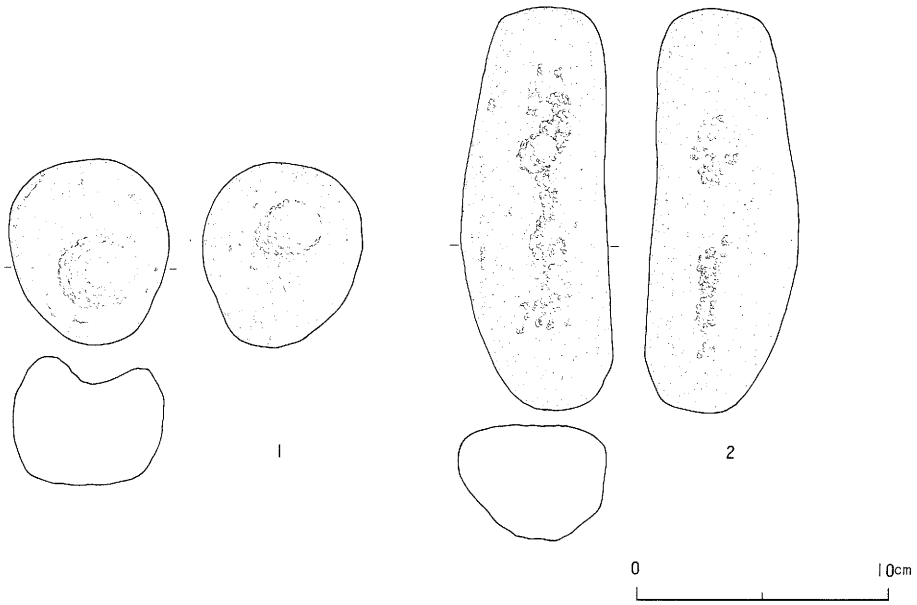
第14図　遺構外出土石器(1)（1/3）



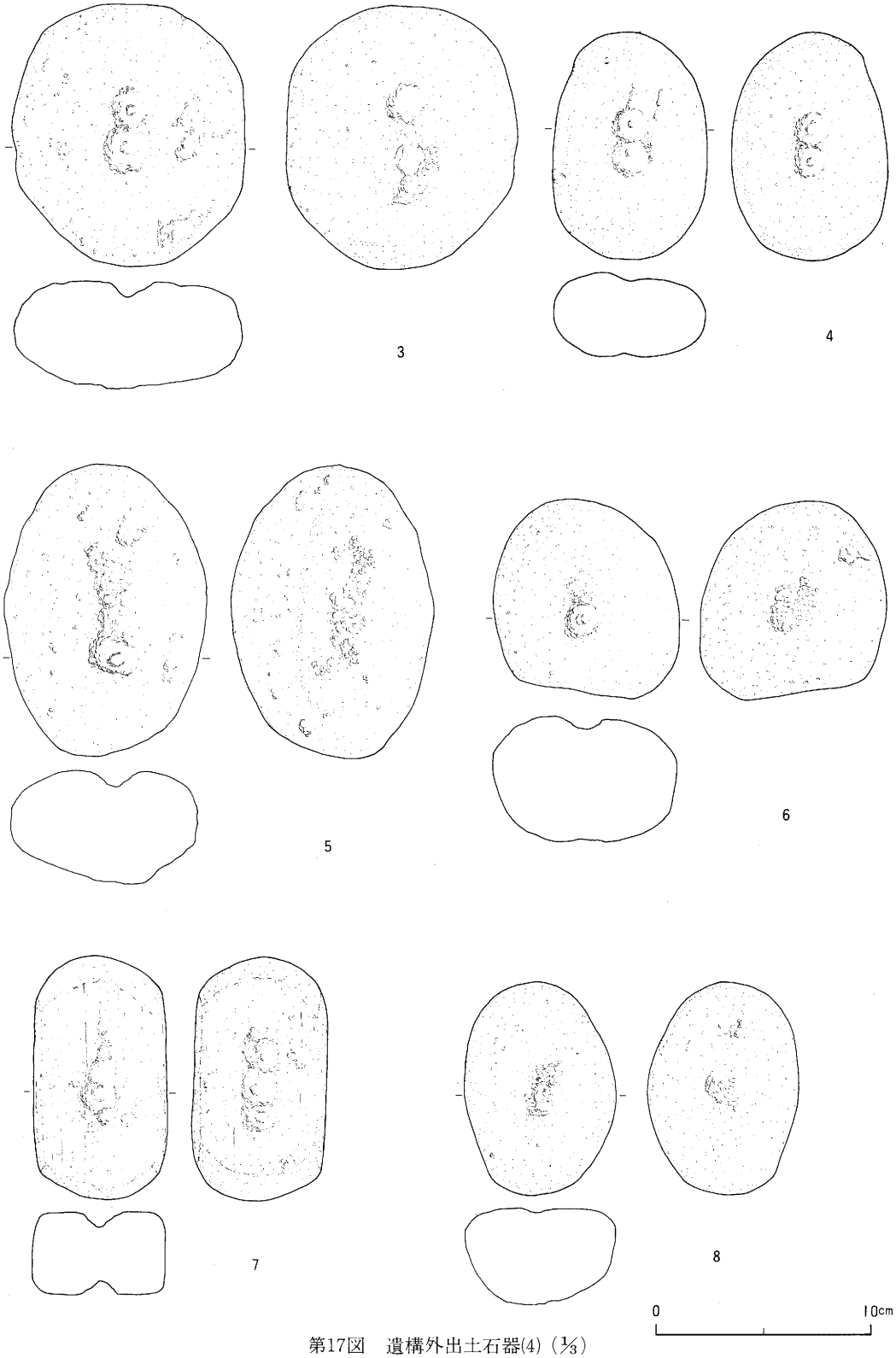
第15図　遺構外出土石器(2)（½）

磨製石斧（第15図）　磨製石斧の大半は遺構外より出土した。全て定角式のものである。2は基部を欠損し刃部も刃こぼれが著しい。3は両端を刃部としているもので断面形が楔形を呈する。両刃部には細かな刃こぼれが見られる。側面には縦に擦痕が見られる。

凹石（第16～17図）　凹石は8点出土し全て遺構外よりの出土である。全て両面に凹部分を有しているものである。素材は安山岩の断面形が楕円形を呈するもので、平面形は楕円形または長楕円形を呈するものを用いる。凹味部は断面がU字形を呈するものとアバタ状の敲打痕を有するものがある。



第16図　遺構外出土石器(3)（⅓）



第17図　遺構外出土石器(4)（1/3）

遺構外出土石器一覧表　〔単位cmおよびｇ、(　)内は現在値〕

挿図番号	No.	出土区	種別	最大長	最大幅	最大厚	重量	石材	備考
第14図	1	ⅡＧ－１	打製石斧	(8.2)	(8.6)	(3.0)	(330)	結晶片岩	基部欠損
	2	表採		(7.8)	(7.2)	(2.3	(273)	粘板岩	刃部欠損
	3	ＩＨ－32		(7.6)	(5.5)	(1.5)	(102)	結晶片岩	基部刃部欠損
	4	ＩＧ－８		12.3	5.7	1.6	163	結晶片岩	
	5	ＩＣ－18		11.4	4.5	2.1	136	粘板岩	
	6	ＩＧ－69		(10.3)	4.7	(1.0)	(73)	粘板岩	基部欠損
	7	ⅡＤ－７		(8.3)	6.1	(1.3)	(93)	結晶片岩	基部欠損
	8	ＩＢ－23		(8.3)	(4.7)	(1.5)	(80)	玄武岩	基部・刃部欠損
	9	ⅡＥ－７		(5.4)	(5.0)	(1.5)	(68)	粘板岩	基部・刃部欠損
	10	ＩＪ－３		(11.5)	8.8	(3.2)	(548)	粘板岩	基部欠損
	11	表採		(10.2)	(5.5)	(1.6)	(121)	粘板岩	基部欠損
	12	ＩＦ－38		(4.1)	(6.6)	(1.0)	(45)	粘板岩	刃部のみ
第15図	1	ＩＤ－23	磨製石斧	5.3	3.3	0.8	32	チャート	
	2	ＩＤ－13		(5.1)	3.2	1.0	(33)		基部欠損
	3	ＩＫ－１		5.1	1.5	0.5	8	緑色片岩	
第16図	1	ＩＧ－８	凹石	7.3	6.4	5.1	210	安山岩	
	2	ＩＨ－31		16.0	5.9	4.6	678	安山岩	
第17図	3	ＩＦ－71		12.1	10.9	5.0	786	安山岩	
	4	ⅡＤ－21		10.5	7.1	3.9	395	安山岩	
	5	ＩＥ－70		13.5	9.5	5.3	803	安山岩	
	6	ＩＧ－40		9.3	8.7	5.9	683	安山岩	
	7	ⅡＥ－13		11.3	6.3	3.8	458	安山岩	磨痕を有する
	8	ＩＨ－３		9.8	7.1	4.5	386	安山岩	
第48図	1	ＩＨ－１	横刀形石器	5.0	3.9	0.4	16	粘板岩	
	2	ＩＨ－３		(4.9)	4.0	0.6	(22)	粘板岩	両端欠損
第119図	1	ＩＨ－５	石臼	12.1	10.4	6.5	1,046	安山岩	
	2	ＩＤ－46		(21.2)	(10.0)	(9.3)	(1,843)	多孔質安山岩	上臼¼
	3	ＩＥ－69	砥石	10.1	3.3	2.7	138	凝灰岩	
	4	ＩＧ－40		(6.1)	3.1	1.1	(40)	粘板岩	両端欠損・裏面剥落
	5	ＩＦ－70		(4.1)	3.5	1.1	(26)	凝灰岩	両端欠損

第２節　弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は調査全域より竪穴住居址12軒が検出された。全て後期に属するものと思われる。この他に壺棺と思われるものを伴なう土壙が１基検出された。

第４号住居址（第18図、図版15）

検出状況　第３号住居址を精査するに伴ない確認された住居址である。掘り込みはしっかりしており容易にプランは検出された。住居址内に掘立柱建築址が重複している。なお、住居址南西側は暗渠により攪乱されている。覆土はほぼ黒褐色土の単一層（第１・３層）で、壁際にローム粒子を含む黄褐色土（第４層）があった。

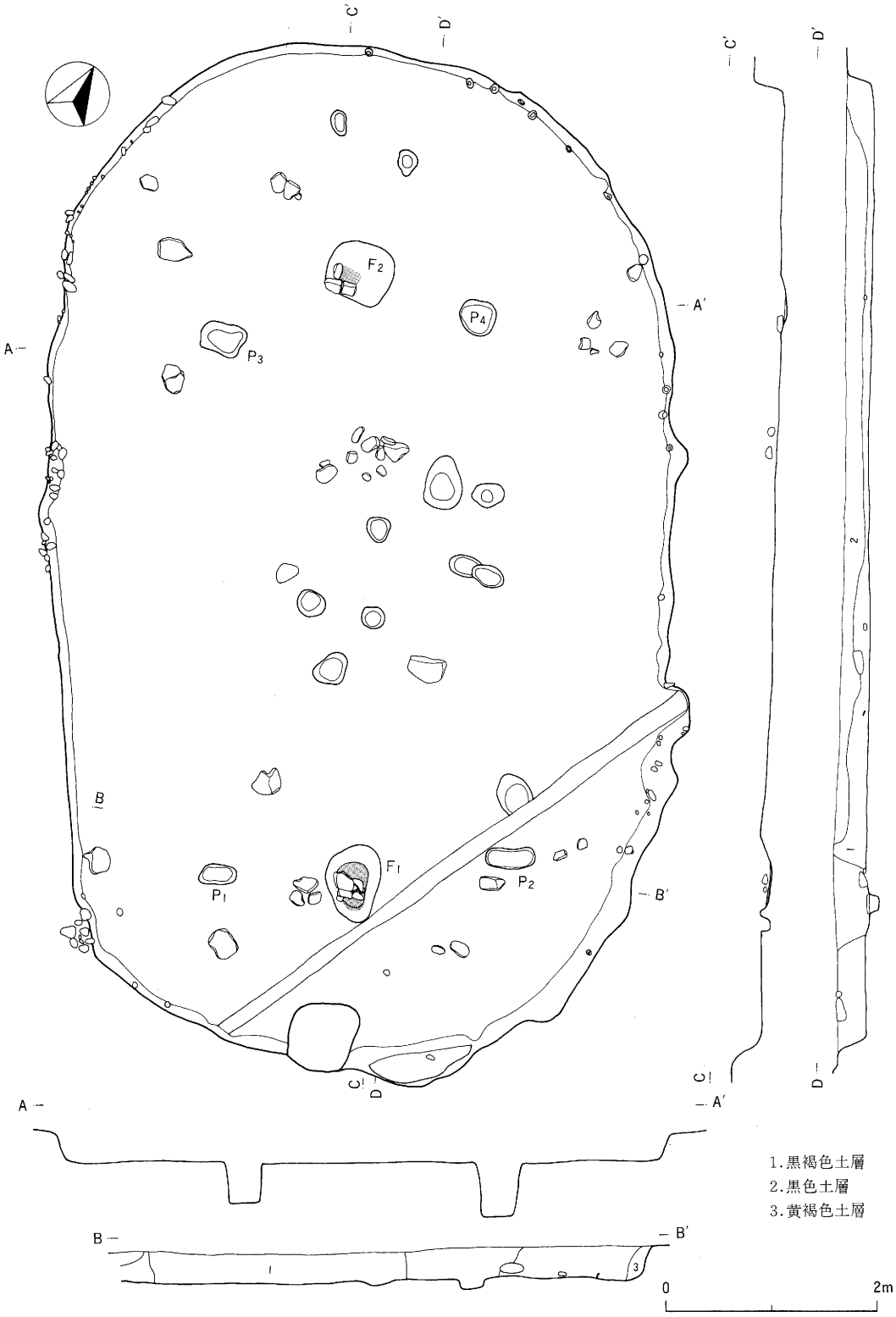
遺構の構造　本址は長軸9.6×短軸4.9ｍの長楕円形プランの大型の住居址である。主軸方向はN31°Wを向く。残存壁高は24～30cmであり、西側壁は地山礫層に掘り込んでいる。主柱穴はP_1～P_4の４本柱である。主柱穴の深さは、P_1は38cm、P_2は35cm、P_3は40cm、P_4は52cmである。この他にも住居址中央部に深さが６cm～13cmのピットが数個見られる。また、北壁側を中心に径８cm位の斜孔が数個見られる。床はほぼ水平で堅緻である。西側は地山礫面を床にする。炉址は主軸線上北側F_2と南側F_1の２ヶ所にある。両者共床面を８～10cm掘り窪めた地床炉で、焼土が２cm程度堆積していた。F_2の掘り方脇にはＬ字状に石が置いてあった。

遺物の出土状態　出土遺物は少なく、住居址南側を中心とした覆土中より若干の土器片が出土した。

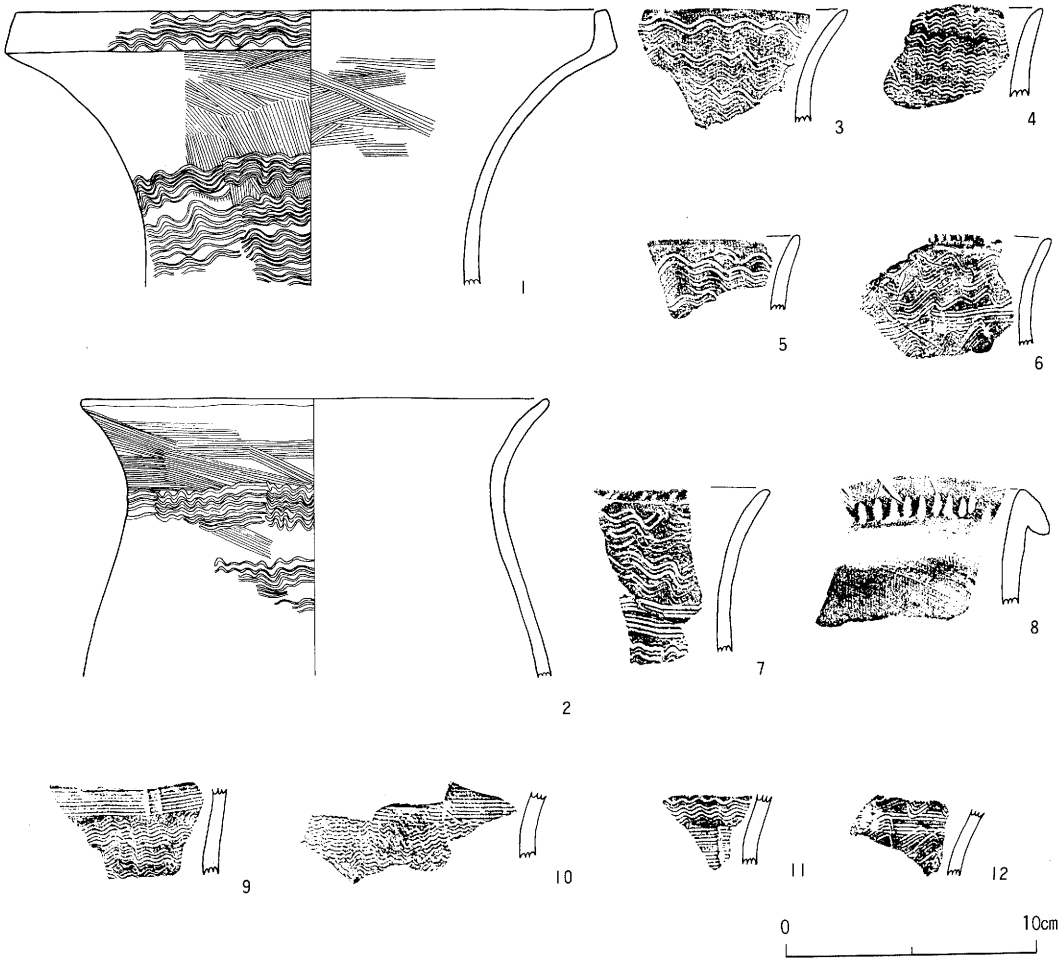
出土遺物（第19図）

遺物の出土量は非常に少なく図示した２点の他に破片が28点あるだけである。器形の判り得るものは図示したものだけで壺・甕の器種がある。

１は口縁部が屈曲し、有段口縁をもつもので、口縁段部には７条の波状文が施される。頸部以下には７条の波状文が４帯みられる。整形は頸部上半が斜状ハケ整形で、内面は横位と斜状のハケ整形が一部にみられる。胎土内には砂粒を含む。口径23.5cm、現在高11cm。２は口縁部と体部が張るもので最大径が体部にある。頸部から体部上半にかけて５条の波状文が３帯施される。整形は口縁部付近に軽い斜状のハケ整形が、内面は口縁部が横ナデ、内部が横研磨されている。焼成は良好で混入物の少ない胎土である。口径8.5cm、現在高11cm。３～12は小片で器形文様構成等についての詳細は不明の点が多い。３～５は甕形土器の口縁部で波状文が口縁部一帯に施されている。6・7は口唇部に刻目を持つもので、口縁部より２帯の波状文、その下に７条の簾状文を１帯施文し、以下波状文を施文するものである。８は口唇部を折り返し有段口縁とするもので、ハケ状工具による刻目が口縁部に施される。９～12は簾状文と波状文の施されているものである。



第18図　第4号住居址（1/6）



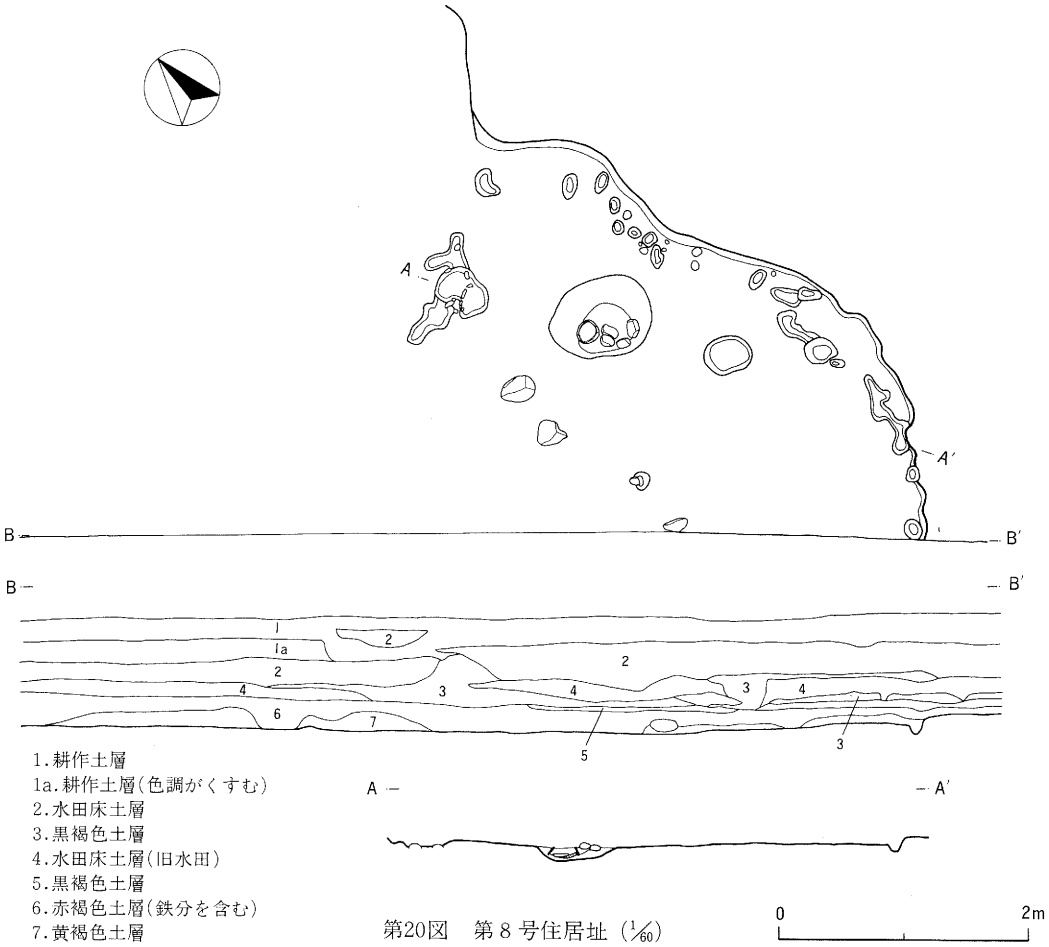
第19図　第4号住居址出土土器（⅓）

第8号住居址（第20図、図版15）

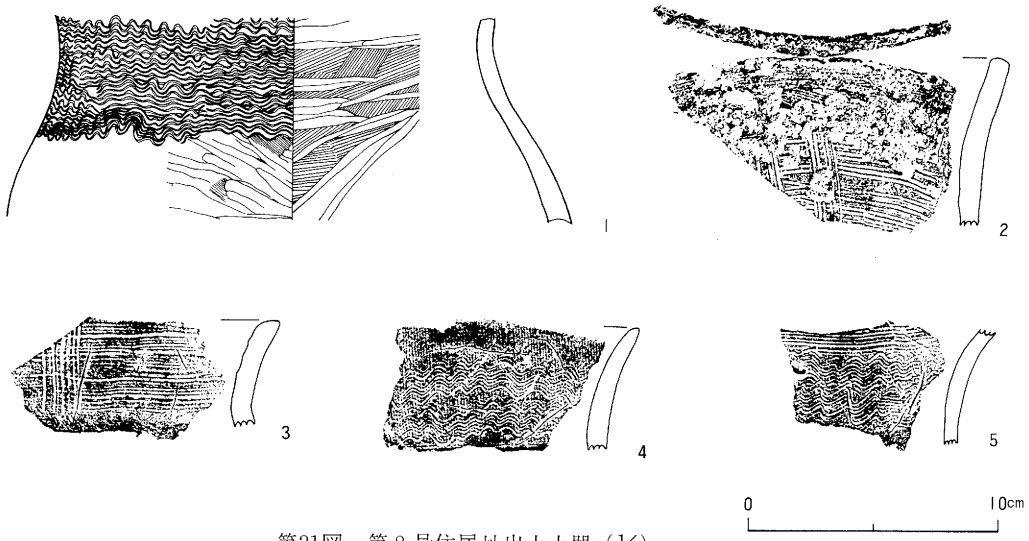
検出状況　本址は7号住居の精査に伴ない重複した形で検出された住居址である。北壁側は7号住居址により切られ、約⅔ほどが用地外のため、その東側⅓ほどを調査したに過ぎない。

遺構の構造　本址は調査された部分が少なくその規模等については不明である。プランについては南西側コーナーより隅丸方形に近い形を呈するものではないかと推定される。残存壁高は8cmと残い。周溝と思われる不規則な溝がほぼ全周する形で見られる。床は住居址西側を中心に堅緻な面が見られ、ほぼ水平に構築されている。炉址は埋甕炉で、床面を大きさ82×62cmの楕円形に掘り北西側に胴部のみの甕（第21図）を埋設し、周囲を黄褐色土（第3層）で埋め南東側に4個の礫を置く。内部には焼土粒子を含む暗褐色土（第1層）が充満し下部には厚さ3cmの焼土が堆積する。焼土の上には12cm大の扁平な礫が置かれていた。

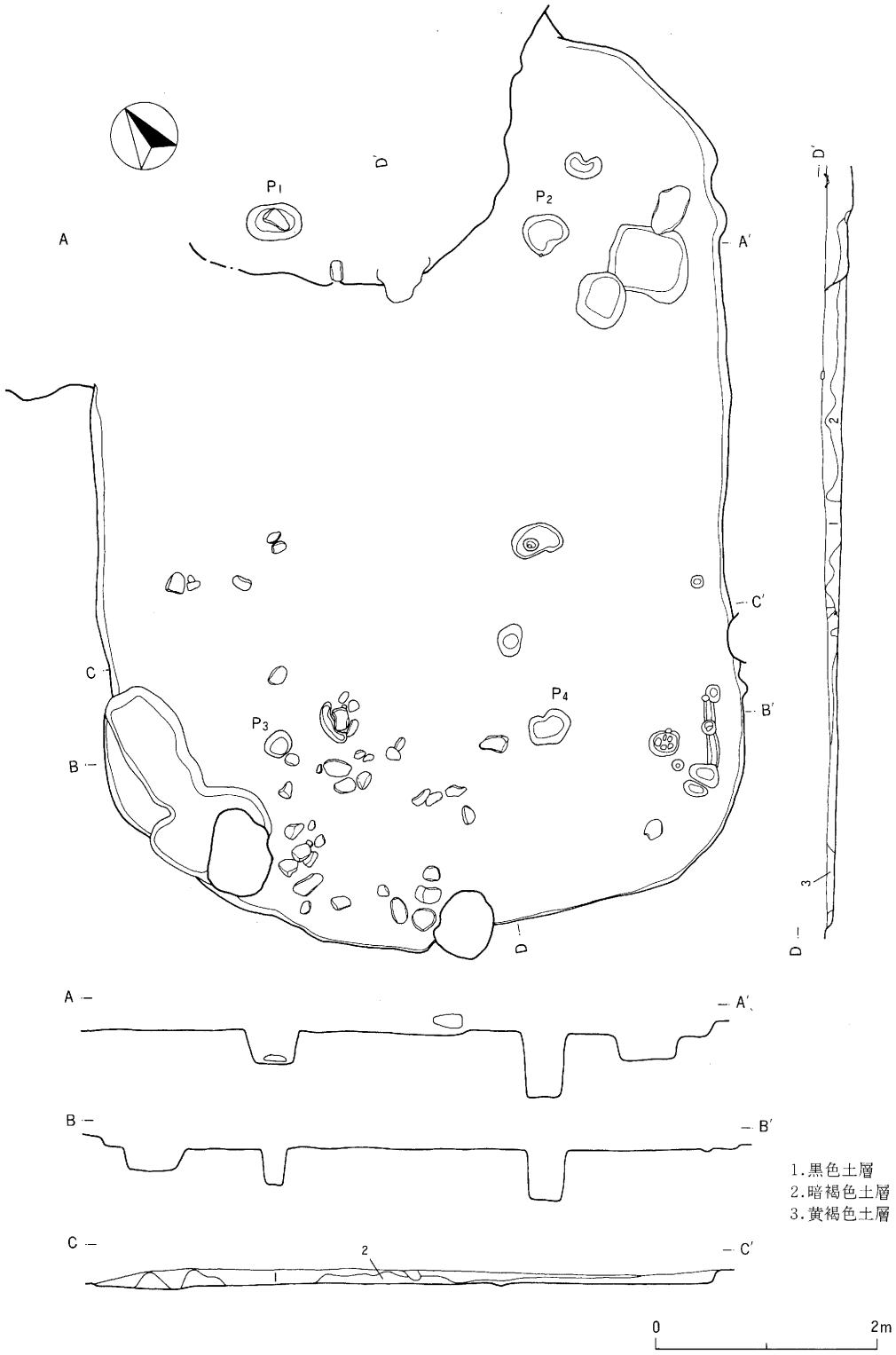
遺物の出土状況　遺物は少なく埋甕炉を中心とした覆土内より土器片が若干出土した。



第20図　第８号住居址（1/60）



第21図　第８号住居址出土土器（1/3）



第22図　第12号住居址（1/60）

出土遺物（第21図）

図示した埋甕炉に使用されていた甕の他に破片が8点あるだけである。

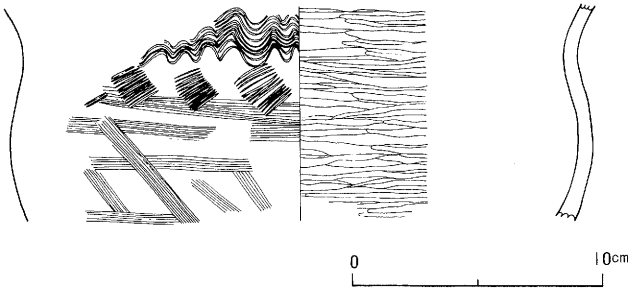
1は甕の頸部より胴部上半までのもので、体部が張るものである。頸部より体部上半にかけて7条の波状文が5帯みられる。器面整形はハケ整形の後、斜状にヘラ磨きを施す。内面も同様で斜状のハケ整形の後、頸部は横位に体部は斜状に研磨を施す。胎土は混入物の少ないもので焼成も良好である。現在高8cm。2・3はT字状文が施されるもので、2は口唇部に波状文を施文する。4・5は簾状文と波状文の施されているものである。

第12号住居址（第22図、図版16）

検出状況　本址は11号住居址精査に伴ない確認された住居址である。北側を11号住居址に切られ、西側コーナー部が掘立柱建築址と重複するために、南・東コーナー部等からプランは推定した。覆土は2層に分かれ、上部に黒色土（第1層）が堆積し、床面上にローム粒子を含む暗褐色土（第2層）が、壁際には黄褐色土（第3層）が堆積していた。

遺構の構造　本址は長軸7.6m×短軸5.6mの長楕円形プランの住居址である。主軸方向はN29°Eを向く。壁は褐色土中より掘り込まれていたと思われ、西・南側は余り掘り方もしっかりしておらず不明確である。また、北西側は11号住居址の切り合い等より確認できなかった。残存壁高は割合掘り方のしっかりしている東側において10cmほどで、若干の傾斜をもち立ち上がる。周溝は深さ4cmほどと浅く南側コーナー付近に若干見られるだけである。主柱穴はP_1～P_4の4本柱である。主柱穴の深さはP_1は32cm、P_2は56cm、P_3は34cm、P_4は44cmで、しっかり作られている。壁面に斜孔等は見られない。床は住居址東側が堅緻で、他の部分は若干軟弱である。西側床面を中心に、床上4～10cmに礫が数十個散在し西側に緩やかに傾斜する形で構築されている。炉址の位置していたと思われる部分は11号住居址により切られているため検出できなかった。

遺物の出土状況　出土遺物は少なく、住居址中央部を中心とした覆土中より若干の土器片が出土した。

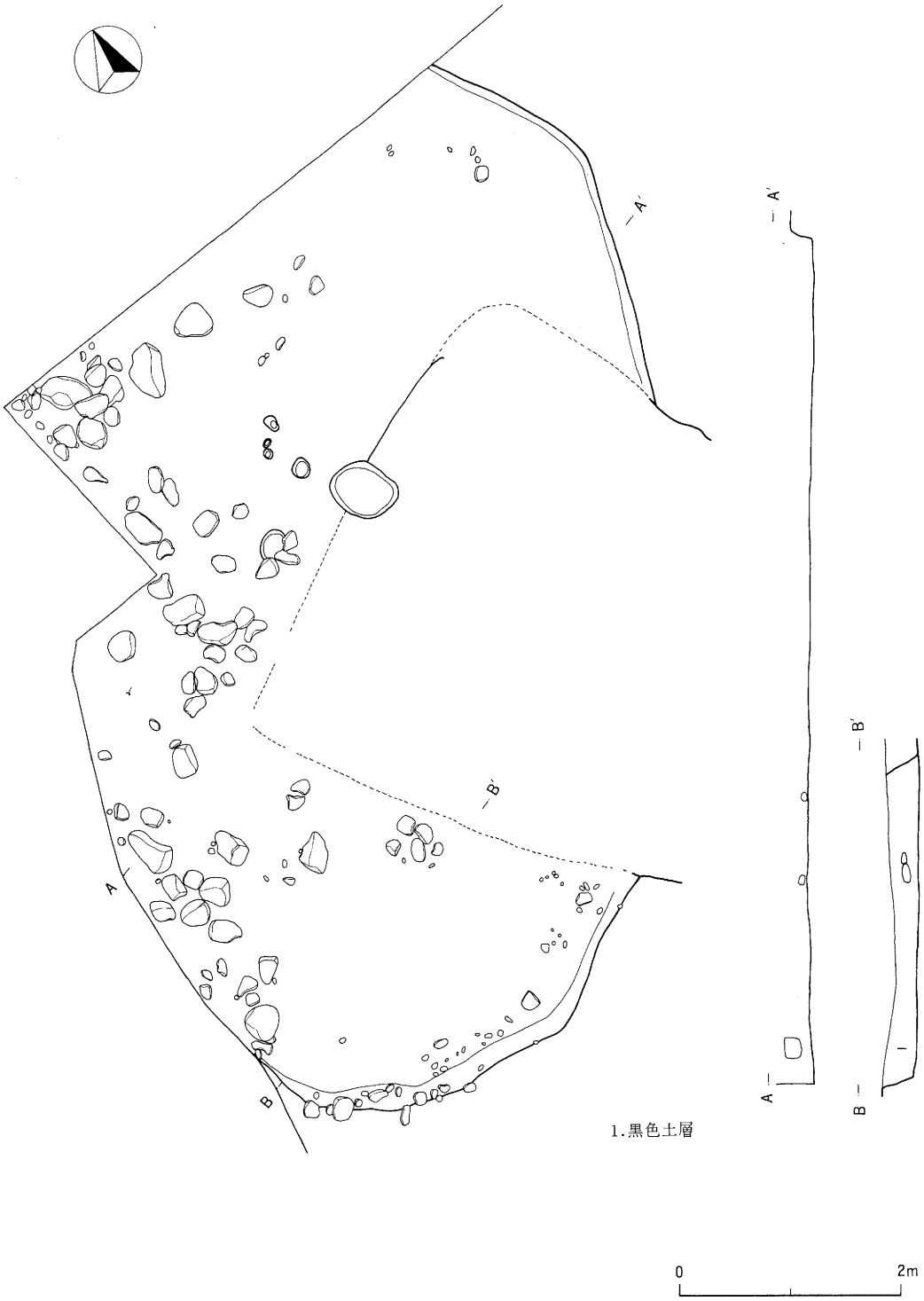


第23図　第12号住居址出土土器（1/3）

出土遺物（第23図）

図示したものの他に細片が5点出土しただけである。

1は口縁部が広く開く甕形を呈するもので最大径が口縁部にあると思われる。頸部から体部上半にかけて5条の波状文が2帯みられ、その下に5条の斜走短線文が3帯施されている。整形は器面が横位と斜状のハケ整形で、内面は横位のヘラ磨きが施されている。現在高8.5cm。



第24図　第15号住居址（1/60）

第15号住居址（第24図）

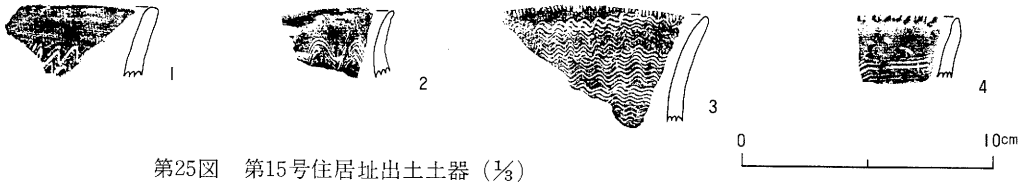
検出状況　本址は14号住居址と重複関係を持つ住居址である。掘り込みはしっかりしており容易にプランは検出されたが、東壁側14号住居址に切られ、住居址の約½が用地外にあるため、南・東コーナー部より大略プランを推定し得た。覆土はローム粒を含む明黒色土で30～40cmほどの礫を含む。

遺構の構造　本址は約½が用地外にあるため、その規模は不明である。プランは南・東コーナー部より長楕円を呈するものと推定できる。残存壁高は23cmほどであり、南側壁は地山礫層を掘り込んでいる。床は全面堅緻でほぼ水平に構築されている。西側は地山礫層面を直接床としている。

遺物の出土状態　出土遺物は少なく覆土中より若干の土器片が出土した。

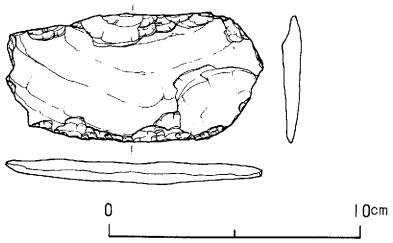
出土遺物（第25・26図）

本址より出土した遺物は土器片６点、横刃形石器１点だけである。



第25図　第15号住居址出土土器（⅓）

1・2は口縁部以下に波状文を施すもので、波状文の波形が小さい。３は口縁部以下に波状文を施すもので口唇部に櫛状工具による刻目をもつ。波状文の波形は小さい。４は口縁部下に櫛描平行線を施文するもので口唇部に刻目をもつ。

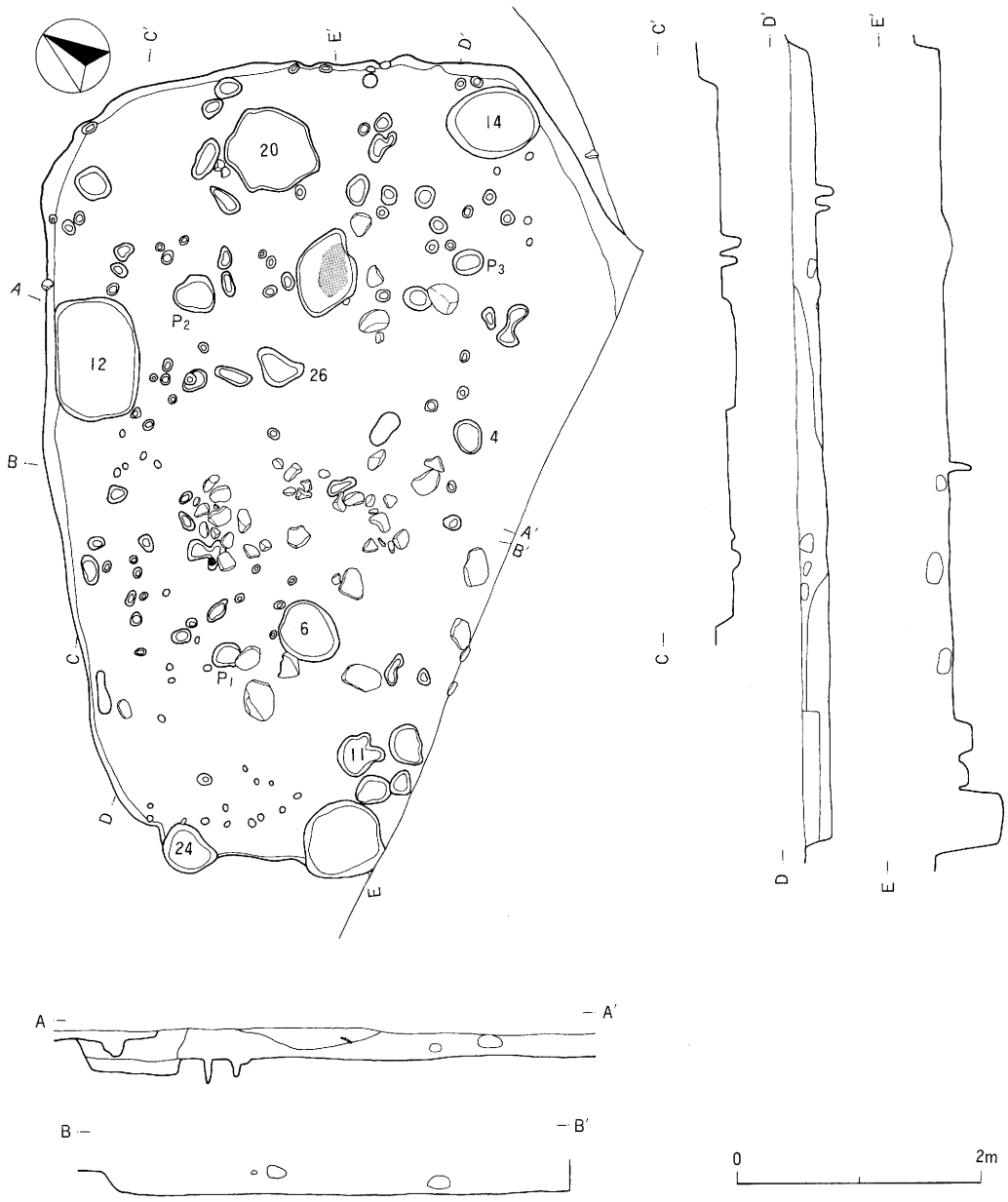


第26図　第15号住居址出土石器（⅓）

石器（第26図）　横刃形石器は硬砂岩製で横長の剝片を素材としている。刃部は外彎しており割合丹念な調整が施されている。背部の一部に自然面を残しており剝離は雑である。断面形は三角形に近い形を呈する。現在長5.0cm、幅10.1cm、最大厚0.8cm、重量66ｇである。

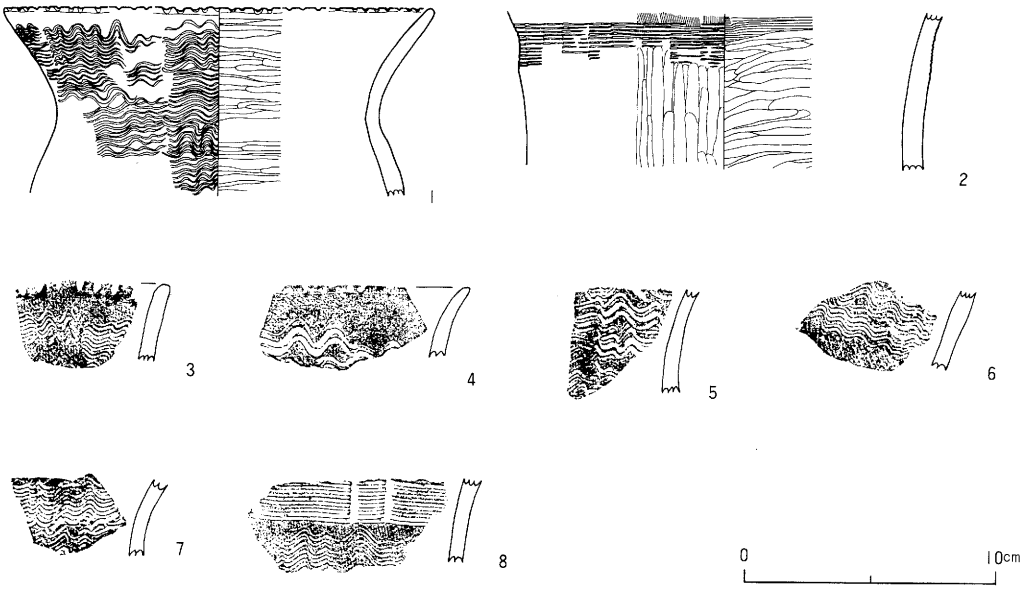
第16号住居址（第27図、図版16）

検出状況　本址は試掘の際にその存在が明らかになった。掘り込みはしっかりしており容易にプランは検出された。なお、住居址南側壁は用地外のため、その⅓ほどを調査したことになる。覆土は２層に分かれ上部に炭化物を含む黒色土（第１層）が堆積し、床面上にローム粒子を含む黒褐色土（第３層）があった。



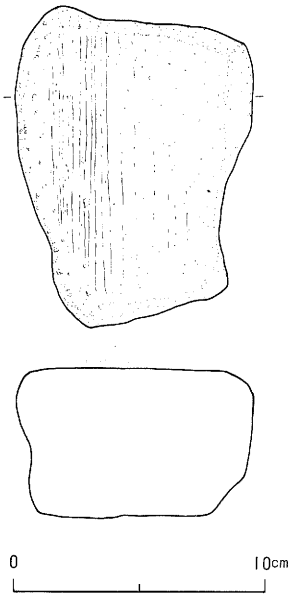
第27図　第16号住居址（1/60）

遺構の構造　本址は長軸6.5×短軸4.8ｍの隅丸長方形プランの住居址である。なお、各コーナーは丸味を帯びている。主軸方向はN51°Eを向く。残存壁高は東・西壁が20cmでほぼ直に立ち上がる。南・北壁は16cmと若干浅く、緩やかな傾斜をもち立ち上がる。主柱穴はP_1～P_3で他の1



第28図　第16号住居址出土土器（1/3）

本は用地外に位置するものと思われ4本柱である。主柱穴の深さはP_1で37cm、P_2は36cm、P_3は31cmである。この他にも深さ14～36cmまでのピットが数個見られる。また、床面には住居址中央部を囲むように、径6～16cm、深さ18cmほどの小さなピットが数多く存在する。特に北壁側を中心として散在している。床は全体的に堅緻でほぼ水平に構築され、住居址中央部やや西寄り床上6～12cmに、大きさ20cmほどの礫が数十個散在していた。炉址は主軸線上東壁寄りに位置する。床面を大きさ72×50cm、深さ6cmの楕円形に掘り窪めた地床炉で、焼土が3cmほど堆積していた。



第29図　第16号住居址出土石器（1/3）

遺物の出土状態　遺物は土器片が覆土中より出土した。特に住居址北側を中心に出土している。

出土遺物（第28・29図）

本址より出土した遺物は図示した土器の他に破片11点、磨石1点とその出土量は少ない。

1は口縁部が直線的に開き頸部で大きくくびれ、体部が張る甕形のものである。口縁部から体部にかけて9条の波状文が5帯施される。この波状文は波形の小さいものによる帯と、波形が大きいものによる帯が交互に施文されている。口唇部に刻目が施される。整形は内面が横位のヘラ磨きが施される。口径17.1cm、現在高7.4cm。

2はほぼ直に立上がる頸部である。施文は上部に13条の簾状文を一帯有している。器面整形は頸部上半が縦方向のハケ整形、下部が縦方向のヘラ磨きとなっている。内面整形は上半にハケ整形の後、横方向のヘラ磨きが行なわれている。現在高6.2cm。

3・4は口縁部以下に波状文を施し、口唇部に刻目を持つもので、口唇部の刻目はヘラ状工具によるものと思われる。5～7は波状文を施文するもので細片のため詳細については不明である。8は簾状文と波状文が施文されているものである。

石器（第29図） 磨石は直方体を呈する安山岩を素材とし、平坦な自然面の一部に磨痕が見られるものである。磨痕の見られる箇所には縦方向に細かな線条痕が見られる。現在長12.7cm、幅9.4cm、最大厚5.9cm、重量1,267gである。

第19号住居址（第30図、図版17）

検出状況 本址は18号住居址を精査中にその存在が明らかとなった住居址である。住居址の½ほどが用地外のため、その北側½ほどを調査したことになる。覆土は2層に分けられ、上部に粘性のある炭化物を含む黒色土（第1層）、床上にローム粒子を含む褐色土（第2層）、東壁際には黄褐色（第3層）の堆積が見られる。

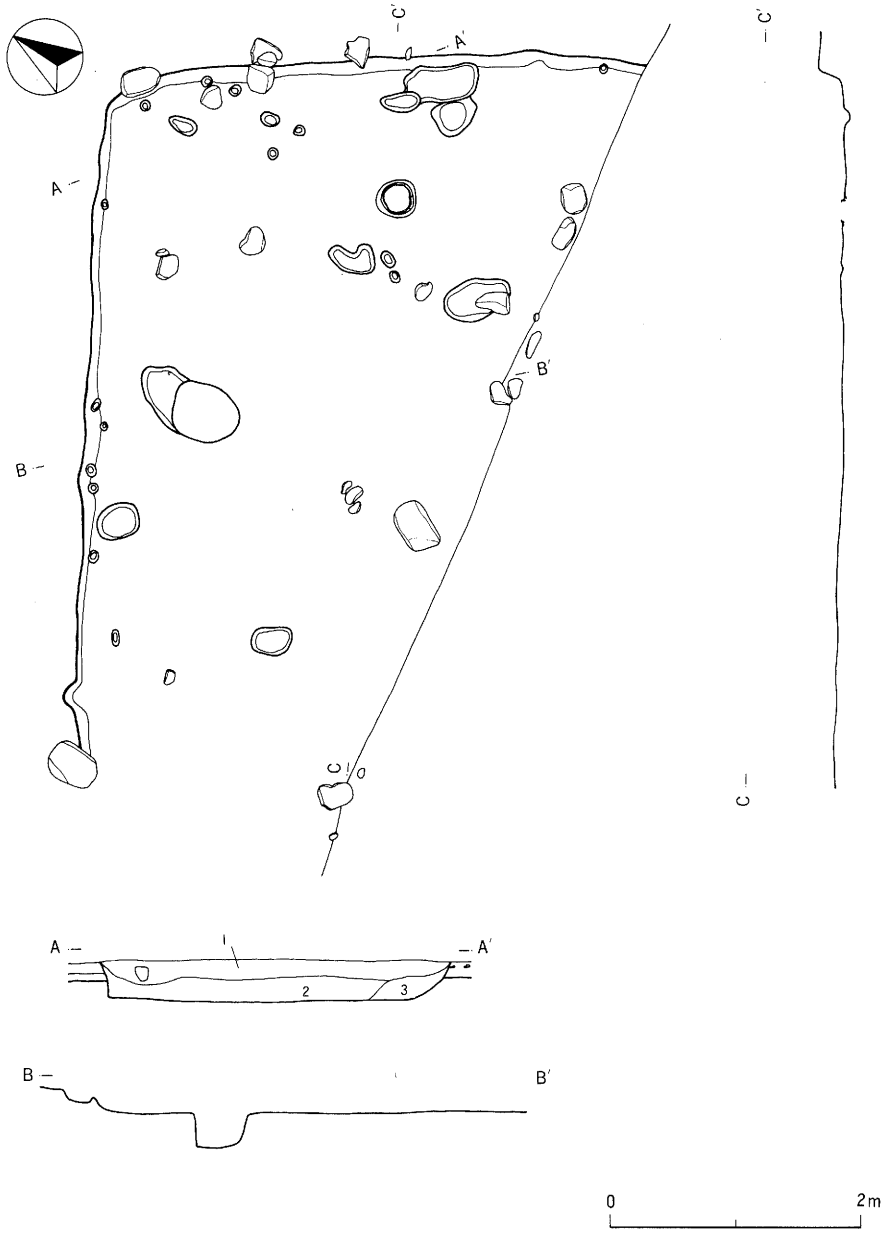
遺構の構造 本址は½ほどが用地外のため規模等については不明であるが、北コーナー部・東・西壁より隅丸長方形プランを呈する住居址であると思われる。主軸方向はN57°Eを向く。掘り込みは16号住居の覆土内よりで、残存壁高は18cmとしっかりしたものである。南西壁側は褐色土中より掘り込まれていたと思われ、立ち上がり等は確認できなかった。主柱穴と思われるものは検出できなかったが、西壁を中心に径8cmほどの斜孔が見られた。床は全体的に堅緻でほぼ水平に構築されている。炉址は埋甕炉で住居址東壁寄りに位置する。土器は径30cmほどの不整円形をなす掘り方の、ほぼ中央部に埋設されている。

遺物の出土状態 遺物は土器片を中心に覆土中より出土した。

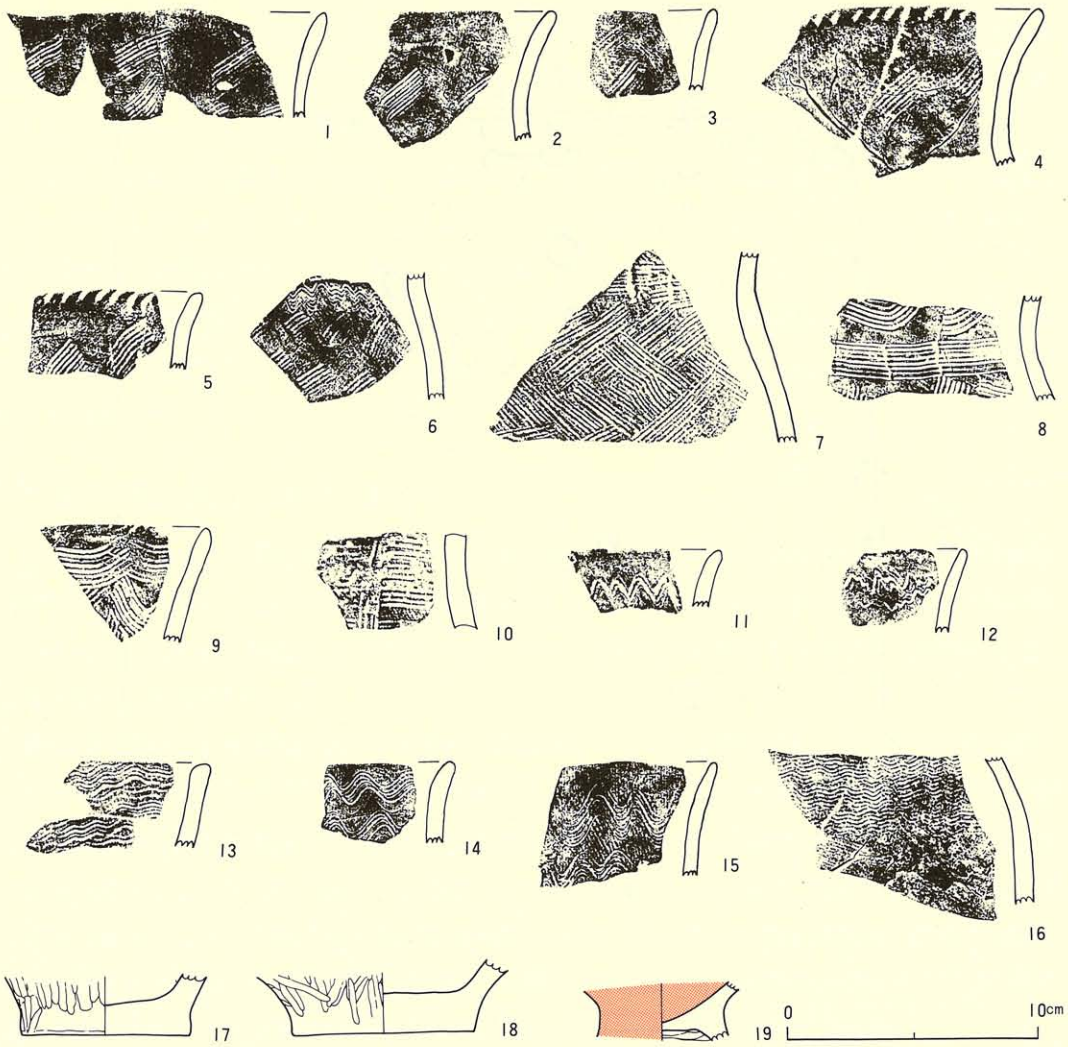
出土遺物（第31図）

本址より出土した遺物は図示したものの他に土器片48点が出土している。土器片は接合するものが少なく器形のわかり得るものはない。

1～3は8、9条の斜走短線文が数帯施文されるものである。器形はすべて口縁が開く甕形を呈するものと思われる。1には籾状圧痕が見られる。4・5も7条の斜走短線文が施文されるもので、口唇部にヘラ状工具による刻目が施される。6は上部に波状文を施し7条の斜走短線文を加えるものである。7は上部に9条の簾状文を施文し、9条の矢羽根状条線が施されている。8は頸部に8条の簾状文が一帯施文され弧状短線文、斜走短線文が施文される。9は口縁部に8条の弧状短線文が2帯以上施文されるものである。10は頸部にT字状文が施文されるものである。11～16は波状文を施文するもので波形に多くのバリエーションが見られる。17・18は底部で焼成の良いものである。整形は縦方向のヘラ磨きが施されている。19は高坏で内外両面に赤色塗彩さ



第30図　第19号住居址（1/60）



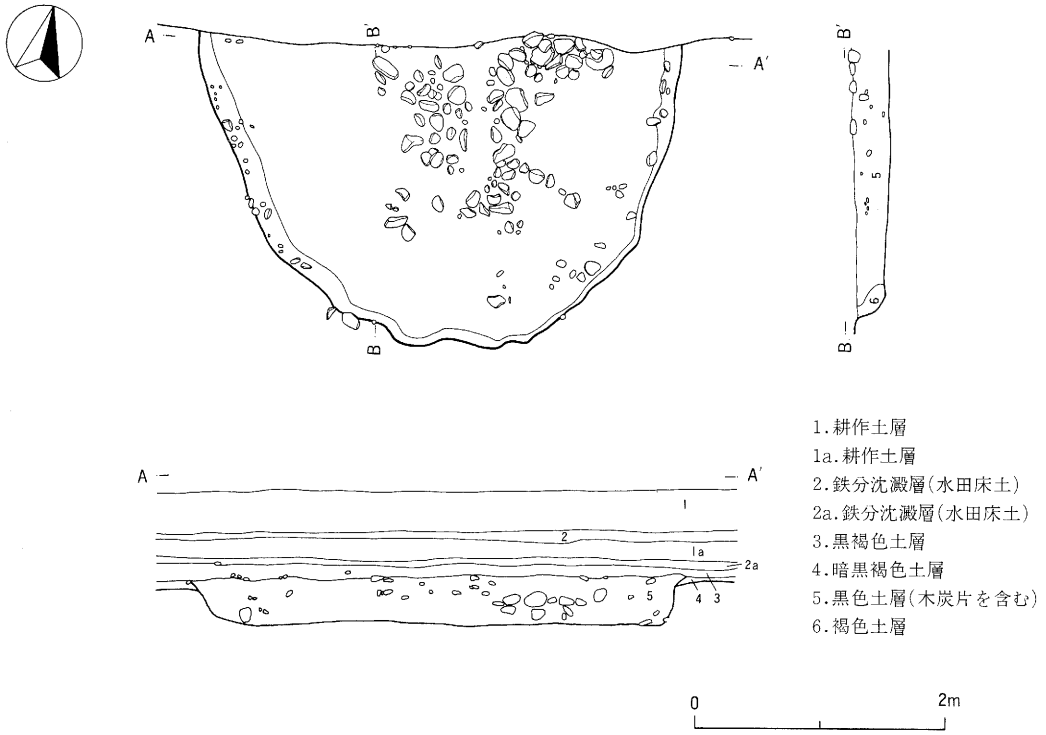
第31図　第19号住居址出土土器（⅓）

れている。脚部との接合部分は横位のヘラナデが行なわれている。

第23号住居址（第32図、図版17）

検出状況　本址はB－47グリッドを中心に黒色の落ち込みが確認されその存在が明らかとなった。本址は暗黒褐色土より掘り込まれ、覆土との識別が困難でプランの確認がむずかしく、住居址の床範囲より壁立ち上がりを確認した。覆土は炭化物を含む黒色土（第５層）の単一層で、南壁際にローム粒子を含む黒色土（第６層）が堆積していた。なお、第５層中には５～20mmほどの礫が多量に入っている。

遺構の構造　本址は北側½ほどが用地外のため規模等については不明である。プランは南コーナー部等より楕円形を呈するものと思われる。壁は地山礫層内に掘り込んでいるために若干不

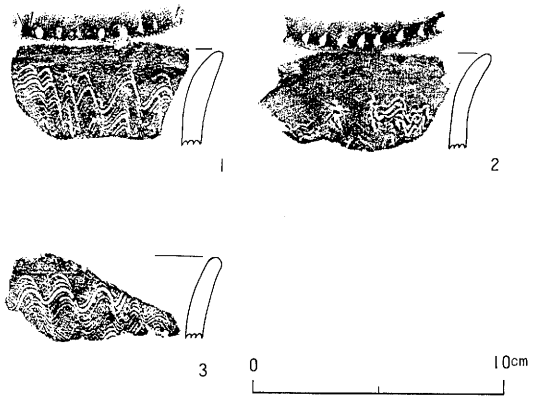


第32図　第23号住居址（1/60）

規則であるが、残存壁高は22cmほどとしっかりしている。床は地山礫層面にロームを硬く貼り形成しており、全体的に堅緻でほぼ水平に構築されている。

遺物の出土状態　遺物は覆土内より土器片が若干出土しただけである。

出土遺物（第33図）



第33図　第23号住居址出土土器（1/3）

本址より出土した遺物は非常に少なく、土器片が4点出土しているだけである。すべて接合関係は見られず器形のわかり得るものはなかった。

1・2は口縁部に波状文を施すもので口唇部に刻目を持つ。3は口縁部に波状文を施すもので口唇部には刻目を持たない。

第34図　第24号住居址（1/60）

第24号住居址（第34図、図版18）

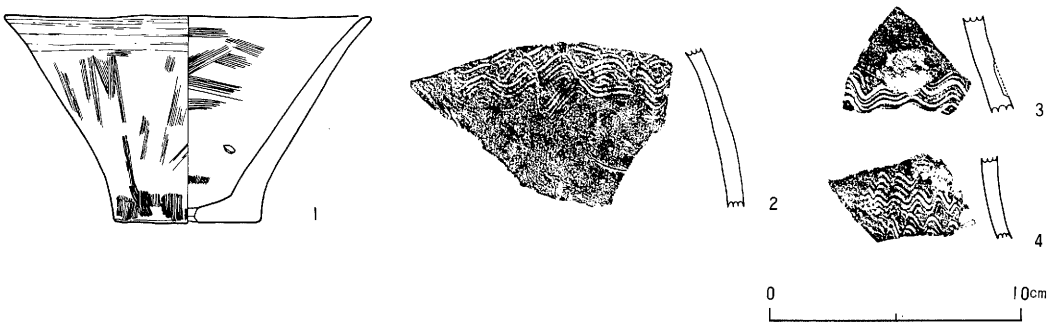
検出状況　本址は試掘の際にその存在が明らかになった住居址である。1/3ほどを溝状集石遺構によって切られるために、北コーナー部等からプランは推定した。覆土はローム粒を含む黒褐色土（第1層）の単一層である。

遺構の構造　本址は南側1/3ほどを溝状集石遺構によって切られるために、プランは北コーナー部等から推定すると、短軸が4.6mの長楕円形を呈するものと思われる。主軸はN34°Eを向く。壁は確認面が低く西壁側は掘り方もしっかりしておらず不明確である。また、北側コーナー付近は地山礫層内に掘り込んでいるため立ち上がりは検出できなかった。残存壁高は東壁側で12cmほどで傾斜を持ち立ち上がる。柱穴はP_1～P_4が検出されP_2～P_4が主柱穴に関わるものかと思われる

が配列に規則性が見られず、若干の凹凸がある。住居址中央やや東寄りに堅緻な部分が見られる。炉址はほぼ主軸線上に位置する。床面を大きさ52×34cm、深さ14cmの不整円形に掘り窪めた地床炉であり、炉内に別個体の土器片4枚を平らに敷いた形で遺存した。なお、焼土の堆積は見られなかった。

遺物の出土状態　出土遺物は少なく住居址北寄りの床上より甑が出土している。他は覆土中より若干の土器片が出土した。

出土遺物（第35図）



第35図　第24号住居址出土土器（1/3）

本址から出土した遺物は図示したものと土器片が3点である。

1は甑で体部下半が直に立ち上がり体部中程で折れ直線的に開く器形である。底部中央には0.8cmの穿孔がある。整形は口縁部が横ナデ整形、体部は縦方向のハケ整形による。内部は斜状のハケ整形が見られる。また籾状圧痕がある。焼成は余り良くなく軟質である。

2～4は頸部より体部上半にかけて不規則な波状文を有するものである。

第25号住居址（第36図）

検出状況　本址はE－52グリッドを中心に黒褐色土の落ち込みが確認され住居址の存在が明らかとなった。住居址の½ほどは開田の際に攪乱され、床面や壁については判然としなかった。覆土は2層に大別でき、上部に若干の炭化物を含む黒褐色土（第1層）、床上面にローム粒を含む褐色土（第2層）が堆積していた。

遺構の構造　本址は南・西側が開田の際に攪乱され、北・東壁が遺存するだけであるが、遺存する壁等より考えて長楕円形に近い隅丸長方形を呈するプランと推定される。主軸はN48°Eを向く。残存壁高は14cmほどで緩やかな傾斜をもち立ち上がっている。床面は直接地山礫面を床としているため、地山礫が突出している。炉址は主軸線上東壁寄りに位置する。床を大きさ66cm、深さ15cmに掘り地床炉としている。西側の掘り方は緩やかで、背部にL字状に石を置いている。内部に堆土の堆積は見られなかった。なお、炉址上に60cmほどの礫が遺存した。

遺物の出土状態　出土遺物は少なく、炉址を中心とした覆土内より若干の土器片が出土した。

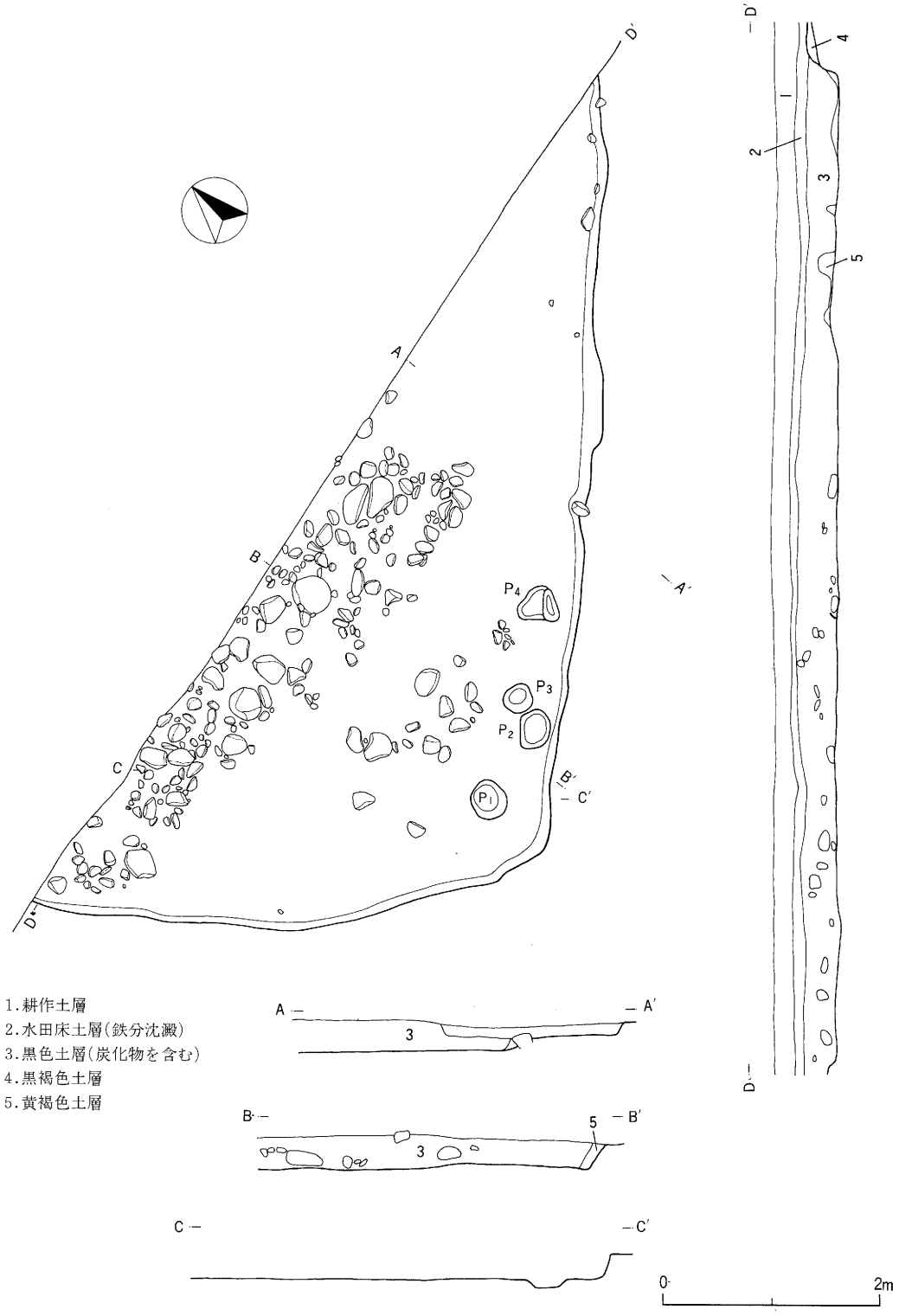
1.黒褐色土層
2.褐色土層

第36図　第25号住居址（1/60）

第37図　第25号住居址出土土器（1/3）

出土遺物（第37図）

本址は住居址の1/2ほどを攪乱されているために遺物の出土量は非常に少なく土器片が4点出土しただけである。そのうち施文が見られたものは2点だけであった。



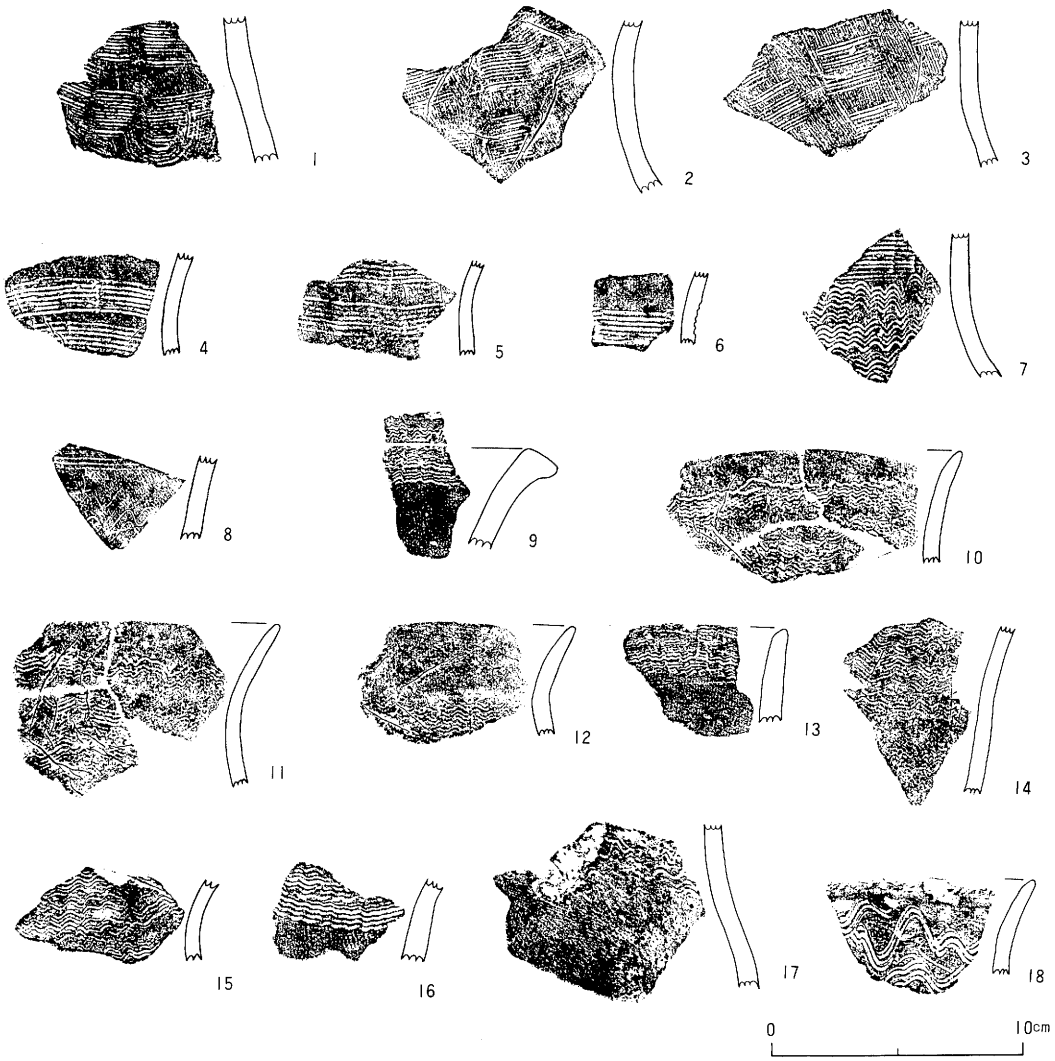
第38図　第26号住居址（1/60）

1は7条の波状文を施文したものである。文様構成等については不明である。2は折返し口縁を持つもので口縁部に波状文を1帯施文する。

第26号住居址（第38図、図版18）

検出状況　本址は試掘によりその存在が明らかとなった住居址である。住居址の½ほどは用地外で、南コーナー部等のあり方よりプランを確認できた。覆土は炭化物を含む黒色土（第3層）の単一層で内部に大小の礫を含む。壁際には黄褐色土（第5層）が堆積する。

遺構の構造　本址は北側の½ほどが用地外のため規模等については不明である。南コーナー部、東壁等より推定すると、隅丸長方形を呈する住居址と考えられる。主軸方向は東壁等より推



第39図　第26号住居址出土土器（⅓）

察すると、N47°Eを向くものになる。壁は黒褐色土（第4層）内より掘り込まれている。東壁側は残存壁高18cmとしっかりしており、ほぼ直に立ち上がる。柱穴はP_1～P_4が検出され、深さは9cm前後と浅い。P_1は南コーナー部に位置すること等より隅柱と考えられる。床は住居址東北付近を中心に堅緻で、西側になるにつれて軟弱となる。全体的に西側に緩やかに傾斜する形で床面は構築されている。床上には数十個の人頭大より拳大の礫が住居址中央部より西側にかけて散在する。

遺物の出土状態　遺物は住居址中央部を中心に覆土内より土器片が出土した。

出土遺物（第39図）

本址は住居址の½を調査したに過ぎないため、出土した遺物も土器片が32点と少ない。器形のわかり得るものはないが、大半が甕に関わるものが主体のようである。

1～3は同一個体の破片と思われるもので、ハケ整形の後13条の斜走短線文や弧状短線文を施文するものである。4～6は簾状文を有するもので4・5には7条の簾状文で2帯施文されている。7・8は波状文と簾状文が施文されるものである。9は折返し口縁を有するもので内部口縁、口唇部に波状文が施文される。10～18は口縁部から体部上半に波状文を施文するものである。波状文は波形の小さいものが主体である。18は口唇部に刻目を持つものである。

第36号住居址（II区7号住居址）（第40図、図版19）

検出状況　本址は30号住居址を精査するに伴ないその存在が明らかとなった住居址である。住居址の¼ほどは30号住居址により切られ、南コーナー部覆土上に溝状集石遺構が重複している。覆土は2層に大別され上部にローム粒を含む明褐色土（第2層）、東壁際には黄褐色土（第3層）が堆積していた。

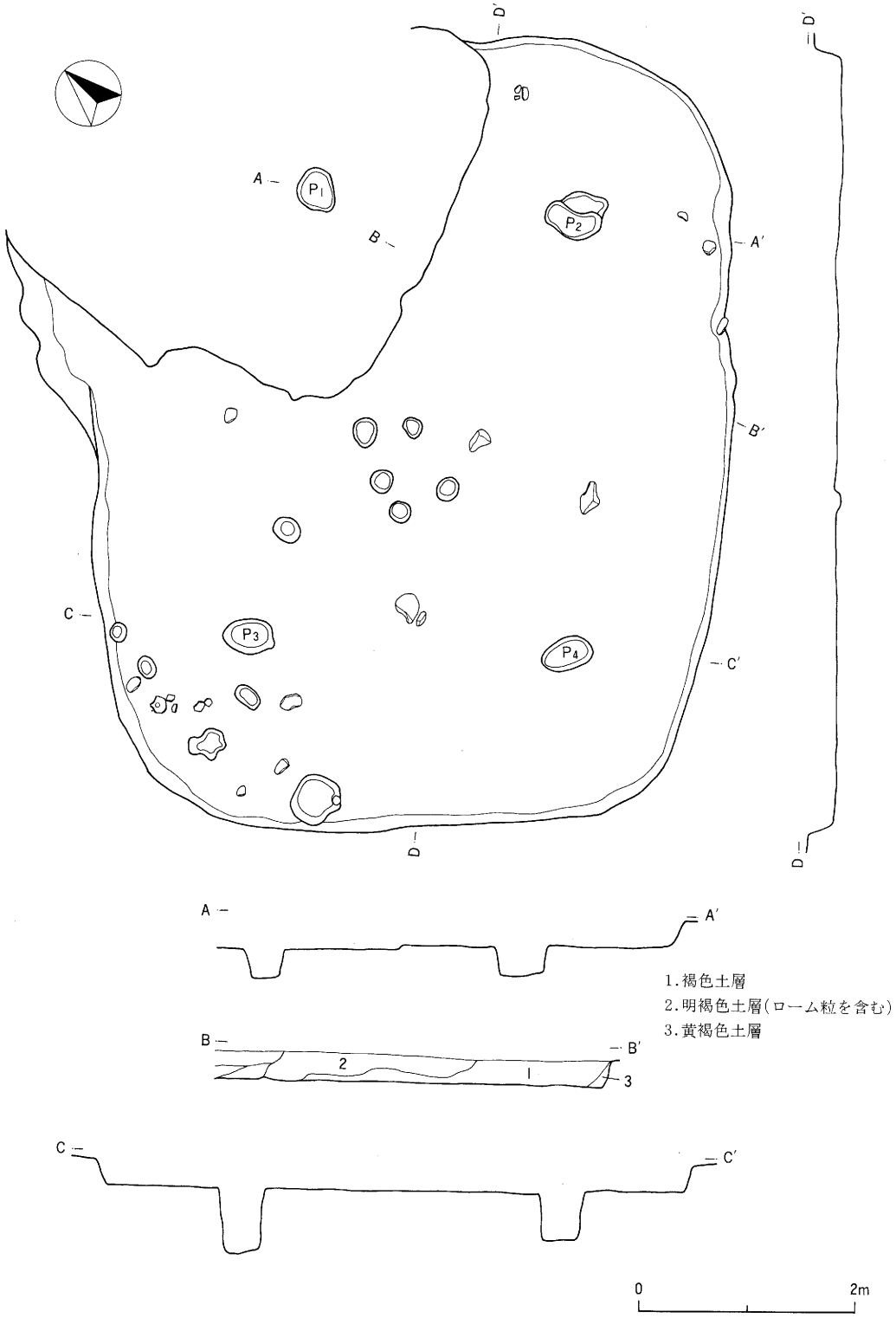
遺構の構造　本址は長軸7.1m×短軸5.7mのコーナー部に丸味を持つ隅丸長方形プランの大型の住居址である。主軸方向はN45°Eを向く。壁の掘り方はしっかりしており、残存壁高は25cmで、東壁側は地山礫層内に掘り込んでいる。主柱穴はP_1～P_4の4本柱である。主柱穴の深さはP_1は58cm、P_2は43cm、P_3は26cm、P_4は24cmである。この他にも住居址ほぼ中央部に深さが11～12cmのピットが数個見られる。床はほぼ水平で堅緻である。東壁側は地山礫面を床とする。炉址は主軸線上に位置していたと思われるが、30号住居址に切られるために遺存していなかった。

遺物の出土状態　出土遺物は住居址東コーナー部付近の覆土内に集中し、床上より高坏脚部（第41図4）が出土した。また、西コーナー部付近に蓋状土器（第41図2）が出土した。

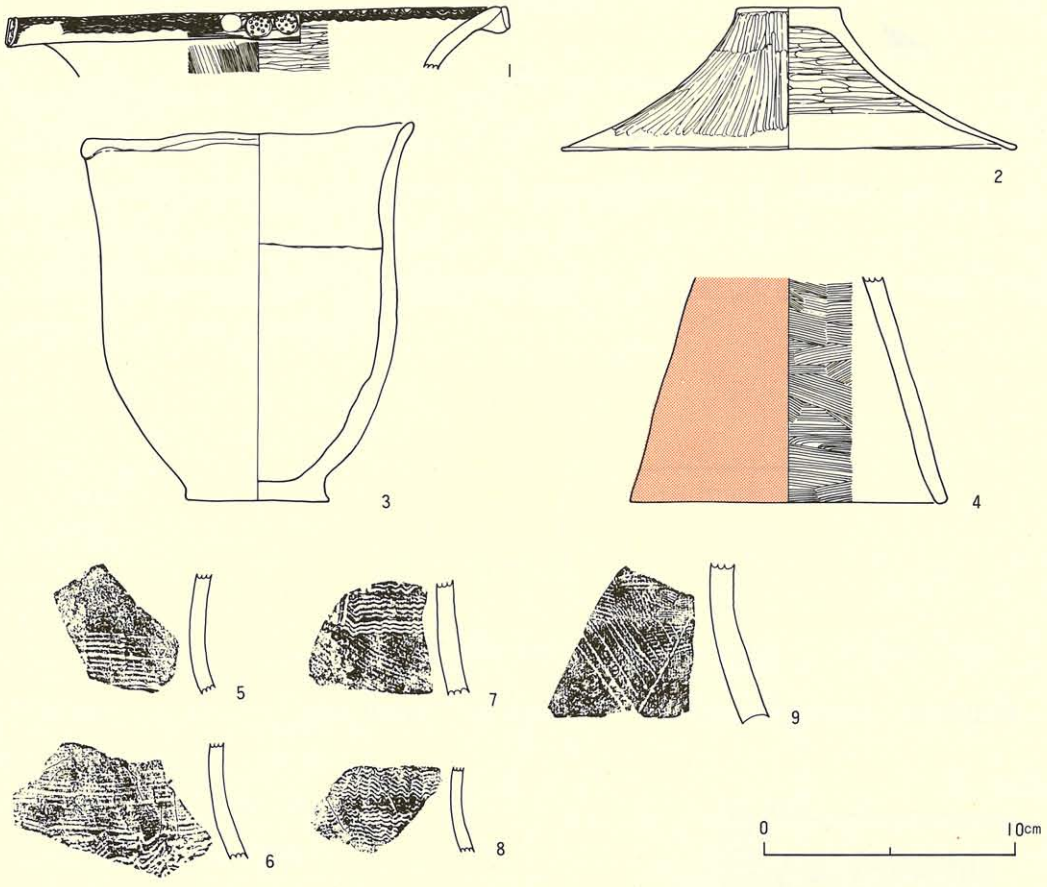
出土遺物（第41図）

本址より出土した遺物は図示したものの他に土器片が13点である。

1は口縁部が大きく開き口唇部が折り返される器形をなす。施文は9条の波状文が口唇部に1帯、内面口縁部に1帯施文され、3個一組のボタン状貼付文を4単位口縁部に貼り付けるものである。整形は良く器面が縦方向のハケ整形、内面が横方向のヘラ磨きによる。口径39.5cm、現



第40図　第36号住居址（1/60）



第41図　第36号住居址出土土器（1は⅙、2～9は⅓）

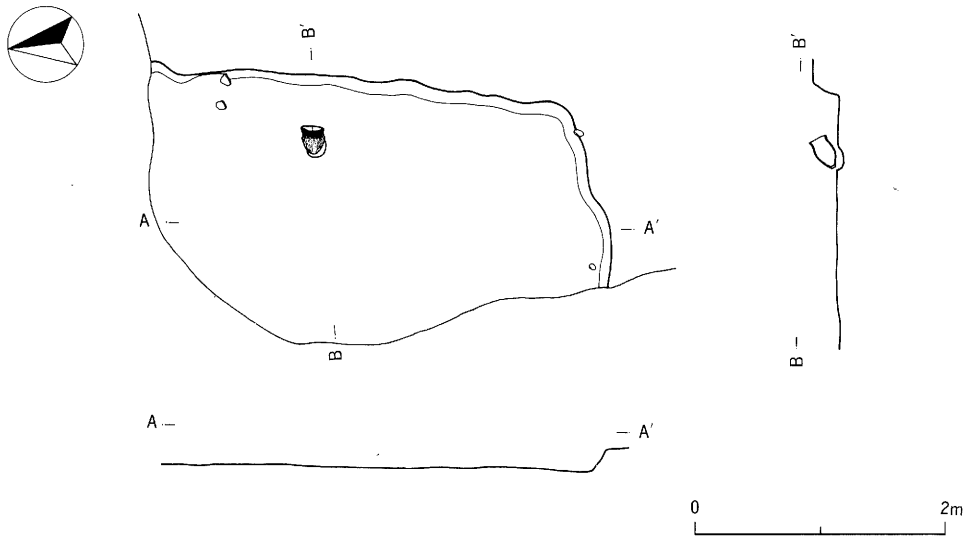
在高4.7cm。

2は口縁部が広く張り天井部が4cmほどの円で平らになる蓋形を呈するものである。器面は縦方向、内面は横方向のヘラ磨きにより整形される。器高56cm、口径18cm。

3は体部下半に丸味を持ち口縁部までほぼ直に立ち上がる頸部のくびれのない甕形土器である。口唇部は粘土を横ナデし若干厚みを帯びる。器形には全体的に歪みが見られる。整形は器面が縦方向、内面が横方向のヘラ磨きである。器面は二次焼成を受けたためか剥落が著しい。口縁部付近にスス状炭化物の付着が見られる。口径13cm、器高14.5cm。

4は脚部がハ字状になる高坏の脚部である。器面は赤色塗彩され縦方向のヘラ磨きが施される。内面は横方向のハケ整形による。

5～9は甕または壺の破片と思われるものである。5は頸部簾状文を施文するもので、6は簾状文下に波状文を施文する。7・8は波状文を有するものでその波形は小さい。7は波状文に垂下する形で平行沈線が施文されている。9はハケ整形の後体部上半にヘラ描きによる鋸歯文を施文し、その中を斜状のヘラ描き沈線で埋めるものである。



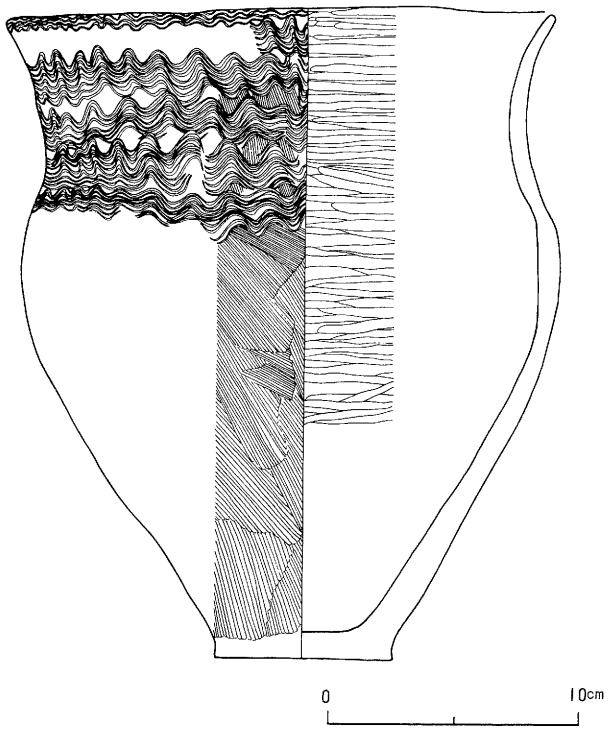
第42図　第37号住居址（1/60）

第37号住居址（II区8号住居址）（第42図、図版19）

検出状況　本址はII区F－102グリッド付近において溝状集石遺構を精査中にその存在が明らかとなった住居址である。本址は耕作等により攪乱され¼ほどが遺存していたに過ぎない。

遺構の構造　本址は攪乱等により¼ほどが遺存していたに過ぎず、規模等については不明である。住居址プランは南コーナー部より推定すると隅丸方形のプランを呈するものと思われる。壁の掘り方はしっかりしており、残存壁高は23cmほどで若干の傾斜を持ち立ち上がる。床は堅緻で南側に若干傾斜する形で構築されている。

遺物の出土状態　遺物は東壁寄り覆土内より出土した。また、床上よりは甕形土器（第43図）が倒れた形で遺存していた。



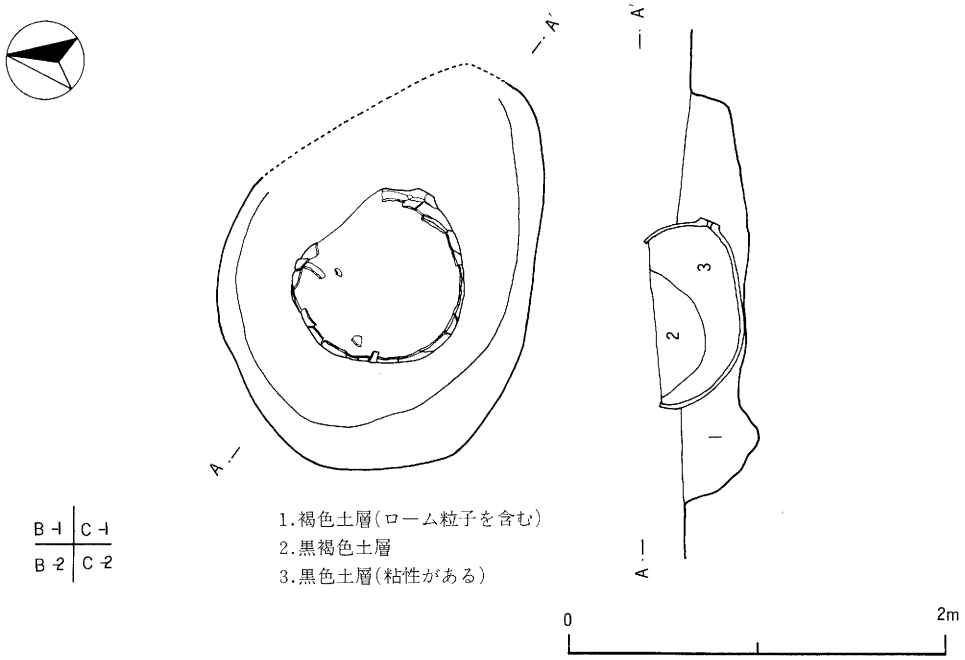
第43図　第37号住居址出土土器（⅓）

なお、土器の遺存していた所に、径14cm、深さ11cmのピットがあり、その部分に直立していたものかとも考えられる。

出土遺物（第43図）

本址より出土した遺物は土器で1点である。

形態は底部が若干張る形で、体部上半に最大径を持ち肩部の張った感じの甕形土器である。施文は口縁部を中心に9条の波状文が4帯施文されており、口唇部にも波状文が1帯施文されている。波状文の波形は全体的に不規則である。体部の整形はナデ整形した後ハケ整形を加えている。内面は横方向のヘラ磨きが施される。



第44図　壺棺（土壙2）（1/20）

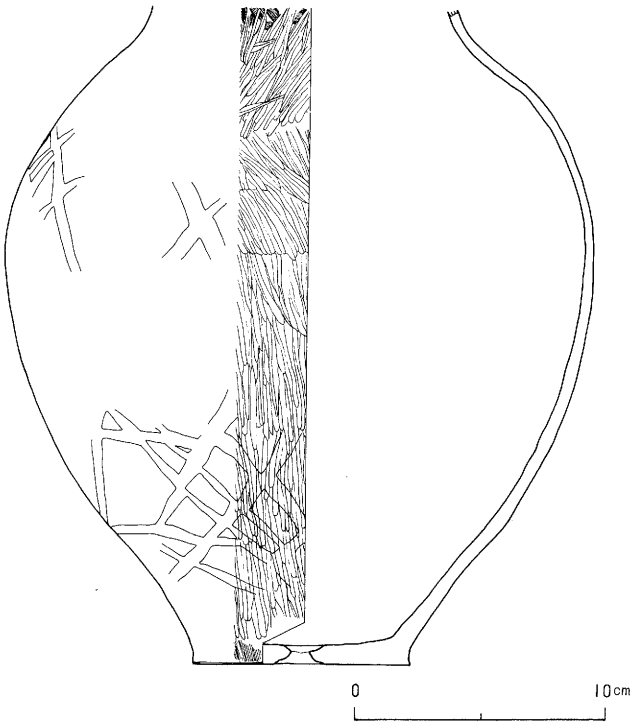
壺棺（土壙2）（第44・45図、図版20）

検出状況　本址はI区C－1グリッドより検出されたもので、検出状態等より当初土壙内に直立する形で土器が埋設されているものと予測されたが、土壙内覆土の除去により土壙内部に横位に埋設されていると認定できた。なお、東側は攪乱により土壙の立上がりは確認できなかった。

覆土は土壙内にはローム粒子を割合大目に含む褐色土（第1層）が堆積しており人為的に埋めた土だと思われる。土器内は2層に分けられた。上部にローム粒子を若干含む黒褐色土（第2層）、下部に2層と比較してローム粒子の混入の少ない粘性のある黒色土（第3層）が堆積する。これらの土層はその状態等より自然流入した可能性が強く、土器埋設当初土器内は空洞であったと考え

られる。なお、土層内より骨片等の確認はできなかった。

遺構の構造　本址は1.1ｍ×0.8ｍの不整楕円形を呈する土壙内ほぼ中央に現在高51.8cm、最大径46.7cm、底径17.2cmの壺形の土器を埋設している。土器は横位に埋設され頸部より口縁部にかけては遺存していない。遺存する胴部上半がほぼ平坦に壊れている事等より考えると、頸部・口縁部を取り壊して胴部のみを棺として使用したものと考えられる。底部ほぼ中央部には内外より穿孔したと思われる直径3.5cmの孔が見られる。



第45図　壺棺（1/6）

棺として利用した壺は胎土内に若干の石英粒等を含む割合焼成の良いもので、整形は器面は斜状、縦位の箆磨き、胴部上半は刷毛ナデが施される。内面は整形が施されておらず凹凸がある。胴部には籠の網目跡が見られる。このような器形を持ち胴部に籠の網目跡の見られるものは岡谷市橋原遺跡[1]より出土している。

このような土壙内に壺を埋設する所謂壺棺の例は諏訪地区に於いては初めてのものであり、類例を求めた場合千曲川水系の佐久市周防畑Ｂ遺跡[2]、長野市屋地遺跡[3]より発見されている。なお、周防畑Ｂ遺跡の場合は合口甕棺、屋地遺跡の場合は甕棺の形態を持つ。

註　(1) 岡谷市教育委員会　1981　「橋原遺跡」

(2) 佐久市教育委員会　1982　「周防畑Ｂ遺跡」

(3) 日本窯業史研究所　1976　「岡地遺跡」

遺構外出土遺物（第46～48図）

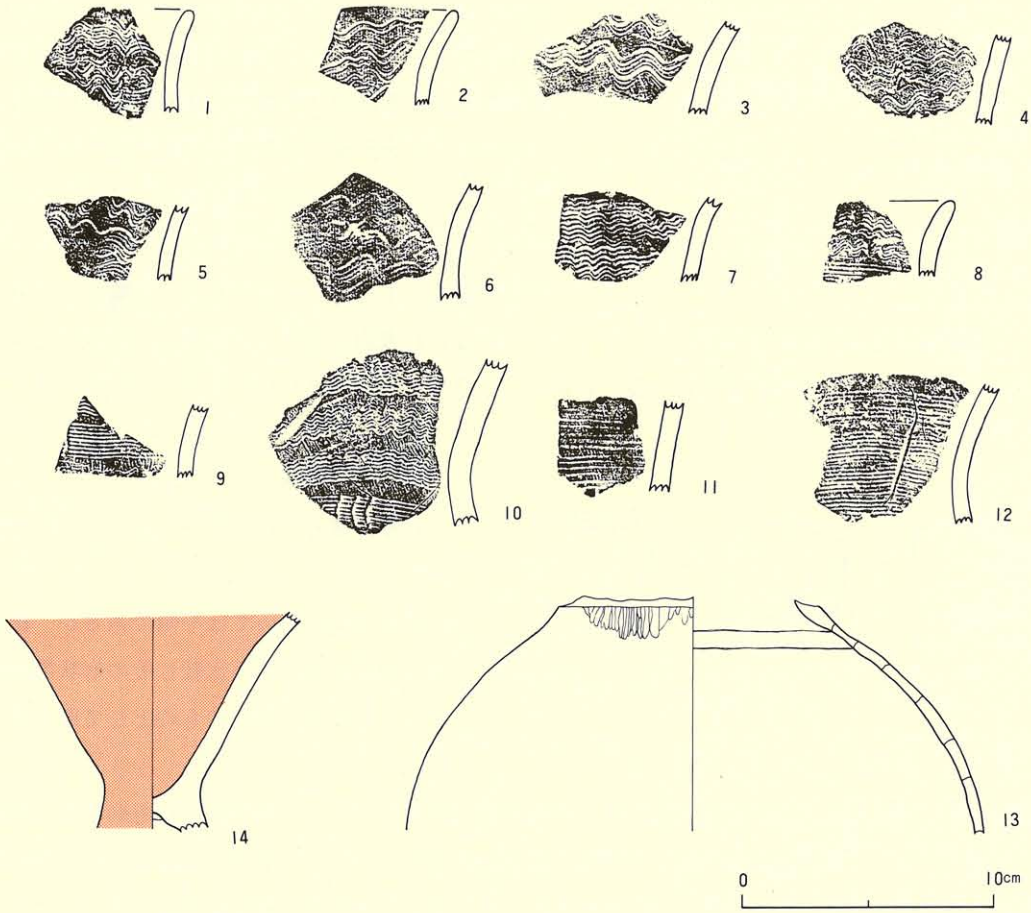
弥生時代の遺物で遺構外より出土したものは非常に少ない。

土器（第46図）

土器は全て細片で器形の復元できうるものは少ない。全て後期に属するものと思われる。

第Ｉ群土器（１～14）　後期に属するもので施文工具は櫛状工具によるものである。

第１類　口縁・頸部・体部上半に波状文を施文するものである。波状文の波形が乱れ不規則なものが主体である。なお器形は甕形土器のものが多いように推測できる。（１～７）



第46図　遺構外出土土器（1～12・14は⅓・13は⅙）

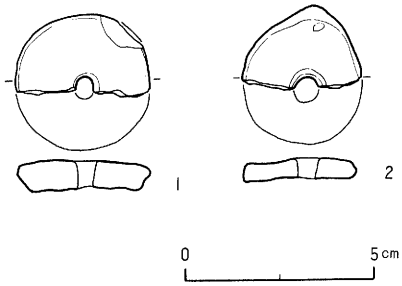
第２類　波状文と簾状文を施文するもので、簾状文は頸部付近に施文されている例が多い。（８～10）

第３類　櫛状工具による平行条線が施文されるもので、頸部付近に施文されている。（11・12）

13・14については施文が見られず施文分類に従わず説明を加える。13はⅠ区Ｅ－25グリッドより出土したものである。器形は体部が強く張るもので頸部がくびれるものである。頸部に縦方向の篦磨きが見られる。14は高坏で坏部が直線的に開き口縁部が若干外反するものである。坏部内面、坏・脚部器面に赤色彩色されており縦方向に研磨される。

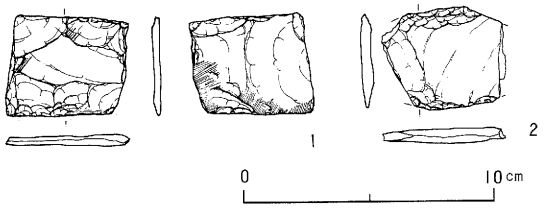
土製品（第47図）

紡錘車　２点遺構外より出土した。両者共に約½を欠損しているが形状の大略については残存



第47図　遺構外出土土製品（½）

しているものより推定でき得る。１は直径3.6cm、孔径0.7cmのもので平面形は円形を呈する。表面は平滑に整形されるが裏面は整形の際の指圧痕が残り凹凸がある。側面は斜状になり、断面は彎曲した形の台形をなす。裏面縁辺に若干の粘土の盛り上りが残る。孔はほぼ中央に穿たれる。２は１に比べ不整形なもので直径3.1cm、孔径0.7cmのもので縁辺の一箇所が突出した不整形な円形を呈する。整形は指頭により行なわれ裏面にはその際の凹凸が残る。孔は中央部より若干外れた箇所に穿たれ、裏から表に孔を穿ったものと思われ孔周囲には粘土の盛り上りが残る。



第48図　遺構外出土石器（⅓）

石器（第48図）

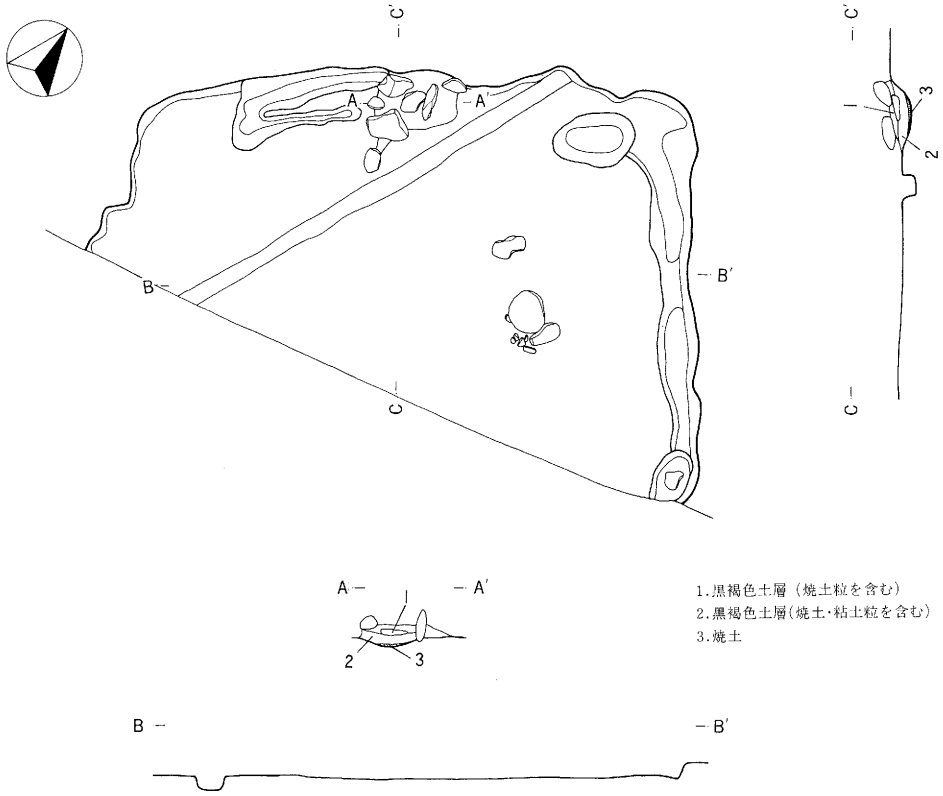
石器は横刃形石器が２点出土しているだけである。これらは遺構に伴わないために所属時期については不明であるが、縄文時代の横刃形石器に比較しその形状等が異なるために弥生時代のものとして取り扱った。

横刃形石器　１、２共に粘板岩製の板状の剝片を素材としている。平面形は長方形を呈し厚さは一定している。背部は刃部に比較し調整が余り加えられていない。１の刃部には磨痕が見られ線条痕が刃部に沿った形で横位と斜状に走る。この刃部は若干外彎する形を呈する。

第３節　平安時代の遺構と遺物

平安時代の遺構は調査区域ほぼ全域より検出された。内訳は竪穴住居址22軒、建築址４棟、柱穴列１基、溝状遺構４で遺跡の主体をなす。

第２号住居址（第49図、図版21）



第49図　第２号住居址（1/60）　0　2m

検出状況　H－18グリッドに焼土、石組みを発見し、これを中心にプランの把握に努めた。本址は住居址の南東部約½ほどが用地外にあり、中央部を縦断する形で暗渠により攪乱され、北部を掘立柱建築址２号により切られているが、北西のコーナーが把握でき、また北西壁部にカマドが設けられていたことから、大略プランを推定し得た。

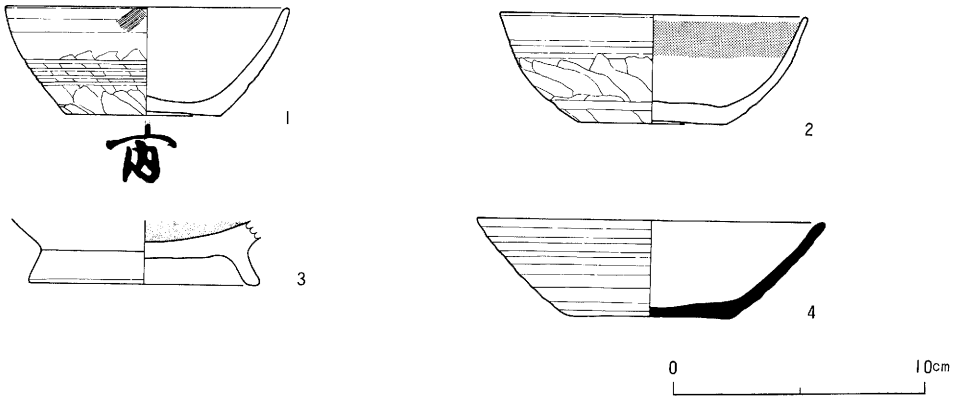
遺構の構造　北西壁中央部にカマドを持つ隅丸方形のプランの住居址である。主軸方向はN 37°Wを向く。北壁の一部は暗渠により攪乱されているが、残存壁高は10cm前後の高さで発見された。周溝は北西壁カマド周辺に若干と西壁部に見られる。深さは３～４cmと浅い。

カマドは北西壁中央部に設けられている。暗渠等の攪乱により石組等は壊されており右側袖石

しか残存しない。残存する袖石からみて石組カマドのようである。袖石には扁平石を用いており、焚口部にはずり落ちたような形で天井石と考えられる礫が遺存した。燃焼部は窪んだ底面で、焼土が残っている。

遺物の出土状態　遺物は住居址北東側の覆土中より、底部に墨書をもつ坏等（第50図）が出土している。

出土遺物（第50図）

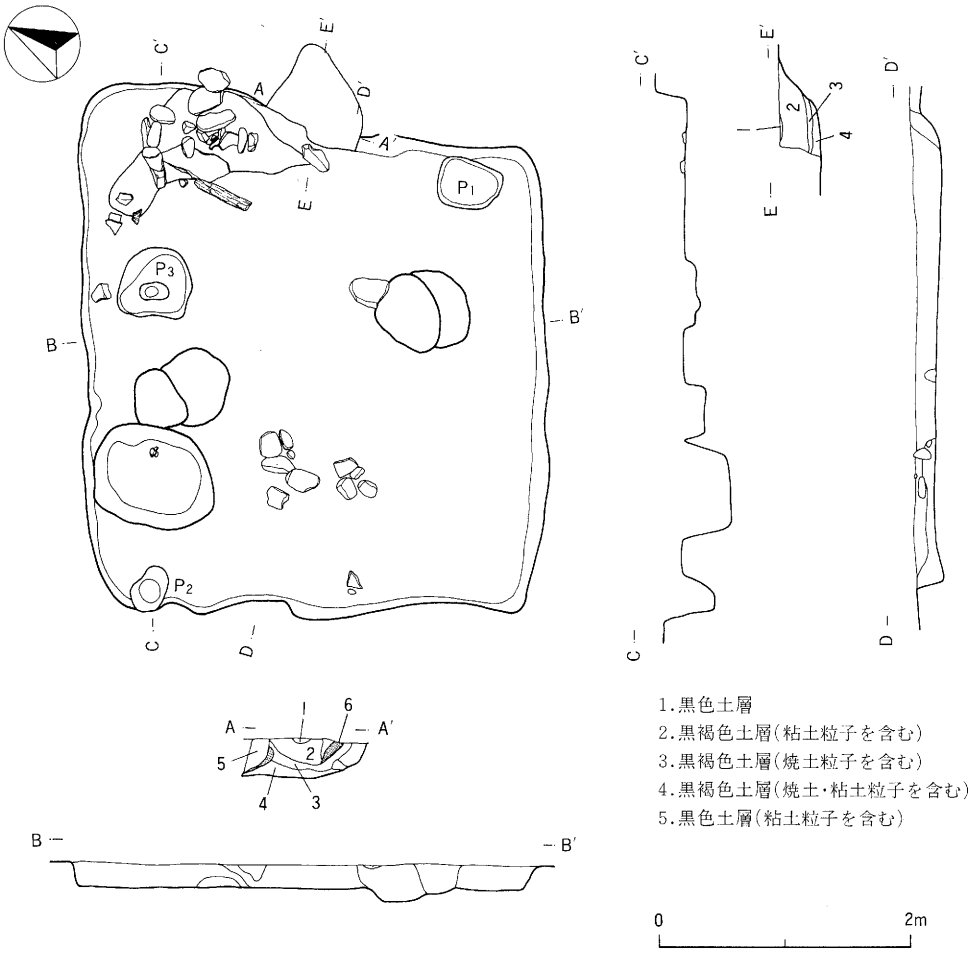


第50回　第２号住居址出土土器（1/3）

遺物の出土量は少なく図示した土師器坏（１～３）、須恵器坏(4)だけである。１は体部が弱い丸味をもつて口縁部で若干外反する器形で、内面はハケナデされている。器面はハケナデの後轆轤成形により生じた稜をヘラ削りし、体部上半は２段のヘラ削り調整となっている。底部は糸切り後周縁をヘラ削りする。底部に「上内」と字が墨書されている。焼成は堅緻で赤褐色を呈する。２は１よりも体部に丸味をもち、口縁部が割合外反する器形で、内外面共クロナデされ、外面はロクロナデの後２段のヘラ削りにより調整されている。底部は糸切り後周縁をヘラ削りする。焼成は堅緻で茶褐色を呈する。内面口縁部付近にタール状の炭化物が付着する。１、２共に放射状の暗文は見られないが、製作技法等より「甲斐型」坏と考えられる。３は高台付埦で底部は糸切り後高台を付け周縁をナデている。内部は内黒である。焼成は余り良くなく色調は黄褐色を呈する。４は須恵器の坏である。体部は底部際で折れてから口唇部まで直線的に開く。底部は糸切りである。

図	器　種	法　量	器　形	手　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	土師器　坏	口径11.2cm 器高 4.3cm 底径 6.1cm	体部が弱い丸味をもち口縁部で若干外反する。	ロクロ成形、体部下半2段の篦削り、底部は糸切り後周縁部を手持ち篦削り。	焼成良好、胎土は混入物が少なく緻密、赤褐色を呈す。	3/4	底部に墨書、器形等は「甲斐型」坏に近い。

図	器　種	法　量	器　形	手　法	焼成及び胎土	残存	備　考
2	土師器 坏	12.2cm 4.3 5.8	体部が丸味をもち口縁部が外反する。	ロクロ成形、体部下半2段の篦削り、底部は糸切り後周縁部を手持ち篦削り。	焼成良好で堅緻、胎土中混入物少なく緻密、茶褐色を呈す。	½	器形等「甲斐型」坏、内面口縁部にタール。
3	土師器 高台付 埦	— — 高台径 9.1cm	体部が若干の丸味をもつ。高台部は「ハ」字状に開く。	ロクロ成形、底部は糸切り後高台を貼り周縁ナデ、内面黒色手法。	焼成は余り良くない。胎土中に砂粒含有、色調黄褐色を呈す。	底部 ½	
4	須恵器 坏	13.3cm 3.8 6.5	体部は底部際で折れ口唇部まで直線的に開く。	ロクロ水挽き回転糸切り。	焼成良好で堅緻、胎土中に若干の砂粒含有、色調灰黄褐色を呈す。	¼	



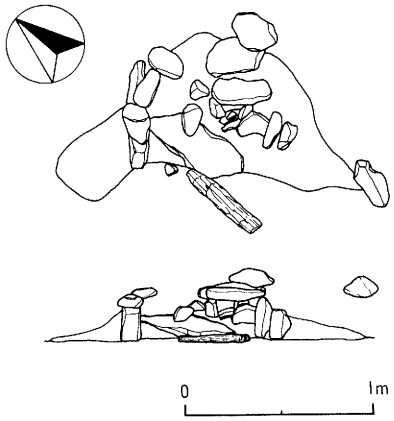
第51図　第3号住居址（1/60）

第３号住居址（第51図、図版22）

検出状況　本址はF－17グリッドにカマドが発見されたことにより存在が明らかとなった。住居址は掘り込みもしっかりしており容易にプランを検出された。しかし、北東コーナーは４号住居址の覆土内に作られていたために識別し難かった。覆土はほぼ黒褐色土の単一層（第１～３層）で掘立柱痕（第５ａｂ層）が掘り込まれた形であった。

遺構の構造　北東壁中央部とその左側にカマドを持つ、3.8×3.6ｍの若干北東コーナーを張る形の隅丸方形を呈するプランの住居址である。主軸方向はN63°Eを向く。残存壁高は20～26cmあり、若干の傾斜を持ち立ち上がる。柱穴は北西部コーナーと南東部コーナーの２ヶ所検出された。P_1は深さ12cm、P_2は26cmである。その他に北壁際に床下土壙と思われる大きさ１ｍ×78cmのものが検出され、内部より「甲斐型」坏が２点出土している。床はほぼ水平であるが西側がゆるやかに傾斜する。東側に堅緻な箇所が見られ、西側は地山礫層を床にする。

カマドは北東壁中央部とその左側に位置する。旧カマドと思われるカマドＡは壁のほぼ中央に位置し石を用いない粘土によるカマドである。壁を78cm幅でＵ字形に76cm切込み、床を不整楕円形に６cm掘込んでいる。カマド内には、粘土粒・焼土粒混りの黒褐色土（第２～４層）が充満し、袖・天井部等は粘土等で構築されていたと推定される。カマドＢはカマドＡの左側住居址コーナーに近い部分にある。残存する袖石・土層状態等より粘土を貼った石組みのカマドと思われる。袖石は扁平なものを用い、その上部に扁平な石を天井石としていたようであり、燃焼部に落ち込んだ形で存在した。カマド内からは須恵器坏・甕等が出土し、焚口部付近には46cm×８cmの炭化材が遺存した。



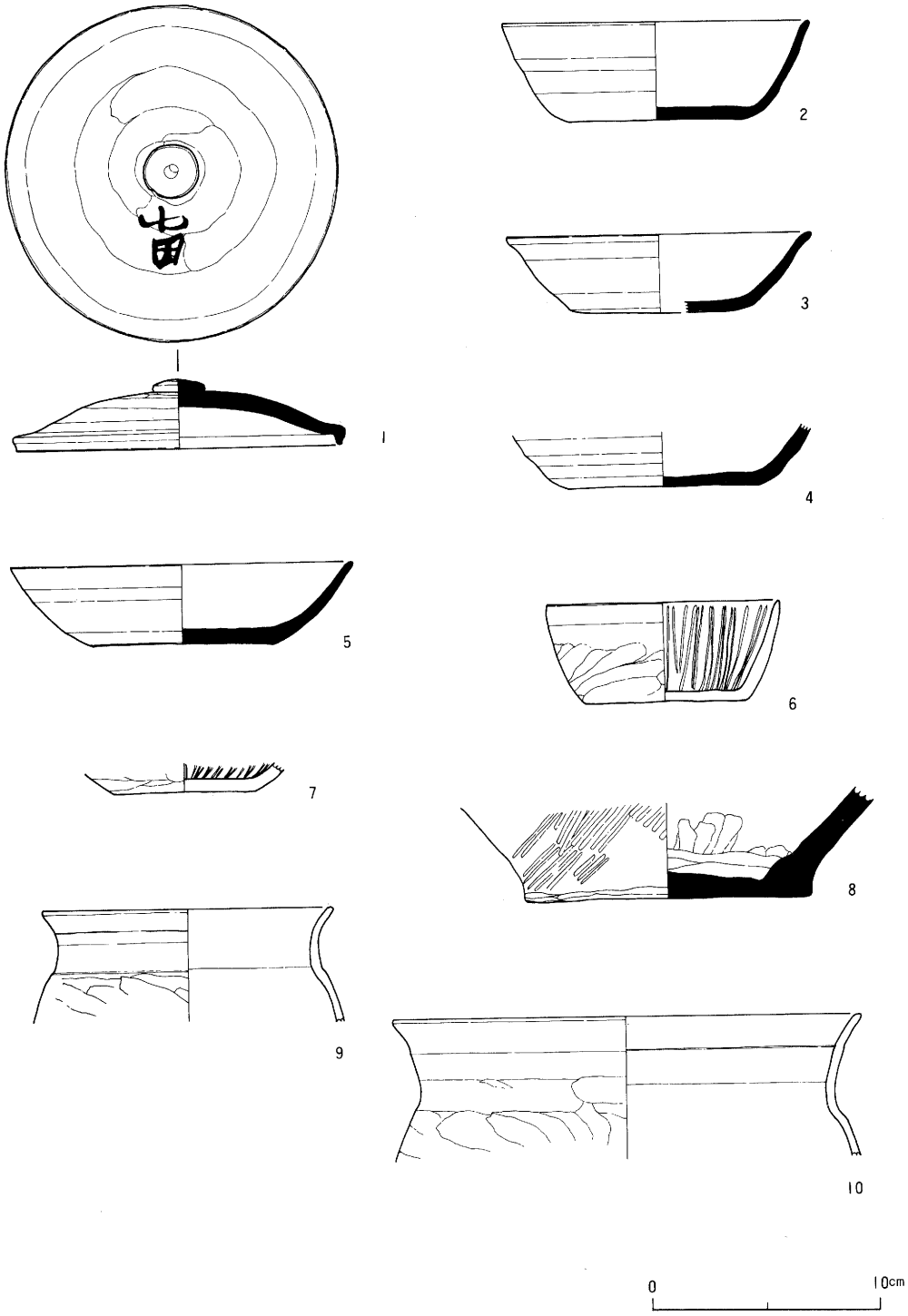
第52図　第３号住居址カマド（1/40）

遺物の出土状態　遺物は覆土内、カマド内より出土し特にカマドＢ周辺に集中した。床面からの出土遺物は、P_3脇から墨書をもつ須恵器蓋（第53図）、カマド周辺から須恵器甕の底部が出土した。

出土遺物（第53図）

遺物の出土量は少なく、図示した須恵器蓋(1)、須恵器坏（２～７）、胴張甕（９・10）、須恵器甕（８）の他には、ヘラ削り整形の胴張甕片が覆土層から若干出土している。１は口唇部が若干内傾する。内外面ロクロナデされる。胎土に石英・長石粒を含み、白灰色を呈する。天井部は３段の回転ヘラ削りが施されている。須恵器坏２～５は体部が弱い丸味をもち立ち上がり、口唇部が若干外反する器形で、内外面共轆轤ナデされている。底部は糸切りによるものが主体であるが、３のように底部を回転ヘラ削りしたものもある。床下土壙より「甲斐型」坏が出土している。胴張

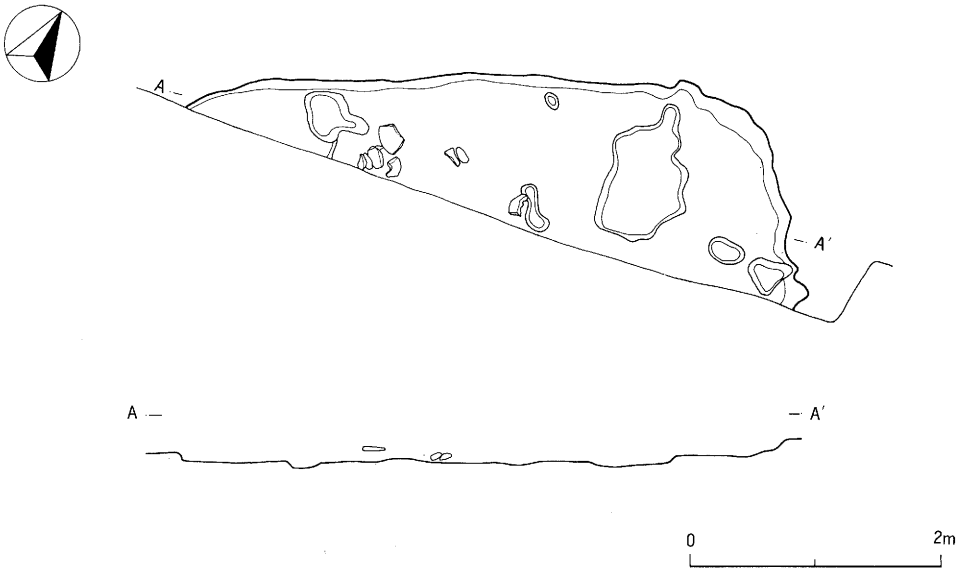
甕9・10は口縁部が上半部で外反し弱い「コ」の字形をなす。胴部はヘラ削りが施される。



第53図　第3号住居址出土土器（1/3）

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	浅存	備　考
1	須恵器 蓋	14.2 3.0 鈕径 2.3	口唇部が若干内傾天井部6.1 cmのほぼ平坦突起部をもつ鈕。	ロクロ水挽き、内外面に弱いナデ、天井部3段の回転篦削り。	焼成良好、胎土中に若干の長石、石英粒含有色調白灰色を呈す。	完形	天井部に「小田」墨書
2	須恵器 坏	13.4 4.2 7.5	体部が丸味をもち口縁部が若干内反する。	ロクロ水挽き、内外面に弱いナデ、回転糸切り。	焼成軟質、胎土中に若干の砂粒、色調白灰色を呈す。	½	
3	須恵器 坏	13.3 3.4 8.1	体部に丸味をもち立ち上がり口縁部で外反する。	内外面にナデ、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、胎土中に若干の砂粒色調青灰色を呈す。	½	
4	須恵器 坏	— — 8.3	体部は底部際で折れ丸味をもち立ち上がる。	ロクロ水挽き、内外面にナデ、底部は回転糸切り。	焼成良好堅緻、胎土中に砂粒含有、色調青灰色を呈す。	底部 ⅔	
5	須恵器 坏	14.9 3.4 7.8	体部に丸味をもち口縁部が若干内反する。	ロクロ水挽き、内外面にナデ、底部は回転糸切り。	焼成は若干軟質、胎土中に砂粒を含有、色調白灰色を呈す。	ほぼ完形	
6	土師器 坏	10.1 4.3 7.0	体部に若干の脹みをもつU状をなす。口唇部が若干内反する。	ロクロ成形、体部下半は篦削り、底部は手持ち篦削り、内面に放射状の暗文。	焼成は割合良好、胎土中に若干の混入物を含有、色調は黄褐色を呈す。	¼	「甲斐型」坏
7	土師器 坏	— — 6.1		ロクロ成形、体部下半は篦削り、底部は糸切り後手持ち篦削り、内面・底に放射状の暗文。	焼成良好堅緻、混入物は少ない、色調は赤褐色を呈す。	底部 ¾	「甲斐型」坏
8	須恵器 甕	— — 12.4		外面は平行叩き目文工具で締める、内面は雑な篦削り。	焼成は良好で堅緻、色調は青灰色を呈す。	底部 ⅓	
9	土師器 胴張甕	12.7 — —	口縁部は直立してから上半部で外反し弱い「コ」字状をなす。胴部は球状に脹む。	口縁部は横ナデ、胴部外面上半は横方向の篦削り。	焼成は良好、胎土中に混入物が少ない、器壁が薄い色調は茶褐色を呈す。	口縁部 ⅓	
10	土師器 胴張甕	20.4 — —	口縁部は直立してから強く上半部で外反し「コ」字状に近い形をなす。胴部は球状に脹む。	口縁部横ナデ、胴部外面上半は横方向の篦削り。	焼成は良好、胎土中に混入物が少ない、器壁が薄い色調は茶褐色を呈す。	口縁部 ⅓	

第５号住居址（第54図）



第54図　第５号住居址（1/60）

検出状況　Ｉ－13グリッドに黒色土の落ち込みが見られ、これを中心に精査を進め、プランの把握に努めた。住居址は約2/3ほど用地外のため、その北側1/3ほどを調査したことになるが、北東側コーナー、北西側コーナーによりプランについて推定し得た。

遺構の構造　本址は調査された部分が少なくその規模等については不明である。プランについては北東・北西側コーナーにより隅丸方形を呈するものと思われる。残存壁高は８cmであり、根等の攪乱によって不明確である。床面は現在の耕作面より約40cmと浅いため攪乱が及んでおり、凹凸の有るものとなっている。

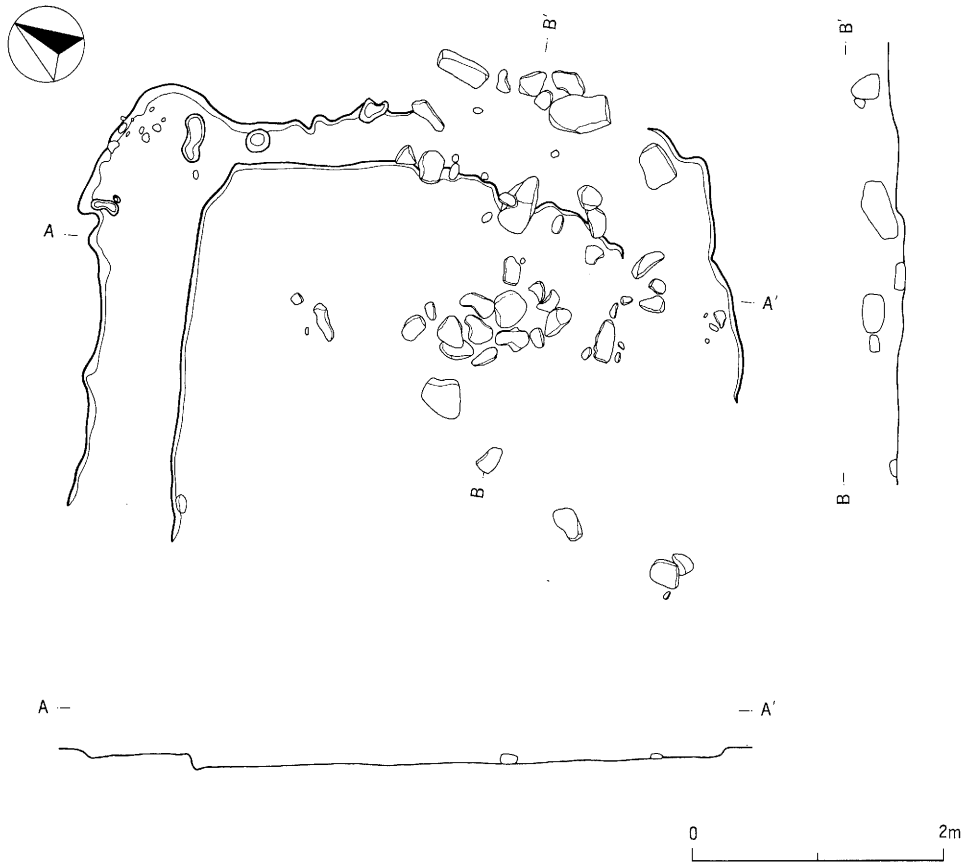
遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。

第６号住居址Ａ（第55図）

検出状況　第１号住居址の精査に伴ない確認された住居址である。耕作の攪乱等で掘り込みはしっかりしておらず、そのためにプランについては不確実ながらもカマドの位置等により推定した。西側の掘り込みは確認できなかった。

遺構の構造　本址は東壁中央部にカマドを有する隅丸方形に近いプランの住居址であろう。主軸方向はN65°Eを示し、主軸線に直交する軸線の長さは4.3ｍである。壁面は掘り込みが浅く、残存壁高は12cmほどである。床面は全体的に軟弱で凹凸がある。

カマドは東壁若干右寄りに設けられていたと思われる。石組カマドであり、袖石として用いられたと思われる礫が遺存していた。カマドの構造については掘り方も認められなかったため、多



第55図　第6号住居址（1/60）

くが不明である。カマド周辺の床面に散在する礫はカマドに関わるものであろう。本址は重複する6号住居址Bより、南寄りに移築したものかとも思われる。

遺物の出土状態　遺物はカマド周辺を中心とした覆土内より、土師器坏類を中心に出土している。

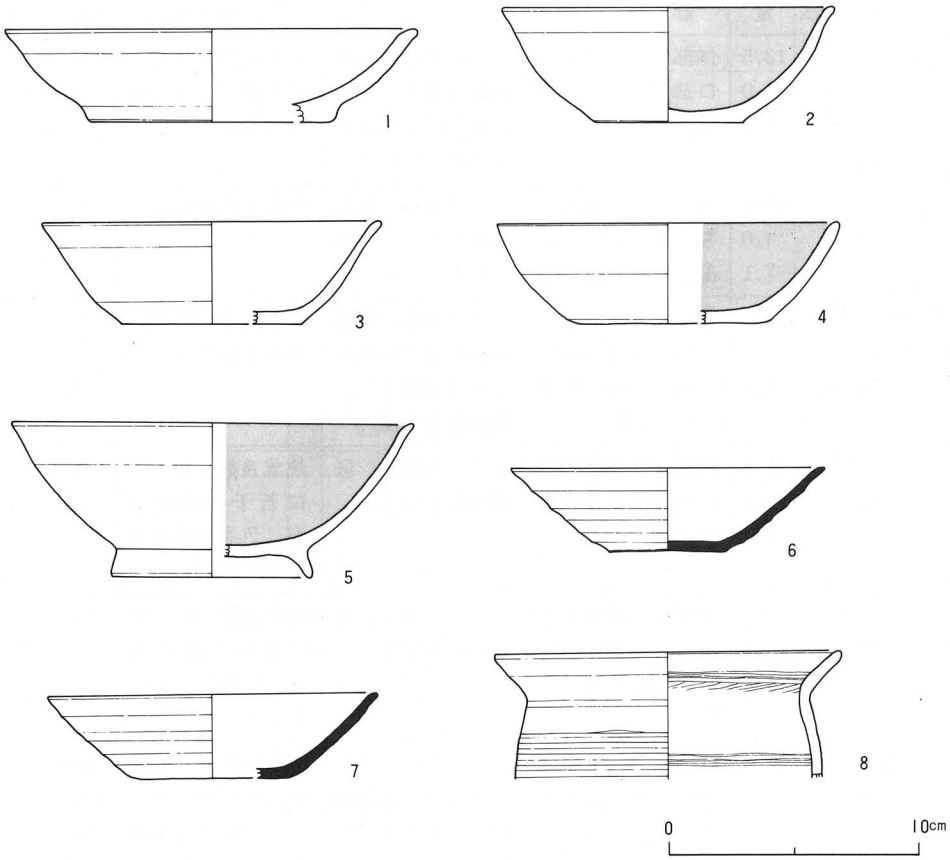
出土遺物（第56図）

本住居址出土の遺物は、図示したものの他に土師器甕胴部破片が若干出土している。遺物はカマド周辺の覆土内より出土したものである。

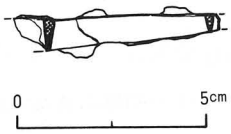
坏類が主体で、土師器・須恵器のもの合計6点出土している。土師器の坏（1～4）は体部に丸味をもち、口縁部が外反するものが主体で、内面を黒色研磨したものと、そうでないものの2種類がある。須恵器は轆轤水挽きで体部が直線的に開くものである。

埦は高台を有するもので内面を黒色研磨する。製作手法は割合と丹念である。

甕は小形甕の部類に属するものである。口縁部は「く」の字形を呈し、胴部は若干の丸味をもつものである。整形はカキ目整形で内面に刷毛撫でが見られる。



第56図　第６号住居址出土土器（⅓）



第57図　第６号住居址出土
鉄製品（½）

鉄製品（第57図）　１は刀子の刃部と関部の一部の破片で、現在長5.3cm、最大幅0.8cm、厚さ0.3cmを測る。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	土師器 坏	16.3 3.6 9.8	底部から一段の稜を有して立ち上がる、体部は丸味をもち口縁部が外反する。	ロクロ成形、底部は回転糸切り。	焼成は良好、胎土中に若干の砂粒を含有。	¼	
2	土師器 坏	13.1 4.6 5.8	体部に丸味をもち口縁部を外反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面は黒色手法を用い放射状研磨。	焼成は良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	⅓	

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
3	土師器 坏	13.5 4.0 7.0	体部は丸味をもち口縁部で外反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面は口唇部が横・他は放射状研磨。	焼成は割合良好、胎土中に若干の砂粒含有。	⅓	
4	土師器 坏	13.6 4.0 7.1	底部より丸味をもち立ち上がり口縁部は外反しない。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法。	焼成は若干軟質。	⅓	
5	土師器 高台付 埦	15.8 6.1 高台径 8.1	体部は丸味をもち立ち上がり口縁部が外反、高台は「ハ」字状。	ロクロ成形、底部回転糸切り後高台を貼り周縁ナデ、内面黒色手法。	焼成良好、色調は茶褐色を呈す。	½	
6	須恵器 坏	12.4 3.2 4.6	体部は底部際で折れ口縁部まで直線的に開く。	ロクロ水挽き、底部回転糸切り。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は橙褐色を呈す。	⅓	
7	須恵器 坏	13.0 3.3 5.8	体部は口縁部まで直線的に開くが口唇部で若干外反する。	ロクロ水挽き、底部回転糸切り。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は青灰色を呈す。	⅓	
8	土師器 小形甕	12.6 — —	口縁部「く」字形に外反し胴部は若干の丸味をもつ。	ロクロ成形でカキ目をもつ口縁部内面にもカキ目、内面ハケナデ。	焼成は良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は赤褐色を呈す。	口縁部 ¼	

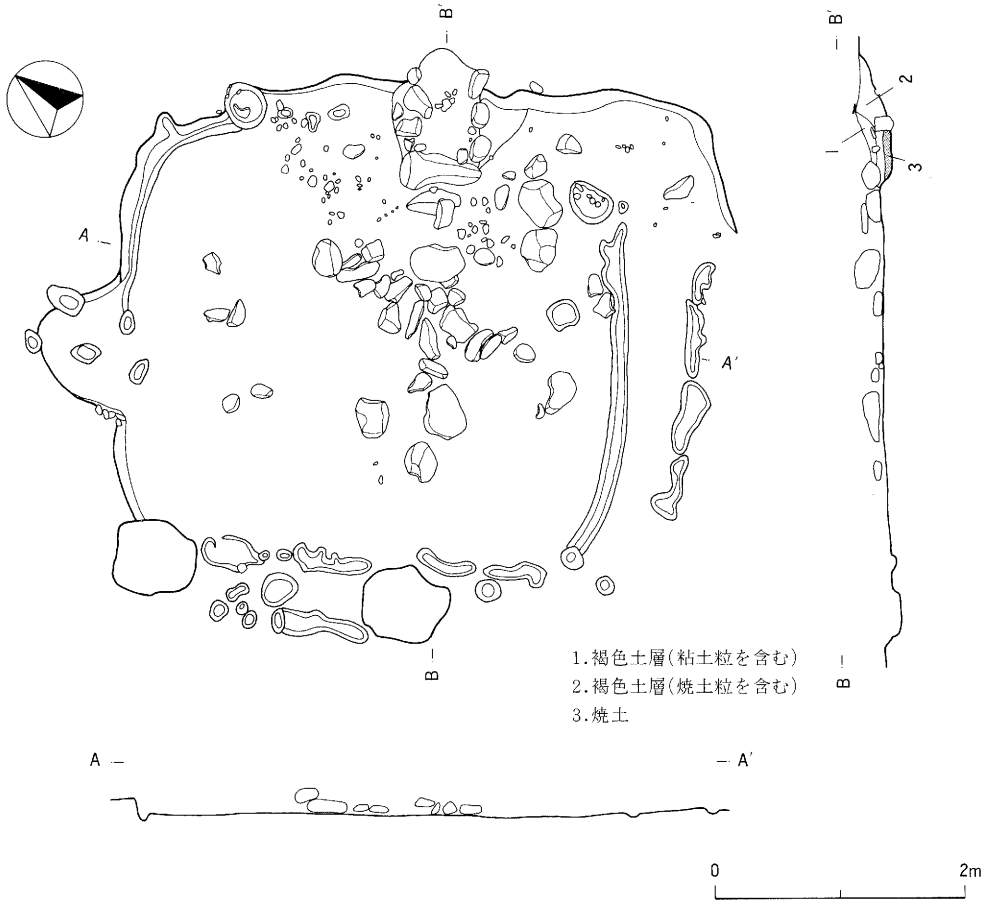
第6号住居址B（第55図）

検出状況　第6号住居址Aの精査に伴い重複した形で検出された住居址である。第6号住居址Aと重複し、北壁側を地山礫層に掘り込んでいるため、プラン等については不明確である。

遺構の構造　本址は東壁中央部やや南寄りにカマドを有する。北・東側コーナーにより隅丸方形に近いプランの住居址であろう。壁面は掘り方がしっかりしておらず浅く、残存壁高は9cmほどである。床面は6号住居址Aに切られているために明確でないが、残存部より見ると軟弱で凹凸がある。

カマドは明確でなく石組に用いられたと思われる礫が数個見られるだけである。本址は6号住居址Aに切られており、新旧関係が明確になった。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。



第58図　第７号住居址（1/60）

第７号住居址（第58図、図版22）

検出状況　本址はＨ－７グリッドより石組をもつカマドが発見されてその存在が明らかとなった。住居は南西・南東側を黒色土中より掘り込んでおり、また西側を掘立柱建物址によって切られたために確認できなかった。しかし、北・東側コーナー、カマドや周溝の位置等により大略のプランを推定し得た。

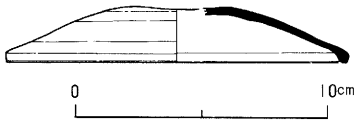
遺構の構造　北東壁ほぼ中央部にカマドを持つ4.5×4.7ｍの隅丸方形プランの住居址である。主軸方向はN51°Eを向く。なお、本址は同軸上に於いて南東・南西側に拡張が行われている。壁は南西・南東側は黒色土中よりの掘り込みのために検出できなかったが、北西側等の掘り方を見ると残存壁高が16cm前後で割合しっかりしている。周溝は北東壁下を除きほぼ全周する。深さは６～８cmである。床はカマド付近を中心に堅緻な面が見られるが他の部分はやや軟弱である。ほぼ水平に構築されている。

カマドは北東壁ほぼ中央部に設けられている。本址は拡張されているため新旧のカマドが存在

するはずであるが1箇所しか検出できなかった。残存する袖石、土層状態等より粘土を貼った石組のカマドと思われる。カマドは82×73cmの楕円形の掘り方を持ち厚い礫を左右3個ずつ袖石として深く直立させている。燃焼部には焼土混りの褐色土(第2層)が充満し、燃焼部底には厚さ6cmで焼土が堆積する。また、長さ約15cmの角柱礫が直立する形で遺存しており、これが支脚であると考えられる。焚口部には天井石と思われる長い礫が崩落していた。カマド手前に散在する礫はカマドに関わるものであろう。

遺物の出土状態　出土遺物は少なく覆土内より須恵器蓋(第59図)、カマド前面の集石より砥石(第60図)が出土しているに過ぎない。

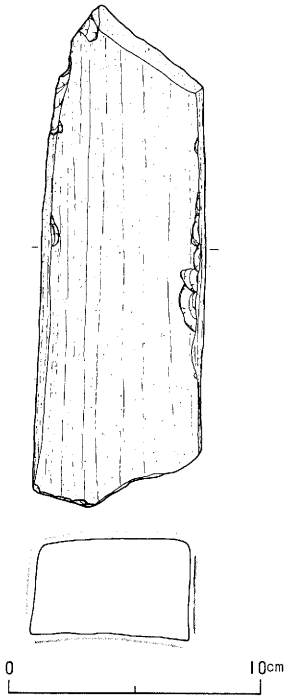
出土遺物(第59～60図)



第59図　第7号住居址出土土器(⅓)

本址よりの出土遺物は図示した須恵器蓋1点と砥石1点だけである。須恵器蓋は口唇部が若干内傾するもので、天井部は4.3cmでほぼ平坦である。轆轤水挽きで内外面に軽いナデ痕が残る。焼成は余り良くなく軟質を呈する。色調は白灰色を呈する。口径13.5cmを計る。

石製品(第60図)は安山岩製の砥石で、中央部が若干彎曲する面と凸面とがある。全面がよく研磨されている。一辺6cmの長方形断面をなし、現在長さ19.8cmを計る。住居址内床上礫内より出土した。



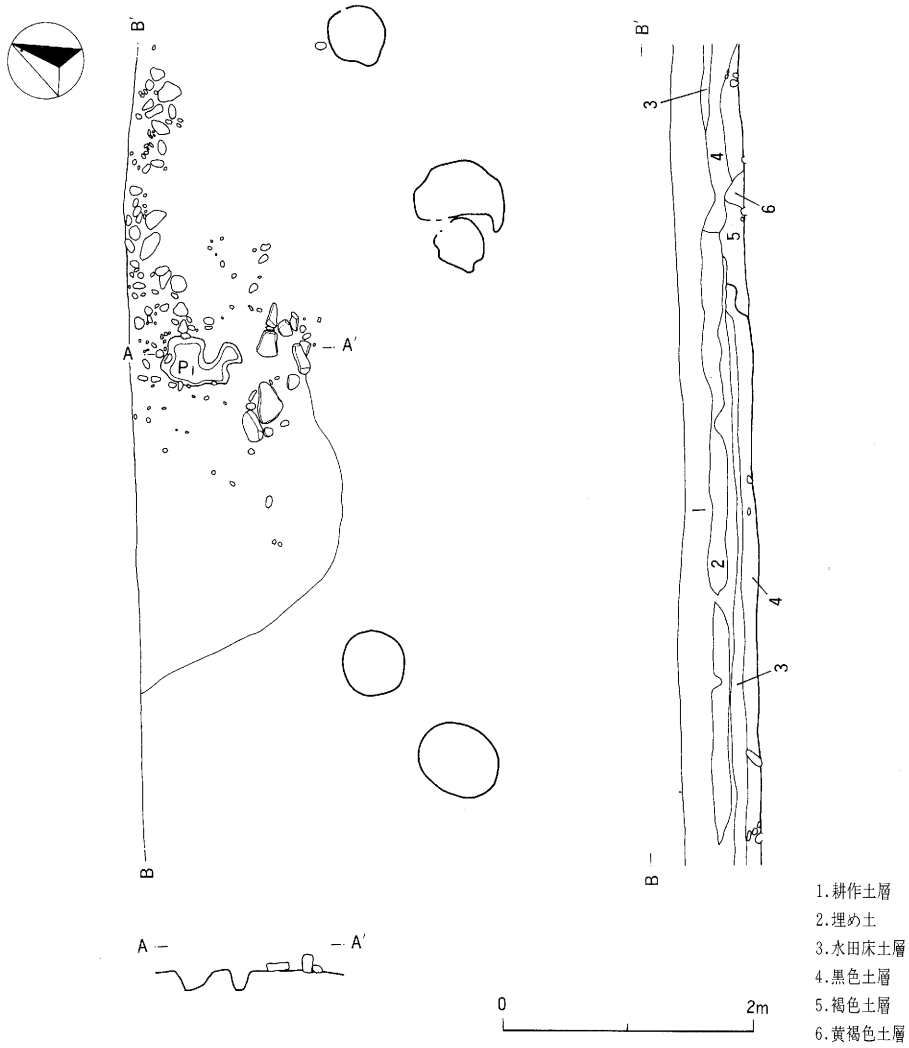
第60図　第7号住居址出土石製品(⅓)

第9号住居址(第61図)

検出状況　本址はB－6グリッドにおいてカマドの袖石らしきものが発見されその存在が明らかになった。耕作等によりプランは不明確で、カマド西側に堅緻な床面が確認されただけである。北壁セクションによると覆土は礫を含む黒色土の単一層(第4層)で、褐色土(第5層)より掘り込まれているようである。

遺構の構造　本址は攪乱等により立ち上がりが不明確でありプランの把握に至らなかった。壁高は北壁セクションによると17cmである。床はカマド西側が堅緻であり、他は残存していなかった。ピットはP_1のみである。P_1は不整形のもので深さ18cmで地山礫層内に掘り込まれている。また、中より坏類が出土している。

カマドは袖石部が残存するのみで掘り方等については確認できなかった。袖石は扁平な礫を左右2個ずつ用い袖石の間に打製石斧の破片(第63図1)を詰めている。焚口周辺に散在する扁平な礫はカマドの石組みに関わるものであろう。



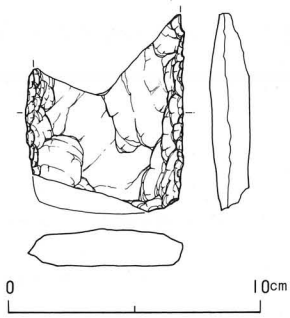
第61図　第９号住居址（1/60）

遺物の出土状態　遺物はカマド内、カマド脇、ピット内より出土した。カマド内よりは小形甕（第62図5）、甕（第62図８）が落ち込んだ状態で出土し、カマド脇ピット内よりは坏類（第62図１）を中心に遺存していた。

出土遺物（第62～63図）

本址よりの出土遺物は図示したものの他に羽釜口縁部破片が出土している。遺物は全て土師器で、坏・小形甕・長胴甕が出土している。坏は口縁部が若干外反するものが主体で、体部は若干の丸味をもつがほぼ直線的に開くものが主体である。底部はすべて回転糸切りで雑な切り方のものが存在する。内面が黒色研磨されたものが１点ある。

第62図　第９号住居址出土土器（1/6）

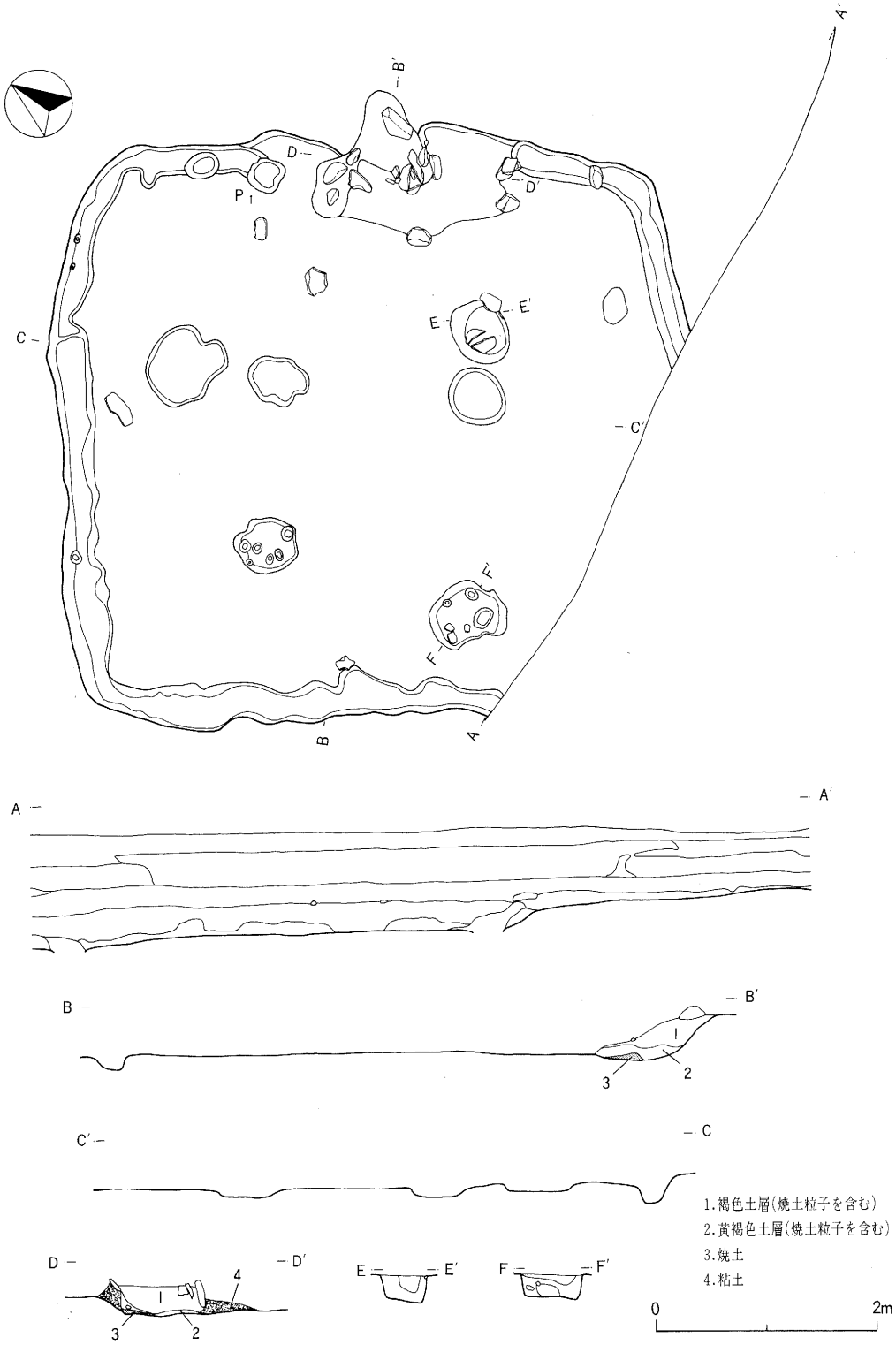


第63図　第９号住居址カマド出土石器(1/3)

甕は法量等により小形甕と大形の長胴甕に分けられる。小形甕は口縁部が「く」の字形に外反するもので、最大径が胴部上半、胴部中間のものに分けられる。製作法は粘土紐の巻き上げによりつくられ、ロクロナデにより整形されるものと、ハケナデされるものとに分けられる。すべて焼成は余り良くなく胎土中に砂粒等を含んでいる。長胴甕は口縁部が「く」の字形に外反し、胴部が張るものである。

この他に打製石斧がカマドの袖石間より検出されたが、直接的に住居址に関わるものではなく詰め石である。打製石斧は粘板岩製で刃部と基部を欠損している。平面形は短冊形を呈している。縄文時代に使用され破損し廃棄されたものを後世に石材として利用したものである。

図	器種	法量	器形	手法	焼成及び胎土	残存	備考
1	土師器 坏	10.5 2.7 5.2	底部より体部は外反する形で立ち上がり体部中央で折れ丸味をもつ口縁部は若干外反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成良好で堅緻、胎土中に若干の砂粒含有、色調は褐色を呈す。	⅓	
2	土師器 坏	10.0 3.5 4.8	底部より直線的に開き口縁部が若干外反する	ロクロ成形、底部回転糸切り、外面にロクロナデの稜が残る。	焼成は余り良くなく軟質、胎土中に若干の砂粒含有、色調は灰褐色を呈す。	½	
3	土師器 坏	13.0 4.0 6.7	体部は丸味をもち立ち上がり口縁部が若干内反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成は余り良くなく軟質、胎土中に砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	½	
4	土師器 坏	13.4 5.5 7.2	体部は丸味をもち立ち上がり口縁部が若干外反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法。	焼成良好、胎土中に砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	½	
5	土師器 小形甕	— — 6.1	胴部は丸味をもち下半部が最も脹む。	粘土紐巻き上げ法による。	焼成は良くなく軟質、胎土中に砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	胴部 ⅓	
6	土師器 小形甕	16.5 — —	口縁部は「く」字形に外反し胴部上半が最も脹む。	ロクロ整形し胴部下半は篦削りされる。	焼成は余り良くない、胎土中に石英砂などを含有、色調は茶褐色。	⅓	口縁内面に種子圧痕
7	土師器 小形甕	17.7 — —	口縁部は「く」字形に外反、口縁部は若干内反、胴部上半に最大径。	内外面共にハケ目により整形。	焼成は余り良くない、胎土中に砂粒含有、色調は茶褐色を呈す。	口縁部 ¼	
8	土師器 長胴甕	20.9 — —	口縁部は強く「く」字形に外反し胴部は若干の丸味をもつ。	内外面共にハケにより整形。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は茶褐色を呈す。	口縁部 ¼	



第64図　第10号住居址（1/60）

第10号住居址（第64図、図版23）

検出状況　本址はH－10グリッドを中心に遺物が多数発見されてその存在が明らかとなった。なお、住居址南側コーナーは用地外である。住居址内に掘立柱建築址が重複している。掘り込みはしっかりしており容易にプランは検出された。覆土は２層に分かれ、上部にローム粒子を含む黒色土（第６層）が堆積し、床面上にローム粒子を含む黒褐色土（第７層）が、壁際にはローム粒子を含む明褐色土（第８層）が堆積していた。

遺構の構造　本址は5.4×5.7ｍの若干南壁側を張る横長の隅丸方形プランの住居址である。主軸方向はN51°Eを向く。残存壁高は12cmほどで、ゆるやかな傾斜を持ち立ち上がる。なお、南西壁は褐色土中より掘り込まれていたために確認できなかった。周溝はカマド部分を除きほぼ全周する。幅30cm、深さ16cmほどである。柱穴と思われるピットは検出されなかったが、カマド左脇に大きさ15×15cm、深さ33cmのピットが検出され内部より焼きの悪い須恵器坏が、逆位の灰釉皿の上に載った状態で出土している。床は住居址北西側にロームブロックを含む明褐色土を貼り平坦に構築している。カマドは北東壁ほぼ中央部に設けられている。遺存する袖石脇部に粘土が貼られていることにより石組み粘土カマドであると思われる。

カマドは大きさ78×70cm、深さ７cmのほぼ円形の掘り方をもち、両脇に扁平礫を直立させ粘土により固定され袖部としている。燃焼部上部には焼土粒を含む褐色土（第１層）、下部には焼土粒を含む黄褐色土（第２層）が堆積していた。焼土は焚口部に近い部分に７cmほど堆積していた。また、カマド周辺には袖部等に貼ってあったと思われる粘土が崩壊し10cmほど堆積していた。なお、天井石等は遺存していなかった。

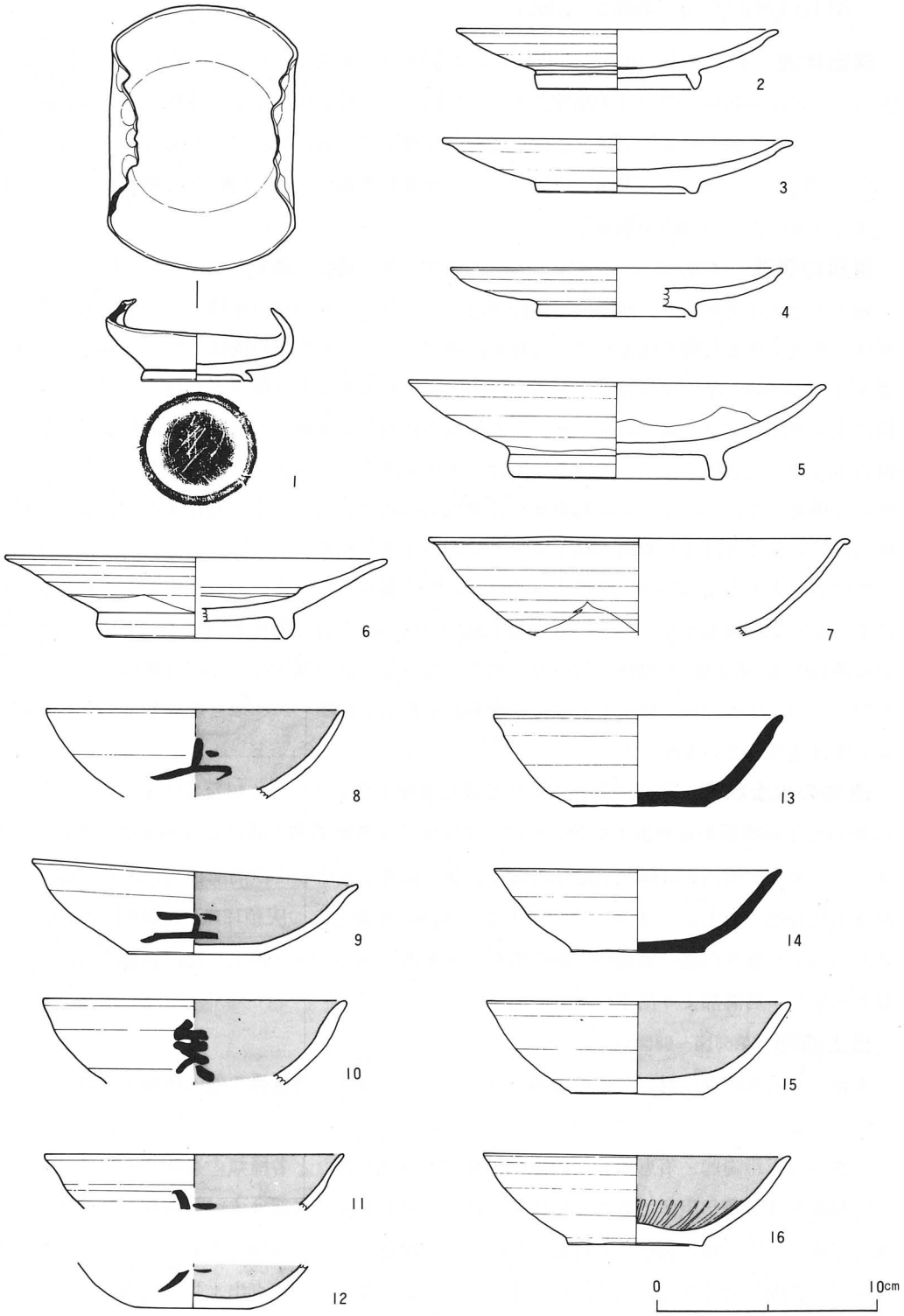
遺物の出土状態　今回の調査において最も遺物が発見された住居址である。土器群はカマド左側周辺と周溝部からの出土が多かった。カマドでは燃焼部第１層内より小形甕（第67図42）が出土した。カマド周辺では黒色土器坏の破片、甕の破片が集中した。周溝部では黒色土器坏の破片が落ち込む形で出土し、東コーナー床上より14cmに刻書をもつ灰釉耳皿（第65図１）が出土した。またP_1内より焼きの悪い須恵坏（第65図13）、灰釉皿（第65図２）が出土した。鉄器類は小刀子、円盤状鉄製品が周溝部より出土した。

出土遺物（第65図～68図）

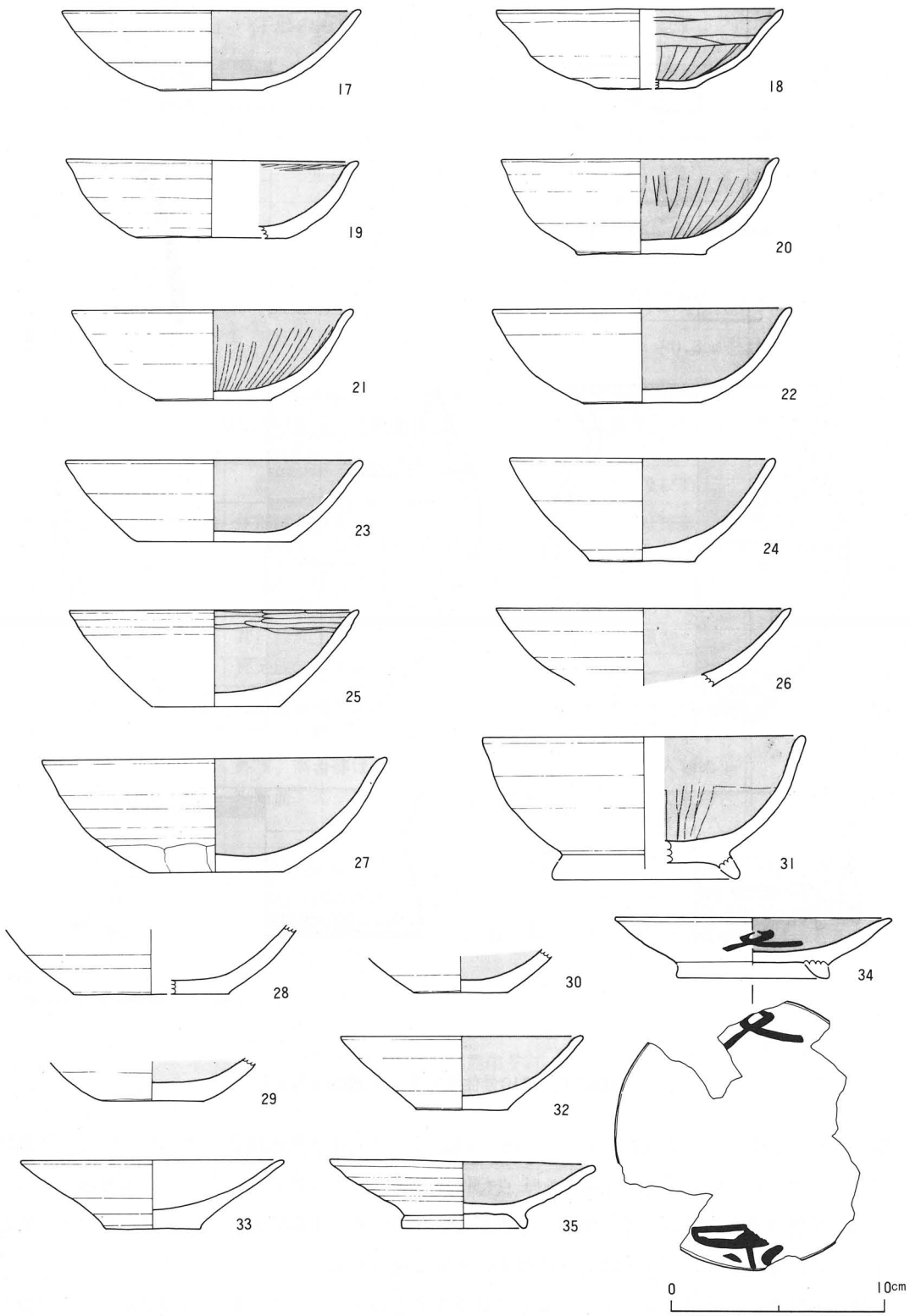
本址は今回の調査において最も遺物の点数が多い。図示した遺物の他に坏類、甕類の破片が出土している。

土器類は灰釉陶器・須恵器・土師器で、皿・坏・埦・甕など各種類の遺物である。

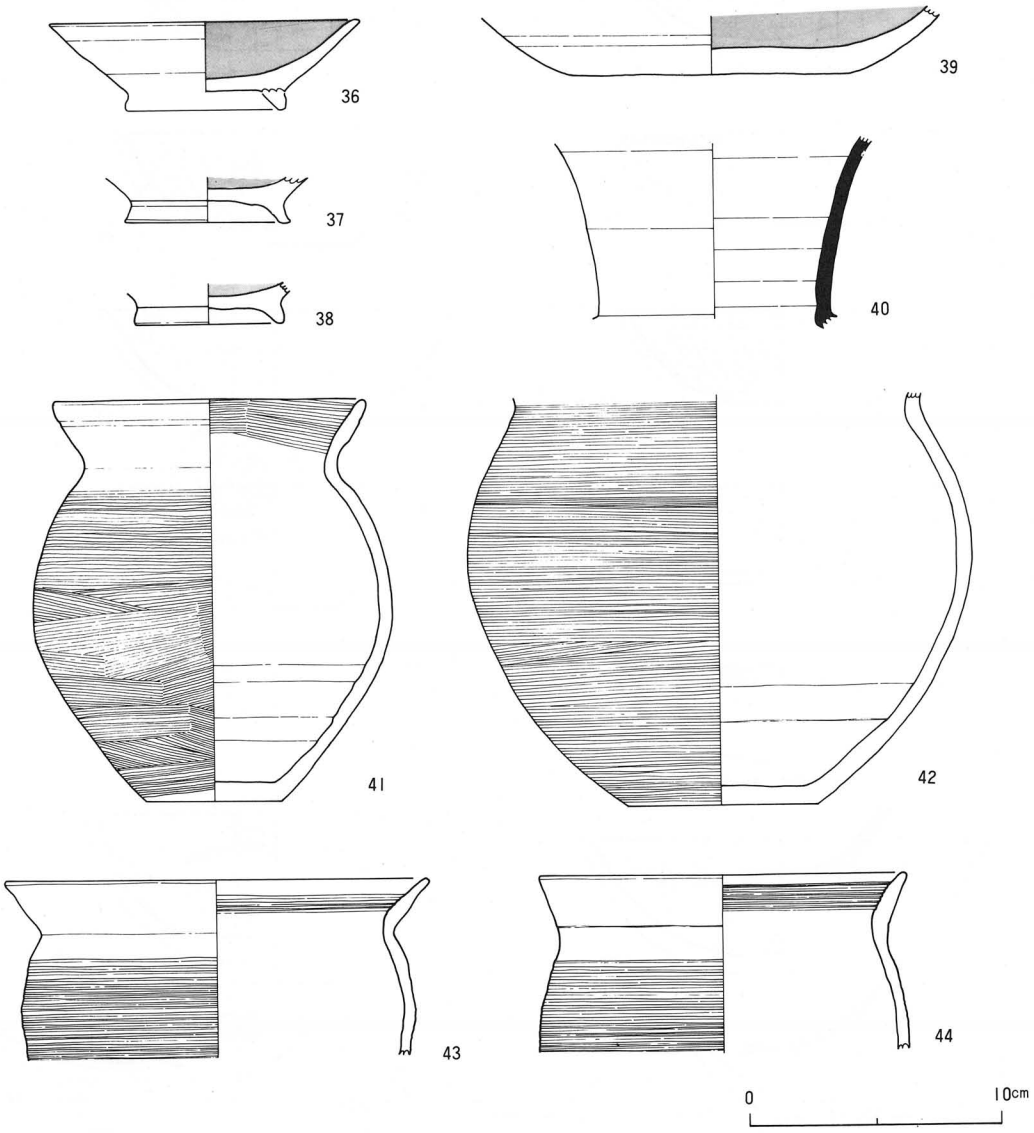
灰釉陶器は皿類が主体で焼成・製作等の良いものである。底部はすべて回転ヘラケズリで、焼成も堅緻である。釉の発色は淡緑色のものと、白緑色のものに分類できる。１・２は製作、焼成等が同一で同じ窯で作られたものかと思われる。須恵器の坏が２点出土しているが、２点共焼成が悪く軟質のものである。土師器では皿と坏が主に出土し、坏は本址出土遺物の主体を占める。坏は体部に丸味をもち立ち上がり口縁部が外反するものと、体部が直線的に立ち上がるものに分



第65図　第10号住居址出土土器(1)（⅓）



第66図　第10号住居址出土土器(2)（1/3）

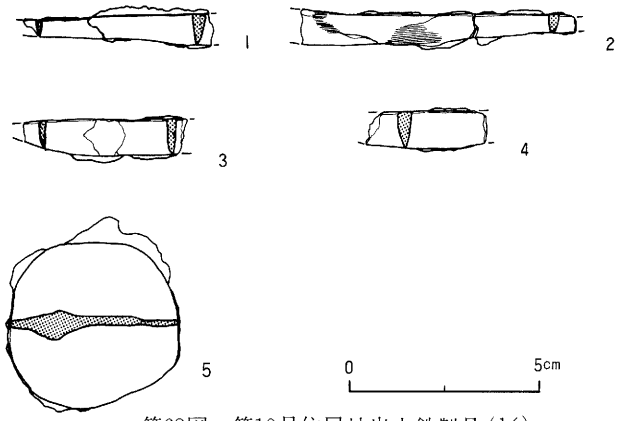


第67図　第10号住居址出土土器(3)（⅓）

類できる。底部はすべて回転糸切りである。内面は１点を除き黒色研磨がなされている。体部はロクロナデされているものが主体で、１点だけ体部下半をヘラケズリするものが混じる。また、一部の黒色研磨されている坏の体部に墨書がなされている。土師器皿は高台を持つものと、もたないものに分類され、これに器形等に若干の差異が見られる。

甕は小形甕で、口縁部が「く」の字形に外反するものと、「コ」の字形に外反するものとに分かれる。「く」の字形に外反するものはハケナデ調整され、「コ」の字形を呈するものはカキ目調整さ

れている。焼成は「コ」の字形のものの方が良好で器壁も0.5cmと薄い。



第68図　第10号住居址出土鉄製品（½）

鉄製品（第68図）1～4は刀子の破片で1・3・4が刃部片、2が刃部より関部にかけてのものである。1は刃部先端になるにつれ内彎気味になる。2は刃部に木質部が若干残る。3・4の刃部が外反する。1は現在長5.0cm、最大幅0.8cm、厚さ0.3cmを計る。5は円盤状鉄製品で直径4.5cm、厚さ0.3cmで紡錘車に関わるものかと思われる。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	灰釉陶器 耳皿	12.0 幅　8.4 3.7 高台径 5.1	体部は若干丸味をもち立ち上がり相対する口縁部を折り曲耳部とする、耳部棒状工具等で押え波状にする。	ロクロ成形、底部は回転篦削り後高台を貼り付ける。	焼成良好堅緻、釉は淡緑色を呈す、素地は混入物の少ないもので灰白色を呈し緻密。	完形	底部に焼成前に篦状工具により刻書。
2	灰釉陶器 皿	14.6 2.7 高台径 7.2	体部は直線的に開き、口唇部で若干外反、高台部は方形断面。	ロクロ成形、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は淡緑色を呈す、素地は混入物の少ないもので灰白色を呈し緻密。	完形	内面に重ね焼の痕跡。
3	灰釉陶器 皿	15.9 2.4 高台径 7.2	体部は若干の丸味をもち、ほぼ直線的に開き、口唇部が若干外反、高台部は方形断面。	ロクロ成形、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は淡緑色を呈す、素地は混入物が少なく灰白色を呈す。	⅔	内面に重ね焼の痕跡。
4	灰釉陶器 皿	15.1 2.1 高台径 7.2	体部は若干の丸味をもち立ち上がり口唇部が若干外反する。高台部は方形断面。	ロクロ成形、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は淡緑色を呈す、素地は灰白色を呈す。	¼	
5	灰釉陶器 皿	18.9 4.3 9.5	体部は丸味をもち立ち上がり口唇部が若干外反する。高台部は僅かに丸味をもつ方形断面。	ロクロ成形、底部は回転篦削り。	焼成良好、釉は白緑色を呈す、素地は灰白色。	½	

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
6	灰釉陶器 段皿	17.3 3.6 高台径 8.4	体部は直線的に開き口唇部が若干外反する、高台部は僅かに丸味をもつ方形断面、段部は鋭利な切り込み。	ロクロ成形、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は白緑色を呈す、素地は灰白色を呈す。	⅓	
7	灰釉陶器 埦	19.0 — —	体部は弱い丸味を持って立ち上がり口縁は玉縁状をなす。	ロクロ成形、体部下半は篦削り。	焼成良好堅緻、釉は淡緑色を呈す、素地は緻密で灰白色を呈す。	⅓	
8	土師器 坏	13.7 — —	体部は弱い丸味をもって立ち上がる。	ロクロ成形、内面は黒色手法で放射状研磨。	焼成良好、胎土中に砂粒を含有、色調は黄褐色を呈す。	⅓	体部に「上」墨書。
9	土師器 坏	14.8 3.7 6.0	体部は直線的に開き上部で丸味をもち折れ口唇部が外反する。	ロクロ成形、内面は黒色手法で放射状研磨、底部は雑な回転糸切りで傾むく。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	⅔	体部に墨書。
10	土師器 坏	13.5 — —	体部は丸味をもち立ち上がり口縁部が若干外反する。	ロクロ成形、内面は黒色手法を用いる。	焼成は良好、胎土中に砂粒含有、色調は赤褐色を呈す。	⅓	体部に墨書。
11	土師器 坏	13.5 — —	体部は丸味をもち口縁部は外反する。	ロクロ成形、内面黒色手法で放射状研磨。	焼成良好堅緻、胎土中に若干の砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	⅓	体部に墨書。
12	土師器 坏	— — 5.2	体部は丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、内面黒色手法で放射状研磨。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	底部 ¾	体部下半に墨書。
13	須恵器 坏	13.0 4.1 5.9	底部より外反する形で折れ体部は丸味をもつ、口縁は外反する。	ロクロ水挽き、底部は回転糸切り。	焼成は良くなく軟質、胎土中に砂粒含有、色調は白灰褐色を呈す。	完形	
14	須恵器 坏	13.0 3.7 6.0	底部より外反する形で折れ体部はほぼ直線的に開く、口縁部は弱く外反する。	ロクロ水挽き、底部は回転糸切り。	焼成は良くなく軟質、胎土中に若干の砂粒含有、色調は白灰色を呈す。	⅔	

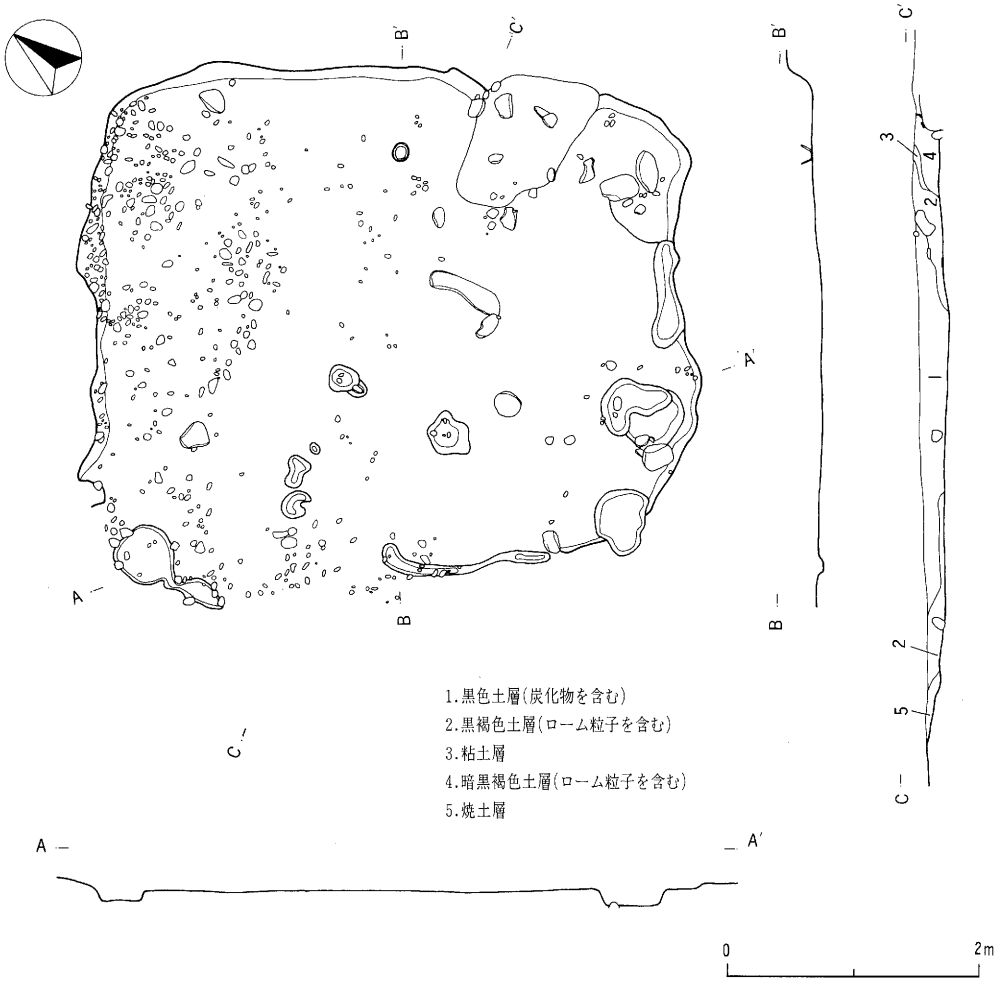
図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
15	土師器 坏	13.8 4.2 6.0	体部は丸味をもち立ち上がり口縁部で弱く外反する。	ロクロ成形、底部は回転糸切り、内面黒色手法。	焼成は余り良くなく軟質、胎土中に若干の砂粒、色調は黄褐色。	⅓	
16	土師器 坏	13.9 4.1 6.2	底部より外反する形で折れ体部は丸味をもつ、口縁部は外反。	ロクロ成形、底部は回転糸切り、内面黒色手法で放射状研磨。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は赤褐色を呈す。	⅔	
17	土師器 坏	13.9 3.7 4.8	体部は丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、底部は回転糸切り、内面黒色手法で放射状研磨。	焼成良好堅緻、若干の砂粒を含有、色調は赤褐色を呈す。	½	
18	土師器 坏	13.4 3.7 4.5	体部は中央で折れ口縁部で若干外反する。	ロクロ成形、成形が悪くゆがむ、内面黒色手法で体部が放射状、口縁部が横位研磨。	焼成良好、若干の砂粒を含有、色調は茶褐色を呈す。	⅓	
19	土師器 坏	13.7 3.6 7.0	体部は丸味をもち口縁部が外反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法、放射状研磨。	焼成良好、胎土中に余り砂粒を含有しない。色調明褐色を呈す。	½	
20	土師器 坏	13.0 4.4 6.0	体部は丸味をもち口唇が外反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法、放射状研磨。	焼成良好、色調は赤褐色を呈す。	½	
21	土師器 坏	13.2 4.2 5.4	体部は丸味をもち口唇が外反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法、放射状研磨。	焼成良好堅緻、胎土中に若干の砂粒、色調は赤褐色を呈す。	⅓	
22	土師器 坏	13.9 4.4 5.5	体部は丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法、横研磨。	焼成良好、胎土中に長石粒等を含有、色調は明褐色を呈す。	⅓	
23	土師器 坏	13.8 3.7 7.2	体部は若干丸味をもつがほぼ直線的に立ち上がる。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法、放射状研磨。	焼成良好、胎土中に石英粒等を含有、色調は明褐色を呈す。	½	
24	土師器 坏	12.4 4.8 4.9	体部は若干の丸味をもつがほぼ直線的に立ち上がる。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法、放射状研磨。	焼成良好、胎土中に金雲母含有、色調は黒褐色を呈す。	½	

図	器種	法量	器形	手法	焼成及び胎土	残存	備考
25	土師器 坏	13.5 4.5 5.9	体部は直線的に開く。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法、口縁部横研磨。	焼成良好、色調は黒赤褐色を呈す。	⅔	
26	土師器 坏	13.7 — —	体部は丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、内面黒色手法で放射状研磨。	焼成良好堅緻、色調は赤褐色を呈す。	⅓	
27	土師器 坏	16.1 5.3 6.2	体部は丸味をもち若干口縁部が外反する。	ロクロ成形、体部下半が篦削り、底部回転糸切り、内面黒色手法、放射状研磨。	焼成良好堅緻、胎土中に若干の砂粒含有、色調は黒褐色を呈す。	⅔	
28	土師器 坏	— — 7.3	底部より若干丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成良好、色調は赤褐色を呈す。	底部 ⅓	
29	土師器 坏	— — 4.8	底部より若干丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法。	焼成良好、色調は赤褐色を呈す。	底部 ⅔	
30	土師器 坏	— — 4.4		ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法で研磨。	焼成良好、胎土中に砂粒含有、色調は褐色を呈す。	底部 ⅔	
31	土師器 高台付 埦	15.1 — —	体部は丸味をもち立ち上がり口縁部で若干外反する。	ロクロ成形、底部の糸切り痕はナデ消す。黒色手法で放射状研磨。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	½	
32	土師器 皿	11.3 3.4 4.2	体部は底部より外反する形で折れ直線的に開く。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法で放射状研磨。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は橙褐色を呈す。	⅓	
33	土師器 皿	12.3 3.2 4.4	体部は底部より外反する形で折れ直線的に開く。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面は良く研磨。	焼成は良くなく軟質、胎土中に砂粒含有、色調は橙褐色を呈す。	½	
34	土師器 高台付 皿	12.9 — —	体部は若干丸味をもちほぼ直線的に開く。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後周縁をナデ、内面黒色手法。	焼成は余り良くなく軟質、胎土中に砂粒含有、色調明褐色。	⅔	体部の相対する面に2字墨書。
35	土師器 高台付 皿	12.4 3.1 高台径 5.8	体部は直線的に開く、高台部は方形断面をなす、器形はゆがみを持つ。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後周縁をナデ、体部はロクロナデ痕を残す、内面黒色手法で研磨する。	焼成良好堅緻、胎土中に若干の砂粒含有、色調は赤褐色を呈す。	⅔	灰釉陶器皿の模倣か。

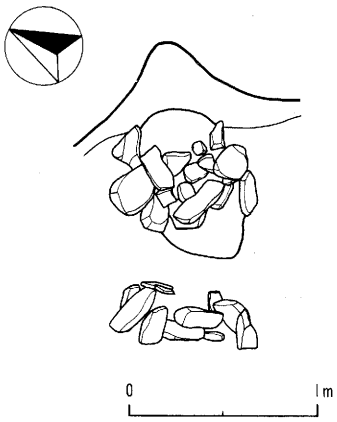
図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
36	土師器 高台付 皿	12.3 — —	体部は直線的に開く。	ロクロ成形、内面は黒色手法。	焼成は良くなく軟質、胎土中に長石粒を含有、色調は橙褐色。	⅔	
37	土師器 高台付 坏	— — 高台径 6.6	高台は方形断面をなし若干外開きとなる。	ロクロ成形、底部糸切り痕をナデ消す、内面黒色手法。	焼成良好堅緻、色調は赤褐色を呈す。	底部 ⅔	
38	土師器 高台付 坏	— — 高台径 5.9	高台は丸味をもつ方形断面。	ロクロ成形、底部は糸切り痕をナデ消す、内面黒色手法。	焼成良好堅緻、色調は橙褐色を呈す。	底部 ⅔	
39	土師器 鉢	— — 11.0		底部は篦削り、内面黒色手法を用いる。	焼成良好、色調は赤褐色を呈す。	底部 ⅔	
40	須恵器 長頸瓶	— — 頸部径10.1	頸部は胴部にのせ接合したと思われる、口縁部は大きく開く。		焼成にやや難がある、胎土中に砂粒含有、色調は灰色を呈す。	頸部 ⅓	
41	土師器 小形甕	12.4 15.9 5.3	口縁部は「く」字形にやや丸味をもって外反、胴部中央に最大径。	粘土紐の巻き上げの後ロクロにて整形、底部は回転糸切り。	焼成は良くなく軟質、胎土中に若干の砂粒含有、色調は橙褐色。	⅔	
42	土師器 小形甕	— — 7.4	頸部は折れ胴部は中央で球状に脹る。	粘土紐の巻き上げ後ロクロにて整形、ハケナデ痕を有す、底部篦切り。	焼成はやや軟質、胎土中に若干の砂粒雲母を含有、色調は黄褐色を呈す。	⅔	
43	土師器 小形甕	16.8 — —	口縁部は「く」字形に外反し胴部に丸味をもつ。	体部カキ目が見られ内部口縁部にもカキ目。	焼成良好、胎土中に砂粒含有、色調は黒褐色を呈す。	口縁部 ⅓	
44	土師器 小形甕	14.5 — —	口縁部は弱く「く」字形に外反し頸部に傾斜が見られず「コ」字形に近い。	体部、口縁部内部にカキ目痕。	焼成良好、胎土中に砂粒を含有、色調は赤褐色を呈す。	口縁部 ⅓	

第11号住居址（第69図、図版23）

検出状況　本址はC－10、D－10グリッドを中心に黒色土の落ち込みが発見されてその存在が明らかとなった。プランは南西壁側が褐色土中より掘り込んであったためにこの部分の壁は判然としなかった。しかし、西・南コーナー部に柱穴が、また若干の周溝が検出されたことからプランは推定し得た。住居址内には掘立柱建築址が重複している。覆土は黒褐色土の単一層（第1・2層）で第2層はローム粒を含有する。南西壁側に焼土（第5層）が認められたのが注意される。



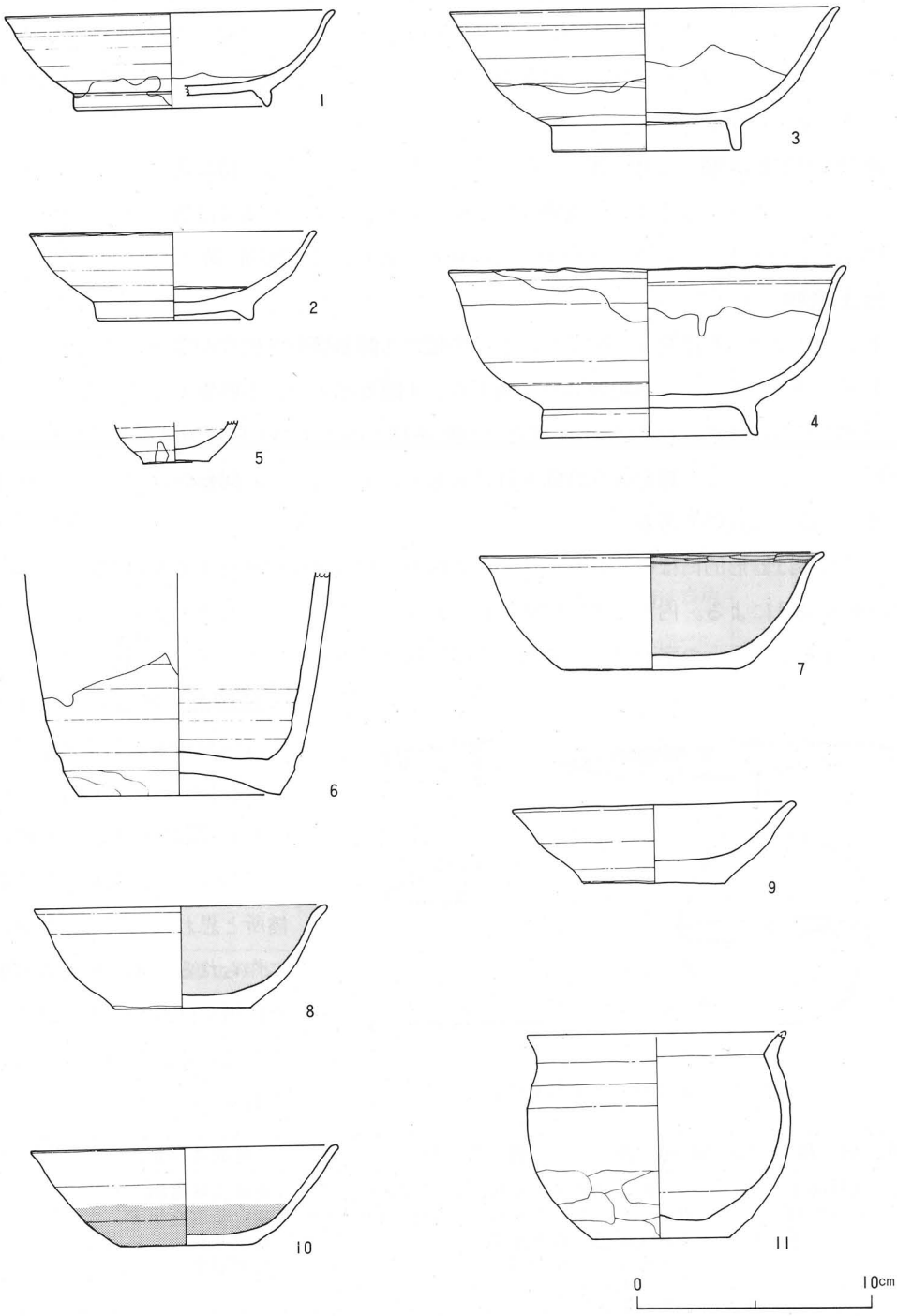
第69図　第11号住居址（1/60）



第70図　第11号住居址カマド(1/40)

遺構の構造　本址は4.0×4.6ｍの南側コーナーが若干張る隅丸方形プランの住居址である。主軸方向はN52°Eを向く。壁は南東側が12号住居址覆土内より、北西側が地山礫層内に掘り込んでいるために不明確な部分があったが、北東側はしっかりしており、残存壁高20cmほどで緩やかな傾斜を持ち立ち上がる。周溝は南東壁側、南西壁側の一部に２cmと浅いものが見られる。主柱穴は西・南コーナー部に不整形の深さ９cmほどのものが設けられている。これらは住居址コーナーの隅柱と考えられる。床は北西側が地山礫層面を直接床としており、床面に礫が突出している。一方カマド周辺は割合堅緻な床が見られ、住居址中央部が若干窪く構築されている。

カマドは北東壁やや右寄りに設けられている。土層状態等



第71図　第11号住居址出土土器（⅓）

より石組粘土カマドであると思われる。カマドは大きさ86×50cm、深さ5cmほどの楕円形の掘り方を燃焼部とし、煙道部は38×32cmでU字形に壁を切り込んでいる。今回の調査において最も煙道部のはっきりしたカマドであった。石組は袖石が左右3個ずつ扁平な礫が直立した形で遺存し、天井石に関わると思われる細長い扁平石が崩落していた。燃焼部内部は暗黒褐色土が堆積し焼土の堆積は見られなかった。

遺物の出土状態　遺物は覆土内等より出土したが、壁周辺、特に北コーナー部付近より出土した。またカマド付近等よりも遺物の出土が見られ、カマド左横には置かれたような形で甕底部（第71図6）が出土した。カマド内よりは紡錘車と思われる鉄製品（第72図4）が出土した。

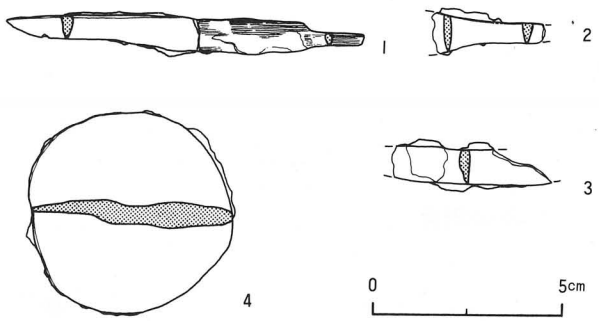
出土遺物（第71・72図）

本址より出土した遺物は、図示したものの他に土師器甕胴部破片が出土している。

実測し得た土器は、灰釉陶器高台付埦4点、土師器坏4点、小形甕1点である。

灰釉陶器埦はロクロ成形により、底部は回転糸切り後高台部を付け周縁をナデ整形するものと、回転ヘラケズリにより整形後高台部を付けるものに分けられる。回転ヘラケズリによるものの方が焼成、胎土も良好である。

土師器坏は器形的には似ており、体部に丸味をおび口縁部が外反するものである。すべて底部は回転糸切りによる。内面が黒色研磨されるものと、そうでないものとに分けられる。甕は小型甕で口縁部が「く」の字形に外反するもので、胴部下半をヘラケズリしている。

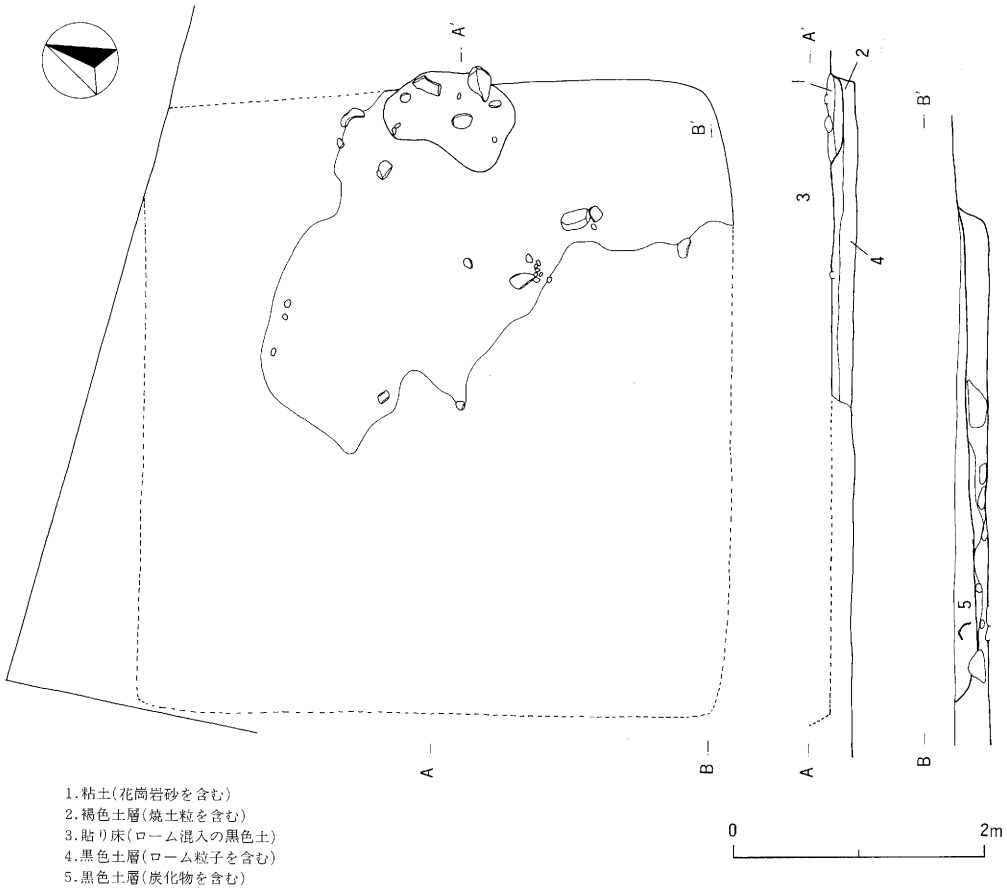


第72図　第11号住居址出土鉄製品（½）

鉄製品（第72図）　1～3は刀子で4は円盤状鉄製品である。1は刀子で現在長9.4cm、最大幅0.9cm、厚さ0.3cmで関部を中心に木質部が遺存している。2は関部より刃部に至る箇所と思われ、関部より刃部が幅広に作られる。4の円盤状鉄製品は10号住居址においても同様のものが出土している。直径5.3cm、厚さ0.4cmである。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	灰釉陶器 高台付 埦	13.9 4.0 高台径 8.1	体部は若干の丸味をもち立ち上がり口縁部で若干外反する、高台は僅かに内反する。	ロクロ成形、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は白緑色を呈す、素地は緻密で白灰色を呈す。	½	
2	灰釉陶器 高台付 埦	12.0 3.7 高台径 6.5	体部は若干の丸味をもち口縁部で若干外反する、高台はほぼ直に立つ。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後周縁ナデ。	焼成は良好堅緻、釉は白色を呈す、素地は黄灰色を呈す。	½	重ね焼きの痕跡。

図	器種	法量	器形	手法	焼成及び胎土	残存	備考
3	灰釉陶器 高台付 埦	16.5 6.0 高台径 8.0	体部下半で丸味をもち口唇部で若干外反、高台はほぼ直に立つ。	ロクロ成形、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は白緑色を呈す、素地は灰白色を呈す。	⅔	
4	灰釉陶器 高台付 埦	16.5 7.1 高台径 9.2	体部は丸味をもち口唇部で外反する、高台はほぼ直に付き畳付部は平坦。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後周縁をナデ、口縁部内面に一条の沈線。	焼成はやや軟質、釉の発色は悪い、素地は白灰色を呈す。	½	
5	灰釉陶器	— — 2.8	体部は丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成良好、釉の発色は悪く白色、素地は白灰色を呈す。	底部	
6	灰釉陶器 ?	— — 8.5	胴部は直線的に開き底部は上げ底状を呈す。	ロクロ成形、底部は回転篦削り？、胴部下半は篦削り。	焼成良好堅緻、釉の発色は茶色を帯び鉄釉発色の様な色調、素地は白灰色で緻密。	胴部	
7	土師器 坏	14.5 4.9 7.0	体部は丸味をもち口縁部が外反する。	ロクロ成形、底部は回転糸切り、内面黒色手法で口縁部横研磨。	焼成普通、胎土中に石英・長石粒を含有、色調黒灰色を呈す。	½	
8	土師器 坏	12.4 4.3 5.8	体部は丸味をもち口縁部が外反する。	ロクロ成形、底部は回転糸切り、内面黒色手法。	焼成普通、胎土中に若干の砂粒、色調は黒灰色を呈す。	½	
9	土師器 坏	11.9 3.2 6.0	底部より外反する形で立ち上がり体部中央で折れる、口縁部は外反する。	ロクロ成形、底部は雑な回転糸切り。	焼成は普通、胎土中に若干の砂粒含有、色調黒灰色を呈す。	⅓	
10	土師器 坏	13.0 4.1 5.6	底部より若干の丸味をもちほぼ直に立ち上がる、口唇部は若干外反する。	ロクロ成形、底部は雑な回転糸切り。	焼成は良くなく軟質、色調は橙褐色を呈す。	⅔	内外面にスス状炭化物付着。
11	土師器 小形甕	— — 5.7	口縁は弱く「く」字形を呈す、胴部は丸味をもつ器壁は厚い。	ロクロ成形、体部下半横位の篦削り。	焼成は普通、胎土中に砂粒含有、色調赤褐色を呈す。	⅔	



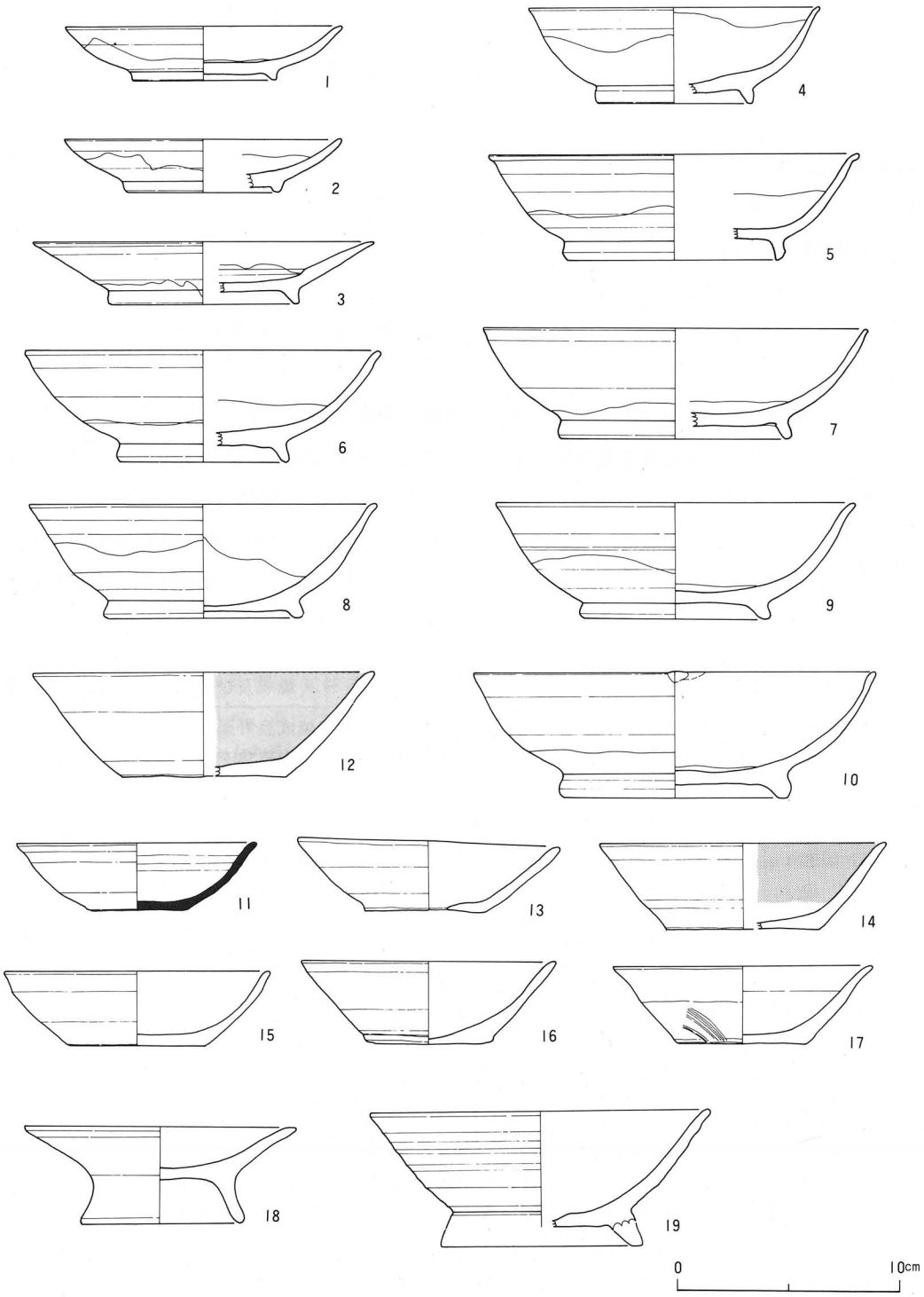
第73図　第13号住居址（1/60）

第13号住居址（第73図）

検出状況　本址はB－25グリットにカマド袖石、遺物が発見されそれにより存在が明らかとなった。掘り込みが黒色土中よりなされていたために不明確で、プランの検出には至らなかった。しかし、残存する貼り床等より不確定ながらもプランは推定し得た。覆土は黒色土（第5層）でプラン確認はし難い。

遺構の構造　本址は東壁ほぼ中央部にカマドを有するもので、貼床範囲等より4.9×4.6ｍの隅丸方形プランの住居址であると思われる。壁は黒色土中より掘り込まれているために北・東・南側共確認できなかった。西側についてはセクションにより確認でき、ローム粒を若干含む黒色土（第4層）に12cmほどの掘り込みを持つ。床はロームを混入する黒色土を貼床としており住居址の約1/4程度にしっかりしたものが検出されたに過ぎなかった。貼床は若干の凹凸を持ち西側に緩やかに傾斜する形で構築されている。

カマドは東壁ほぼ中央部に設けられている。残存する袖石脇部に花崗岩の風化による粘土が貼



第74図　第13号住居址出土土器（⅓）

られていることより石組み粘土カマドであると思われる。カマドは貼床を大きさ69cm、深さ9cmほどにほぼ円形の掘り方をもつ。両脇に花崗岩の扁平礫を直立させ粘土を貼り固定させ袖部としている。燃焼部にはカマドに用いられていた粘土（第1層）、焼土を含む褐色土（第2層）が堆積していた。

遺物の出土状態　遺物はカマドを中心とする付近より灰釉陶器埦類が中心に出土した。また、覆土中よりも土師器坏類が多数出土している。

出土遺物（第74図）

本址は土師器・須恵器・灰釉陶器の皿・坏・埦が割合多量に出土した。器形のわかるものを図示したが、この他にも坏の体部破片が出土している。特に灰釉陶器の接合不可能な細片がかなり出土した。

灰釉陶器は皿・埦の器種があり、全て焼成は良好で堅緻なものが多い。素地は白灰色を呈するものが主体であるが、1点黄白色を呈するものがある。底部は回転糸切り後高台部を付け周縁をナデ整形をするものが主体であるが、2点回転ヘラケズリにより調整されたものがある。

土師器坏は焼成の余り良くない軟質傾向のもので、色調は明褐色及び橙褐色を呈する。すべて体部が直線的に開くもので、底部は回転糸切りで、切り方が雑なものが数点見られる。内面が黒色研磨されているものは1点だけであった。

図	器種	法量	器形	手法	焼成及び胎土	残存	備考
1	灰釉陶器 皿	12.3 2.4 高台径 6.5	体部は若干の丸味をもち口唇部が若干外反する、高台は若干内傾する。	ロクロ成形、回転糸切り後周縁をナデ。	焼成良好堅緻、釉は白灰色を呈す、素地は白灰色を呈す。	½	重ね焼痕跡。
2	灰釉陶器 皿	12.3 2.4 高台径 6.7	体部は若干の丸味をもつ、高台は丸味のある方形断面を呈す。	ロクロ成形。	焼成良好堅緻、釉は透明である、素地は白灰色を呈す。	⅓	
3	灰釉陶器 段皿	15.2 2.7 高台径 8.5	体部はほぼ直線的に開き口唇部が外反する、高台は若干外反、段部はやや丸味をもつ。	ロクロ成形、底部は回転篦削り。	焼成良好、釉は白っぽい発色、素地は黄白色を呈す。	⅓	
4	灰釉陶器 高台付 埦	13.0 4.3 高台径 7.0	体部は若干丸味をもち口唇部が若干外反、高台は丸味をもち若干張る。	ロクロ成形、底部は回転篦削り。	焼成良好、釉は白っぽい発色、素地は白灰色を呈す。	⅓	
5	灰釉陶器 高台付 埦	16.6 4.7 高台径 9.3	体部下半に丸味をもち立ち上がり口唇部が強く外反、高台は内反する形。	ロクロ成形。	焼成良好堅緻、釉は透明、素地は白灰色を呈す。	¼	

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
6	灰釉陶器	17.1 — —	体部は丸味をもち口唇部が若干外反する、高台は丸味をもち若干外反する。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後周縁をナデ。	焼成良好、釉は白っぽい発色、素地は白灰色を呈す。	⅓	
7	灰釉陶器 高台付 埦	15.8 5.0 高台径 5.5	体部は若干の丸味をもつ、口唇部は若干外反、高台は丸味をもち若干内反。	ロクロ成形、底部回転糸切り後周縁をナデ。	焼成良好、釉は白っぽい発色、素地は白灰色。	⅓	
8	灰釉陶器 高台付 埦	15.5 5.1 高台径 9.0	体部は直線的に開き、中程で折れ稜をなす、高台は方形断面。	ロクロ成形、体部下半篦削り、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は白緑色を呈す、素地は緻密で白灰色を呈す。	½	
9	灰釉陶器 高台付 埦	16.0 5.1 高台径 8.5	体部は丸味をもち口唇部で外反する、高台は丸味をもち若干外反する。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後周縁をナデ。	焼成良好堅緻、釉は透明、素地は緻密で白灰色を呈す。	½	
10	灰釉陶器 高台付 埦	17.9 5.6 高台径10.0	体部は丸味をもつ、高台は丸味をもち畳付部が平坦、輪花状に口唇部に刻目。	ロクロ成形、底部回転糸切り後周縁をナデ。	焼成は良好で堅緻、釉は淡緑色を呈す、素地は緻密で灰白色を呈す。	½	
11	須恵器 坏	10.7 3.0 4.0	体部は丸味をもち口唇部が若干外反する。	ロクロ水挽き、底部回転糸切り。	焼成良好、胎土中に砂粒、褐鉄鉱粒を含有、色調は橙褐色を呈す。	⅔	
12	土師器 坏	15.2 4.6 7.3	体部は直線的に開く。	ロクロ成形、底部回転糸切り、内面黒色手法。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は茶褐色を呈す。	½	
13	土師器 坏	11.8 3.0 5.4	底部より若干の丸味をもちほぼ直線的に開く。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成は余り良くなく軟質、胎土中に砂粒含有、色調橙褐色を呈す。	ほぼ完形	底部中央に穿孔。
14	土師器 坏	12.7 3.8 6.9	底部よりほぼ直線的に開く。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成は良くなく軟質、胎土中に砂粒含有、色調は明褐色を呈す。	ほぼ完形	内部口縁部付近に炭化物。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
15	土師器 坏	11.9 3.3 6.0	底部よりほぼ直線的に立ち上がり上半部で折れ口唇部が若干外反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成は普通でやや軟質、色調は橙褐色を呈す。	2/3	
16	土師器 坏	11.3 3.7 5.8	底部より体部はほぼ直線的に立ち上がる。	ロクロ成形、底部は雑な回転糸切り。	焼成は普通でやや軟質、色調は明褐色を呈す。	1/3	
17	土師器 坏	11.5 3.4 5.7	直線的に立ち上がり体部中程で折れる、口唇部は若干外反する。	ロクロ成形、底部は回転糸切り。	焼成良好、胎土中に褐鉄鉱粒を含有する、色調は橙褐色を呈す。	2/3	
18	土師器 高台付 坏	13.3 5.5 高台径 7.4	体部は直線的に立ち上がり口唇部で若干外反する、高台は高く内反する形をとる、全体的にゆがみのある器形。	ロクロ成形、底部は回転糸切り痕をナデ消す。	焼成良好、胎土中に長石粒等を含有、色調は橙褐色を呈す。	完形	
19	土師器 高台付 埦	15.1 — —	体部は直線的に開く。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後周縁をナデ。	焼成は良好、色調は赤褐色を呈す。	2/3	

第14号住居址（第75図）

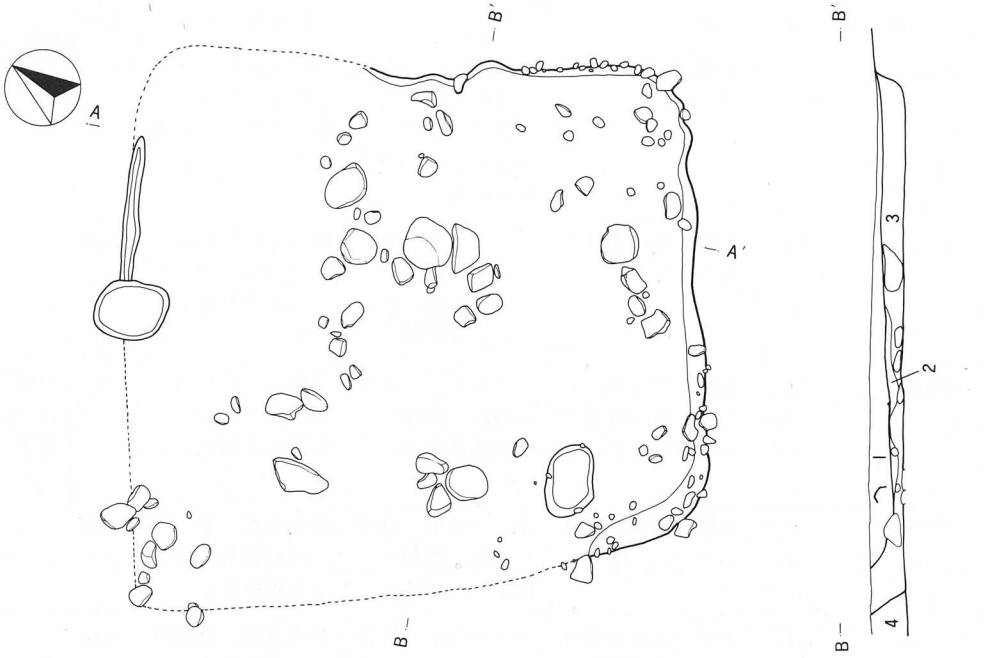
検出状況　本址は13号住居址貼床下にあり重複関係をもつ住居址である。北・西側のプランは黒色土系の土層内に設けられていたため、この部分の壁については判然としなかった。しかし東南コーナー部、北壁側周溝が検出されたことから、不確実ながらもプランは推定し得た。覆土はローム粒を若干含む黒色土（第３層）の単一層で、内部に20～30cmほどの礫を含む。

遺構の構造　本址は南・東コーナー部、北壁側周溝等より4.2×4.6ｍの隅丸方形プランの住居址であると思われる。壁は南・東側はローム層内に掘り込み、北・西壁はローム粒を含む明黒色土（第４層）内に検出された。残存壁高は30cmほどでしっかりしている。周溝は北壁側の一部に深さ４cmと浅いものが見られる。床は地山面を直接床としているため、地山礫が床面に突出している。全体的に堅緻でほぼ水平に構築されている。柱穴は南コーナー部に一箇所楕円形を呈するものが見られ、深さは14cmを計る。カマドは検出されなかった。

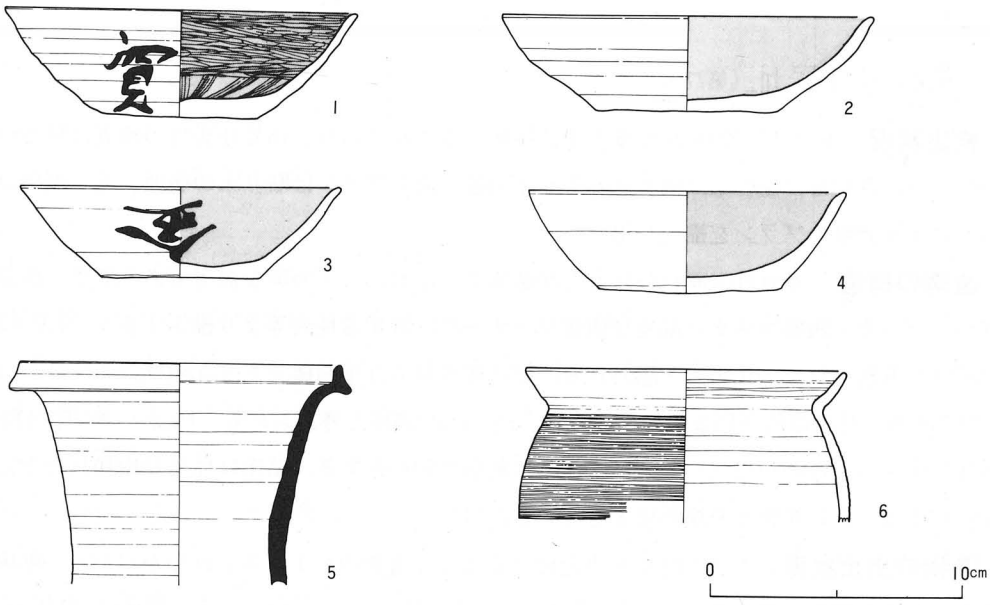
遺物の出土状態　遺物は覆土中より若干出土した。墨書をもつ黒色土器坏（第76図1・3）は南壁よりずり落ちた形で遺存した。

出土遺物（第76図）

出土した遺物は土師器坏が主体である。坏は全て黒色土器である。



第75図　第14号住居址（1/60）



第76図　第14号住居址出土土器（1/3）

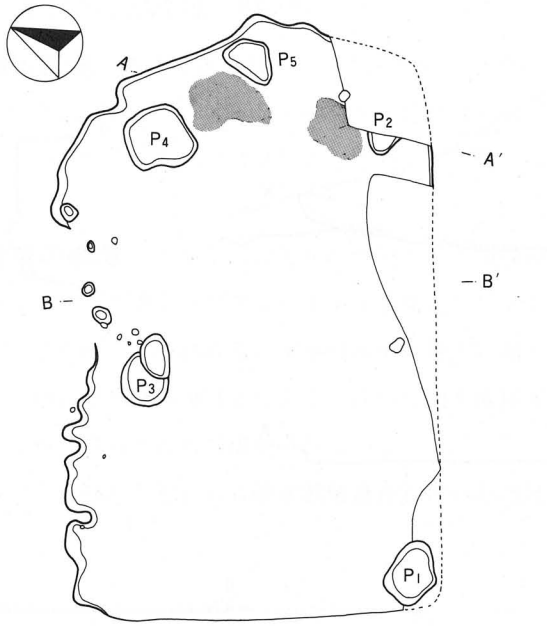
図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	土師器 坏	14.0 4.2 6.1	体部は丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後全面手持ち篦削り、内面黒色手法で放射状研磨。	焼成は良好だがやや軟質、胎土中に砂粒を含有、色調は赤褐色を呈す。	完形	体部に「賀」？墨書。
2	土師器 坏	14.7 3.8 7.1	体部上半に丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、糸切り後手持ち篦削り、内面黒色手法で放射状研磨。	焼成はやや軟質、胎土中に砂粒含有、色調赤褐色を呈す。	ほぼ完形	
3	土師器 坏	12.7 3.6 6.2	体部はほぼ直に立ち上がり口唇部で若干外反する。	ロクロ成形、糸切り後軽く篦削り、内面黒色手法。	焼成は良好、胎土中に砂粒を含有、色調は赤褐色を呈す。	⅔	体部に逆に「金」？墨書。
4	土師器 坏	12.5 4.0 7.3	体部は若干の丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、糸切り後軽く篦削り、内面黒色手法。	焼成良好、胎土中に砂粒含有、色調は赤褐色を呈す。	ほぼ完形	
5	須恵器	12.7 — 頸部径 9.4	頸部は上部に外反し、口縁部は強く外反する、口唇はほぼ直に立つ。	ロクロ成形で胴部と頸部は積み上げとなる。	焼成良好、色調は茶灰色を呈す。	口縁部⅔	
6	土師器 小形甕	12.7 — —	口縁部は外反し「く」字形を呈す、胴部は丸味をもつ。	体部にカキ目。	焼成良好堅緻、色調は茶褐色を呈す。	口縁部⅓	

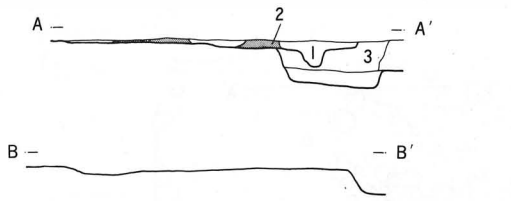
第17号住居址（第77図）

検出状況　本址は16号住居址覆土上に貼床がなされており、16号住居址の精査に伴ない存在が明らかにされた。住居址は掘り込み等が不明確でありプランは貼り床の範囲、北・西側コーナー等により大略のプランを推定し得た。

遺構の構造　本址は床面積の⅓ほどが貼床で、部分的に不明瞭な箇所もありプラン確認はし難かった。北・西側コーナー部及び南側コーナーに位置する柱穴等より推定すると、4.7×2.9mの隅丸長方形プランの住居址と思われる。壁の掘り込みは不明確であり北西壁は1～2cmほどのものである。柱穴はP_1～P_5まで検出されP_1、P_2、P_4が隅柱と考えられる。P_1は8cm、P_2は12cm、P_4は5cmと浅いものが目立つ。床は全体的に軟弱で凹凸がある。貼床は住居址南側⅓ほどにローム粒を多量に含む褐色土を埋め床としている。

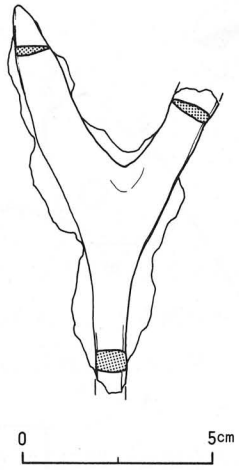
遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかったが、貼床土層内より鉄鏃が出土している。





1.黒色土層
2.焼土
3.黒褐色土層(ローム粒を含む)

第77図　第17号住居址（1/60）



第78図　第17号住居址出土鉄製品（1/2）

鉄製品（第78図）

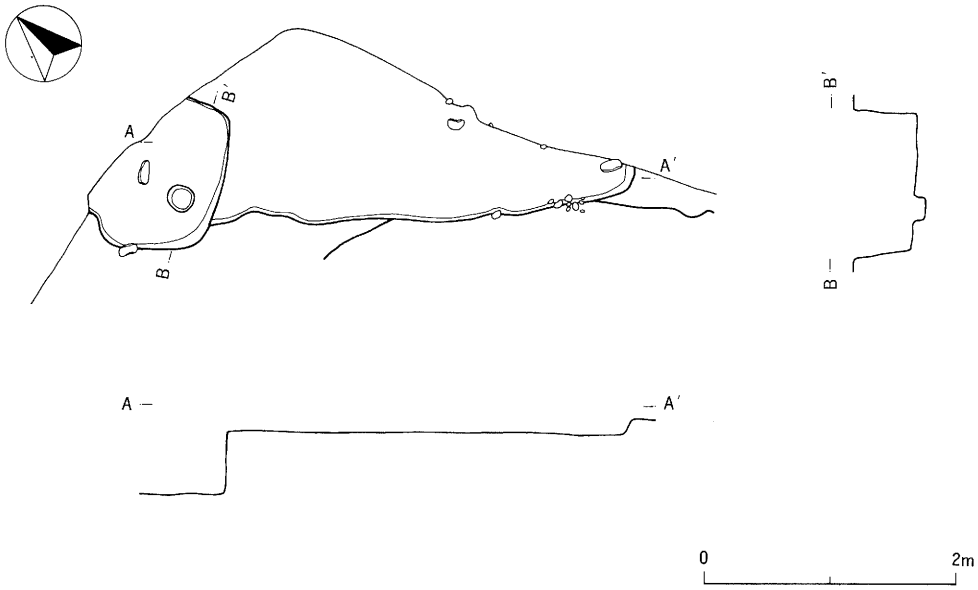
1は有茎雁式の鉄鏃で、現在長10.3cm、最大幅3.5cmで尖頭部は片刃状断面をなし、茎部は長方形断面を呈する。15号住居址貼床内より出土している。

第21号住居址（第79図）

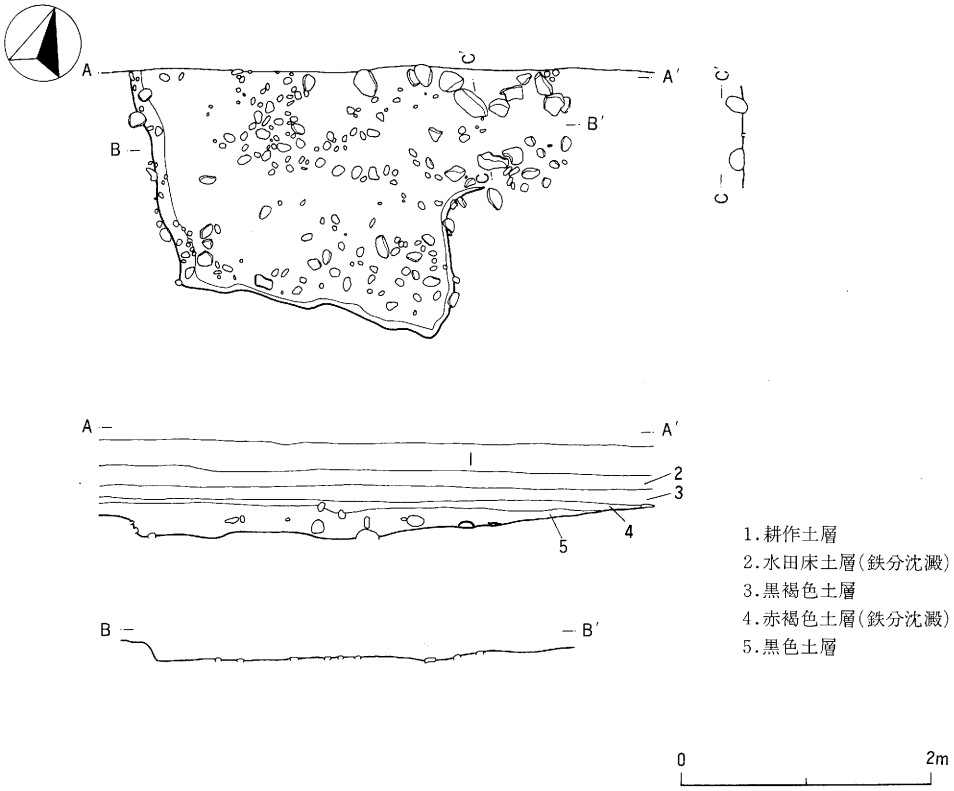
検出状況　本址は20号住居址を精査中に検出されたものである。住居址内部は暗渠、耕作等により攪乱されている。住居址の1/3ほどを調査したに過ぎずプラン等については不明確であった。

遺構の構造　本址は内部が暗渠、耕作等により攪乱されており、南壁の掘り方が検出されただけである。掘り方は褐色土層中より掘り込まれていたと思われるもので、南コーナー部において残存壁高は14cmである。床は攪乱により凹凸が見られるが、ほぼ水平に構築されていたものと思われる。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。



第79図　第21号住居址（1/60）



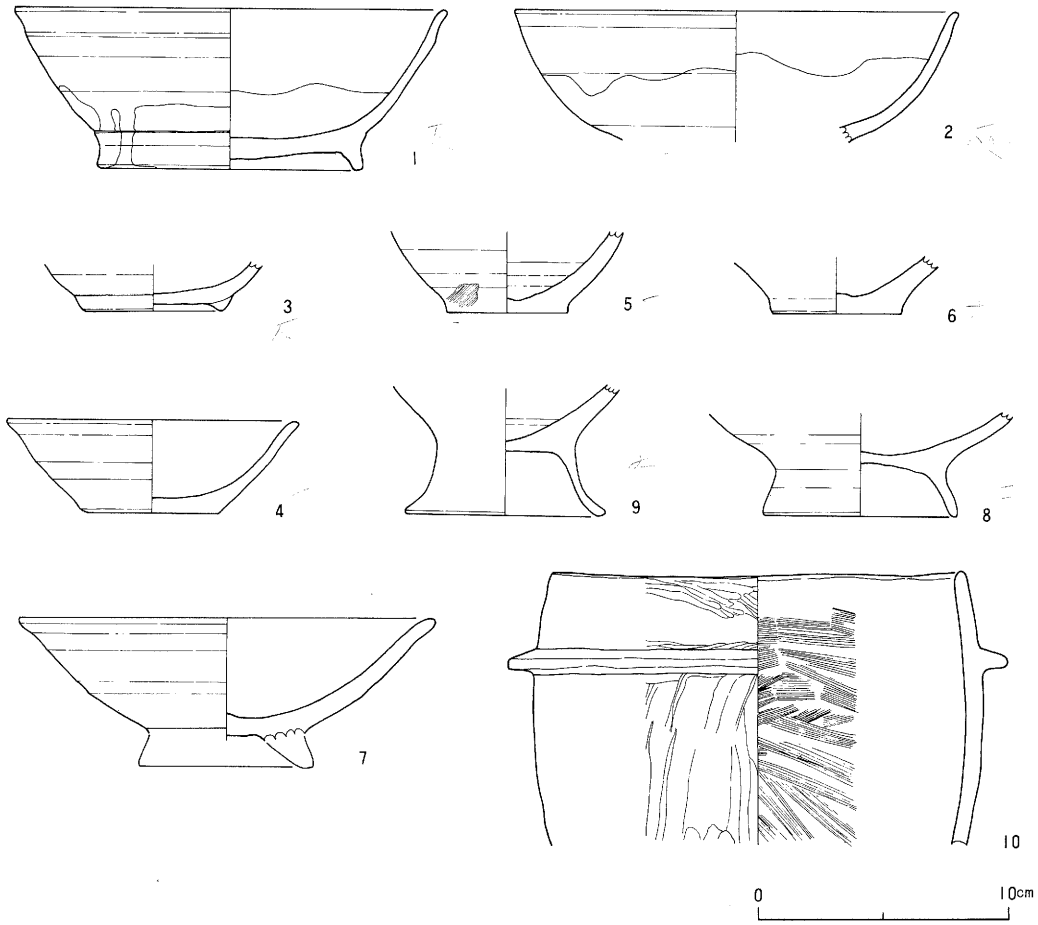
第80図　第22号住居址（1/60）

第22号住居址（第80図）

検出状況　本址はB－44グリッドにカマドの袖石が検出され、これを中心に精査を進め、プランの把握に努めた。住居址の約½が用地外にある。プランは地山礫層内に設けられていたためか、カマド周辺については判然としなかった。覆土は黒色土（第5層）の単一層で内部に拳大の礫を含んでいる。

遺構の構造　本址は½ほどが用地外のため規模等については不明であるが、東・西コーナー部等より考えて隅丸方形プランを呈する住居址であると思われる。主軸方向はカマドの位置等よりN73°Eを向くと思われる。本址は地山礫層内に掘り込んでいるために、その掘り方は不規則である。残存壁高は16cmほどである。地山礫面を直接床としており、床面は凹凸が見られ、東壁側に緩やかに傾斜する形で構築されている。

カマドは袖石と思われる礫が数個遺存していただけである。カマドに関わる掘り方等は検出さ



第81図　第22号住居址出土土器（1～9は⅓、10は⅙）

れず規模等は不明である。

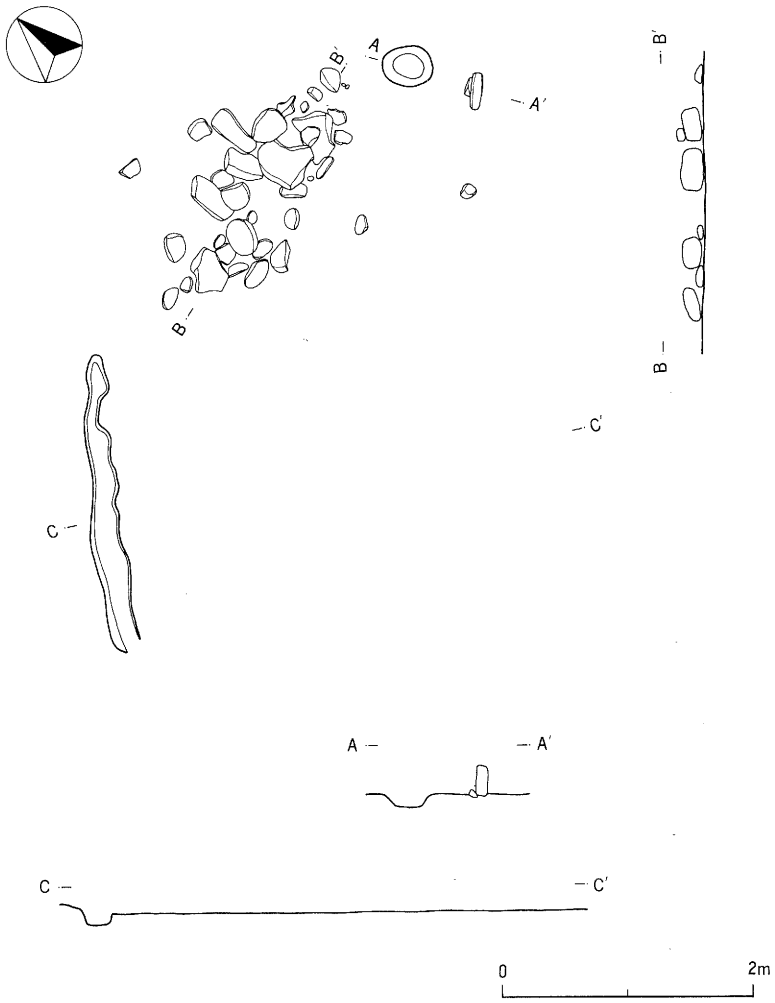
出土遺物（第81図）

本址より出土した遺物は土師器、灰釉陶器の坏類と土師器羽釜であり、その他の遺物は出土しなかった。

灰釉陶器は埦の類で、口縁部の外反するものと、しないものに分けられる。素地にも差異が見られ黄白色のものと、白灰色のものがある。土師器坏類は高台付埦と坏に分けられ、高台付埦は体部に丸味をもつ高台部が高いもので、底部は糸切り後高台を貼り付け、底部全面をナデ整形しているものである。胎土・焼成・色調も類似している。坏は体部が直線的に開くもので、底部は回転糸切りによるものである。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	灰釉陶器 高台付 埦	17.1 6.3 高台径10.6	体部は若干の丸味をもち口唇部で外反する、高台は外に開き方形断面。	ロクロ成形、底部は回転箆削り。	焼成良好、釉は白色、素地は黄白色を呈す。	⅔	
2	灰釉陶器 埦	17.6 — —	体部は丸味をもち口唇部が外反する。	ロクロ成形。	焼成良好堅緻、釉は透明、素地は緻密で白灰色を呈す。	⅓	
3	灰釉陶器	— — 高台径 5.5	高台は低く丸味をもち内側に向く。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後高台を貼り付ける。	焼成良好、胎土中に砂粒含有、素地は灰色を呈す。	底部	
4	土師器 坏	11.6 3.7 5.1	体部は若干の丸味をもち折れながら立ち上がる、口唇部が外反。	ロクロ成形、底部は回転糸切り。	焼成良好堅緻、胎土中に若干砂粒含有、色調は橙褐色を呈す。	⅔	
5	土師器	— — 4.8	底部より折れ体部に丸味をもつ、埦形になるものか。	ロクロ成形、底部は回転糸切り。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は橙褐色を呈す。	底部 ⅓	
6	土師器	— — 5.1	底部より外反する形で開く、底部が厚く切り高台状をなす。	ロクロ成形、底部は回転糸切り。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は茶褐色を呈す。	底部	
7	土師器 高台付 埦	16.4 — —	体部中央部で折れ稜をなす、口唇部は若干外反する。	ロクロ成形、底部は回転糸切り後高台を貼り付ける。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は茶褐色を呈す。	⅔	
8	土師器 高台付	— — 高台径 7.7	体部は丸味をもち立ち上がる、高台は若干外反する。	ロクロ成形、高台を貼り付け底面をナデ整形。	焼成良好、色調は橙褐色を呈す。	底部	

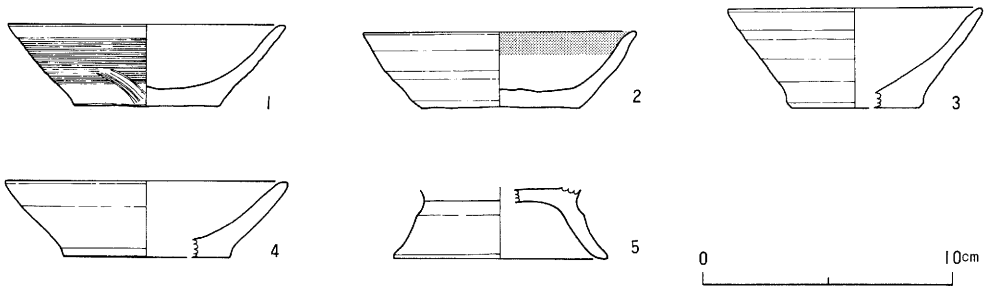
図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
9	土師器 高台付	— — 高台径 8.0	高台は強く外反し高い。	ロクロ成形、高台を貼り付け底面をナデ整形。	焼成良好、色調は橙褐色を呈す。	底部	
10	土師器 羽釜	32.5 — —	体部は若干の丸味をもつ、鍔部は傾斜する。	器面は箆削りされている。内面はハケナデ。	焼成は良好、胎土中に若干の石英粒含有、色調は茶褐色を呈す。		



第82図　第27号住居址（1/60）

第27号住居址（第82図）

検出状況　本址はG−43グリッドにカマドの袖石らしきものを検出し、その存在が明らかにな



第83図　第27号住居址出土土器（⅓）

った住居址である。カマド及び住居址の掘り方等は開田の際にすべて攪乱され、カマド袖石、カマド周辺に床面が若干見られただけであった。

遺構の構造　本址は開田による攪乱が激しく遺構のプランの把握はできなかった住居址である。床面はカマド袖石と思われる付近を中心に堅緻な面が若干見られたが、他の部分については攪乱により破壊されていた。床上面には数十個の礫が散在しており、遺存する位置等よりカマドに関わるものではないかと考えられる。周溝は西壁側に設けられていたと思われるものが検出された。深さは10cmほどで割合しっかりしている。

カマドは袖石と思われる扁平礫を１枚遺存するだけで、掘り方に関わるものは見られなかった。袖石はしっかり床面に直立し根本に小礫を支う形をとっている。

遺物の出土状態　遺物はカマド付近、黒色土中より出土した。この他には床上に散在する礫内よりも土師器坏等の破片が出土している。

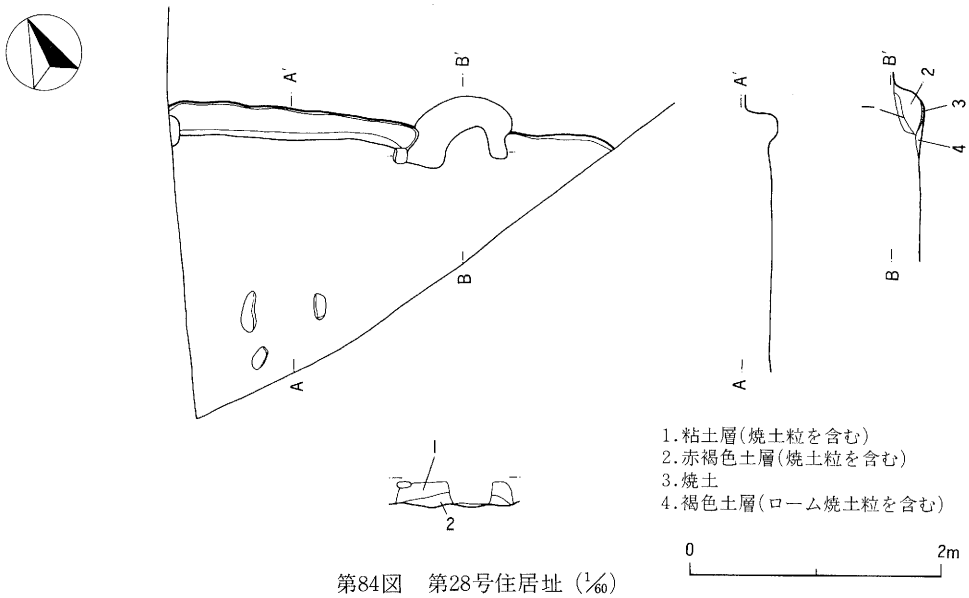
出土遺物（第83図）

本址より出土した遺物は土師器坏類が中心で、図示した５点の他は土師器坏の胴部細片が若干出土している。

土師器坏は体部がほぼ直線的に開く器形をなし、底部は回転糸切りである。胎土・焼成・色調はすべて同じである。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	土師器 坏	11.0 3.2 5.7	体部はほぼ直線的に立ち上がる。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は橙褐色を呈す。	ほぼ完形	
2	土師器 坏	10.8 3.0 6.2	体部は若干の丸味をもち中程で折れ稜をなす。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は橙褐色を呈す。	ほぼ完形	内面口縁部にスス状炭化物

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
3	土師器 坏	10.1 4.0 5.1	底部で折れ稜をなし体部はほぼ直線的に開く。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は橙褐色を呈す。	¼	
4	土師器 坏	11.1 3.0 6.6	底部付近で折れ若干丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成良好、色調は橙褐色を呈す。	⅕	
5	土師器 高台付	— — 高台径 8.5	高台は中程で折れ稜をなし外反する。	ロクロ成形。	焼成は余り良くなく軟質、色調は橙褐色を呈す。	底部 ¼	



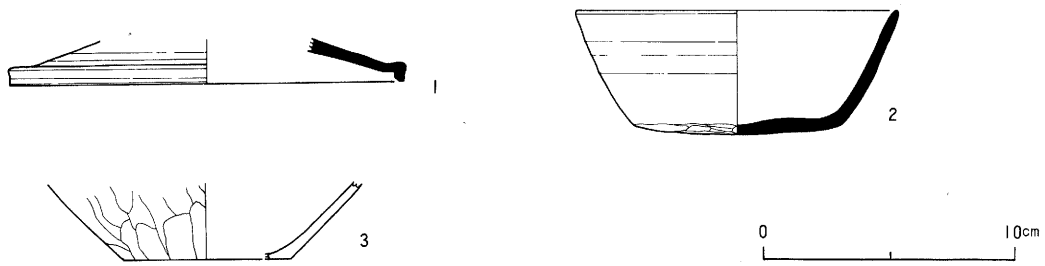
第84図　第28号住居址（1/60）

第28号住居址（第84図、図版24）

検出状況　本址は1－28グリッドを中心に黒色土の落ち込みが確認されその存在が明らかとなった住居址である。住居址の⅔ほどは用地外に当たるため、プラン全体の把握には至らなかった。覆土はローム粒を含む黒色土の単一層であった。

遺構の状態　本址は⅔ほどが用地外のため、カマドを中心とした東壁側が検出されたのみで、プランの把握には至らなかった。東壁の掘り込みはしっかりしており、残存壁高は20cmほどで、ほぼ直に立ち上がる。周溝は東壁の一部に検出され、幅の広い深さ30cmほどのものである。床面は全体的に堅緻でほぼ水平に構築されている。

カマドは粘土カマドで東壁ほぼ中央部に設けられている。壁を71cm幅でU字形に切り込み、床に大きさ54cm、深さ５cmの掘り方をもつ。カマド内には、焼土粒混りの赤褐色土（第２層）が充満し、袖・天井部は若干の焼土粒を含む粘土（第１層）で構築される。なお、燃焼部底には焼土が厚



第85図　第28号住居址出土土器(⅓)

さ2cmほど堆積していた。カマド内から須恵器埦・甕等が出土した。

遺物の出土状態　遺物はカマドを中心に若干の土器片が出土したに過ぎない。

出土遺物（第85図）

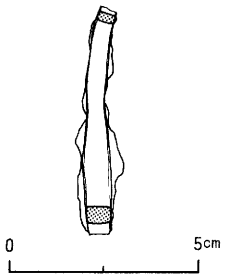
本址より出土した遺物は図示したものだけでその出土量は極めて少ない。

出土した土器の器種は蓋・坏・甕で、蓋・坏が須恵器である。2の坏は作りの良いものである、この他に鉄製品破片が出土している。

1は須恵器蓋で鈕の部分等を欠損している。器形は口唇部が一端折れてから内傾するものでロクロ水挽きによる。焼成は余り良くなく軟質を呈し色調は白灰色を呈する。法量は口径が15.6cmである。

2は須恵器埦で⅔を欠損する。器形は体部が底部際で丸味をもって立ち上がる。底部は回転糸切り後周縁をヘラ削りする。焼成は良好で堅緻である。胎土中には混入物が少なく色調は青灰色を呈す。法量は口径12.8cm器高4.9cm、底径8.3cmである。

3は土師器甕の底部で胴部・口縁部を欠損する。器形は胴部で弱い丸味をもって開くものと思われるもので胴部外面は縦方向のヘラ削りが施される。焼成は普通で色調は赤褐色を呈する。法量は底径6.6cmである。

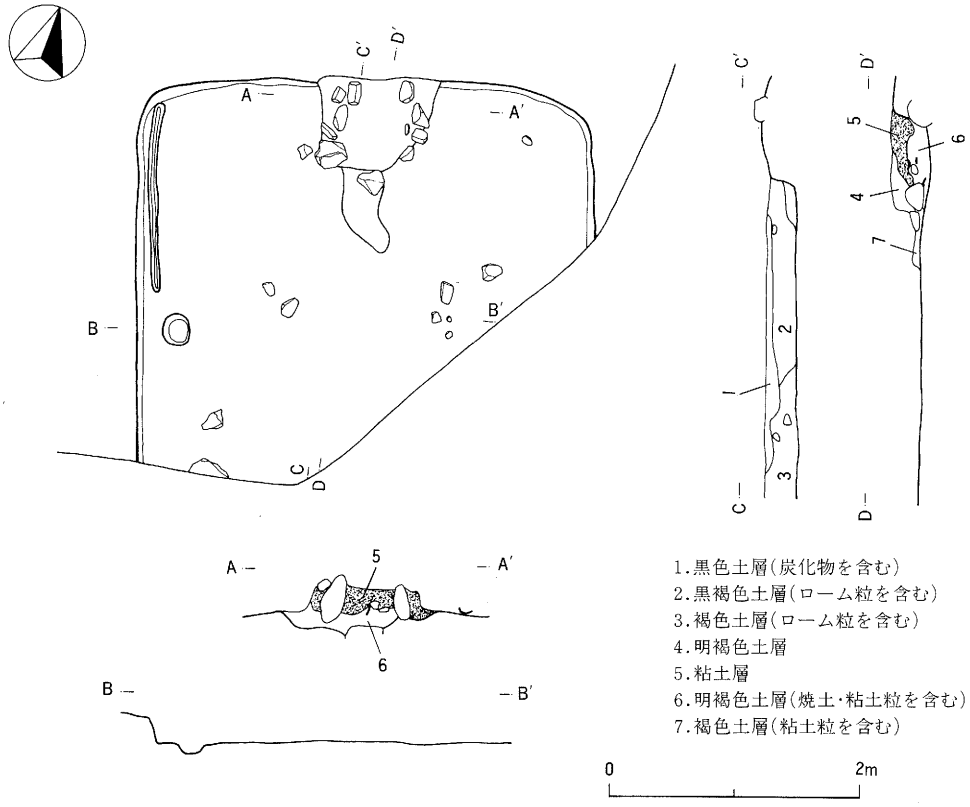


第86図　第28号住居址出土鉄製品(½)

鉄製品（第86図）　1は断面が長方形をなす鉄製品で、現在長6.0cm、最大幅0.7m、厚さ0.5cmである。形状等は鉄鏃等の茎部に類似する。

第29号住居址（第87図、図版24）

検出状況　本址は試掘の際にその存在が明らかとなった住居址である。本址はその⅓が用地外であるが、カマド位置、東・西コーナー部の位置からプランを把握することができた。覆土は3層に分かれ、上部に炭化物を含む黒色土（第1層）、床上カマド付近にローム粒を含む黒褐色土

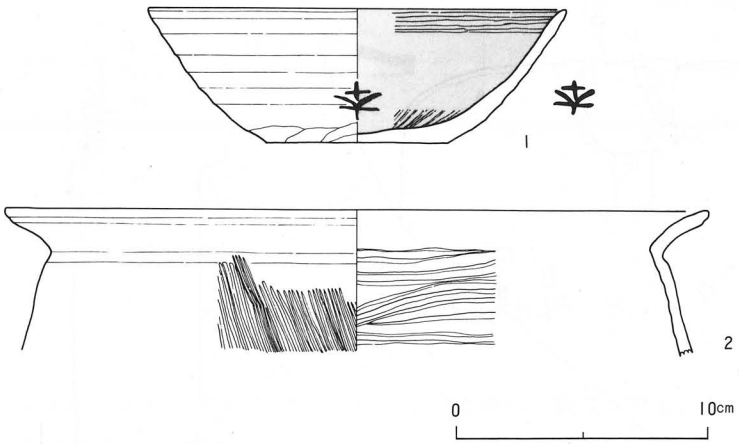


第87図　第29号住居址（1/60）

(第2層)、第2層よりもローム粒の含有が多く粘性の少ない褐色土(第3層)が堆積する。

遺構の構造　本址は北壁のほぼ中央にカマドを設ける住居址で、1/3ほどが用地外のため規模等は不明である。プランは東・西コーナー部から隅丸方形を呈するものと考えられる。主軸方向はN22°Wを向くと思われる。壁は褐色土層より掘り込まれておりしっかりしている。残存壁高は21cmで若干の傾斜を持ち立ち上がる。柱穴は西壁側に1箇所検出された。深さ8cmと浅いものである。周溝は幅8cm、深さ5cmほどのものが西壁コーナー付近より検出されているに過ぎない。床はカマドを中心に堅緻な部分が見られるが、西コーナー付近は若干軟弱な部分がある。床はほぼ水平に構築されている。カマドは北壁ほぼ中央部に設けられている。遺存する袖石脇部に粘土が貼られることより石組み粘土カマドであると思われる。

カマドは大きさ66×122cm、深さ12cmの楕円形の掘り方をもち、両脇に3個ずつの扁平礫を直立させ粘土により固定させ袖部としている。燃焼部上部には天井部に貼ってあったと思われる粘土(第5層)が、底部には焼土粒・粘土粒を含む明褐色土(第6層)が堆積していた。また、燃焼部奥、煙道部立ち上がりに地山礫が突出している。焼土等の堆積は見られなかった。また、焚口部付近にはカマドに貼ってあった粘土が崩壊し堆積していた。



第88図　第29号住居址出土土器（⅓）

遺物の出土状態

カマドを中心とした付近より遺物は出土し、墨書を持つ土師器坏（第88図1）がカマド右側より出土している。

出土遺物（第88図）

本址より出土した遺物は極めて少なく図示したものだけであった。

出土した土器の器種は坏・甕で全て土師器である。

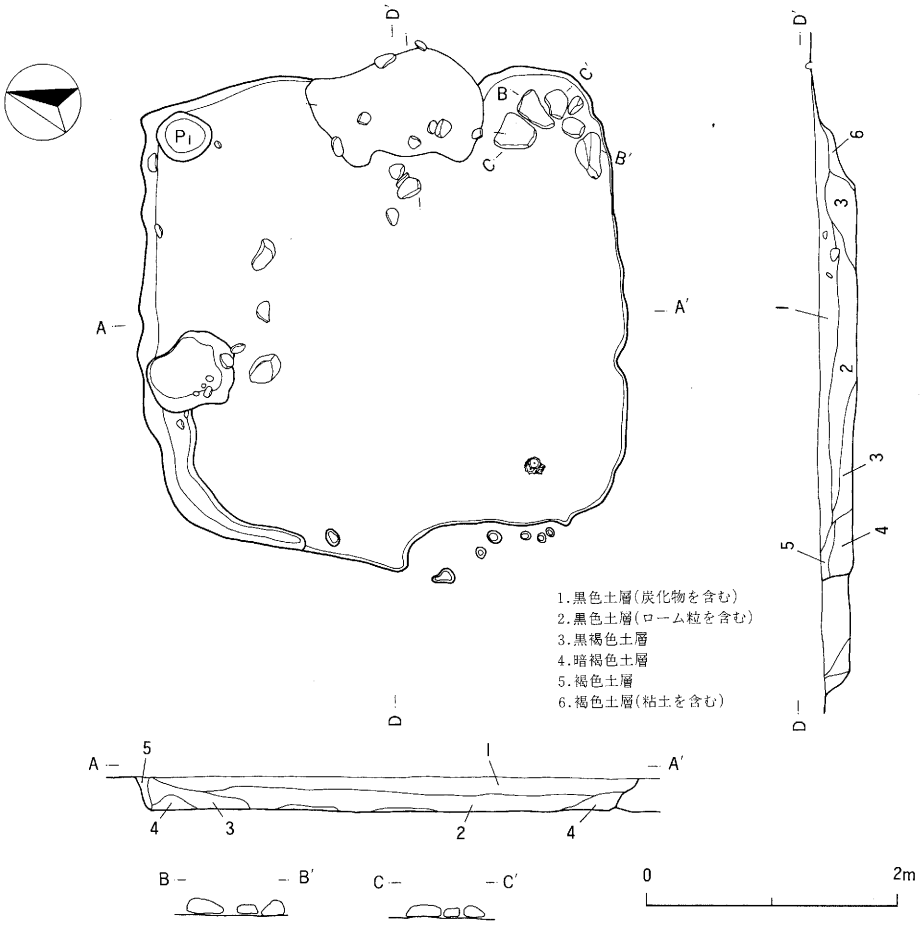
1は土師器坏で全体の⅔を遺存する。体部は若干の丸味をもち立ち上がる。ロクロ成形で体部下半は一段の篦削りが施される。底部は回転糸切りである。内面は黒色手法を用い体部は放射状、口縁部は横方向の研磨が施される。焼成は良好で胎土中に褐鉄鉱粒を含有する。色調は赤褐色を呈する。なお、体部の相対する部分に逆位で「本」の墨書を持つ。法量は口径16.6㎝、器高5.3㎝、高径7.1㎝を計る。

2は土師器長胴甕の口縁部である。器形は口縁部が強く「く」字形に外反し肩部に若干の稜をなすものである。内外面共に刷毛により整形されている。焼成は良好で胎土中に砂粒、雲母を含み色調は茶褐色を呈する。法量は口径28.0㎝を計る。

第30号住居址（II区1号住居址）（第89図）

検出状況　本址はII区D－2グリッドよりカマドを検出しそれにより存在が明らかになった住居址である。北・東壁共に掘り方はしっかりしており容易にプランが検出された。覆土は2層に分かれ、上部に若干炭化物を含む粘性のある黒色土（第1層）、床上にはローム粒を含む黒色土（第2層）が堆積する。壁際には黒褐色土（第3層）、暗褐色土（第4層）、褐色土層（第5層）三角堆積状になっている。カマド付近はカマドの貼り粘土が流れ、粘土を含む褐色土（第6層）が堆積する。

遺構の構造　本址は3.6×3.8ｍのコーナー部が丸味を帯びる隅丸方形プランの住居址である。主軸はN75°Eを向く。壁の掘り込みはしっかりしており、北壁側で残存壁高24㎝を計る。南・西壁は7号住居址覆土内より掘り込んでいる。壁は直に立ち上がる。周溝は西コーナー部に不規則な幅広の深さ9㎝ほどのものが検出された。柱穴は北コーナー部に深さ9㎝のP_1が検出され隅柱と考えられる。床は全体的に堅緻でほぼ平坦に構築されている。カマドは東壁ほぼ中央部に設け



第89図　第30号住居址（1/60）

られており、今回の調査において最も遺存状態の良いものであった。遺存する状態より見ると石組み粘土カマドであると思われる。

カマドは大きさ74×68cm、深さ5cmの楕円形の掘り方ををもち、両脇に扁平礫を4枚ずつ直立させ粘土により固定させ袖部としている。燃焼部には焼土粒を含む黒褐色土（第2層）、下部には焼土粒を含む褐色土（第3層）が堆積していた。焼土は左側袖部に10cmほど堆積していた。また、第3層内には天井部に関わると考えられる扁平な礫が数個崩落していた。煙道部は扁平礫をハ字状に直立させ短いものを作っている。カマド右側住居址西コーナー部に、ほぼ扁平な人頭大の礫を6個U字状に配したものがあるが、どのような性格の遺構であろうか。

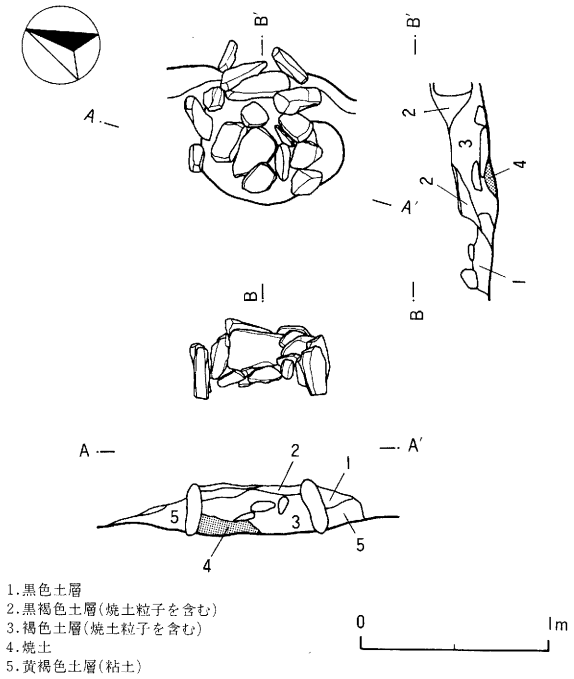
遺物の出土状態　遺物はカマドを中心とした覆土内より出土した。カマド内第3層より土師器甕破片が出土している。住居址南コーナー覆土第2層上面より八稜鏡が12×9cmほどの板材の

上に載った状態で3面出土した。土層の堆積状態等より直接同住居址に伴なうものとは考えにくく、むしろ同住居址が自然堆積していく過程においてできた窪地内に置かれたものと考えるのが妥当であろう。

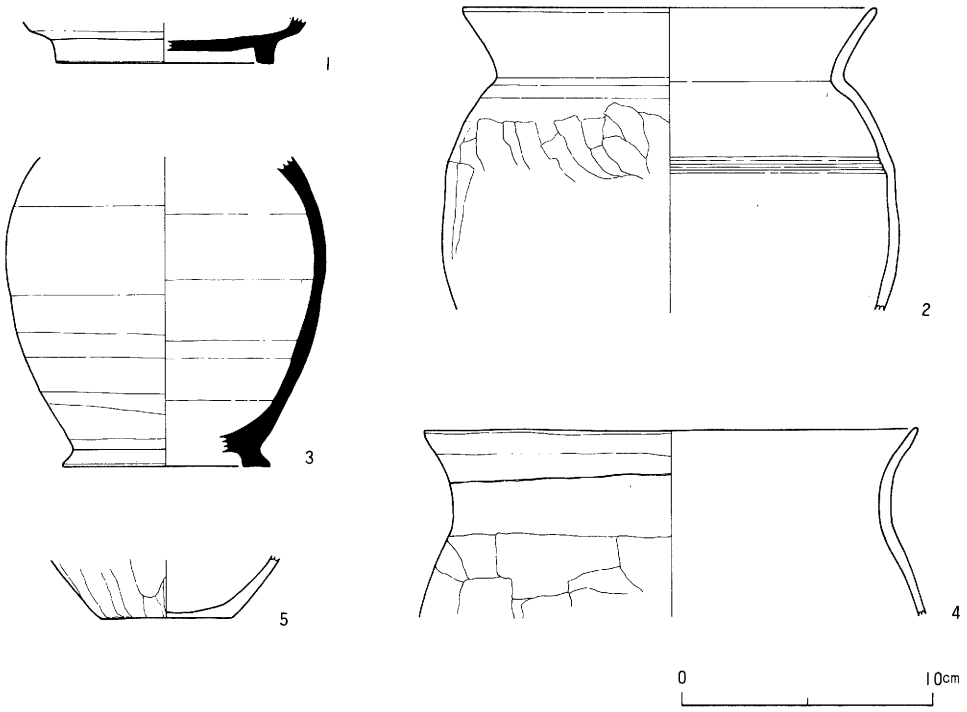
出土遺物（第91図）

本址より出土した遺物は、図示したものの他に土師器甕の胴部破片がある。須恵器瓶や土師器甕の器種が存在した。

土師器甕は胴部が球形に張らむものが主体で、口縁部が「く」の字形に外反するものと、「コ」の字形に外反するものに分けられる。整形は胴部がヘラケズリされるもので、胎土・焼成は良好で器壁は0.4cmと薄いものである。



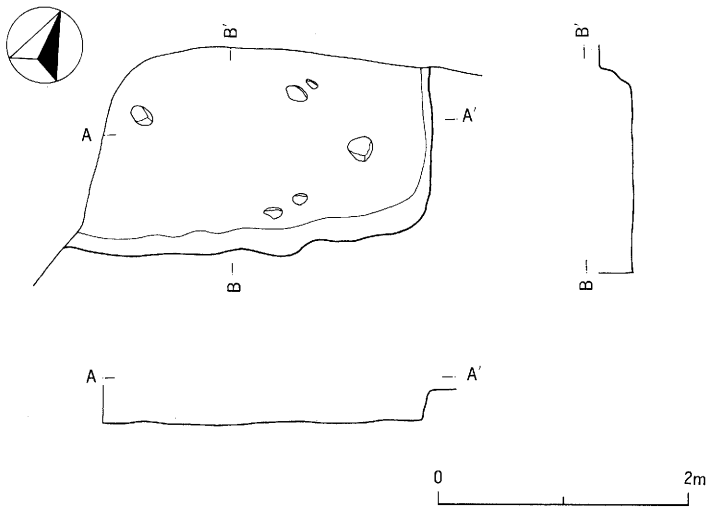
第90図　第30号住居址カマド（1/40）



第91図　第30号住居址出土土器（1/3）

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	須恵器 高台付	— — 高台径 8.6	体部は底部際で折れ直に立ち上がる高台は断面方形をなす。	底部は回転篦削り、高台は付高台。	焼成良好堅緻、色調は灰黒色を呈す。	底部	
2	須恵器 長頸瓶	— — 8.2	胴部下半は弱い立ち上がりで上半部に最大径をもつ、外開きの高台で畳付部は平坦。	底部は回転篦削り、胴部下半に4段の回転篦削り。	焼成は堅緻、胎土緻密、色調は灰黒色を呈す。	胴部 ⅓	
3	土師器 胴張甕	16.5 — —	口縁部は「く」字形に折れ胴部は球形に脹らむ、肩部弱く張る。	口縁部は横ナデ、胴部は縦方向の篦削り。	焼成良好、胎土中に混入物が少ない、色調は茶褐色を呈す。	口縁部 ½	
4	土師器 胴張甕	19.6 — —	口縁部は直立してから弱く上半部で外半し「コ」字形をなす、胴部は若干脹らむ。	口縁部は横ナデ、胴部横方向の篦削り。	焼成良好、胎土中に混入物が少ない、色調は茶褐色を呈す。	口縁部 ⅔	
5	土師器 甕	— — 5.2	胴部はほぼ直線的に開く。	胴部は縦方向の篦削り、底部も篦削り。	焼成良好、胎土中に混入物が少ない、色調は茶褐色を呈す。	底部	

第31号住居址（II区2号住居址）（第92図）

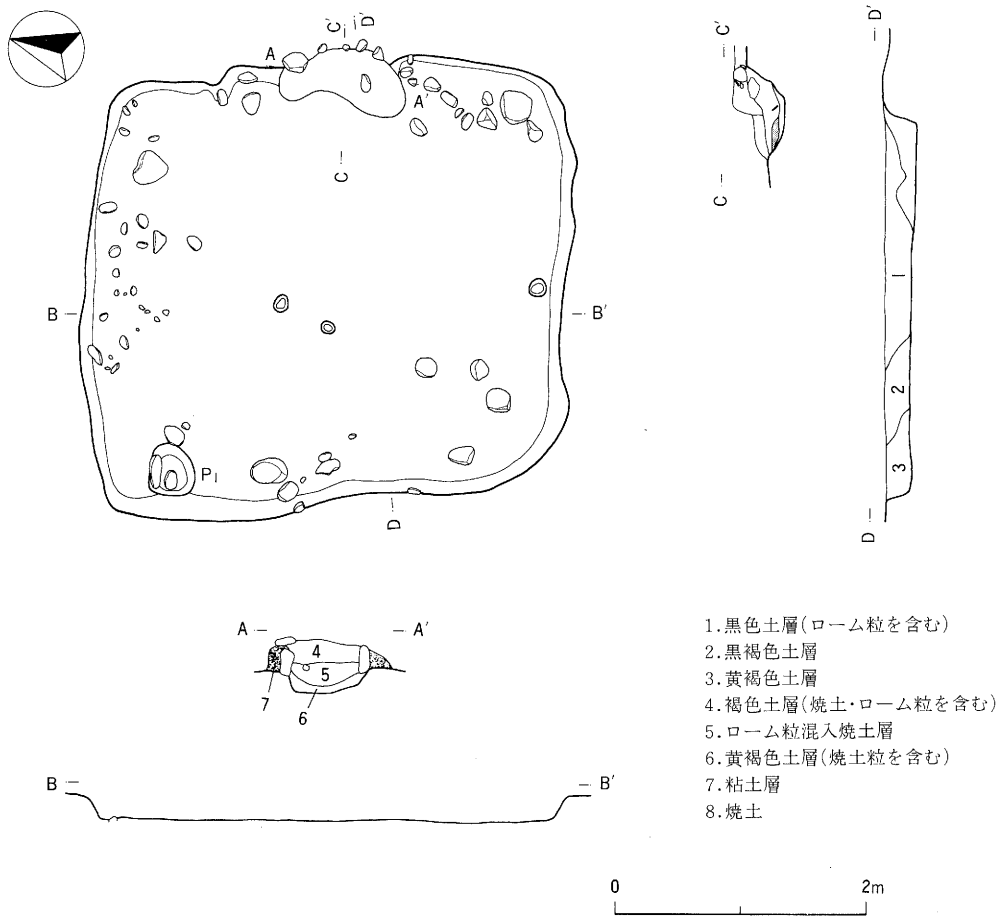


第92図　第31号住居址（1/60）

検出状況　本址はII区B－1グリッドに黒色土の落ち込みが確認されその存在が明らかとなった住居址で、⅔ほどが用地外である。

遺構の構造　本址は全体の⅓ほどを調査したに過ぎず住居の規模等については把握できなかった。西コーナー部等より推定すると隅丸方形を呈するものと思われる。住居址の掘り込みはしっかりしており残存壁高は24cmほどである。床面は凹凸の激しい軟弱なもので、礫が数個散在している。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土は見られなかった。



第93図　第32号住居址（1/60）

第32号住居址（II区3号住居址）（第93図、図版25）

検出状況　本址はII区C－5グリッドに黒色土の落ち込みが確認されその存在が明らかとなった住居址である。覆土は2層に大別され、住居址ほぼ中央部にローム粒を含む黒色土（第1層）、カマド周辺、西壁寄りには黒褐色土（第2層）、西壁際には黄褐色土（第3層）が堆積している。

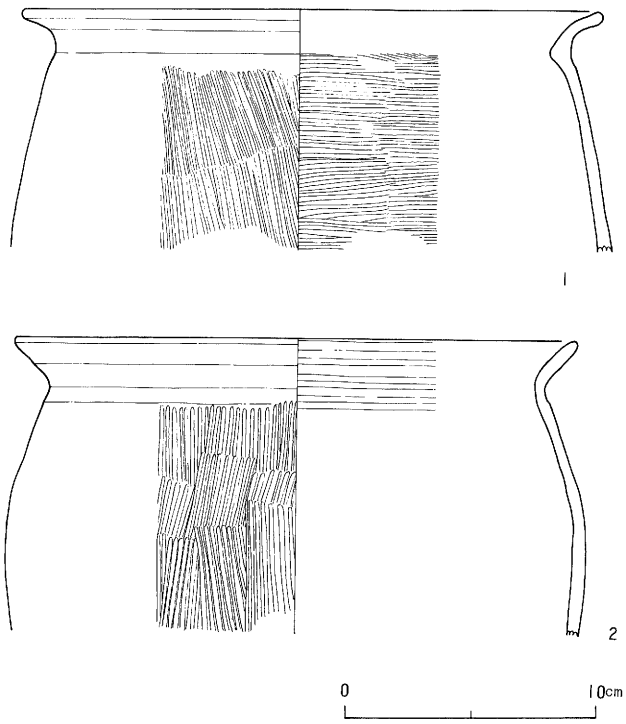
遺構の構造　本址は東壁ほぼ中央部にカマドを設ける住居址で、3.6×3.8mの南コーナー部が丸味をもつ隅丸方形を呈するプランの住居址である。主軸方向はN71°Eを向く。壁は掘り方もしっかりしており、残存壁高は18cmほどで緩やかな傾斜をもち立ち上がる。柱穴は西コーナー部に1箇所P_1が検出された。P_1は深さ11cmほどで隅柱と考えられる。床は住居址内南東範囲を中心に堅緻な箇所が見られる。北壁側は地山礫面を直接床とするため、礫の突出が見られる。床はほ

ぼ水平に構築されている。

カマドは東壁ほぼ中央部に設けられている。土層状態等より石組粘土カマドであると思われる。カマドは大きさ64×60cm、深さ18cmほどの円形の掘り方を燃焼部としている。袖石は扁平礫を燃焼部背部に直立させ粘土により固定させている。燃焼部には焼土・ローム粒を含む褐色土（第1層）、ロームブロックを含む焼土混りの褐色土（第2層）、下部に焼土粒を含む黄褐色土（第3層）が堆積していた。焼土は焚口付近に5cmほど堆積し、天井部に関わる礫が若干遺存した。カマド右側に第1号住居址のように礫を配した箇所が検出された。礫は1号住居址のものに比べ小さく、礫の配し方も不規則であった。

遺物の出土状態　遺物はカマド付近の覆土内より出土した。また、カマド第2層内より土師師器甕の破片が出土している。

出土遺物（第94図）



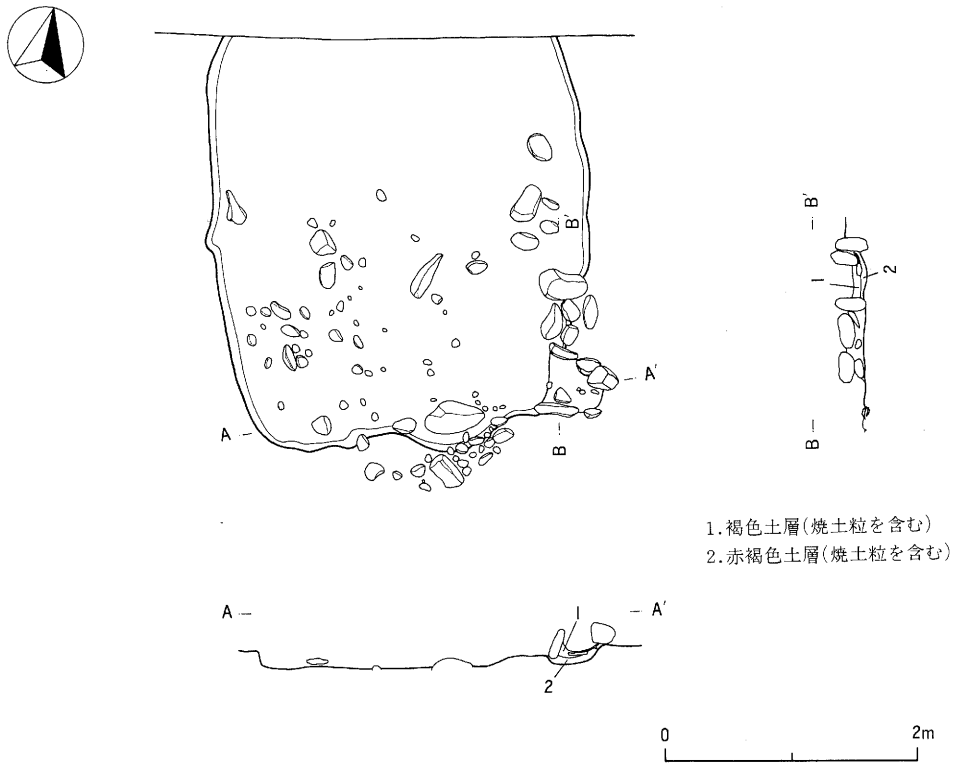
第94図　第32号住居址出土土器（⅓）

本址より出土した遺物は図示したものの他に土師器甕の胴部破片がある。

土師器甕は口縁部が「コ」の字形をなすものと、「く」の字形をなすものに分けられる。両者共にハケナデ整形で焼成、胎土等が類似する。

1は土師器長胴甕で口縁部を遺存している。器形は口縁部が弱く直立してから上半部が強く外反する「コ」字形をなす。胴部は若干脹むようである。胴部内外面共に刷毛ナデ整形される。焼成は良好で、胎土中に雲母を含む。色調は茶褐色を呈する。法量は口径22.9cmを計る。

2は土師器長胴甕で口縁部が遺存する。器形は口縁部が外反し「く」字形をなすもので胴部が若干張る。内外面共に刷毛ナデ整形される。焼成は良好で胎土中に砂粒を含有する。色調は赤褐色を呈する。法量は口径22.3cmを計る。



第95図　第33号住居址（1/60）

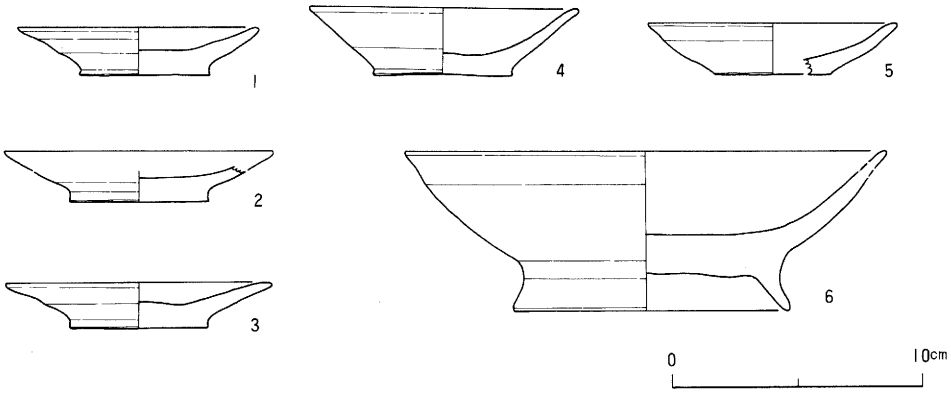
第33号住居址（II区4号住居址）（第95図、図版26）

検出状況　本址はII区C－8グリッドにカマドの袖石と思われる礫が検出され、その存在が明らかになった住居址である。¼ほどが用地外であるが、カマドの位置、南コーナー部よりプランを把握することができた。覆土はローム粒を若干含む黒色土の単一層である。

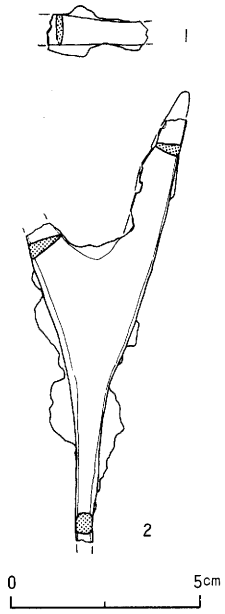
遺構の構造　本址は住居址東コーナー部にカマドを設けるもので、住居の¼ほどが用地外にあるため、規模等については不明であるが、東・南コーナー部より東・西壁を若干張る横長の隅丸長方形を呈する住居址であると考えられる。主軸方向はN74°Eを向くと思われる。残存壁高は12cmほどで、ほぼ直に立ち上がる。南壁は地山礫層内に掘り込まれており不整形である。床は住居址内南側が地山礫面を直接床としているため礫が突出し凹凸が激しい。

カマドは住居址コーナー部に設けられている。袖石が左右2枚ずつ直立した形で遺存している。燃焼部は34×35cm、深さ6cmほどの掘り方を持っている。

内部には焼土粒を含む褐色土（第1層）、焼土粒を含む赤褐色土（第2層）が堆積していた。また、1層上面には扁平な礫と高台坏が遺存していた。カマドの左横には、細長い礫を5個組み合せ長方形に配した遺構が検出された。カマドに伴なう遺構であると考えられる。



第96図　第33号住居址出土土器（⅓）



第97図　第33号住居址出土鉄製品（½）

遺物の出土状態　遺物はカマドを中心とした付近より出土した。特にカマド際床上より土師器坏が重なり合った状態で出土している。また、カマド内よりは高台坏が煙道付近より崩落した形で出土している。

出土遺物（第96図）

本址より出土した遺物は図示した土師質土器の皿類がすべてである。

土師質土器皿は胎土中に混入物の少ない橙褐色を呈するもので、器形は直線的に広く開き器高の低いものである。底部は回転糸切りで割合雑な切り方のものである。また、底部の作りも厚く切り高台的である。土器の状態を見た場合「カワラケ」に近い様相を示す。

鉄製品（第97図）1は刀子破片で現在長2.6cm、最大幅0.8cm、厚さ0.2cmを計る。2は有茎雁式の鉄鏃で、現在長11.2cm、最大幅3.1cmを計る。尖頭部は片刃で茎部は長方形断面をなす。15号住居址より出土したものより細身の感のするものである。

図	器種	法量	器形	手法	焼成及び胎土	残存	備考
1	土師器 皿	9.6 1.9 5.2	底部より折れ直線的に開き中程で折れ稜をなす、口縁部は外反、底部は厚く切り高台状。	ロクロ成形、底部は回転糸切り。	焼成は普通、胎土中に砂粒含有、色調は赤褐色を呈す。	⅔	土師質土器に近い。
2	土師器 皿	— — 5.5	底部より折れ弱い丸味をもち直線的に開く、底部は厚く切り高台状を呈す。	ロクロ成形、底部は回転糸切り。	焼成は普通、胎土中に混入物が少ない、色調は橙褐色を呈す。	⅔	土師質土器に近い。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
3	土師器 皿	10.6 1.8 5.4	体部は底部より直線的に開き中程で折れ稜をなす、口縁部は外反する、底部は厚く切り高台状を呈す。	ロクロ成形、底部は回転糸切り。	焼成は普通、胎土中に混入物が少ない、色調は橙褐色を呈す。	⅓	土師質土器に近い。
4	土師器 皿	10.6 2.6 5.5	体部は底部より直線的に開く。	ロクロ成形、底部は雑な回転糸切り。	焼成は普通、胎土中に混入物が少ない、色調は橙褐色を呈す。	⅓	土師質土器に近い。
5	土師器 皿	9.9 2.0 5.0	体部は弱い丸味をもち口縁部が若干外反する。	ロクロ成形、底部は回転糸切り。	焼成は普通、胎土中に若干の砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	⅓	土師質土器に近い。
6	土師器 高台付 坏	19.1 6.3 高台径10.9	体部は丸味をもち口縁部が若干外反する。高台は「ハ」字状に外反する。	ロクロ成形、底部は糸切り後高台を付け周縁をナデる。	焼成は普通、胎土中に混入物は少ない、色調は赤褐色を呈す。	⅔	

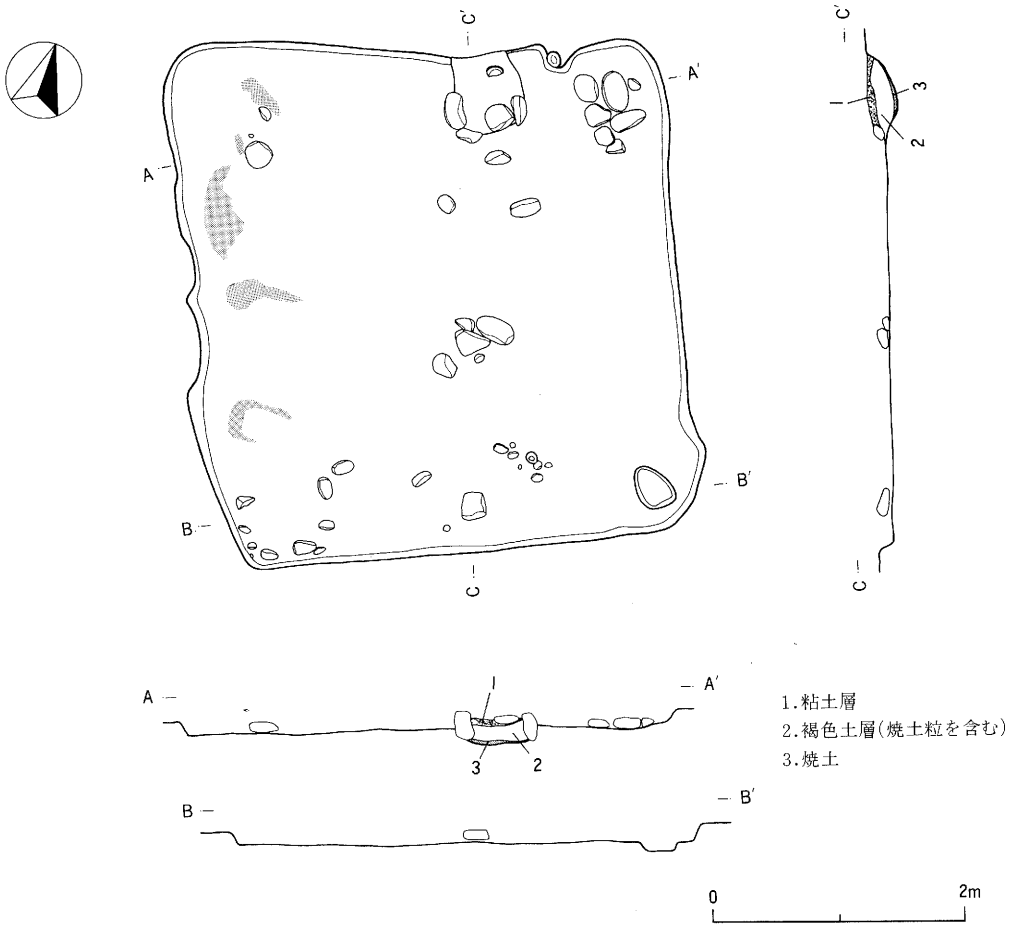
第34号住居址（II区5号住居址）（第98図、図版26）

検出状況　本址はII区B－10グリッドを中心に黒色土の落ち込みが検出され、その存在が明らかとなった住居址である。住居址が掘り込まれている褐色土層は水田耕作により攪乱が激しくプラン確認は難しかった。覆土は黒色土の単一層であるが、上面が攪乱されている。なお、西壁寄り床上17cmほどの部分に焼土が見られる。

遺構の構造　本址は4.0×3.8ｍの若干西コーナー部を張る隅丸方形プランを呈する住居址である。主軸方向はN27°Wを向く。壁の掘り込みは褐色土中よりで、西壁の一部は攪乱のため不明確になっている。残存壁高は12cmほどである。柱穴と思われるピットは西コーナー部に１箇所検出された。深さは６cmほどで浅い。位置等より住居址の隅柱と考えられる。床は全体的に軟弱であるがほぼ水平に構築されている。

カマドは北壁中央やや右寄りに設けられている。土層状態等より石組み粘土カマドであると考えられる。掘り方は大きさ65×60cm、深さ13cmのほぼ円形で、袖石を左右１枚ずつ直立させている。燃焼部内は上部に焼土粒を含む褐色土（第２層）、底には焼土が堆積する。カマド右脇には１号、３号住居址と同様に７個の礫をほぼ楕円形に配する遺構が検出された。礫は床上に扁平な面を据えている。

遺物の出土状態　遺物はカマドを中心に土師器坏が出土している。覆土内は攪乱が著しく遺物の出土は見られなかった。



第98図　第34号住居址（1/60）

出土遺物（第99図）

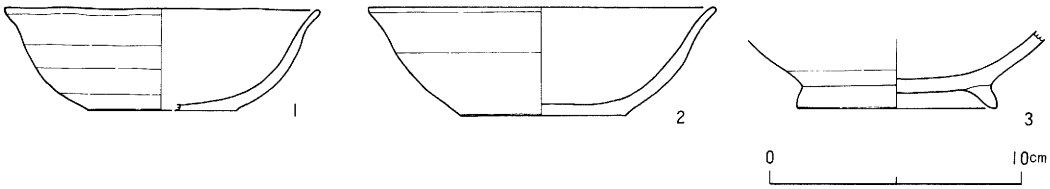
本址より出土した遺物は図示したものがすべてである。

出土した土器は土師器坏類だけである。坏は体部に丸味をもち口縁部が外反するもので、底部は回転糸切りにより雑な切り方をする。

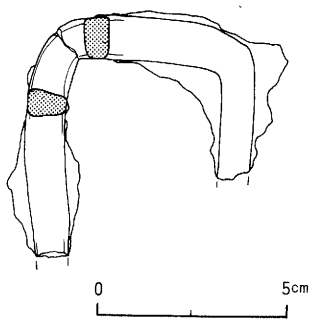
1は土師器坏で½を欠損する。器形は体部が丸味をもち口縁部が強く外反する。ロクロ成形で底部は回転糸切りである。焼成は普通で胎土中に砂粒を含有する。色調は黄褐色を呈する。法量は口径12.5cm、器高4.0cm、底径5.9cmを計る。

2は土師器坏で½を欠損する。器形は体部が丸味をもち口縁部が外反する。ロクロ成形で底部は回転糸切りである。焼成は余り良くなく胎土中に多量の砂粒を含有する。色調は黄褐色を呈する。法量は口径13.8cm、器高4.3cm、底径6.5cmを計る。

3は土師高台付埦になると思われるもので底部のみを遺存する。器形は体部が丸味をもち立ち



第99図　第34号住居址出土土器（1/3）

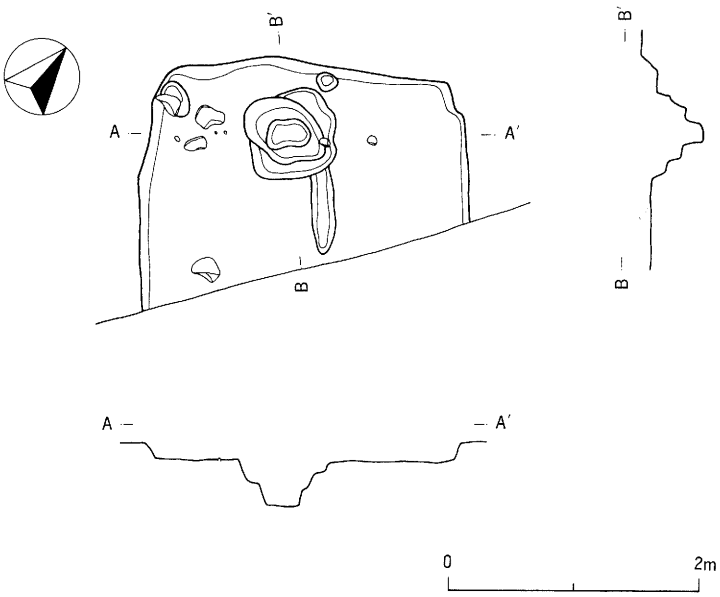


第100図　第34号住居址出土鉄製品（1/2）

上がる。高台は内反する形をとる。ロクロ成形で底部は回転糸切りである。焼成は良好で胎土中に混入物は少ない。色調は赤褐色を呈する。法量は高台径8.0cmを計る。

鉄製品（第100図）1は「コ」の字形をなす鉄製品で現在長6.2cm、最大幅1.1cm、厚さ0.7cmで断面形は方形をなす。

第35号住居址（II区6号住居址）（第101図）



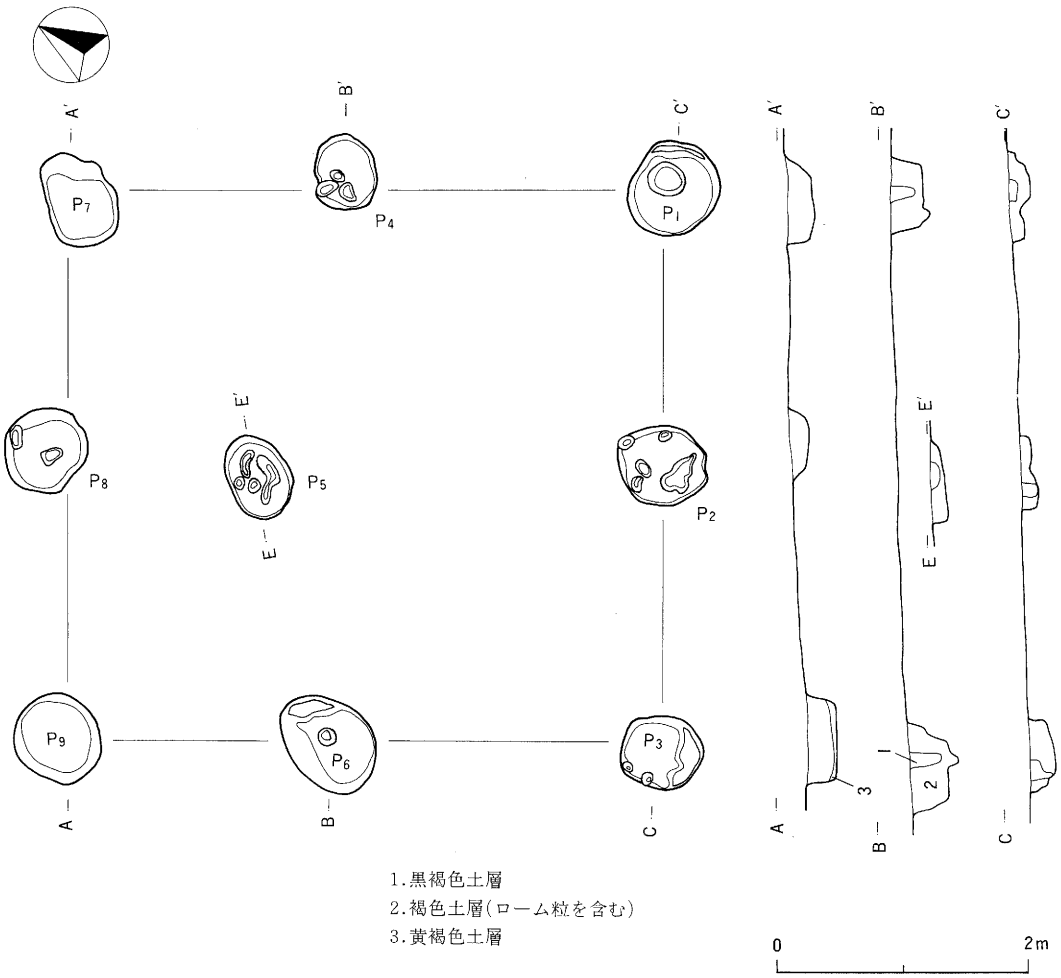
第101図　第35号住居址（1/60）

検出状況 本址はII区F－19グリッドに黒褐色土の落ち込みが確認され、住居址の存在が明らかとなったものである。約1/2ほど用地外のため、その北側1/2ほどを調査したことになる。現在の耕作面より40～50cmと浅いため住居址全体に攪乱が及んでいる。

遺構の構造 本址は調査された部分が少なくその規模等については不明であるが、確認されている西壁は2.5mで、割合小型のものであると推測できる。残存壁高は14cmで緩かな傾斜を持ち立ち上がる。床面は全体的に軟弱で凹凸が激しい。柱穴と思われるピットは西コーナー部に深さ38cmのものが検出され、位置等より隅柱かと思われる。住居址内に

深さ40cmのピットが検出されたが、その土層等より考えて攪乱かと思われる。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。



1.黒褐色土層
2.褐色土層(ローム粒を含む)
3.黄褐色土層

第102図　建築址1（1/60）

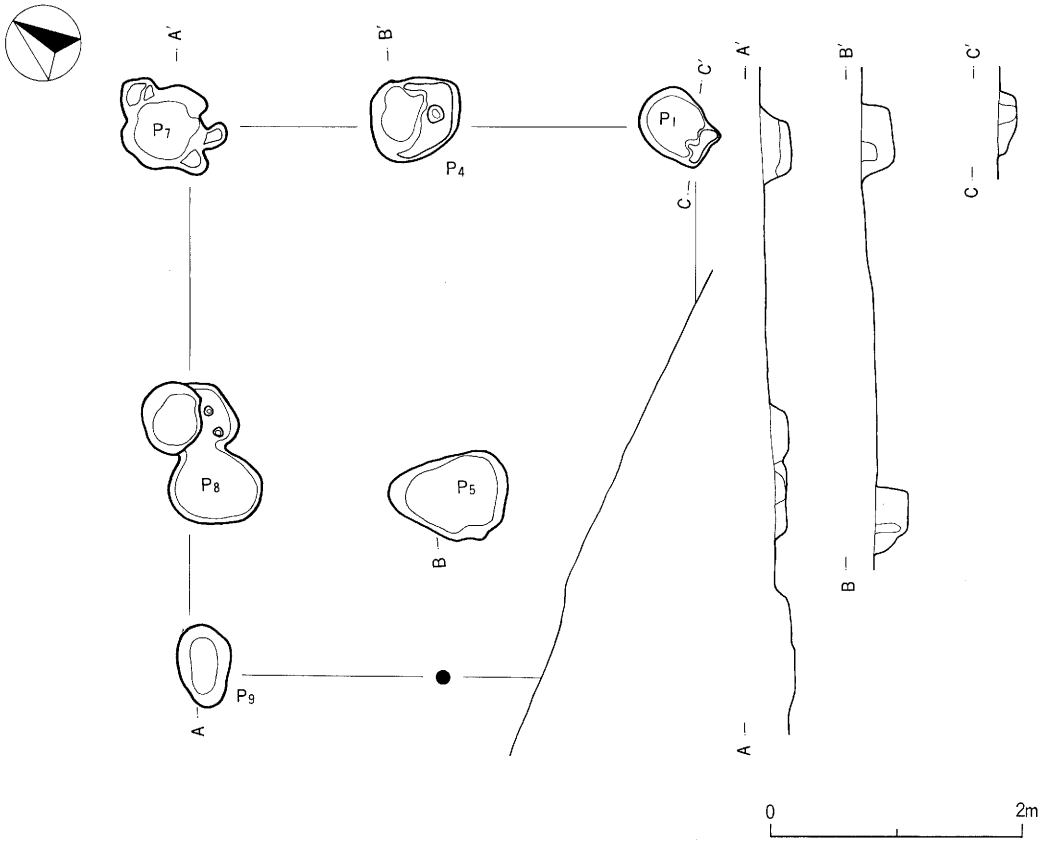
建築址1（第102図）

検出状況　本建築址はⅠ区Ⅰ－14、15グリッドより柱穴列と思われる落ち込みが数箇所確認されその存在が明らかとなったものである。なお、北東側柱穴は12号住居址と重複している。

遺構の構造　本址は2間×2間の形態をもち、主軸はN59°Eを向く。柱間寸法は2.2mであるがP_5の位置がP_8側にずれている。

柱穴の覆土はローム粒を含む褐色土（第2層）が堆積している。P_1～P_6には柱穴のほぼ中央部に黒褐色土（第1層）が柱痕状に検出されている。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。



第103図　建築址２（1/60）

建築址２（第103図）

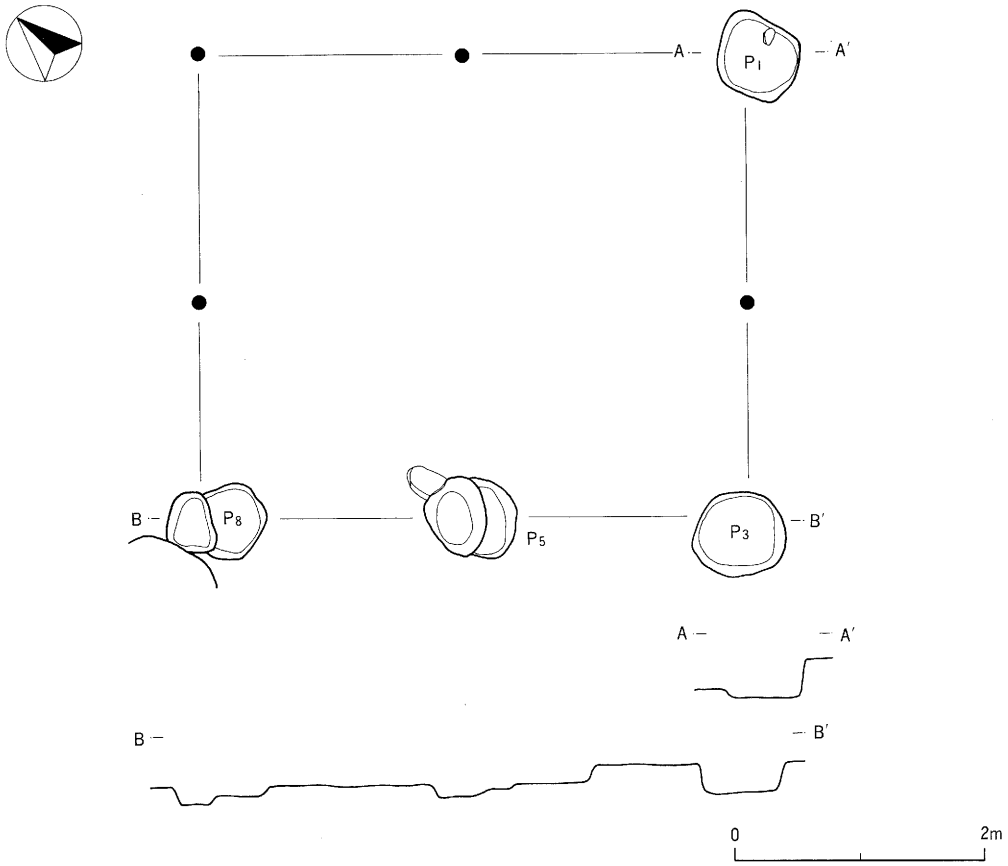
検出状況　本建築址は建築址１の柱列検出に伴ないその存在が明らかとなったものである。当初建築址１の柱列の一部かと思われたが、主軸方向・柱穴の間隔等より別棟と考え建築址２とした。P_2、P_3は用地外、P_6は２号住居址覆土内に掘り込まれており確認できなかった。

遺構の構造　本址は２間×２間の形態をもつもので、主軸はN51°Eを向く。柱間寸法は２ｍであるが、P_5の位置がP_6寄りにずれている。

柱穴の覆土はローム粒を含む褐色土（第２層）が堆積しており、P_1、P_4、P_5の柱穴ほぼ中央部に黒褐色土（第１層）が柱痕状に検出された。

２号住居址と西側で重複しているが、P_9が２号住居址覆土上より床面にまで掘り込まれている事等より本址は２号住居址より新しい時期に構築されたものと判断でき得る。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。



第104図　建築址3（1/60）

建築址3（第104図）

検出状況　本址は3号住居址の調査に伴ないP5、P8が確認され存在が明らかとなったものである。

遺構の構造　本址は2間×2間の形態をもつものと考えられ、主軸方向はN47°Eを向く。柱間寸法は2mである。P2は暗渠により攪乱されP4、P6、P7は住居址覆土内に掘り込まれていたために確認ができなかった。

柱穴の覆土はローム粒を含む黒褐色土である。P5、P8は建て変えが見られ柱穴を旧のものの左側に移動している。

3号住居址と重複しているがP5、P8が覆土内より掘り込んでいる事等より本址が新しいものと判断できる。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。

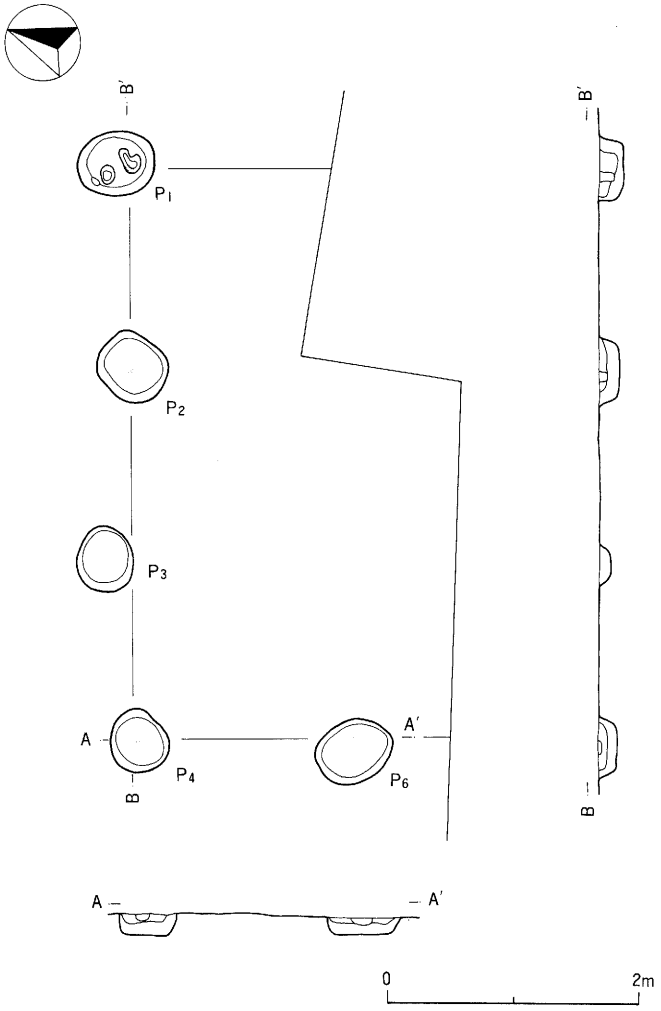
建築址4（第105図、図版30）

検出状況　本址はII区H－14グリッドより柱穴列と思われる落ち込みが数箇所確認されその存在が明らかとなったものである。なお、建築址の½は用地外にある。

遺構の構造　本址は½ほどを用地外に残すが、2間×3間の形態をもち主軸方向はN69°Eを向くものと思われる。柱間寸法は1.6mと他の建築址に比較して短かい。柱穴の並び方はやや不規則でP_3が若干外側に外れる。

柱穴の覆土は粘性のある黒褐色土（第2層）で下部に褐色土（第3層）が堆積する。P_1、P_2、P_4、P_6に柱痕と思われる黒色土の堆積が見られる。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。



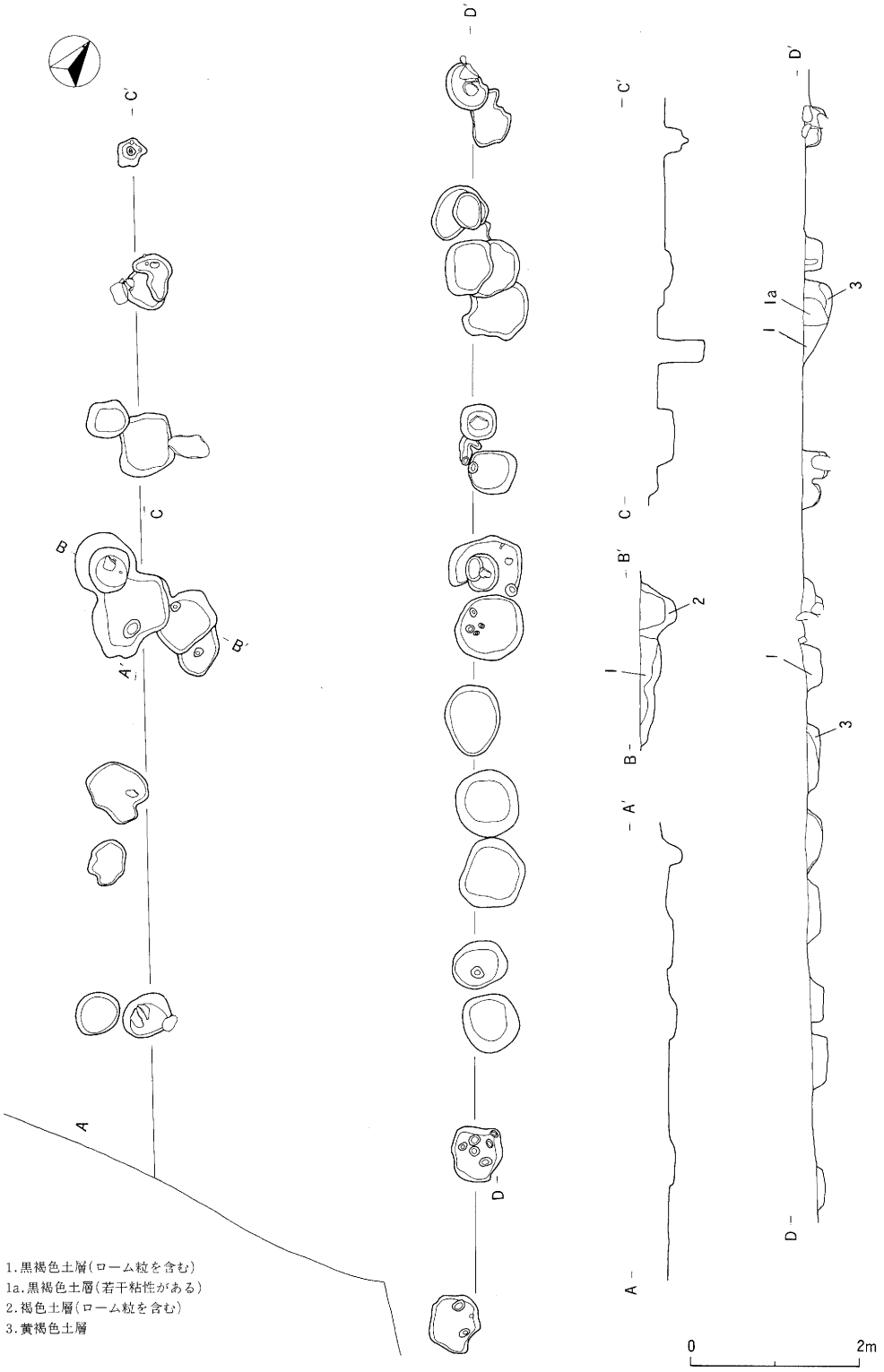
第105図　建築址4（1/60）

柱穴列1（第106図）

検出状況　本址はI区E－8グリッドを中心に柱穴と思われる落ち込みが検出されその存在が明らかとなったものである。当初柱穴列は一列だけの確認であったが、10号、11号、12号住居址に重複し相対する柱穴列が検出された。

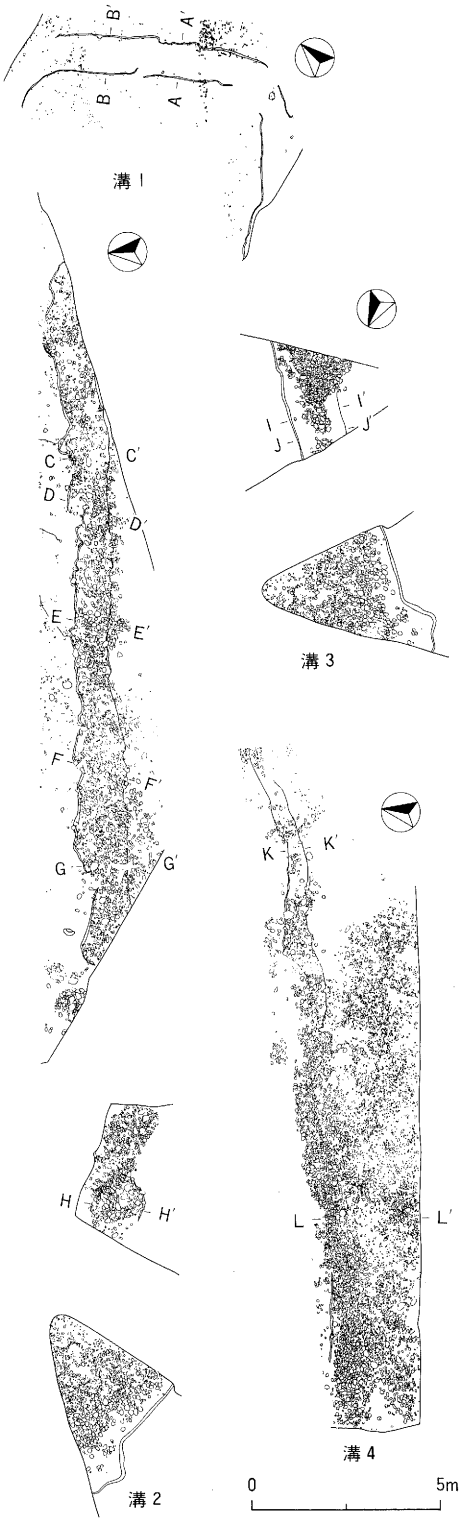
遺構の構造　本址の柱穴は重複が激しく数回に渡り建て変えを行なっているようである。柱間寸法は約2mであるが定まった規格性は見られない。柱列間寸法は約4mでほぼ平行になる状態である。柱穴の配列は若干のばらつきを持つ。

柱穴の覆土はローム粒を若干含む黒褐色土（第1層）で下部に埋め土的なローム粒を含む褐色土（第2層）が堆積するものがある。柱痕と思われるような痕跡は確認できなかった。



1.黒褐色土層(ローム粒を含む)
1a.黒褐色土層(若干粘性がある)
2.褐色土層(ローム粒を含む)
3.黄褐色土層

第106図　柱穴列1 (1/80)



第107図　溝1～4（1/200）

本址は柱穴配置等にばらつきがある事等より考えて建築址として捉えず柱穴列とした。

遺物の出土状態　本址の時期を決定付けるような遺物の出土はみられなかった。

溝1（第107図）

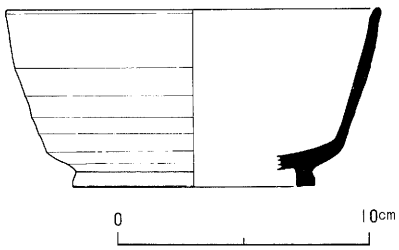
検出状況　I区F－37グリッドを中心に帯状の落ち込みが検出されH－37グリッドよりB－40グリッドに続く溝と確認された。

覆土は2層に分かれ上層に粘性のある黒色土（第1層）、下部に砂・ローム粒子を含む褐色土（第2層）が堆積していた。

遺構の構造　本址は全長20.5m、幅2.1m、深さ18cmのもので、割合幅広の浅い溝である。全体形は「コ」字形を呈し、長軸方向はN42°Wを向く。溝の掘り方は傾斜をもち断面形が逆台形状をなす。

遺物の出土状態　本址より出土した遺物は非常に少なく第2層内より1点出土しているだけである。

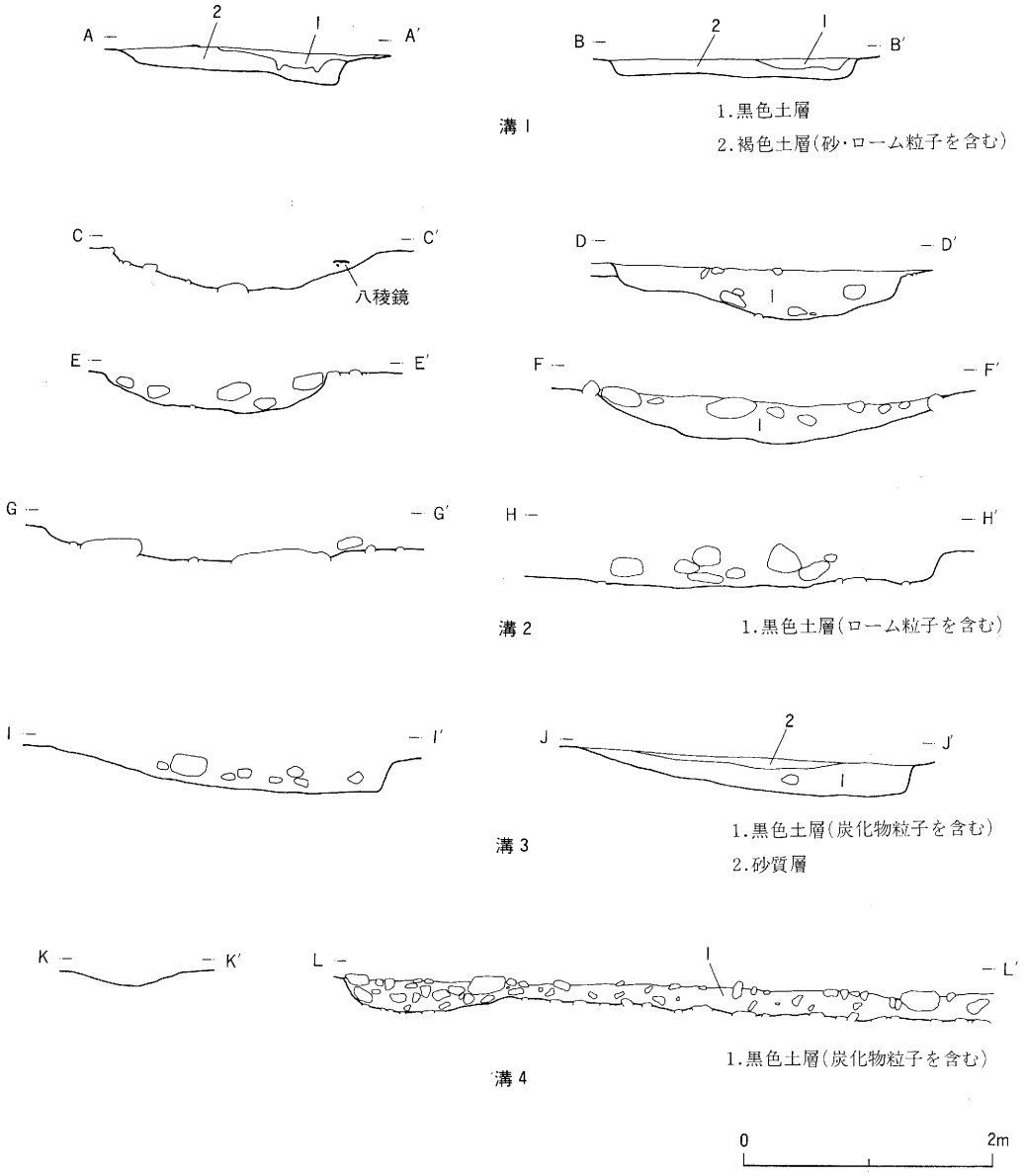
出土遺物（第108図）



第108図　溝1出土土器（1/3）

遺物の出土量は非常に少なく図示した須恵器埦が1点出土しているだけである。

須恵器埦は体部が底部で強く折れ直線的に開くもので、高台部は弱い「ハ」字形をなす。畳付部は平坦である。焼成は良好で堅緻である。胎土は混入物が少なく緻密で色調は黒灰色を呈す



第109図　溝１～４の土層断面図（1/60）

る。法量は口径14.8cm、器高7.0cm、高台径9.5cmを計る。

溝２（第107図、図版28・29）

検出状況　本址はⅠ区Ⅰ－43グリッドよりＥ－69グリッドに続く形で検出されたものでⅡ区Ｂ－21グリッドを中心に検出された溝に接続し用地外に延びるものと考えられる。

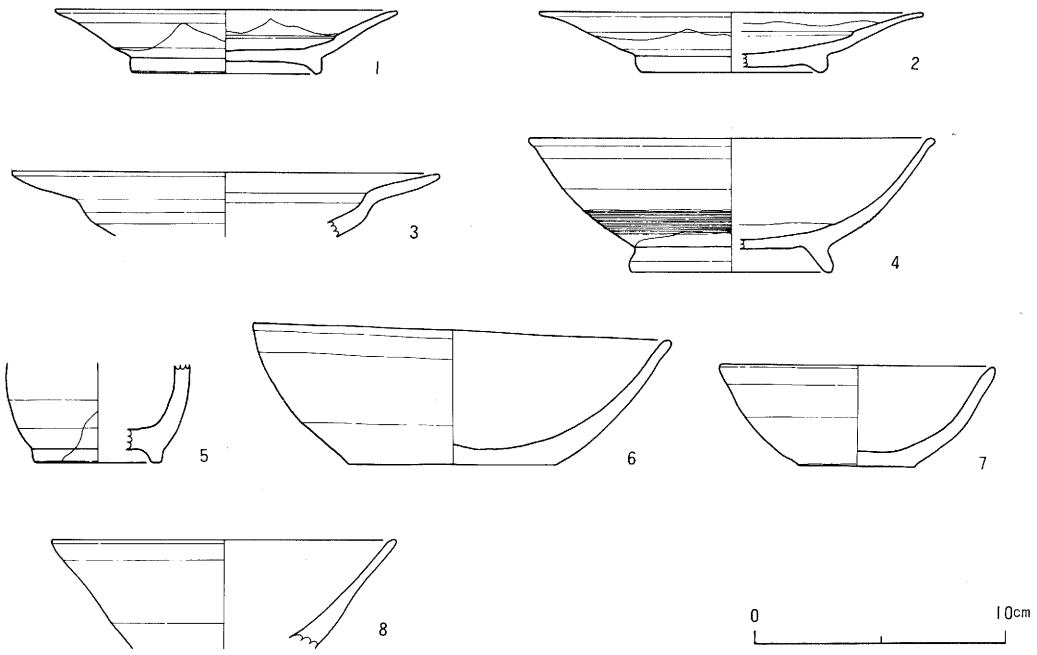
覆土は若干のローム粒子を含む黒色土（第１層）の単一層で内部に拳大より人頭大の河原礫が含

まれている。

遺構の構造　本址はほぼ直線的に延びるもので、II区B－21グリッドを中心として検出された溝に於いて溝3と接続する形をとる。東・西側共に用地外に延びている。検出部分は長さ約46m、幅2m～2.5m、深さ約30cmで長軸方向はN88°Eを向く。溝の途中は堰により2箇所分断されている。溝は地山礫層を掘り込んでおり掘り方は不規則で立ち上がりは緩やかな断面形がU字形を呈する。

遺物の出土状態　溝内より遺物は第1層内の礫に混じって出土している。特にH－50・51・52グリッド周辺に集中する傾向が見られた。この他に溝内H－50グリッドより瑞花双鳳八稜鏡が一面出土している。八稜鏡は溝南側壁に近い位置に鏡面を表にしほぼ水平の状態で出土した。鏡は溝底より22cm上位に検出され鏡面下には紡錘車、鉄器破片が鏡に伴なう形で出土している。出土状態・土層状態等より考えると溝内に含まれる河原礫と同時に鏡を投げ込んだものではなく、溝を埋める段階に於いて鏡・鉄製品を置いている状態である。またこの周辺には意識的にか河原礫の散在が見られなかった。これら溝内より出土した遺物より推察して溝は平安時代末には埋められていたのではないかと考えられる。

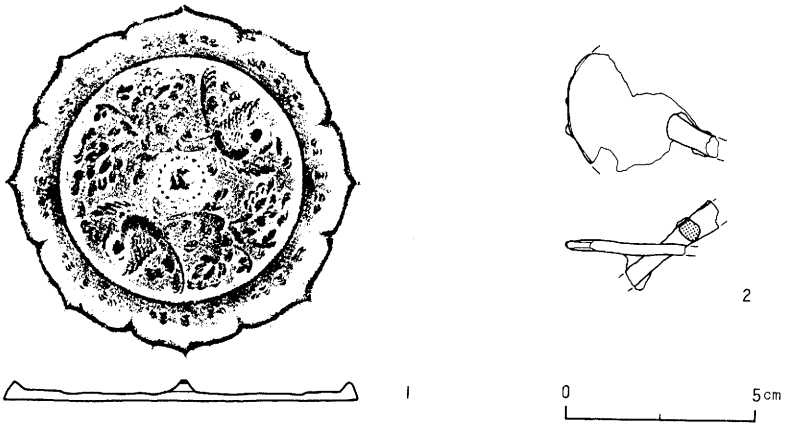
出土遺物（第110・111図）



第110図　溝2出土土器（1/3）

遺物の出土量は余り多くなく図示した灰釉陶器段皿（1～3）、灰釉陶器埦(4)、土師器坏（6～8）、鉄製紡錘車、瑞花双鳳八稜鏡が出土している。灰釉陶器段皿は底部回転糸切り処理のものが主体

である。土師器坏は焼成の悪いもので黒色手法により内面を処理するものは見られない。



第111図　溝2出土和鏡・鉄製品（½）

和鏡　1は直径9.4cmの八稜鏡である。縁は断面が三角形を呈し厚さ0.5cmである。外区部は厚さ0.25cm、内区部は厚さ0.15cmである、なお、外区径4.0cm、内区径3.1cm、鈕径0.7cmを計る。重量61gである。文様は花枝1双に1双の鳥を配したもので、鈕孔を横にした場合双鳥は斜状に対する位置に配されている。鳥は鳳と思われる。これらのことよりこの和鏡は瑞花双鳳八稜鏡かと思われる。鋳造は良く文様の不鮮明な部分などは見られない。また、全体形も整っており優品である。

鉄製品　2は紡錘車で心棒と糸車が残存している。欠損部が多く詳細な事は不明であるが糸車は推定直径8cm位のものであったと思われる。なお、心棒は曲がり糸車と斜状に付いている。

図	器種	法量	器形	手法	焼成及び胎土	残存	備考
1	灰釉陶器 段皿	13.5 2.5 高台径 7.5	体部は直線的に開く、高台は方形断面をなす、段部は鋭利に切り込まれている。	底部は回転糸切り後周縁をナデ。	焼成良好で堅緻、素地は緻密で色調は白灰色を呈す。	½	
2	灰釉陶器 段皿	15.2 2.4 高台径 7.2	体部は直線的に開く、高台は丸味をもつ、段部は鋭利に切り込まれている。	底部は回転糸切り。	焼成良好堅緻、素地は緻密で色調は白灰色を呈す。	½	
3	灰釉陶器 段皿	17.0 — —	体部中間を強く折り曲げて段皿とする。		焼成良好堅緻、素地は緻密で色調は白灰色、釉は淡緑色を呈す。	¼	
4	灰釉陶器 高台付 埦	16.1 5.3 高台径 8.0	体部は丸味をもち立ち上がり口唇部は外反する、高台は若干丸味をもち張る。	ロクロ成形、体部下半篦削り、底部回転篦削り。	焼成良好堅緻、素地は緻密で色調は白灰色、釉は淡緑色を呈す。	½	内面に重ね焼痕。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
5	灰釉陶器	— — 高台径 5.1	体部は丸味をもち立ち上がる高台は方形断面を呈する。	ロクロ成形、底部回転篦削り。	焼成良好、素地中に若干の砂粒含有、色調は白灰色を呈す。	底部 ⅓	
6	土師器 坏	16.6 5.3 8.2	体部は丸味をもち立ち上がり口唇部が若干外反する。	ロクロ成形。	焼成は良くなく軟質、胎土中に砂粒含有、色調は黄褐色を呈す。	⅔	
7	土師器 坏	10.9 4.0 4.6	体部は丸味をもち口唇部で若干外反する。	ロクロ成形、底部回転糸切り。	焼成は余り良くなく軟質、胎土中に砂粒を含有、色調黄褐色。	⅓	
8	土師器 坏	13.6 — —	体部はほぼ直線的に開き口唇が若干内反する。	ロクロ成形。	胎土中に砂粒含有で焼成軟質、色調黄褐色。	⅔	

溝3（第107図、図版30）

検出状況　本址はI区I－70グリッドに於いて検出されたもので、II区B－21グリッドを中心とした溝に於いて溝2と接続し用地外に延びる。

覆土は若干の炭化物を含む黒色土（第1層）で第1層堆積後に上層に砂質の層（第2層）が堆積する。

遺構の構造　本址はほぼ直線的に延びるものでII区B－21グリッドを中心に検出された溝で溝2と接続する。東・西共に用地外に延びている。溝の途中は堰により分断されている。検出された溝の長さ15.3m、幅2.7m、深さ28cmで長軸方向はS50°Eを向く。溝は地山礫層内を掘り込んでいる。溝の立ち上がりは西側が緩かで東側が直の立ち上がりになる。断面形はV状をなす。

遺物の出土状態　溝内より若干の土師器小片が出土しただけである。

溝4（第107図）

検出状況　本址はII区G－9グリッドを中心に広い範囲に渡り集石が検出され精査を進めるに従いII区G-105グリッドよりE－15グリッドまで続く集石を伴なう溝として確認された。西端は道路下となる為に調査できなかったが溝は延びるものと考えられる。

覆土は若干炭化物粒子を含む黒色土（第1層）の単一層で内部に礫を含むが、礫の大きさは溝2・3などと比較して割合一定性を持っており人頭大に近い礫が含まれる。

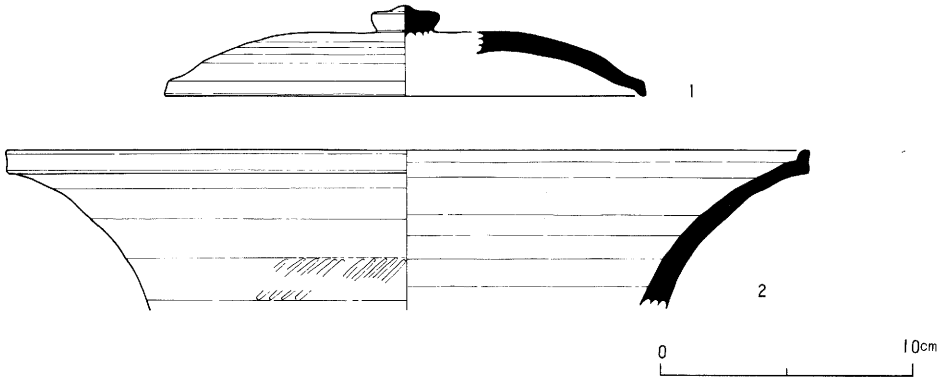
遺構の構造　本址はほぼ直線的に延びるものである。検出部分は長さ約38m、幅約2m、深さ約22cmで長軸方向はN75°Eを向き溝2と若干の蛇行する形だが一直線になるような様子を示す。また確認はできなかったがII区B－21グリッドを中心とした溝2・3の接続部と溝4は接続していたとも考えられる。溝は地山内に掘り込んでいる部分と黒色土層内に掘り込んでいる部分とに

分かれ、掘り方は緩やかな断面形がU字形を呈する。また溝の南側には河原様の礫が集中した範囲があり用地外に延びている。

遺物の出土状態　溝内よりの遺物の出土は第1層内より礫に混じった状態で少量出土している。また直接的に溝内より出土はしていないが、溝より約4 m北側に離れ30号住居址覆土上より八稜鏡が3面出土しており、溝2の例より類推するならば溝4と関わりをもつものとも考えられる。なお、溝4のレベルと八稜鏡の発見されたレベルとでは若干八稜鏡発見のレベルの方が低いが、竪穴住居址が埋没していく過程の窪地に鏡が置かれていたと解釈すると妥当ではないだろうか。

出土遺物（第112・113図）

出土遺物は少なく須恵器蓋、甕口縁部が出土しているだけである。なお、直接的に溝内より出土した訳ではないが八稜鏡が3面付近より出土しており、出土状態等を考慮した場合溝との関係も考えられ敢えてここで取り扱う。

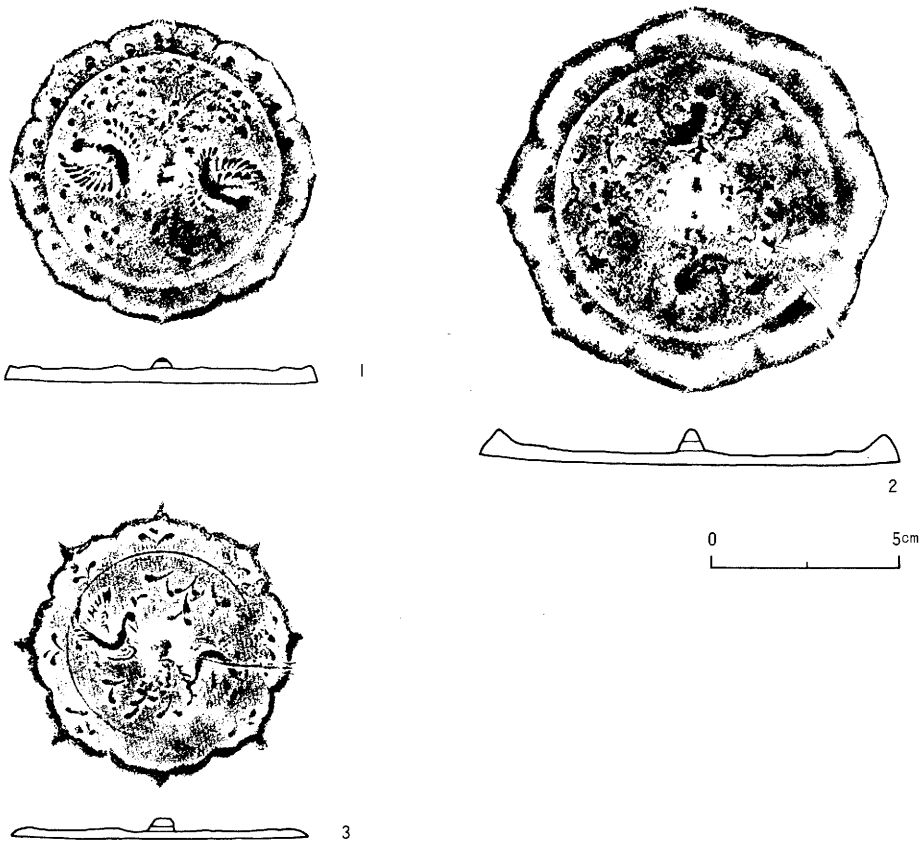


第112図　溝4出土土器（⅓）

1は須恵器蓋で全体のほぼ⅓を遺存する。器形は口唇部が若干外傾し天井部は9.8cmのほぼ平坦をなす。天井部中心に突起をもつ鈕が付く。ロクロ水挽き成形で内側に弱いナデ痕を残す。天井部は2段の回転篦削りが施される。焼成は良好で堅緻であり胎土は混入物の少ない緻密なもので色調は茶灰色を呈す。法量は口径19.0cm、器高3.6cm、鈕径2.7cmを計る。

2は須恵器甕の口縁部でほぼ⅓を遺存する。器形は口縁部が広く外反し口唇部が直に立ち上がる。外面は平行叩き目文工具により締められ内面は軽いナデ痕を残す。焼成は良好で堅緻である。胎土の色調は紫を帯びた灰色で表面は青灰色を呈する。法量は口径31.8cmを計る。

和鏡　1は直径8.3cmの八稜鏡である。縁は断面が三角形を呈し厚さ0.4cmである。外区部は厚さ0.4cm、径3.8cm、内区部厚さ0.3cm、径3.1cm、鈕径0.6cmを計る。重量101gである。文様は花枝1双に1双の鳥を配したもので、鈕孔を横にした場合双鳥は左右横に配されている。鳥は鸞または鳳かと思われ種類については明確にならない。これらのことより和鏡を瑞花双鳥八稜鏡としておく。鋳造は普通であるが、右下端の文様が不鮮明で踏返が行なわれているものと思われる。鏡の全体形は稜部が丸味をもつもので円形に近い形である。

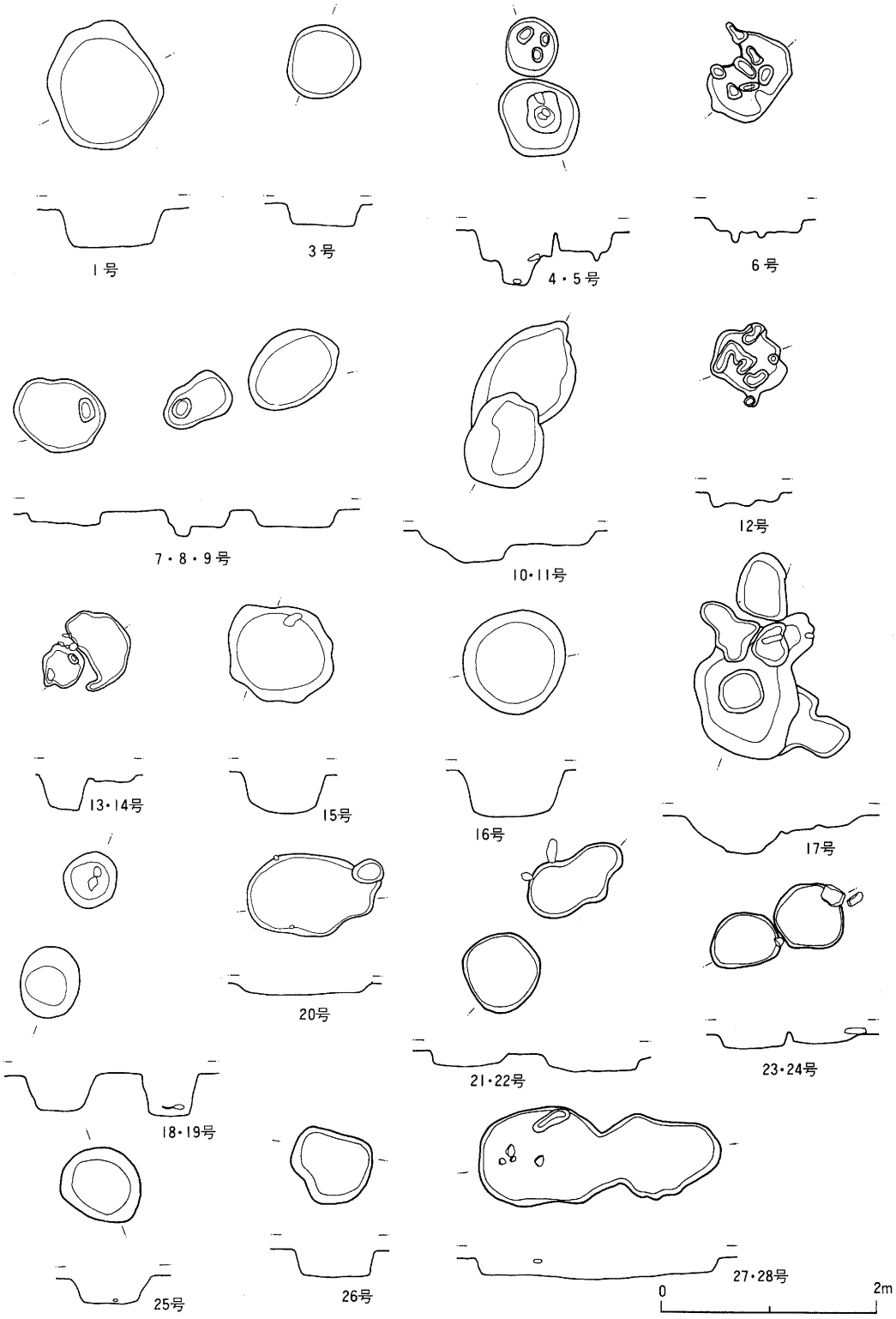


第113図　溝4出土和鏡（½）

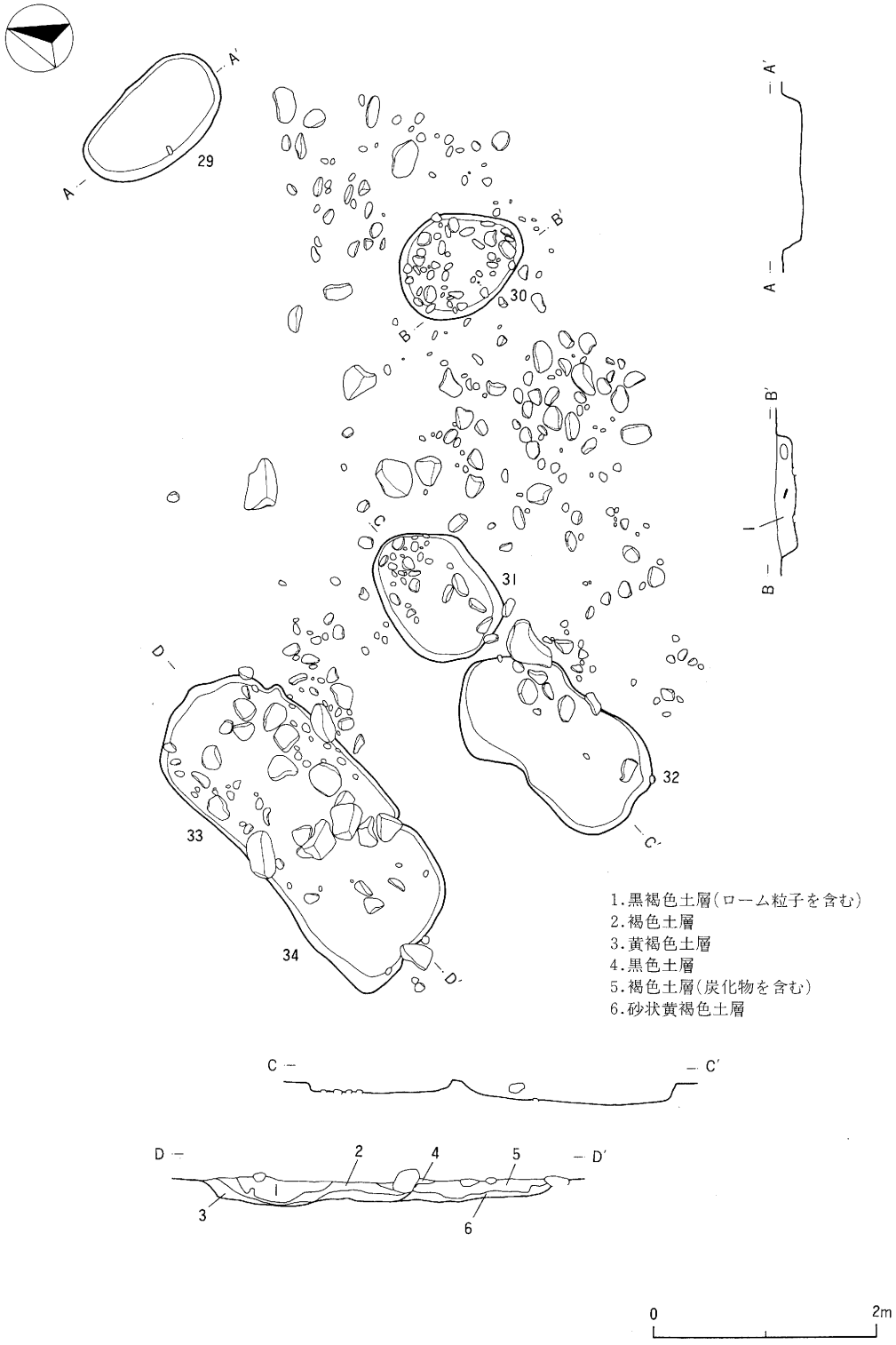
2は直径11.1cmの八稜鏡で全体形は稜、切り込みが若干丸味をもつものである。縁は断面が三角形を呈し厚さ0.7cmである。外区部は厚さ0.4cm、径4.1cm、内区部は厚さ0.3cm、径3.3cm、鈕径0.8cmを計る。重量154gである。文様は何回も踏返が行なわれたと思われ不鮮明である。なお、文様は花枝1双に1双の鳥を配したものであろうと推定される。このことより瑞花双鳥八稜鏡としておく。

3は直径7.8cmと出土した4面の八稜鏡の中で最も小さいものである。全体形は稜部が突出する形状を呈する。縁は丸味のある断面で厚さ0.3cmである。外区と内区の区分は円によってなされており他の3面のように厚さに差がなく0.2cmを呈する。文様は花枝1双と鳥1双で、鈕孔を横にした場合左右相対する位置に鳥が配される。文様は全体的に簡略化されており、右下端が踏返のためか一部が不鮮明となっている。名称は一応瑞花双鳥八稜鏡としておく。

これら3枚の鏡が載っていた板は現在長12.5cm、現在幅9.4cm、厚さ0.3cmのもので割り板状を呈している。板の上には麻糸と思われるもので編まれた蓆状のものを敷いている。



第114図　第1～28号土壙（1/60）



第115図　第29～34号土壙（1/60）

番　号	位　　置(区)	平面形	断面形	壁	床	口　径(m)	底　径(m)	深さ(m)	小穴	遺　物
1	I区B－1	不整円形	タライ状	直	水平	1.2×1.0	0.99×0.89	0.63		
3	C－1	〃	〃	外傾	〃	0.7×0.65	0.56×0.5	0.21		
4・5	D－1	〃	〃	〃	凹凸	0.81×0.72 0.55×0.5	0.7×0.63 0.47×0.34	0.52 0.22		
6	C－2	不整楕円	〃	〃	〃	0.9×0.65	0.76×0.6	0.1		
7・8・9	E-2・3	〃	皿　状	〃	水平	0.83×0.7 0.65×0.5	0.73×0.68 0.55×0.42	0.1 0.15		
10・11	D－4	不整円形	〃	〃	凹凸	0.95×0.65 1.2×0.8	0.85×0.58 0.96×0.71	0.17 0.21		
12	C－4	〃	〃	〃	〃	0.7×0.72	0.55×0.5	0.15		
13・14	B－5	〃	タライ状	〃	水平	0.43×0.41	0.38×0.32	0.34		
15	E－6	〃	〃	〃	〃	0.98×0.9	0.85×0.83	0.37		
16	E－5	〃	〃	〃	〃	1.0×0.97	0.76×0.75	0.43		
17	C-5・6	〃	〃	〃	凹凸	1.23×1.0	1.2×0.73	0.35		
18・19	B－9	〃	〃	〃	水平	0.68×0.58 0.55×0.53	0.4×0.35 0.41×0.42	0.4 0.38		
20	C－8	不整楕円	皿　状	〃	〃	1.31×0.8	1.15×0.7	0.11		
21・22	C－35	〃	〃	〃	〃	0.74×0.71 0.96×0.56	0.68×0.63 0.89×0.48	0.12 0.15		
23・24	C－34	不整円形	〃	〃	〃	0.65×0.55 0.68×0.67	0.58×0.56 0.59×0.6	0.14 0.1		
25	D－60	〃	タライ状	〃	〃	0.78×0.65	0.56×0.46	0.26		
26	D－61	〃	〃	〃	〃	0.78×0.74	0.65×0.55	0.27		
27・28	C-63・64	不整楕円	皿　状	〃	〃	2.21×0.81	2.11×0.79	0.18		
29	II区B－16	〃	〃	〃	〃	1.4×0.78	1.26×0.58	0.17		
30	D－30	〃	〃	〃	〃	1.17×0.93	1.03×0.81	0.16		
31	C・D-14	〃	〃	〃	〃	1.19×0.97	1.07×0.86	0.1		
32	D－14	〃	〃	〃	〃	1.92×1.04	1.76×0.91	0.15		
33・34	C・D-13	〃	〃	〃	〃	1.81×1.32 ×1.36		0.23 0.18		

土壙（第114図・第115図、図版31）

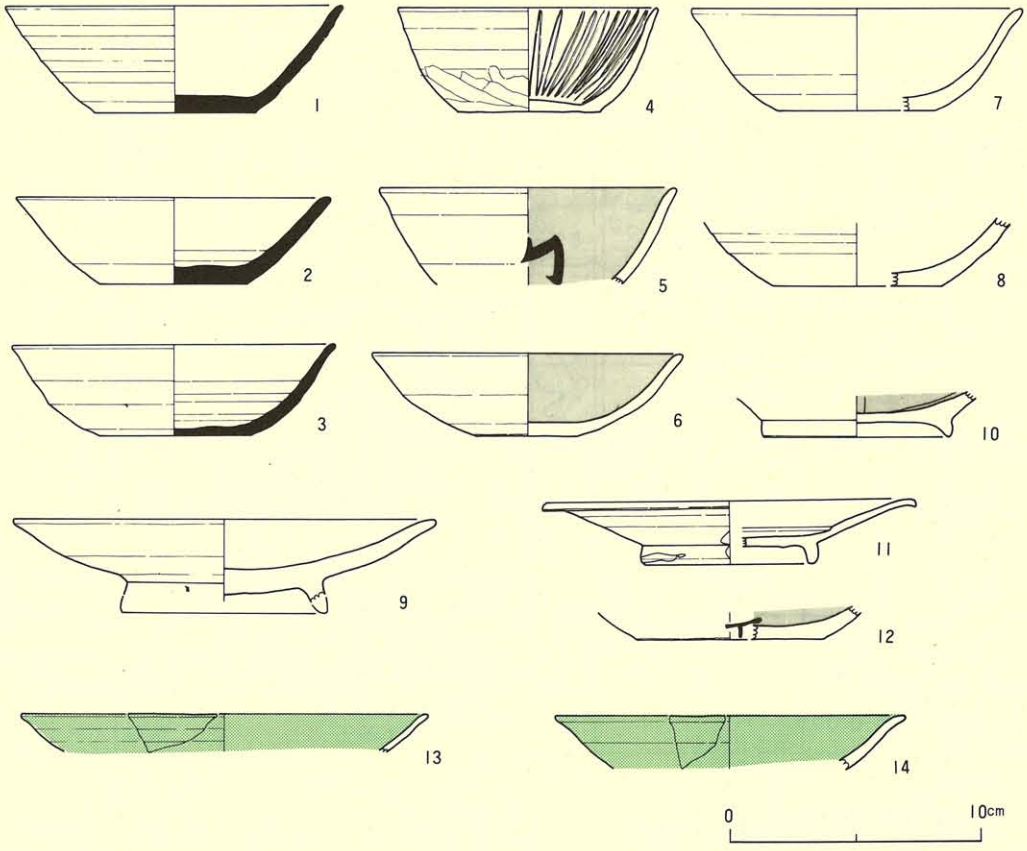
土壙は34箇所検出され、2号土壙を除き所属時期が不明なものである。土壙はその埋土が黒褐色土の単一層か、15・16号土壙のようにロームブロックを含有するものとに大別することが可能である。これらの土壙を平面形状より捉えるとほぼ二つに分類が可能である。I群は平面形が円形プランを呈するもの、II群は平面形が楕円形プランを呈するものである。これらI群・II群の土壙は深さによっても分類することが可能で、I群内には柱穴状のものも含まれている。これらの土壙は調査区の全域に分布するのではなく、ほぼ4箇所の範囲に集中する傾向が見られる。特に調査区の東側に於いてはその傾向を示していた。これらの土壙は直接的にその性格を示しているものはなかったが、I群の柱穴状のものは建築址等に関わるものの可能性もあるが、詳細については不明である。

遺構外出土遺物（第116図）

平安時代の遺物は土器を中心に調査区全域に渡り出土した。

土器（第116図）

土器は図示した土師器、黒色土器、須恵器、灰釉陶器、緑釉陶器があり供膳形態のものが全てである。なお、緑釉陶器は図示したものの他に３点小片が出土している。



第116図　遺構外出土土器（1/3）

図	器種	法量	器形	手法	焼成及び胎土	残存	備考
1	須恵器 坏	13.4 4.2 6.4	体部は底部より折れほぼ直線的に開く。	ロクロ水挽き、回転糸切り。	焼成良好堅緻、胎土は緻密で色調は青灰色。	1/3	
2	須恵器 坏	12.5 3.4 5.9	体部下半に若干丸味をもつがほぼ直線的に立ち上がる。	ロクロ水挽き、底部回転糸切り。	焼成良好堅緻、色調は青灰色を呈す。	1/3	

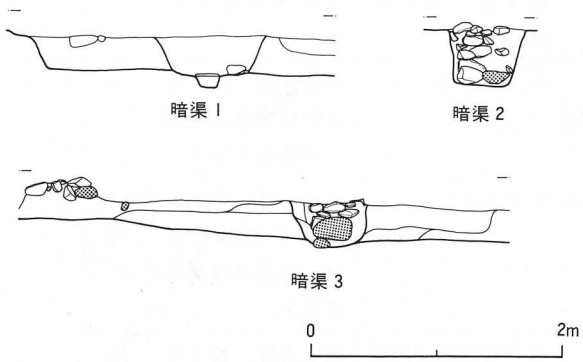
図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
3	須恵器 坏	12.9 3.6 5.9	体部は丸味をもち口縁部が若干外反する。	ロクロ水挽き、底部回転糸切り。	焼成良好堅緻、色調は青灰色を呈す。	⅓	
4	土師器 坏	10.3 4.1 5.6	体部は若干の丸味をもち立ち上がり口唇部が外反する。	ロクロ成形、体部下半を篦削り、底部は回転糸切り後周縁を篦削り、内部は放射状の暗文。	焼成良好堅緻、胎土中に混入物は見られず、色調は赤褐色を呈す。	⅔	「甲斐型」坏
5	土師器 坏	11.7 — —	体部は丸味をもち口唇部が若干外反する。	ロクロ成形、内面黒色手法を用い放射状研磨。	焼成良好、胎土中に混入物少ない、色調は白っぽい褐色を呈す。	⅓	体部に墨書。
6	土師器 坏	12.4 3.3 4.1	体部は丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、底部は回転糸切り、黒色手法で雑な研磨。	焼成普通、胎土中に砂粒含有、色調は暗赤褐色を呈す。	ほぼ完形	
7	土師器 坏	13.0 4.0 6.2	体部は丸味をもち立ち上がり口唇部が外反する。	ロクロ成形。	焼成普通、胎土中に砂粒含有、色調は橙褐色を呈す。	½	
8	土師器 坏	— — 6.7	体部は丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は暗褐色を呈す。	底部⅔	
9	土師器 高台付 皿	16.8 — —	体部は丸味をもち開き口唇部で若干外反する。	ロクロ成形で内面は良く研磨されている。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は暗赤褐色を呈す。	½	
10	土師器 高台付	— — 高台径 7.9	体部はほぼ直線的に開く、高台は若干内傾する。	ロクロ成形、内面黒色手法。	焼成良好、胎土中に若干の砂粒含有、色調は明褐色を呈す。	底部	
11	灰釉陶器 段皿	14.7 2.5 高台径 6.7	体部は直線的に開き口唇部で強く外反する、高台は内反する、段部は鋭利に切り込む。	ロクロ成形、底部は回転篦削り、高台は付高台。	焼成良好堅緻、釉は淡緑色を呈す、素地は白灰色を呈す。	½	重ね焼痕跡。
12	土師器 坏	— — 7.4	体部は丸味をもち立ち上がる。	ロクロ成形、底部は回転糸切り、内面は黒色手法。	焼成は普通、色調は白っぽい褐色を呈す。	底部¼	体部底部近くに墨書。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
13	緑釉陶器 坏	16.1 — —	体部は広く開き口縁が若干外反する。		焼成良好堅緻、釉は深緑色を呈す。素地は灰色を呈す。		
14	緑釉陶器 坏	13.9 — —	口縁部が強く外反する。		焼成は良くなく軟質、釉は淡緑色を呈す、素地は白褐色で土師質。		

第4節　中世・近世の遺構と遺物

中世の遺構については検出できなかったが陶磁器類を中心とした遺物が出土している。

近世においては現在の水田に伴なう遺構として暗渠が3基検出された。遺物も陶磁器類を中心に出土している。



第117図　暗渠遺構断面図（1/60）

暗渠1（第117図）

検出状況　本址は2号住居址内及び4号住居址内を切る形で構築されており、住居址確認作業に伴ない検出されたものである。

遺構の構造　本址は2号住居址、4号住居址を切り構築されている。ほぼ北より南に向かって作られておりN20°Eの方向を向く。溝は幅17cmで断面が逆台形状をなす。上部には幅20cm位の割板を渡している。溝内は空洞で調査時に於いてもなお水の流れが見られた。溝は耕作土内より幅85cmほどの掘り込みをローム層上面まで掘り込み、ローム層を掘り込む形で暗渠用の溝を構築している。そして、暗渠に蓋をした後掘り込みはローム塊を多量に含む黒色土で埋め戻している。所属時期は不明であるが、掘り込みが現在の水田耕作土下よりなされている事、現在でも暗渠に水の流れが見られる点などを考えると新しいものであると考えられる。

暗渠2（第117図）

検出状況　本址は20号住居址を調査するに伴ない検出されたものである。

遺構の構造　本址は20号住居址、21号住居址を切った形で構築されている。長軸方向はN41°Eを向く。溝は幅50cm、深さ53cmで内部に20cm～8cmほどの河原礫を充塡している。溝内への石の入れ方は不規則で一定性がないようである。暗渠内には酸化鉄沈澱が著しかった。所属時期を

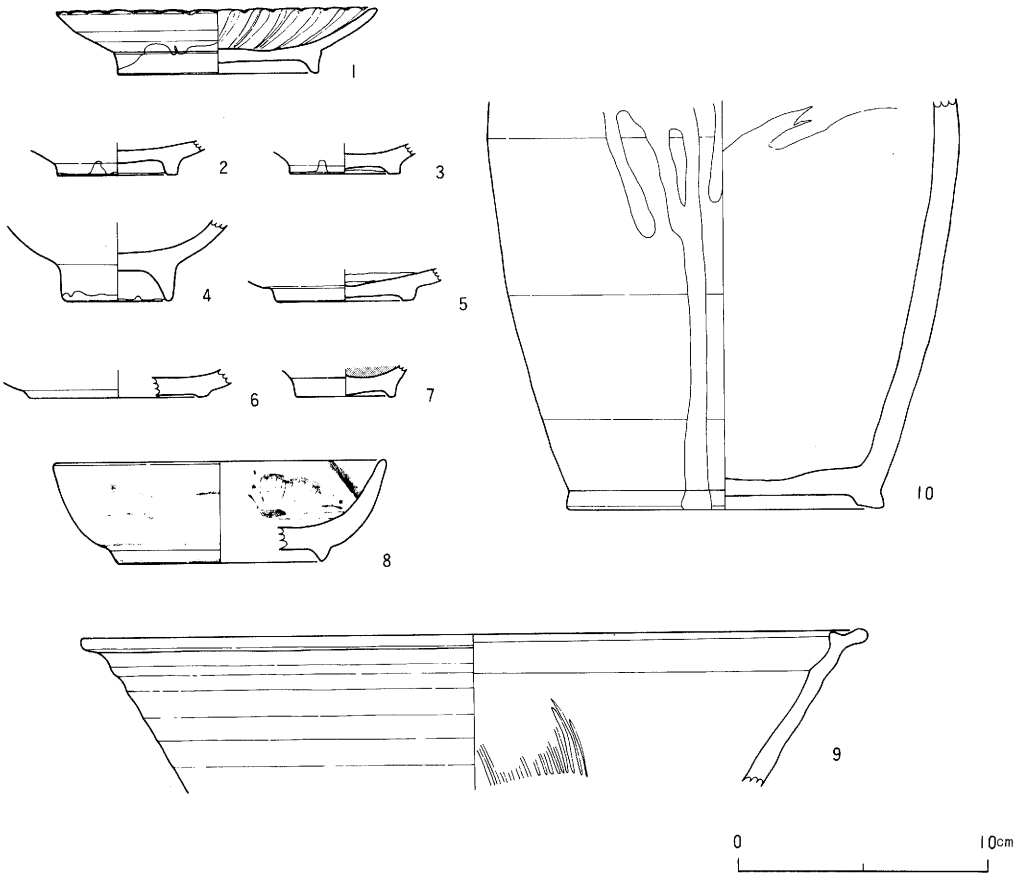
直接示すものはないが、耕作者等の話によると明治時代に構築されたもののようである。

暗渠3（第117図）

検出状況　本址はⅠ区D－46グリッドに於いて検出されたものである。

遺構の構造　本址は長軸方向はN50°Eを向き、溝は幅60cm、深さ35cmである。溝内部は30cm～8cmほどの河原礫を充塡している。石の入れ方はある程度の一定性を持ち、石の平坦面を重ねるような形で構築している。暗渠内には粘性の強い黒色土（第1層）が堆積している。所属時期ははっきりしないが、暗渠上面に蓋のような形で甕破片（第118図10）が遺存していた。

遺構外出土遺物（第118～120図）



第118図　遺構外出土土器（1/3）

中世・近世の遺物はそのほとんどが陶磁器類で器形のわからない細片が主体を占める。これらは遺構に伴なっている例はほとんどなく遺構外よりのものである。陶磁器の他に砥石・石臼が出

土している。

陶磁器（第118図）

中世から近世にわたる陶磁器類が今回の調査に於いて104点出土している。器形のわかるものは図示したものの10点で皿・埦・甕・擂鉢の器種のものが存在した。特にこの中で菊花皿の存在は注目したい。

破片類を分類すると瀬戸窯系皿・埦類45点、擂鉢５点、天目茶埦13点、青磁11点、白磁５点、染付皿・埦14点、不明11点であり、瀬戸窯系の陶磁器が主体を占める。

瀬戸窯系皿・埦、釉は淡緑色で貫入が入るものが主流で、素地は白味の強い灰色若しくは白色を呈し、緻密なものとそうでないものが存在する。

擂鉢は釉が茶色のもので堅緻なものと、若干軟質を呈するものの二者がある。櫛歯状の陰刻は部分的に施されるものと全面に施されるものに分けることができる。

青磁は半肉彫り状の蓮弁文を有するものが３点ある。釉の色調は青白色・黄色味を帯びた青緑を呈するものなどであり貫入の入ったものとそうでないものがある。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	菊花皿	12.7 2.5 高台径 7.9	体部はほぼ直線的に開き上半部で若干内に折れる、口唇部に刻み目を入れ内面体部に浅い凹部を入れ花弁を表現、高台はほぼ直に立つ。	ロクロ挽き、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は灰緑色で貫入が見られる、素地は白味の強い灰色を呈す。	½	瀬戸系？
2		— — 高台径 4.8	高台部は断面方形をなし畳付部は平坦。	ロクロ挽き、底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は灰緑色で貫入が見られる、素地は白味の強い灰色を呈す。	底部	瀬戸系？
3		— — 高台径 4.4	高台部は断面方形をなし畳付部は平坦。	底部は回転篦削り。	焼成良好堅緻、釉は白緑色で貫入が見られる、素地は白灰色。	底部	瀬戸系？
4		— — 高台径 4.4	高台部は断面が三角形に近い。		焼成良好堅緻、釉は灰緑色で貫入が見られる、素地は白灰色。	底部	
5		— — 高台径 5.4	高台部断面方形をなし畳付部は平坦。		焼成良好、釉白黄色を呈し貫入がある、素地は白色を呈す。	底部 ½	

図	器　種	法　量	器　　形	器　　形	焼成及び胎土	残存	備　考
6		— — 高台径 7.0	高台部は断面方形をなし畳付部は平坦	高台は削り出しによるもの。	焼成良好堅緻、釉は黄白色を呈し貫入がある、素地は白色。	底部 1/3	
7	天目	— — 高台径 4.0	高台は方形断面をなし畳付部は平坦。	高台は削り出しによるもの。	焼成良好堅緻、釉は黒茶色を呈す、素地は白色を呈す。	底部	
8	染付 高台付 皿	13.2 4.0 高台径 8.1	体部は丸味をもち立ち上がる、高台は三角形断面をなす。		焼成良好堅緻、釉は淡い青味を帯びたもの、素地は淡い灰色を帯びる。	1/3	内部に松葉文様染付、外面は腰部と高台部に2本の直線、体部に唐草文様。
9	擂鉢	31.2 — —	体部はほぼ直線的に開き口唇が強く外反する。		焼成良好、釉はこげ茶を呈す、素地は白灰色を呈す。	1/5	櫛歯状の陰刻は部分的に付けられる。
10	甕	— — 高台径12.7	胴部は若干の丸味をもちほぼ直線的に開く、高台部は外に開く、畳付部は内傾する。	底部は回転箆削りで高台は貼り付けによる。	焼成良好堅緻、釉は淡緑色を呈す、素地は白灰色を呈す。	2/3	

染付陶磁器は染付部の色調が淡い青色を呈するものと、コバルトブルーを呈するものに分かれる。素地は全て緻密で硬質である。時期的には新しいものが主体を占めるようである。

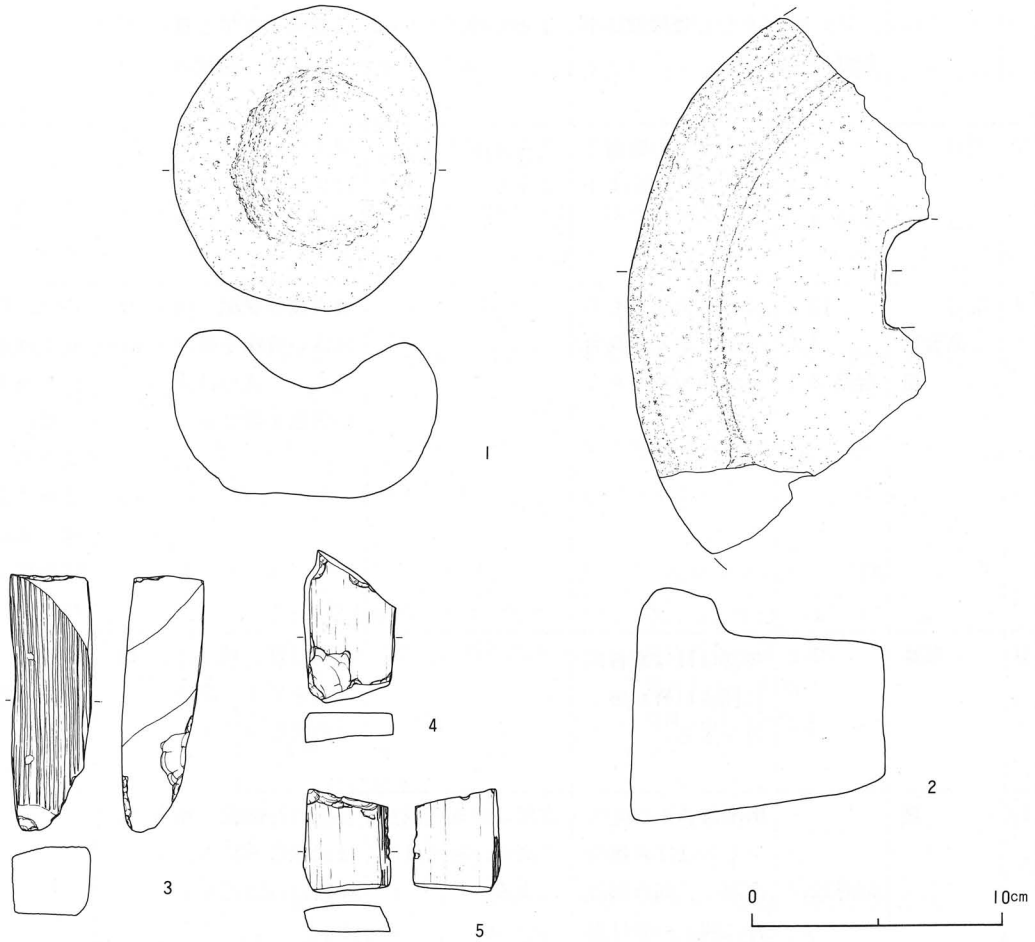
以上中世・近世の陶磁器について述べてきたがこれらの出土分布を見た場合、調査のほぼ全域より散布した形で出土しているが、相対的にみてⅠ区D－55～58、E－55～58グリッドが他より若干破片が集中する傾向を示した。

石製品（第119図）

石製品は石臼と砥石が出土している。

石臼　1は安山岩円礫のほぼ中央部に深い円形の凹み部を作ったもので内面に磨痕が残る。2は上臼の1/4片で溝部はスレが激しく判明しなかった。

砥石　形状的に分類し鰹節状のもの(3)と長方形状のものとに分かれる。3の使用面には粗研ぎ



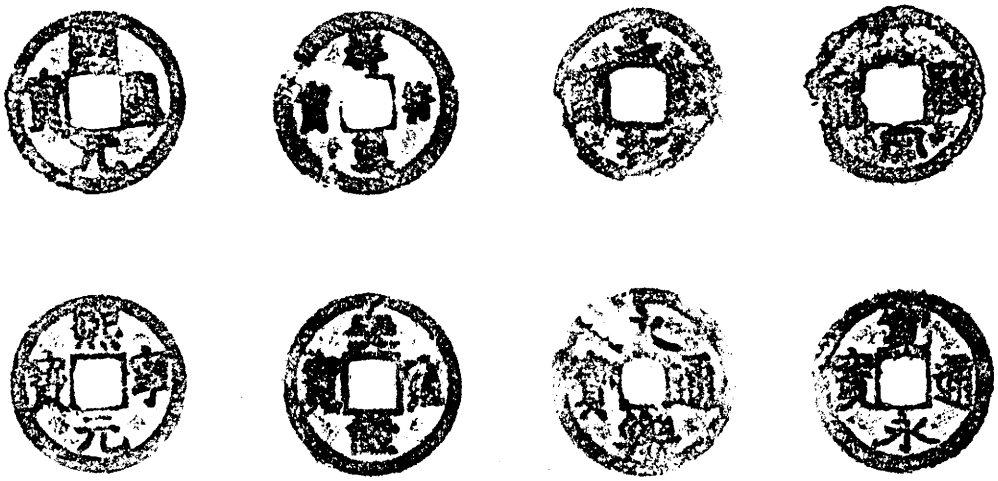
第119図　遺構外出土石製品（⅓）

の面と滑らかな面があり、粗研ぎ面には縦方向の使用痕が残る。４、５は長方形をなすものである。５は側面が粗研ぎ面となっている。

古銭（第120図）

古銭は開元通寶より寛永通寶まで９枚が出土した。これを種類別に分類すると、開元通寶１、祥符通寶１、景祐元寶１、景祐通寶１、皇宋通寶１、熙寧元寶１、永楽通寶１、寛永通寶１、不明１である。景祐元寶、皇宋通寶は篆書体によるものである。

これらの出土分布であるが開元通寶から皇宋通寶までは、Ⅰ区Ｈ－38、Ⅰ－38、Ｇ－43、Ｄ－46グリッドと割合集中した範囲より出土している。



第120図　遺構外出土古銭（1/1）

第５節　構井遺跡の遺構と遺物

弥生時代の遺構は住居址を１軒検出したに過ぎない。

第３号住居址（第121図、図版32）

検出状況　試掘調査の結果に基き、地番967－１に調査区を設定したグリットE—7の範囲より黒色土の落ち込みが確認されプラン検出に努めた。住居址は2/3が用地外にあり、調査はできなかったが、北側コーナー部の確認よりプランは推定し得た。

覆土は黒色土層の単一層で、壁際に三角堆土状に黄褐色土が堆積し自然堆積を思わせた。

遺構の構造　本址は全体の2/3ほどを用地外に当るために住居址規模については不明であるが、確認された北側コーナーより推定すると隅丸長方形又は方形のプランを呈する住居址であると思われる。残存壁高は約30cmほどで、砂質状のローム層内に若干の傾斜をもちしっかりとした掘り方をもっている。主柱穴はP_1、P_2が検出され、これらより考えると４本柱又は６本柱の構造を持つものかと考えられる。柱穴の深さはP_1が約50cm、P_2が約40cmで、P_1は斜状を呈する形で掘り込まれている。床面は全体的に堅緻でほぼ水平に構築されている。炉址はP_1の右側に埋甕炉が遺存していた。埋甕炉はその約1/2が用地外に位置しており、掘り等の平面プランは確認できなかったが、直径40cm程度の不整円形を呈するものかと考えられる。埋甕炉に使用されている土器は、底部を２つ入れ子状にしたもので、外側のものは加熱のためか剝落等が著しかった。なお、内部には焼土の堆積は見られなかった。掘り方内に、径14cm程度の石が１つ検出された。

遺物の出土状態　出土した遺物は割合少なく覆土内より若干の土器片、横刃型石器が出土し

た。

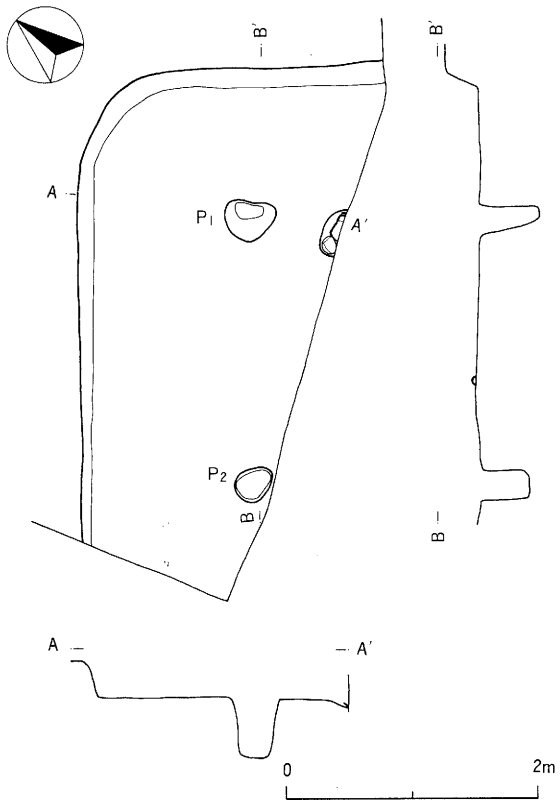
出土遺物（第122図）

遺物の出土量は割合少なく小片が主体で、図示できるものは埋甕炉に使用されていた土器を含めて2点だけであり、器形が判り得るものは少ないが、壺・甕の器種があったものと思われる。

1は、口唇部が外側に折り曲げられ外反するもので厚味をもつ。頸部は若干、外反する形をとるが、ほぼ直に立つもので壺形を呈すと考えられる。施文はハケ整形が行なわれた後、頸部付近に櫛状工具により平行条線が施文されるものである。

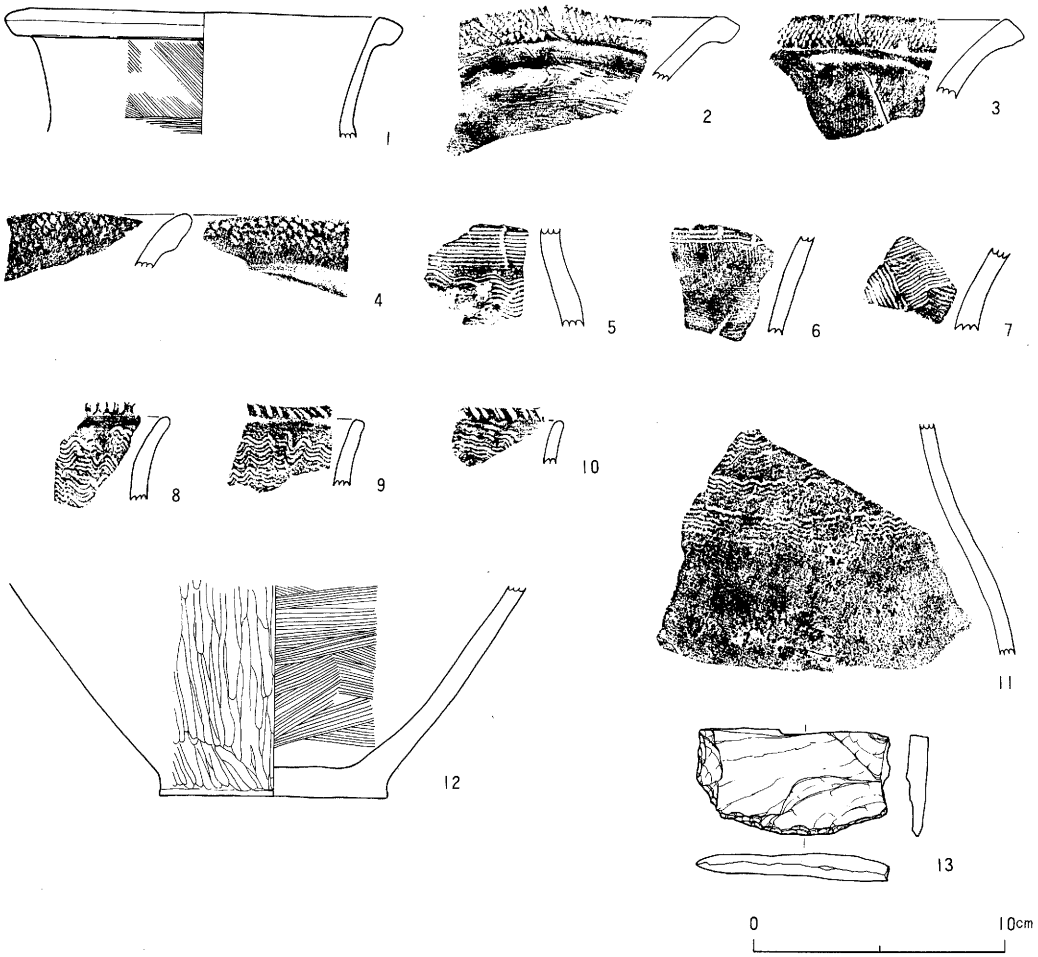
2～4は、口縁部が大きく開き口唇部が折り返される器形をなすもので、折り返された口唇部に縄文が施文される。4は内面にも縄文が施文されている。

5、6は簾状文を施文するもので、8～10は口唇部に刻目をもつ。12は、埋甕炉で内側に入っていたものである。器形は底部際で折れ、胴部が若干の丸味をもち立ち上るもので、甕形土器の底部かと思われる。整形は外面が縦方向の箆磨きにより、内面は横位の刷毛ナデによる。



第121図　第3号住居址（1/60）

石器（第122図）　13は横刃形石器である。粘板岩の半円形状の剝片を素材としており、側縁は折り取った様な剝離がなされている。背部は厚く断面が三角形を呈する。刃部は外彎する形をとり、細かな剝離がなされている。



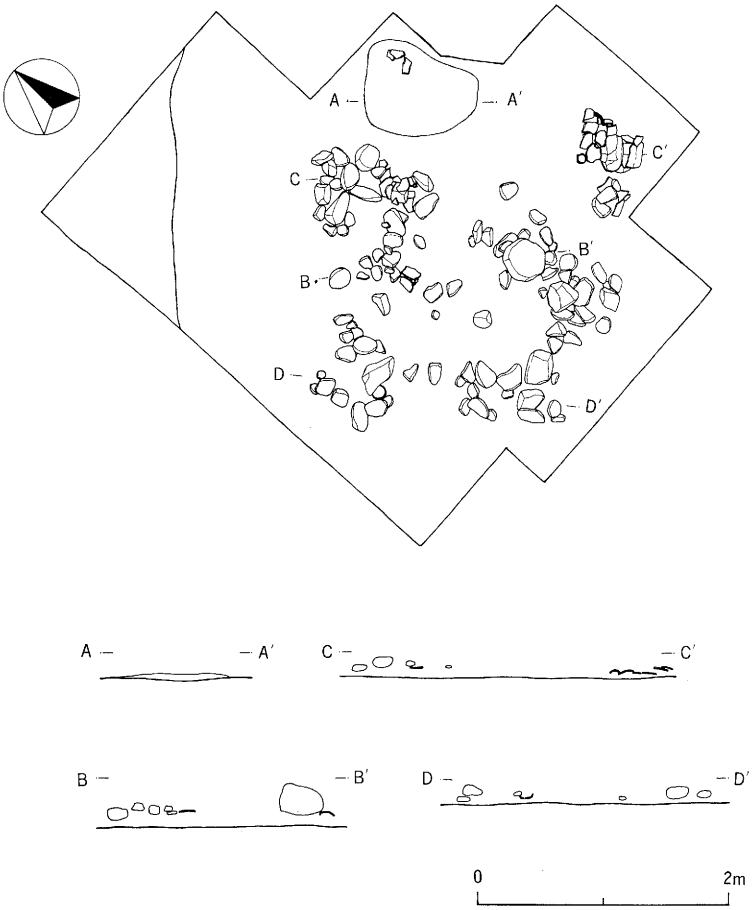
第122図　第３号住居址出土土器・石器（1/3）

第４号住居址（第123図、図版32）

検出状況　本址は試掘を行なった際に、確認されたものである。なお、遺構のプラン等については攪乱が激しく確認できなかった。

遺構の構造　住居址のプランは攪乱等により確認できず、調査範囲も建造物等の関係より拡張ができず、明確に本址の構造を捉えることはできなかった。床面は硬い範囲が散在する礫周辺を中心に見られた。床面上に焼土混りの褐色土の堆積する所から見られた。柱穴・周溝等の検出に努めたが、検出されなかった。

遺物の出土状態　遺物は、床面土より約10cmほどの位置に散在する礫と一緒に出土した。多



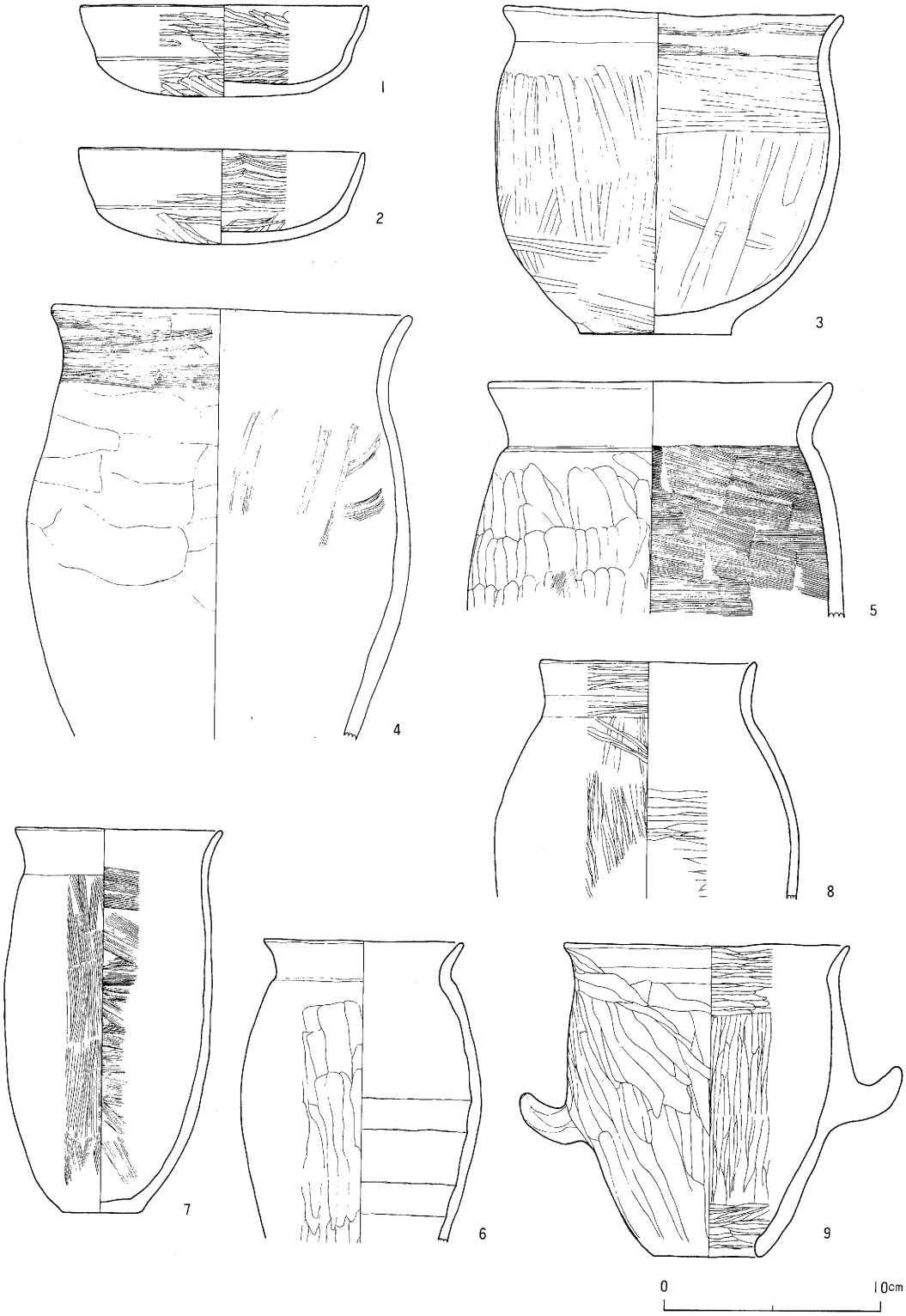
第123図　第4号住居址（1/60）

くのものが礫に潰された様な状態で出土し、土器の上に礫がのっている状態を示すものもあった。これらの状況より考えると、礫は土器と一緒、又は土器を廃棄後投げ込んでいるものと考えられる。

出土遺物（第124図）

本址よりの出土遺物は、図示した土師器類が全てで、坏・小形甕・長胴甕・甑の種類のもので煮沸・貯蔵形態の土器が主体を占める。

図	器　種	法　量	器　　形	手　　法	焼成及び胎土	残存	備　考
1	土師器 坏	13.2 4.2 10.7	底部より丸味を持ち立ち上がり体部中央で若干張り稜をなす、口縁は内彎する。	内外面共に篦磨きされている、体部は横位底部は斜状。	焼成良好堅緻、胎土も密である、色調は赤褐色を呈す。	完形	

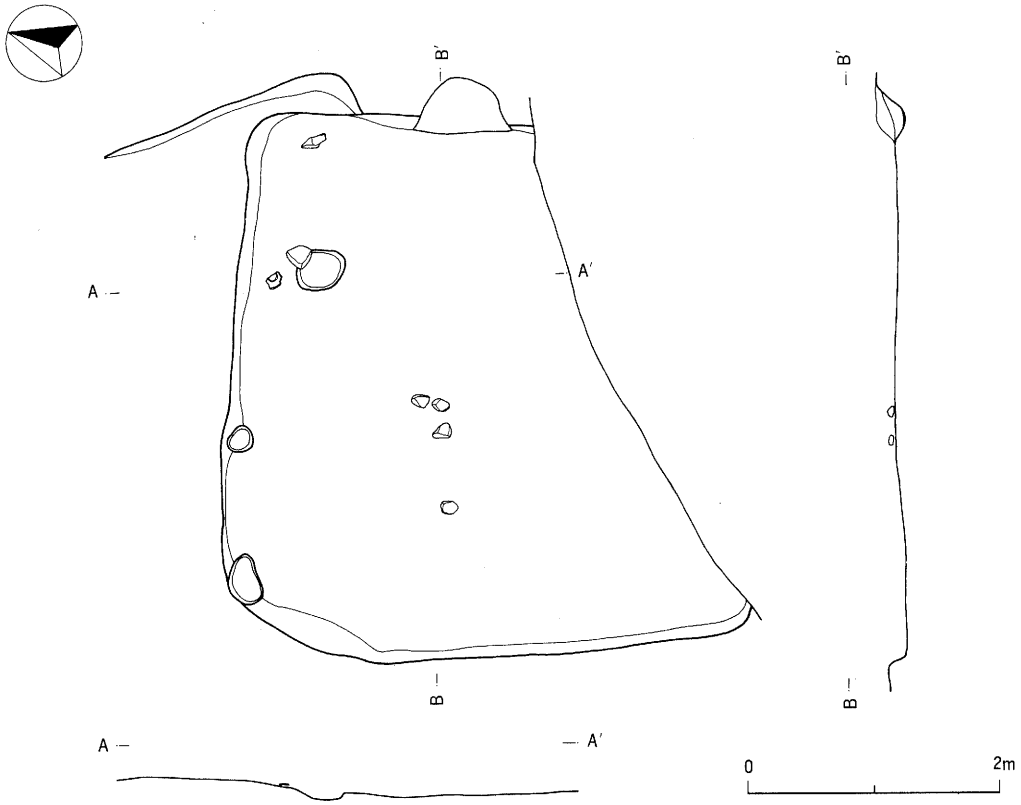


第124図　第４号住居址出土土器（１～５は⅓、６～９は⅙）

図	器種	法量	器形	手法	焼成及び胎土	残存	備考
2	土師器 坏	13.2 4.4 11.2	底部は丸味を持ち体部で稜をなし口縁部は若干内彎する。	内外面共に箆磨きで内面は弧状に研磨される。	焼成良好堅緻、胎土も緻密、色調は赤褐色を呈す。	⅓	
3	土師器 小形甕	15.5 14.8 7.0	胴部は丸味をもち球状に脹む、口縁は「く」字形に外反する。器形にゆがみがある。	内外面共に箆ナデされている、内部口縁は横位の刷毛ナデ。	焼成普通、胎土中には若干の雲母を含有、色調は明褐色。	ほぼ完形	
4	土師器 甕	15.8 — —	口縁部は強く「く」字形に外反し肩部に稜を有する。	胴部外面は指頭による縦方向のナデで凹凸が残る、内面は横位の刷毛ナデ。	焼成は普通、胎土中に若干の雲母を含有、色調は明褐色を呈す。	口縁部⅔	
5	土師器 甕	16.5 — —	口縁部はゆるやかに外反し胴部が若干の脹みをもつ。	胴部は横位の指頭ナデ、口縁部は横位の刷毛ナデ。	焼成は普通、胎土中に若干の雲母・石英粒を含有する。	¾	
6	土師器 甕	18.5 — —	口縁部はゆるやかに外反し「く」字形を呈す肩部に弱い稜を持つ。	胴部外面は縦方向の指頭ナデ、口縁部に軽い刷毛ナデ。	焼成普通、胎土中に若干の雲母含有、色調は明褐色を呈する。	胴部完形	輪積み痕を残す。
7	土師器 甕	19.2 35.4 7.4	口縁部はゆるやかに外反し「く」字形を呈す、肩部は若干の稜をもつ。	胴部外面は縦方向の刷毛ナデ、内面は横位の軽い刷毛ナデ。	焼成良好、胎土中に長石・石英粒含有。	完形	
8	土師器 甕	20.0 — —	口縁部はほぼ直線的に立ち上がる、胴部は中央で脹みをもつ。	胴部内外面共に箆研きされ、口縁部外面は横位の箆磨きが丹念である。	焼成・胎土共に良好で色調は赤褐色を呈す。	胴部	
9	土師器 甑	26.4 28.8 10.0	口縁部は外反し弱い「く」字形を呈する、胴部は若干の丸味をもち下半に把手をもつ。	胴部は斜状の箆削りが施され、内面は口縁部が横位、胴部が縦位、底部が横位の顕著な箆磨きが施される。	焼成は堅緻で胎土も緻密、色調は赤褐色を呈する。	完形	

平安時代の遺構は住居址を１軒確認したに過ぎない。

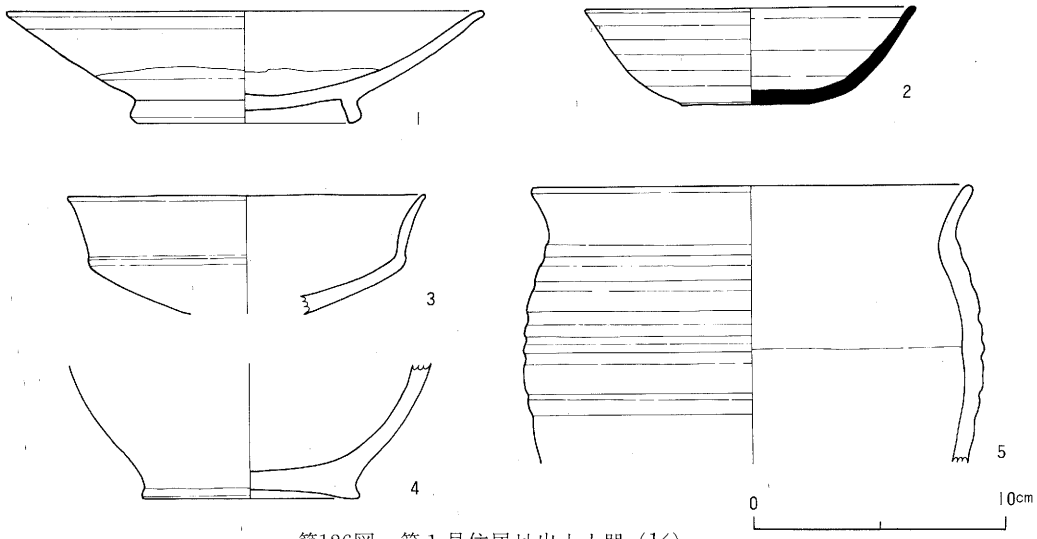
第１号住居址（第125図、図版31）



第125図　第１号住居址（1/60）

検出状況　本址はP－7グリッドを中心に黒色土層の落ち込みが確認され、その存在が明らかとなったものである。約1/3が道路により切られていたが、北・西・南側コーナーよりプランは確認し得た。覆土は攪乱が激しく、土層状態の観察はでき得なかった。なお、２号住居址を切っている状態にある。

遺構の構造　本址は東壁ほぼ中央部にカマドを持つ。4.3×4.1ｍの隅丸方形プランの住居址であると思われる。残存壁高は攪乱のために不明確であったが、西側では15cmを計った。柱穴は、西側コーナー部に径40cm、深さ26cmの不整円形を呈するピットが検出された。位置等より考えて、住居址の隅柱かと考えられる。床面は攪乱されているためか凹凸が見られる箇所がある。全体的に床面は軟弱である。カマドは東壁ほぼ中央部に設けられている。石組み等は見られず、カマドの断面等より粘土カマドであると考えられる。カマドは壁を75cm幅でＵ字形に41cm切込み、床面を不整形に８cm掘り込んでいる。カマド内には、焼土粒を含む褐色土が堆積し、底には薄く焼土が見られた。



第126図　第１号住居址出土土器（⅓）

遺物の出土状態　出土した遺物は割合少なく、覆土内より若干の土器片が出土した。また、灰釉陶器埦が床面直上より出土している。

出土遺物（第126図）

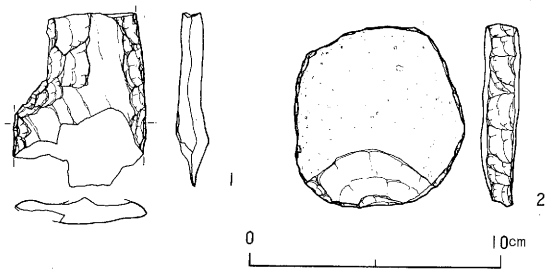
本址よりの出土遺物は、図示した灰釉陶器埦、須恵器坏、土師器甕等である。土師器坏は形状等より考えて、他からの混入かと思われる。

１は灰釉陶器皿で口径18.7cm、器高4.4cm、底径8.6cmを計るものである。器形は体部が若干の丸味をもつもので、高台部は若干内外する。底部は回転篦削りにより調整される。焼成、胎土共に良好である。

２は須恵器の坏で口径13.2cm、器高3.9cm、底径5.1cmを計る。器形は体部に丸味をもち口縁部が若干外反する。ロクロ水挽き成形で、底部は回転糸切りによる。胎土、焼成共に良好で色調は青灰色を呈す。

３は本址に伴なうものではないと思われる。器形は底部が丸味をもつもので体部中程で稜をもち口縁部が外反する。整形は横方向の篦磨きが施される。焼成も良好で堅緻。

４、５は甕の破片で４は軽い刷毛ナデ整形がされ、５は篦状工具により整形されている。５の器形は口縁部がなるい「く」字形を呈する。



第127図　遺構外出土石器（⅓）

遺構外出土石器（第127図）

１は粘板岩製の打製石斧で、刃部及び基部を欠損する。２は安山岩製の石製円盤である。板状の素材周辺に加工を施し円盤とする。

第Ⅴ章　調査の成果と課題

第1節　縄文時代中期後半の集落について

今回の調査区域に於いて3軒の縄文中期後半の住居址が検出された。住居址内より出土した土器より見ると曽利Ⅱ式期～曽利Ⅲ式期に渡るもので、この時期この沖積地が居住の場として利用されていたことを伺わせている。

住居址それぞれは出土した土器よりみて若干の時間差が有るように考えられ、同時に住居址が存在したものではなく、同一集落を構成した住居址として捉えることはできなかった。

調査区域が道路敷地内に限定されているために中期後半の遺構の広がりの把握には至らなかった。

(1)　竪穴住居址について

検出された3軒の住居址を各要素にまとめると次のようになる。

住居址プラン　住居址コーナーが丸味をもつ隅丸方形プランが基本で1号住居址、20号住居址がこれに当たる。18号住居址はコーナー部が明確でないもので、円形に近いプランを呈する。各住居址の規模は、1号住居址5.5m×5.3m、18号住居址6.6m×5.3m、20号住居址3.7m×3.6mで20号住居址は他の2軒と比較して非常に小規模なものである。20号住居址のような小型の住居址は集落内に於いて数軒存在するようであり、与助尾根[(1)]、与助尾根南遺跡[(2)]などに同規模な住居址が報告されている。(註1)

住居址の主軸方向　1号住居址N34°E、20号住居址N41°Wであり若干南より西に偏向した位置に入口があったと捉えることができよう。18号住居址については弥生時代の住居址により切られているために確認はできなかったが、恐らく1号住居址と同様の方向を向くものと考えられる。

住居址に設備された施設　炉址、埋甕を施設として上げることができる。炉址は各住居址に一箇所中央よりやや奥に寄った位置にあるものが主体である。炉址の掘り方は不整円形を呈するものが主体で、1号住居址のものはしっかりした掘り方を持っている。炉石はその一部またはそのほとんどが抜き去られているもので、内部に焼土の堆積が見られない。これらのことより住居址廃棄の際に炉址内に堆積する焼土を掻き出し持ち去っているものと推定でき得る。埋甕は1号住居址に2点埋設されていた。埋設位置は住居址の入口部と思われる位置で、周溝よりも住居内に入った位置である。埋甕は2点共正位の状態で埋設され1点のものには石蓋を有していた。石蓋を有するものは完形で他の一方は胴部下半を欠損している。この埋甕の新旧関係については確認することができなかったが、両方共曽利Ⅲ式に属するものである。

このように今回調査された区域より検出された縄文時代中期後半の住居址は規模、構造等に於いて他の同時期の遺跡に見られる住居址と大差なく普遍的なものとして捉えることができよう。そのような中にあって1号住居址を出土品より見た場合三角壔形土製品と云う出土例の少ない遺物が出土しており、住居址の持っていた性格が若干他のものとは異なっていたと想像し得る。

(2) 集落立地について

今回調査された住居址はそれぞれ若干の時間差を持ち同一集落のものとして捉えることはできなかった。しかし、調査が道路と云う限定された細長い範囲のものだったために集落を構成する住居址群を把握することができなかったが、調査区外に存在する可能性は充分にある。

検出された住居址は調査区東側に集まり散在する形をとり重複関係は持たず、住居址の密度は疎の状態である。このような状態が生じた原因として、集落立地選択を自由に行なえる地形だったため、居住の場として不適当な地であったため等多くのことが考えられるが、周辺には遺跡の立地地形が異なる遺跡が数箇所ありそのような遺跡との関わりを考え合わせる必要があろう。

註1　このような小型住居址に類似するもので、炉の設備の無い柱穴配置の不規則な小型住居址を基本として宮沢恒之氏[(3)]は「作業小屋」「女性小屋」の性格を与えている。

註(1)　宮坂英弐　1957　『尖石』　茅野町教育委員会

註(2)　宮坂虎次・他　1980　『与助尾根南遺跡』　茅野市教育委員会

註(3)　宮沢恒之　1974　「竪穴状遺構の性格」―縄文時代中期にみられる一・二の事例―『長野県考古学会誌』　第19・20号

第2節　弥生時代後期の集落について

今回の調査に於いて12軒の弥生時代の住居址が検出された。これらは全て後期に属するものである。住居址内より出土している土器が少ないために、住居址の時期的細分は難しく捉えることができなかった。

(1) 竪穴住居址について

検出された12軒の住居址を各要素よりまとめると次のようになる。

これらを住居址の平面プランより見ると長楕円形を呈するもの（4号住居址、12号住居址、23号

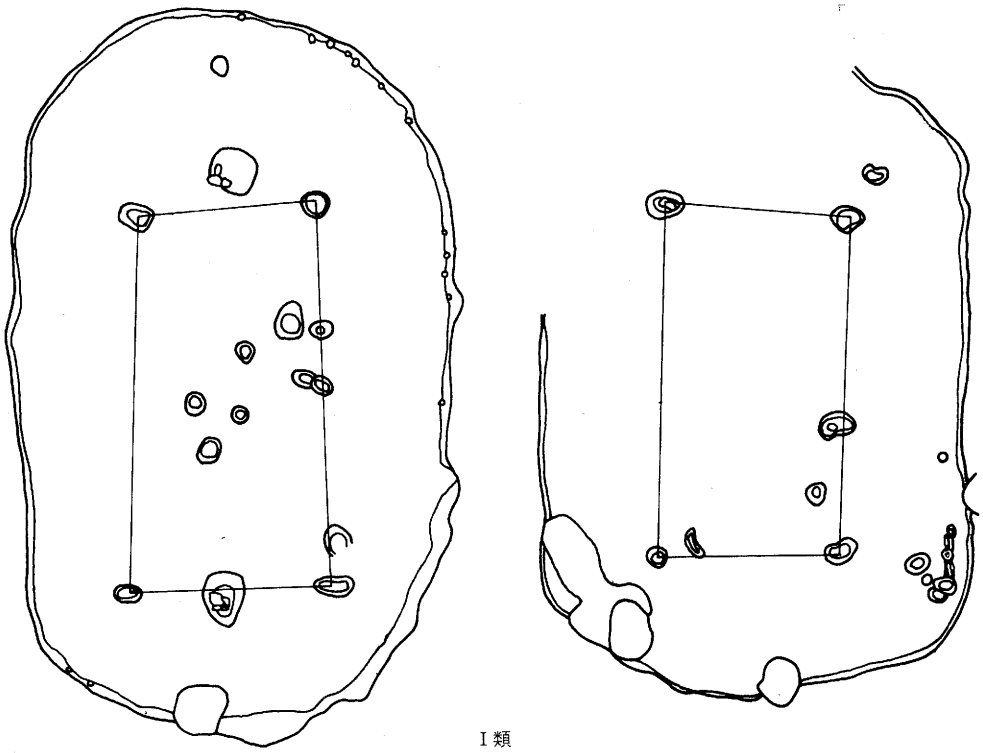
弥生住居址

住居址	形　状	規　模		主軸方向	炉		備　考
		長径×短径m	面　積m²		位　置	素　材	
4　住	長楕円	9.6×4.9	47.04	N31°W	(——)	地床炉	
8　住	隅丸方形	(——)	(——)	(——)	(——)	埋甕炉	
12　住	長楕円	7.6×5.6	42.56	N29°E	(——)		
15　住		(——)	(——)	(——)	(——)		
16　住	隅丸方形	6.5×(4.8)	31.20	N51°E	(——)	地床炉	
19　住	〃	(——)	(——)	N57°E	(——)	埋甕炉	
23　住	長楕円	×3.8	(——)	N13°W	(——)		
24　住	〃	×4.6	(——)	N34°E	(——)	地床炉	
25　住	〃	(——)	(——)	N48°E	(——)	地床炉	
26　住	隅丸方形	(——)	(——)	N47°E	(——)		
36　住	〃	7.1×5.7	40.47	(——)	(——)		
37　住	〃	(——)	(——)	(——)	(——)		

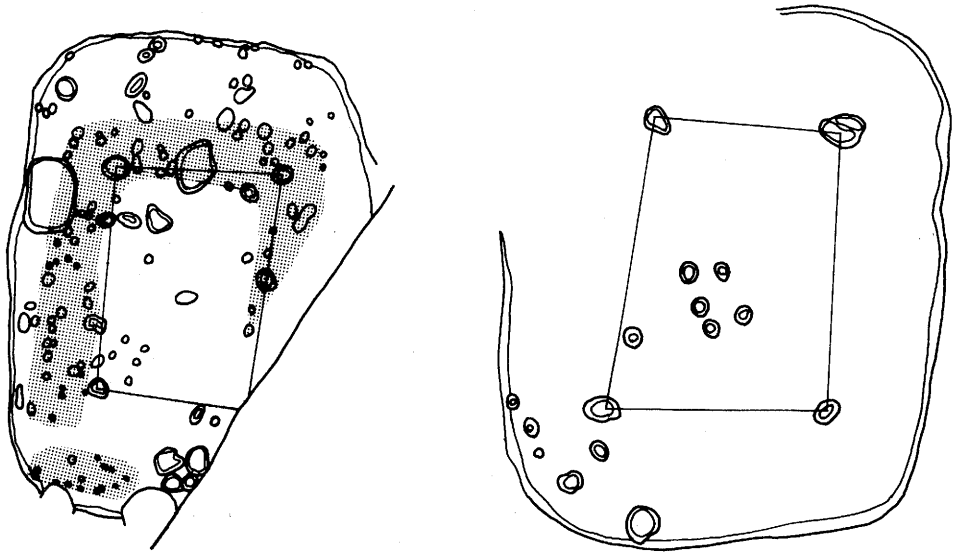
住居址、24号住居址）Ⅰ類と、隅丸長方形を呈するもの（16号住居址、19号住居址、26号住居址、36号住居址）Ⅱ類に分類することができる。これらは大きさにより大型のものと小型のものに分けられるが、Ⅰ類の場合長軸が9.6mを呈するもの（4号住居址）が最大であり長軸と短軸の比率は約2：1である。小型のものは23号住居址で長軸は住居址の半分が用地外に当たるために不明であるが、短軸については3.8mと他のものが4～5m位のものが中心の内にあって割合小さいものとして捉えることができよう。Ⅱ類に於いては36号住居址が規模的には最大のものである。しかし、他の16号住居址等をみた場合大きな差異がなくプランの規模にばらつきが少ない。なお、Ⅰ類に分類した12号住居址は住居址コーナー部が他のものより張る形を呈しⅡ類に近い様相を呈する。

住居址の柱穴についてみた場合4本柱になるものが主体であり、4号住居址、12号住居址、16号住居址、36号住居址等は顕著な例である。しかし36号住居址を除き主柱穴間に補助的に柱が設けられていたためか柱穴が検出されている。また4号住居址、36号住居址のように住居址ほぼ中央部に数個の柱穴と思われるものが検出されており、住居址中央部に屋根を支える柱が存在したものかと思われる。このような柱穴に加えて壁に斜孔を設けている例が4号住居址、16号住居址、19号住居址等に見られた。また16号住居址に於いては床面に径8～10cm、深さ25cmほどの小さな穴が数十箇所検出された。この穴は主柱穴と思われる柱穴に囲まれる範囲を取り囲むように分布しており、住居址中央部には余り見られない。このような小さな穴はその分布状態等より住居址内の場のしきり等に関わるものの可能性が大きい。

住居址内の炉址形態と炉址の位置についてだが、今回の調査に於いて炉址の確認された住居址は6軒で、埋甕炉と地床炉のものが存在し、地床炉のものが全体の⅔を占めた。地床炉を有する住居址は4号住居址、16号住居址、24号住居址、25号住居址であり4号住居址は2箇所の炉址を



I類

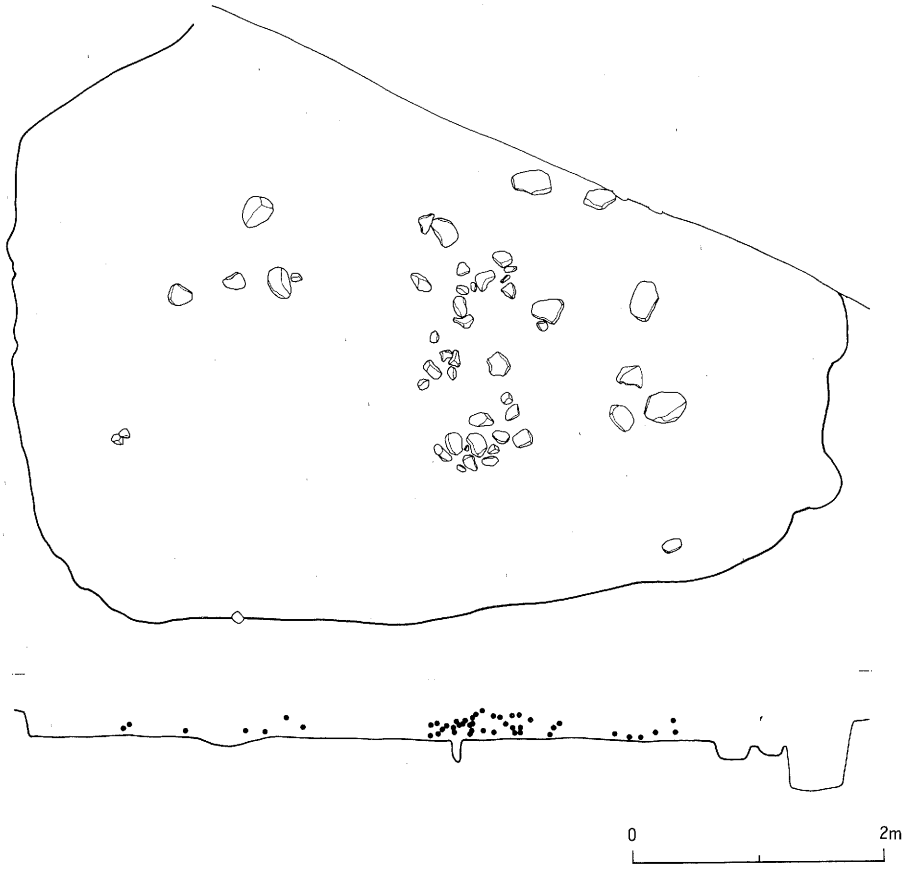


II類

第128図　弥生時代住居址の分類について（1/100）

有していた。埋甕炉を有するものは8号住居址、19号住居址の2軒である。これらの住居址で炉址周囲に石囲いを有するものは、地床炉では4号住居址、25号住居址で囲み方は炉址の掘り方肩部にL字形に置いている。埋甕炉では8号住居址にみられ埋甕周辺一方を囲むように置いている。炉址の位置は長軸方向のどちらか、または両方に作られており、主柱穴間に位置するものが大部分である。住居址の平面プランと炉址の形態をみた場合、I類のものは全て地床炉を有しており、II類のものは埋甕炉または地床炉を有している。

次に住居址の埋没状態についてであるが、今回調査を行なった12軒の住居址の中で住居址覆土内に多量の礫が混入している住居址が3軒検出された。礫は大きいものは人頭大で多くは拳大で



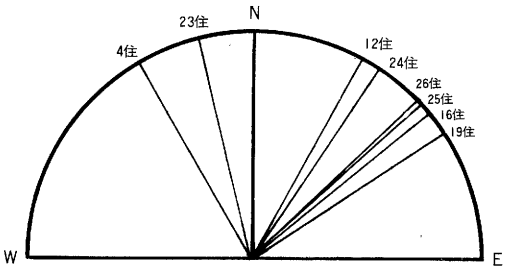
第129図　住居址内礫の散在状態（第16号住居址）

ある。礫の散在する範囲は住居址のほぼ中央部を中心としている。これらの礫は一部の住居址にしか見られない点、礫の大きさがある程度一定している点などから考えて人為的な投げ込みが考えられる。しかし住居址廃絶と同時に礫を投げ込んだのではなく廃絶後ある程度住居址が埋没した時点に於いて行なわれたのではないかと土層状態の観察等より考えられる。

このように今回調査された弥生時代後期の竪穴住居址はI類とII類とに大別できた。これを諏訪地方に於いてみた場合II類が主体でI類についてはその検出例は稀であり志平遺跡第2号住居

址が類似するものとして上げられるだけであった。またⅠ類の住居址形態を持つものは天竜川水系にはみられないようであり、むしろ炉址形態等より考慮すると千曲川水系との関連を考えなければならないであろう。

(2) 集落立地について



第130図　住居址長軸方向

今回の調査により12軒の住居址が検出されたわけであるが、これらは全て同時期に存在したものとは住居址の配置、長軸方向等より考えられない。遺構内よりの遺物の出土が少なかったために、時期決定をすることが難しく時期的変遷を捉えることはできなかった。住居址は調査区のほぼ全域より検出されたが、大雑把にその分布をみるとほぼ4つのグループに分けることが可能であろう。Aグループ4号住居址～12号住居址で調査区の東端に分布するもの、Bグループ15号住居址～19号住居址で調査区のほぼ中央部に分布するもの、Cグループ23号住居址～26号住居址で調査区中央よりやや西寄りのもの、Dグループ36号・37号住居址で調査区の西端に分布するものに分けることができる。これらの住居址は重複関係を持つものでなく、それぞれが散在する形をとっている。これらのことより集落は住居址が密集する様相を呈さず、散在する形をとっていたと考えることができよう。また住居址を長軸方向よりみた場合長軸が北西を向く4号、23号住居址のグループと、長軸が北東を向く12号、16号、19号、24号、25号、26号住居址のグループに分けられる。

住居址が地形内に於いてどの様な位置に立地していたか捉えてみると、広い沖積段丘面上に散在する形で集落は形成されていたようで、前方に広がる沖積丘を生産活動の背景とした集落として捉えることができ、永明寺山々麓のテラス状台地に立地していた一本樋遺跡の集落のあり方とその様相を異にしている。また同遺跡周辺には、永明中学校々庭遺跡等もあり、広い範囲に渡り住居址が埋蔵されていると思われる。

第3節　平安時代の出土遺物と集落

平安時代に属する住居址は22軒確認され全体の約60%を占める。これらの住居址より、平安時代ほぼ全期に渡る遺物が出土しているが、集落の主体は平安時代後半のものが主体となるようである。

(1) 土器について

出土した土器は、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器があり、供膳形態の土器の器種には、

坏・埦・皿・鉢・長頸瓶・蓋がある。貯蔵・煮沸形態の土器には甕・小形甕がある。遺構内より出土し図示したもので器形の判明し得るものは144点であり、その内供膳形態の土器が126点で約88%を占める。全体で土師器は60点(42%)、黒色土器は41点(28%)、須恵器19点(13%)、灰釉陶器24点(17%)で最も土師器が多用され、次に黒色土器が多用されている。須恵器の利用は少なく灰釉陶器の利用されている率の方が高い。

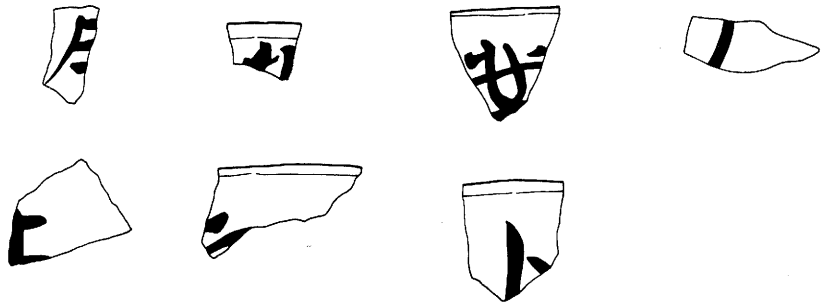
これらの土器を、製作の特徴・器種別の占有率を考慮し、第Ⅰ期～第Ⅴ期の区分に大別することができた。なお、出土土器の点数が少なく不明な住居址も数箇所ある。

第Ⅰ期　3号住居址・28号住居址・30号住居址がこの時期に相当する。しかし土器より見ると、若干30号住居址に古い要素をもつ土器が見られる。土器は土師器と須恵器で、灰釉陶器などは見られない。3号住居址の場合、須恵器の占める割合が80%である。器種は供膳形態のものでは、坏・埦・蓋・長頸瓶があり、貯蔵・煮沸形態のものでは甕・小形甕がある。坏は3号住居址よりのものが中心で土師器のものと須恵器があり、須恵器のものが主体を占める。

なお、須恵器の坏は器形より見ると口径と底径がほぼ2：1で、器高が低いものが中心となる。製作法はロクロ水挽きのもので、底部が回転糸切りされるものと、回転箆削りされるものが存在するが、回転糸切りのものが主体となる。土師器のものは「甲斐型」坏が出土している。埦は全て須恵器で、坏に比較して製作法が良いものである。28号住居址より出土しているものは、底部が回転糸切りによるが、体部下半を箆削りにしている。30号住居址よりのものは、高台付のもので底部は回転箆削りされている。

甕は特徴的なものが出土している。口縁部が緩やかな「コ」字形、または鋭く「く」字形になるもので、胴部が球状に脹むものがある。器壁は薄く混入物の少ない土質の粘土で仕上げている。色調も茶褐色を呈するものが主体となる。成形は口縁部は強い横ナデで、胴部は横・縦位の箆削りがされている。小形甕も甕と同様な傾向を示している。

第Ⅱ期　14号住居址・29号住居址がこの時期に相当する。土器は須恵器と土師器・黒色土器が見られる。土師器と須恵器の割合は点数が少ないために明確に把握できなかったが、土師器のものが主体になるように思われる。器種は供膳形態のものでは坏と長頸瓶があり、貯蔵・煮沸形態のものでは甕がある。坏は全て黒色土器でロクロ成形による。成形による稜を割合良く残してい



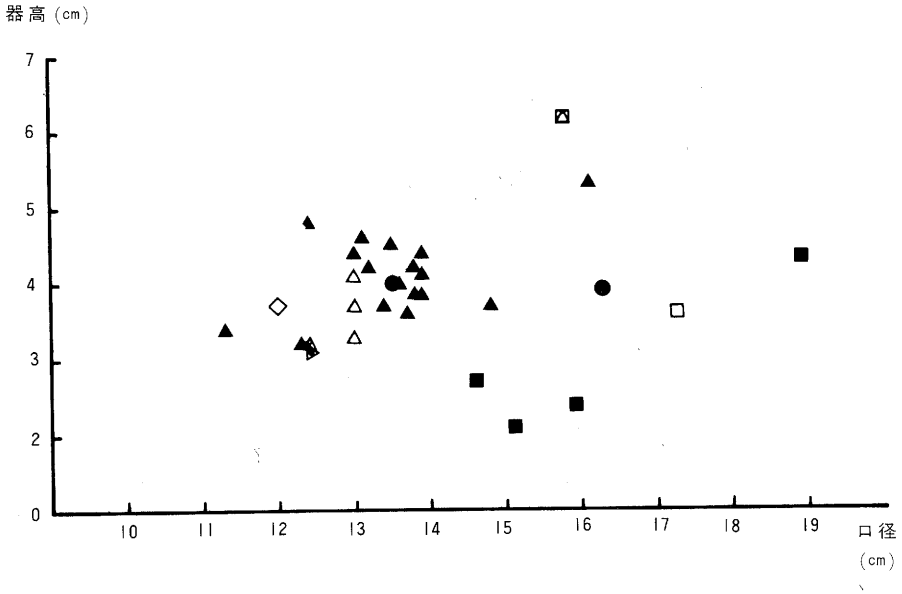
第131図　出土墨書土器片（½）

る。底部は回転糸切りの後、手持の篦削りのものがあり、また体部下半を篦削りしたものも見られる。内面は黒色手法を用い、体部が放射状、口縁部が横位の研磨が良くなされ、暗文状に残っているものが数点ある。器形は、器高が低く浅目のものである。体部に墨書を持つものが3点ある。

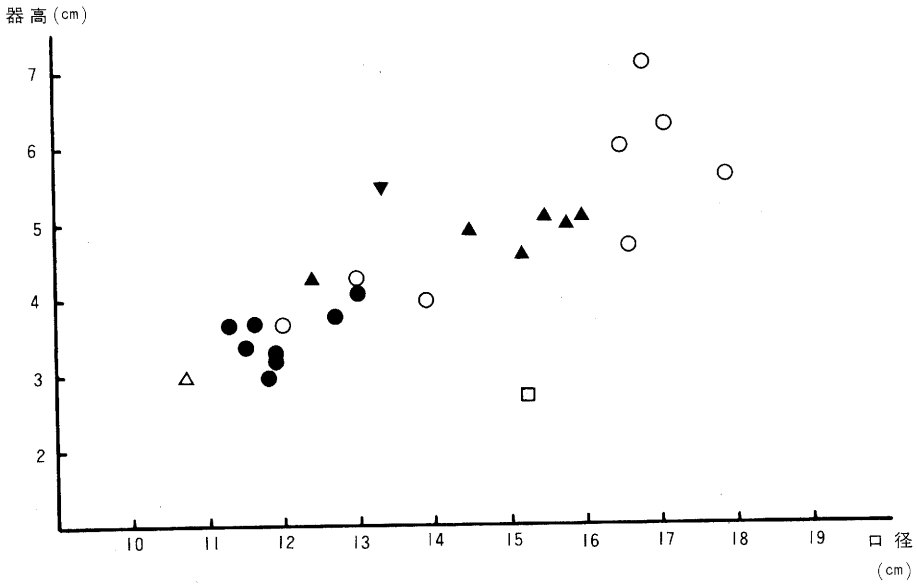
第Ⅲ期　6号住居址・10号住居址がこの時期に相当する。土器は須恵器と灰釉陶器、土師器、黒色土器が見られる。土師器、黒色土器が主体をなす。この傾向は特に10号住居址の場合、検出遺物の約64%を黒色土器が占めた。器種は供膳形態のものでは、坏・埦・鉢・長頸瓶があり、貯蔵・煮沸形態のものでは小形甕がある。供膳形態のものが90%を占めて遺物の主体をなす。中でも特に坏が多い。坏は第Ⅱ期に見られた坏に比較して器形に規格性が見られ、特にその傾向が10号住のものには見られる。器形は体部がやや丸味をもち、口縁部にて外反するものが主体となっている。黒色土器のものとそうでないものとの比率は6：1で黒色土器が主体をなす。黒色土器は全て内面のみが黒色手法によるもので、第Ⅱ期にみられた様な暗文状の研磨が施されたものは残るが、その研磨は雑な感を受け、磨き作業に用いている工具も第Ⅱ期のものに比べ幅広いものとなっている。坏は全てロクロ成形による。底部は回転糸切りにより処理される。この様な坏の他に高台を貼り付けた高台付埦が見られる。また灰釉陶器皿の影響を受けたと思われる高台付皿が見られる。これらも全て黒色土器である。これらの黒色土器の坏、皿等には墨書を有するものが多く、特に10号住居址については顕著であり、6点検出されている。須恵器の坏も若干見られるが主流でない。この他に、新たに灰釉陶器が見られる。灰釉陶器は全て供膳形態のもので皿、埦がある。製作方法は丹念で焼成も堅緻なものであり、底部は回転篦削りされた後高台部を貼り付けたものである。器形は体部が若干の丸味をもつもので、口唇部が若干外反する。高台部は方形断面を呈するものが主体である。また施釉も良好で刷毛によりなされたと思われる。発色は淡緑色を呈するものが主体となる。これら灰釉陶器は一般的な雑器とは一線を画するものとして捉えられよう。

第Ⅳ期　11号住居址、13号住居址、22号住居址がこの時期に相当する。土器は、土師器・黒色土器・須恵器・灰釉陶器がある。これらの占有率は、土師器45点（17%）、黒色土器3点（7%）、須恵器1点（3%）、灰釉陶器17点（45%）である。第Ⅲ期に比較して、黒色土器、須恵器の占める割合が非常に低くなり、灰釉陶器の占める割合が高くなってくる。器種は依然として供膳形態のものが主体である。この時期になると新たに土師器の坏に高台をもつものが現われ、その高台が高い「足高高台付坏形土器」と呼ばれるものも見られる。また貯蔵・煮沸形態のものの中に羽釜が現われてくる。

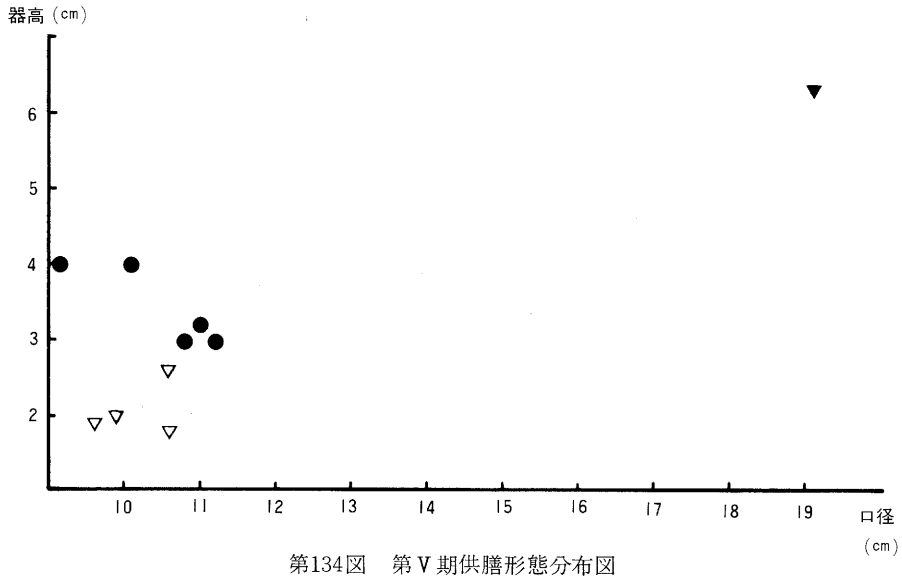
坏は全てロクロ成形によるもので、底部は回転糸切りによって処理されるが、その処理のし方は雑なものである。器形は体部がほぼ直線的に立ち上がるものが主体で、13号住居址を見た場合、規格性の強い感を受ける。高台付のものは、その高台が高く、高台端がゆるく外反するものもある。（第74図18、第81図9）胎土や焼成は粗質なものが多くなり、色調が橙褐色を呈するものが多く



第132図　第Ⅲ期供膳形態分布図



第133図　第Ⅳ期供膳形態分布図



第134図　第Ⅴ期供膳形態分布図

●土師器坏　▲土師器黒色土器坏　▼土師器高台付坏
▽土師器皿　▷土師器黒色土器高台付坏　⊿土師器高台付埦
△須恵器坏　◇灰釉陶器耳皿　□灰釉陶器段皿
■灰釉陶器皿　○灰釉陶器高台付埦

なる。

灰釉陶器は、第Ⅲ期のものに比べ製作技法が簡略されるもので、焼成がやや軟質のものが見られ、釉などもツケガケによるもので、発色の悪いものも見られる。これらは、その製作技法・焼成等より、折戸53号窯期に比定されると思われるものである。

第Ⅴ期　27号住居址、33号住居址がこの時期に相当する。土器は全て土師器で、供膳形態の皿・坏である。皿は所謂カワラケの様相を呈するもので、器形は体部が直線的に大きく開き、外形指数も98～144と大きい。口径と底径比は2：1の割合で、規格性が強いものである。ロクロ成形で、底部は回転糸切りである。また底部器肉を厚く切り離しており、切り高台状を呈する。坏は第Ⅳ期と比較して若干小振りである。須恵器、灰釉陶器などは見られない。

以上、各期の土器群については特徴等について述べてきたが、これらの年代については、検出された遺物の点数が少なく不明確な部分が多々あり、時期の位置付けをすることは大変難かしい。しかし土器の概要より第Ⅲ期は10世紀後半、第Ⅳ期は11世紀後半、第Ⅴ期は12世紀代に想定できようか、今後の検当が必要であろう。

(2)　八稜鏡について

今回の調査に於いて特異な遺物として八稜鏡を上げることができる。八稜鏡は全て瑞花双鳥八稜鏡の類である。現在、県内に於いて12例が確認されている[(1)(2)]が、一遺跡より4点もの八稜鏡が検出された例は初めてであろう。市域に於いては姥塚古墳[(3)]、判ノ木山西遺跡14号住居址より検出さ

れている。鏡の鋳造、文様等より考えると、溝2内よりのものが初鋳のものに近いものかと思われ、文様も他の三枚に比べて優れており、形状等も整うことから、古い様相を呈するものかと思われる。他の三枚のものは踏返によるもので、形状・文様も簡略化され、新しい要素があり、この二つのものの間には時間差があろうか。

出土状態については遺構説明内に於いて記述したが、1点のものは溝内より、もう1点は住居址覆土上よりで、板の上に蓆状の敷物を敷きその上に3枚重ね置いた状態で検出されている。溝内よりのものも、単に廃棄行為によるものではなく、その出土状態より考えると明らかに溝の埋め戻しに伴ない、埋設されたと捉えられるものであった。このような和鏡は、経塚埋納、祭祀奉斎等との関わりが強いとされ、その様な遺跡よりの出土が多い。これらのことより考えると、溝の埋め戻しに供なう祭祀に和鏡が利用されたと理解でき得るのではないだろうか。また、3枚重なったものについても、溝に近い付近よりの出土であるので溝に関わるものとして捉えて妥当であり、溝周辺で祭祀を行ない、置いたのではないかと推定される。また、溝が水路としての役割を持っていたならば、水路が使用されなくなったことに関わる溝の礫の埋め戻しと、和鏡の埋設祭祀と云う事が、何らかの関連があるように思われる。

平安住居址

住居址	形状	規模		主軸方向	カマド		備考
		長径×短径 m	面積m²(坪)		位置	素材	
2 住	隅丸方形	(　×4.7		N37°W	北壁	石組	
3 住	〃	3.8×3.6	13.68(4.1)	N63°E	東壁	A：粘土 B：石組粘土	
5 住	(———)	(———)	(———)	(——)	(——)		
6 住	隅丸方形	×4.3	(———)	N65°E	東壁	A：石組 B：石組(？)	
7 住	〃	4.5×4.7	21.15(6.4)	N51°E	東壁	石組	
9 住	(———)	(———)	(———)	(——)	東壁	石組	
10 住	隅丸方形	5.4×5.7	30.78(9.3)	N51°E	東壁	石組粘土	耳皿出土
11 住	〃	4.0×4.6	18.40(5.6)	N52°E	東壁	石組粘土	
13 住	〃	(4.9×4.6)	22.54(6.8)	(——)	東壁	石組粘土	
14 住	〃	(4.2×4.6)	19.32(5.9)	(——)	(——)		
17 住	〃	(4.7×2.9)	13.63(4.1)	(——)	(——)		
21 住	〃	3.3×	(———)	(——)	(——)		
22 住	〃	3.3×	(———)	N73°E	東壁	石組(？)	
27 住	〃	(———)	(———)	(——)	東壁	石組(？)	
28 住	〃	(———)	(———)	(——)	東壁	粘土	
29 住	〃	(———)	(———)	(——)	北壁	石組粘土	
30 住	〃	3.6×3.8	13.68(4.1)	N75°E	東壁	石組粘土	覆土上より八稜鏡3面が出土
31 住	〃	(———)	(———)	(——)	(——)		
32 住	〃	3.6×3.8	13.68(4.1)	N71°E	東壁	石組粘土	
33 住	〃	3.0×	(———)	N74°E	東壁	石組粘土	
34 住	〃	4.0×3.8	15.20(4.6)	N27°W	北壁	石組粘土	
35 住	〃	×2.5	(———)	(——)	(——)		

和鏡の所有者等についてであるが、これについて直接的な資料は得られなかったが、当時としては貴重品である和鏡を所有できるだけの経済力等を持っていた者の存在がうかがわれ、この様な者が中世の有力者層に発展していく可能性が充分にあるであろう。

(3) 竪穴住居址について

土器より第Ⅰ期～第Ⅴ期までの区分を行なったが、これを住居址の形状、カマドの形態についてみてみよう。

第Ⅰ期に於いては住居址は3号住居址・28号住居址、30号住号址がある。住居址の平面プランは全て隅丸方形のもので、3号住居址と30号住居址の規模は同じであり、割合小型の住居址である。これらは全て東壁ほぼ中央部にカマドを持つもので、粘土カマドのものと石組粘土カマドのものがある。カマドの構築はしっかりしている。

第Ⅱ期の住居址は14号住居址・29号住居址であるが、住居址プランはやはり隅丸方形である。規模は第Ⅰ期に比べ大きめとなる。カマドは29号住居址でしか確認できなかったが、北壁ほぼ中央部に石組み粘土カマドが構築されていた。構築は第Ⅰ期同様にしっかりしている。

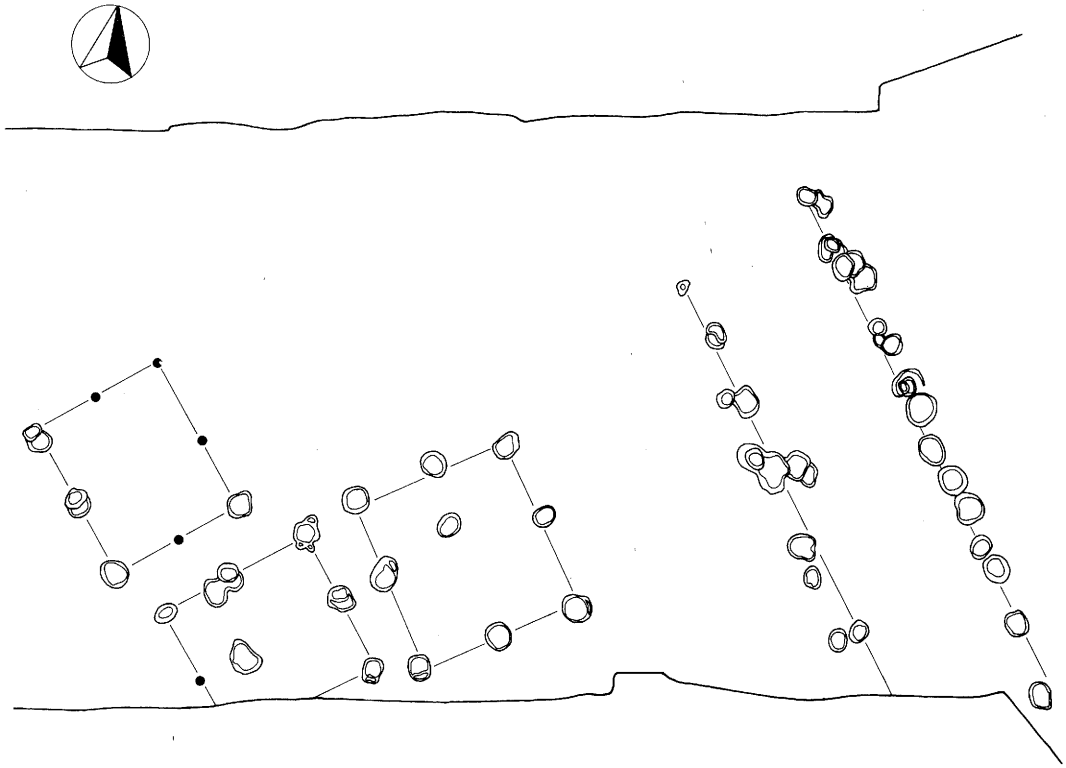
第Ⅲ期の住居址は6号住居址・10号住居址であるが、6号住居址については、プラン等が不明確であり規模等について不明である。10号住居址は隅丸方形を呈すが、やや横長の感をもつものである。規模は、今回調査された住居址の中で最も大きくしっかりしていた。10号住居址の場合は耳皿の出土、黒色土器坏の多用、墨書の多用等により、若干他の住居址とは異なっている要素があり、住居址の規模等について一般的な例として取り扱うのには問題があろうか。

第Ⅳ期は11号住居址・13号住居址・22号住居址がある。プランは隅丸方形のもので、その規模も若干ではあるが第Ⅰ期のものよりは大型になってくる。しかし、構造等は簡略的で、周溝等は見られない。カマドは石組み粘土カマドで、住居址の東壁のやや片寄った位置に構築されている。

第Ⅴ期は27号住居址・33号住居址で、住居址の平面プランは27号住居址では確認できなかったが、33号住居址の場合、隅丸長方形に近い形を呈するもので、その規模も小さなものであるカマドは石組粘土カマドで、位置が33号住居址の場合住居址右側コーナー部にある。

建築址についてみた場合、遺物の出土が見られず、相当する時期は不明であるが、住居址の重複関係より見て、建築址3は第Ⅰ期の住居址の覆土内に柱が掘り込まれている点などを考え合わせると、第Ⅰ期以降に属するものであろう。また柱穴列については、その重複関係より第Ⅳ期以降に属するものと思われる。

また住居址の施設をみると11号住居址・30号住居址・32号住居址・34号住居址のカマド右脇に河原礫を円形等に配置したものがある。このような配石については新井北遺跡、新井南遺跡、判ノ木山西遺跡等の住居址に見られ、調理台・物置台などの勝手用具台的な用をなしたもの[(4)]、作業台的な性格[(2)]などが与えられている。今回の調査に於いては性格を示す積極的な根拠はないが、その置き方等より台的な要素が強いものとして捉えられよう。



第135図　建築址・柱穴列配置図（1/200）

(4)　集落立地について

今回調査された住居址は22軒で、検出された住居址の約60%を占める。前項で述べたが、これらは出土した土器より第Ⅰ期～第Ⅴ期まで分けることができた。この分類に基き、住居址分布についてみた場合、まとまった集中といった程の分布は見られず、散在する形のものである。

重複関係をもつものは13号住居址・14居住居址のみである。大きく住居址の分布について捉えた場合、ほぼ2つのグループに分けられる。調査区東側に位置するグループ（2・3・5・6・7・9・10・11・13・14・17・21・22・27・28号住居址）と調査区西側に位置するグループ(30・31・32・33・34号住居址)に大別できる。この2グループの中央部に集石を伴なう溝が走り、その範囲には住居址が設けられておらず、大きな空白地区となっている。

建築址・柱穴列の分布はある程度の一定性をもっており、調査区東側を中心とした一箇所に集中して検出され、建築址の構造も2間×2間と、同一のもので、その配列は一定性のあるものであった。柱穴列の性格については不明であるが、そのあり方より柵としてのあり方、または建築址が考えられる。適確な根拠を見い出すことはできなかったが、建築址との配列関係を見た場合、柱穴の並び方はほぼ直交する形をとり、何らかの関連がある様に考えられる。

今回の調査が、道路敷と云う縦長の限定された調査区で、集落の広がりの把握には至らなかったが、住居址の配置等を考えると、等高線上に沿った形で横に広がる集落が想定されよう。本遺跡に於いては第Ⅲ期～第Ⅴ期の住居址が主体であり、これらのことより平安時代後半に、割合、規模の大きな集落があったと捉えることができる。この集落の生活基盤としては、集落が立地する地形より沖積段丘面、または氾濫原を中心とした水田耕作等が考えられるが、実証でき得る資料は見られなかった。また、単に沖積段丘面を背景にした集落としてのあり方の他に、山鹿牧等との関わり方等を考慮する必要性があり、今後の課題としたい。

註(1)　桐原　健　1968「平安期にみられる山地居住人の遺跡」『信濃28-1』信濃史学会

註(2)　百瀬長秀、他　1981「判ノ木山西遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市・原村その３―』長野県教育委員会

註(3)　宮坂光昭　1970「諏訪湖盆東縁の終末期古墳群の考察―茅野市姥塚古墳の検討から―」『信濃22－４』信濃史学会

註(4)　山田瑞穂、他　1976「新井北・新井南遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―岡谷市その３―』長野県教育委員会

第Ⅵ章　結　　語

今回の構井・阿弥堂遺跡の発掘は、茅野市において低位段丘面に立地する遺跡としては初めてのことであり、前年の予備調査の結果から、道路建設予定地という限定された緊急発掘ではあったもののその成果は大いに期待されるところであった。これは、この一帯やまた永明寺山腹から山裾にかけて多くの古墳群があり、諏訪の上代史究明の上に重要な位置を占める遺跡と推定されたからである。

諏訪史[(1)]第一巻によると、塚原・上原・横内にかけて点々と縄文・弥生・奈良平安時代の遺物の発見地が記録されている。当時はまだ畑地として耕作されていた場所も多く、表面採集も容易であったが、その後次第に水田化され、八ヶ岳山麓台地の遺跡のように発掘調査されることなく今日に及んだ。一方、宅地化や工場建設等開発も急速に進み、その過程において遺構や遺物の検出も見られたが、規模、性格等を窺知するまでには至らなかった。

阿弥陀堂遺跡から縄文時代中期後半の住居址3基と後期の土器片が出土した。この期の遺物は上川に更に近い地点（原地・ダイラク屋敷・横内家下・助ヶ端・光明寺・大町・葛井平・地蔵堂）からも採集され、また中央高速道路建設に伴う発掘調査では、これらより低位の現上川河床に接する御射宮司[(2)]遺跡からは、縄文後晩期の良好な資料が出土したことから、縄文時代後半にはすでに一応安定した地形となり上川の流路もほぼ現在の位置に定着したことを示すものであろう。もともと遺跡の所在する塚原一帯は、永明寺山裾から続く緩傾斜の地であり、原地形は湧水の浸蝕による起伏があったものであろうが、水田耕作や開発工事により改変された。住居址は原地形の微高地を選定して立地するものであろうが、限定された発掘のため集落規模等を究明するには至らなかった。山裾のテラス状台地に立地する遺跡と、生活手段等に相違があるのかどうか。また住居址床面より出土した三角壔形土製品の意義等検討されるべき問題が多い。

弥生時代後期の住居址が阿弥陀堂遺跡から12基、構井遺跡から1基発見され、土器片は発掘区全域から出土した。弥生式土器片は上原（葛井平・光明寺遺跡他）から横内（家下他）にかけて広い範囲から採集されており、一帯が稲作の適地としてまた居住の場として利用されていたことを示すものである。予備調査によれば構井遺跡では弥生中期の土器片が検出されているから、天龍川を遡上した弥生文化は岡谷の諸遺跡に定着して間もなくここまで波及したことが窺われる。阿弥陀堂遺跡から上川沖積地までの距離は約400mあり、当時の稲作技術では氾濫の多い上川流域での農耕は不可能であったと思われるから、稲作は段丘面の湧水に伴う低湿地において行なわれたものであろう。現在の変容された地形からは推定できないが水田址の発見される可能性も極めて大きい。農耕具としての石器の出土が殆んど見られず、土器の出土の少ないことと共に水田耕作等の後世の攪乱によるものであろうか。

平安時代の住居址は発掘区の全域から22基が発見された。また、ほぼ同時期とみられる建築址・柱穴・溝状遺構・土壙等があり、平安時代の後半にはかなり安定した「むら」が成立していたことを示すもので、周辺の古墳群の存在や八稜鏡の出土から、諏訪における政治や生産活動の中心地の一つであったことが推定される。

広い遺跡の中央に一本のトレンチを設定した如き今回の調査では、その複雑性重要性の一端を垣間見た思いで、今後の調査や保護活用等について残された問題は極めて大きい。

5月24日に開始された発掘調査は、水田地帯の中での田植から稲の生育期と重なり、降り続いた梅雨と共に出水に悩まされ続けた。

幸い県道路公社・諏訪建設事務所や調査委員会・事務局等の温かい理解により、はじめての試みの航空測量等も導入されて9月28日無事現場での作業を完了することができた。改めてこの発掘に関わった多くの方々に心からお礼申し上げる次第である。

註(1)　鳥居龍蔵　1924　「諏訪史」　第1巻　信濃教育会諏訪部会

註(2)　小林秀夫、他　1982　「御社宮司遺跡」『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書―茅野市その5―』　長野県教育委員会

発掘調査関係者名簿（敬称略）

1　構井・阿弥陀堂遺跡調査委員会

委員長	茅野慶次	（文化財審議委員長）
副委員長	矢崎孟伯	（文化財審議副委員長）
委員	福田幹人	（教育委員長）
〃	伊藤喜與人	（社会文教委員長）
〃	小島与四男	（教育長）
〃	河西保明	（社会教育課長）
調査員	宮坂虎次	（尖石考古館長）
〃	守矢昌文	（尖石考古館主事）
〃	鵜飼幸雄	（社会教育課主事）
〃	柳沢士郎	（社会教育課主事）
〃	樋口公男	（社会教育課主事）
調査補助員	田村和幸	
〃	矢嶋恵美子	
〃	山田真子	

2　事務局

事務局長　河西保明（社会教育課長）・事務局次長　藤森忠孝（社会教育係長兼文化財係長）・事務局員　柳沢士郎　鵜飼幸雄　小池文子（社会教育係）・樋口公男（文化財係）

3　発掘協力者

朝倉善次、岩崎治郎、牛山きく子、牛山きよ子、牛山けさみ、牛山たかね、牛山たてみ、牛山たま江、牛山てる、牛山久子、牛山ます、牛山みえ、牛山美枝志、牛山みつ、牛山やすこ、牛山裕子、小林幸、小林シマ、小林高己、小松將雄、竹村マツイ、田中文六、茅野二水、原田仲六、藤森ますの、藤森和助、細田つるよ、細田みや子、宮坂きよめ、宮坂篤夫、宮坂百合子、守屋芳明、守矢芳夫、両角きよえ、両角由吉、矢島らん、柳沢弓子、柳平嘉彦、吉田茂、茅野高校地歴クラブ。

図　　版

遺跡全景

図版2

1　遺跡近景

2　遺跡近景

遺跡遺構全景1

図版4

遺跡遺構全景 2

遺跡遺構全景3

図版6

遺跡遺構全景4

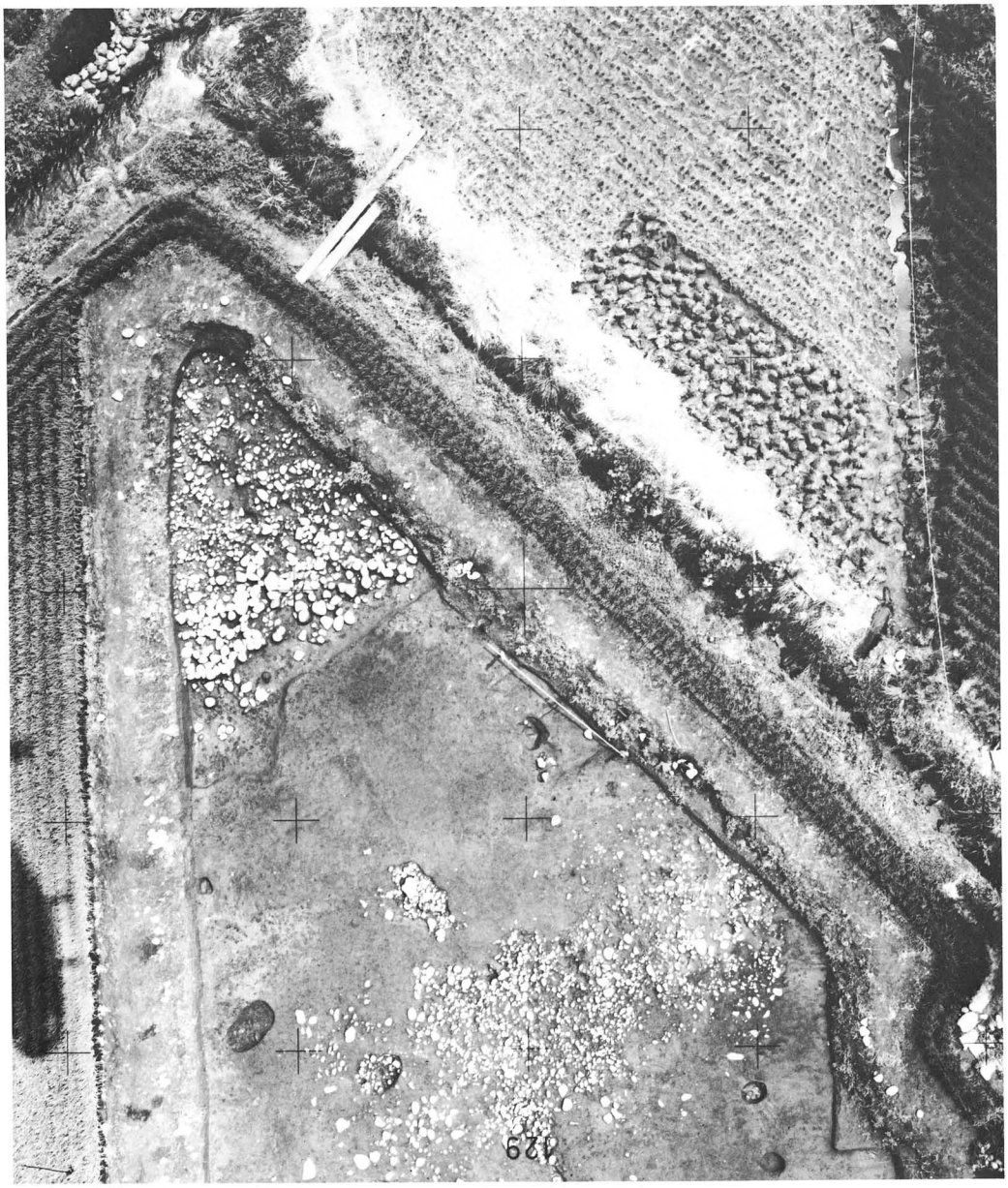
遺跡遺構全景5

図版8

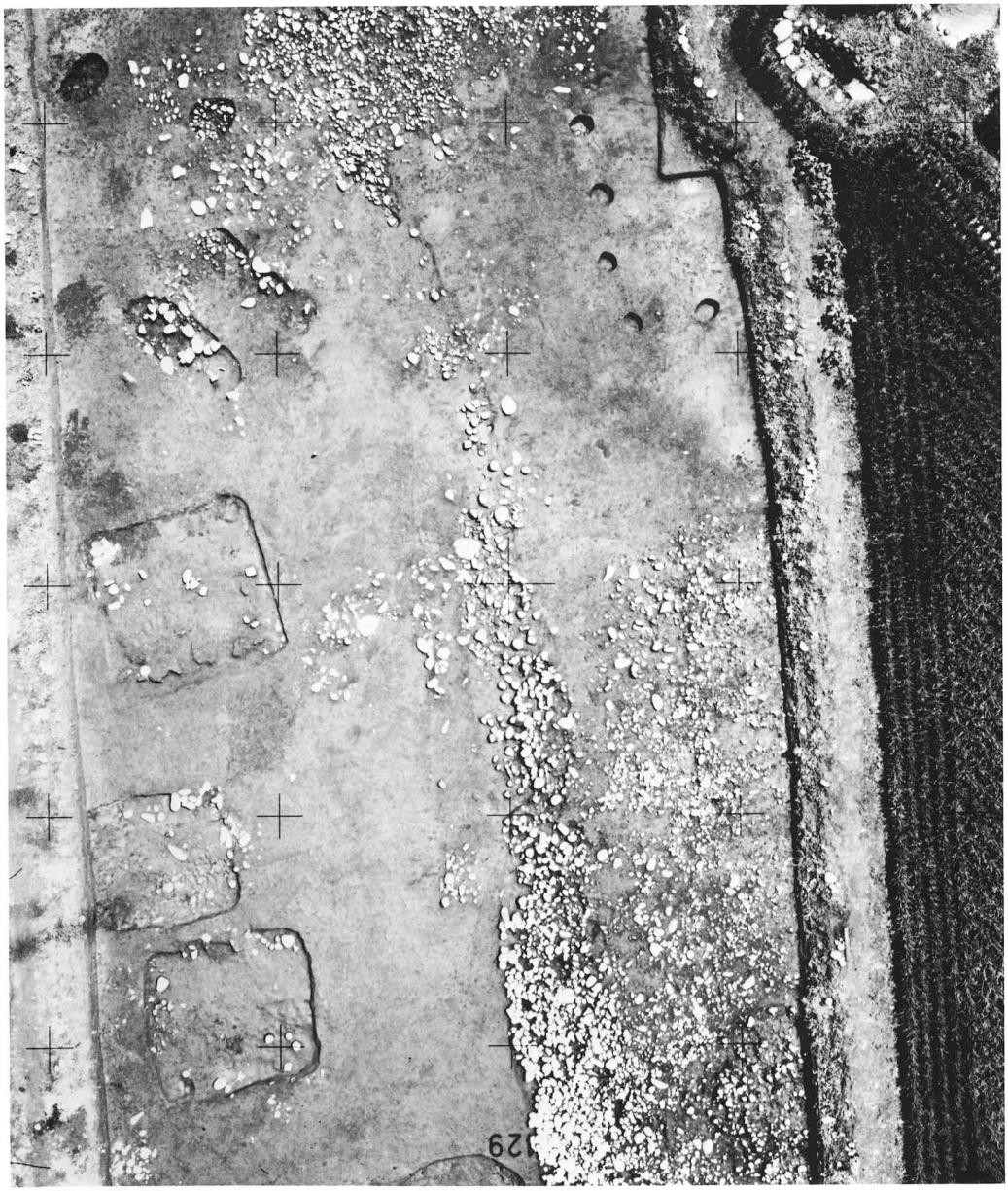
遺跡遺構全景 6

遺跡遺構全景 7

図版10



遺跡遺構全景 8



遺跡遺構全景 9

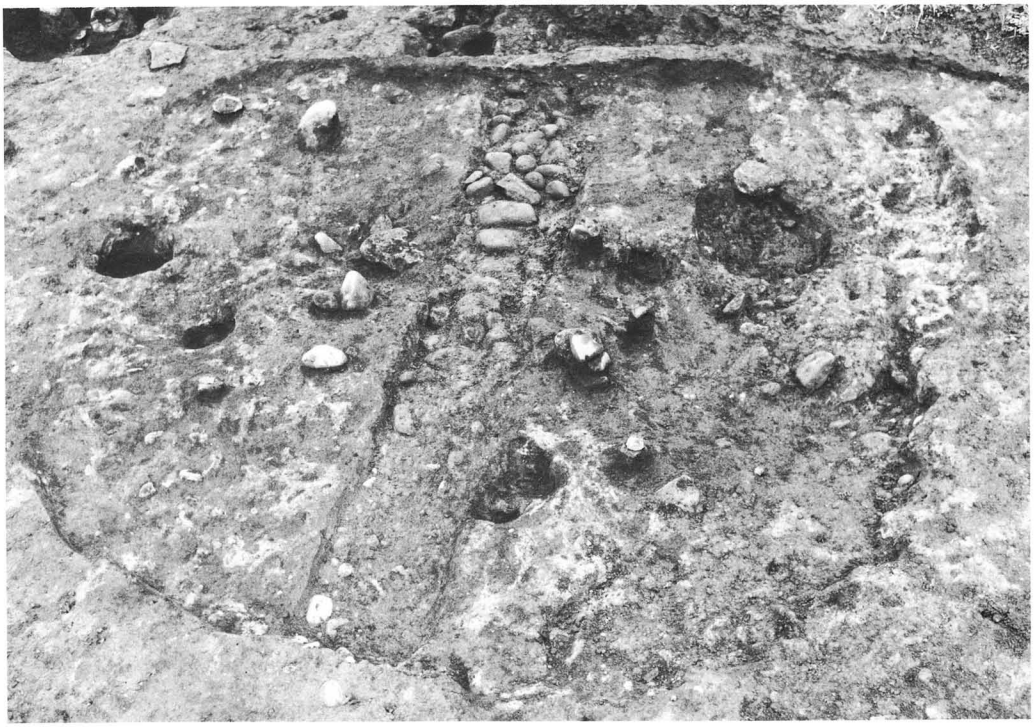
図版12

遺跡遺構全景10

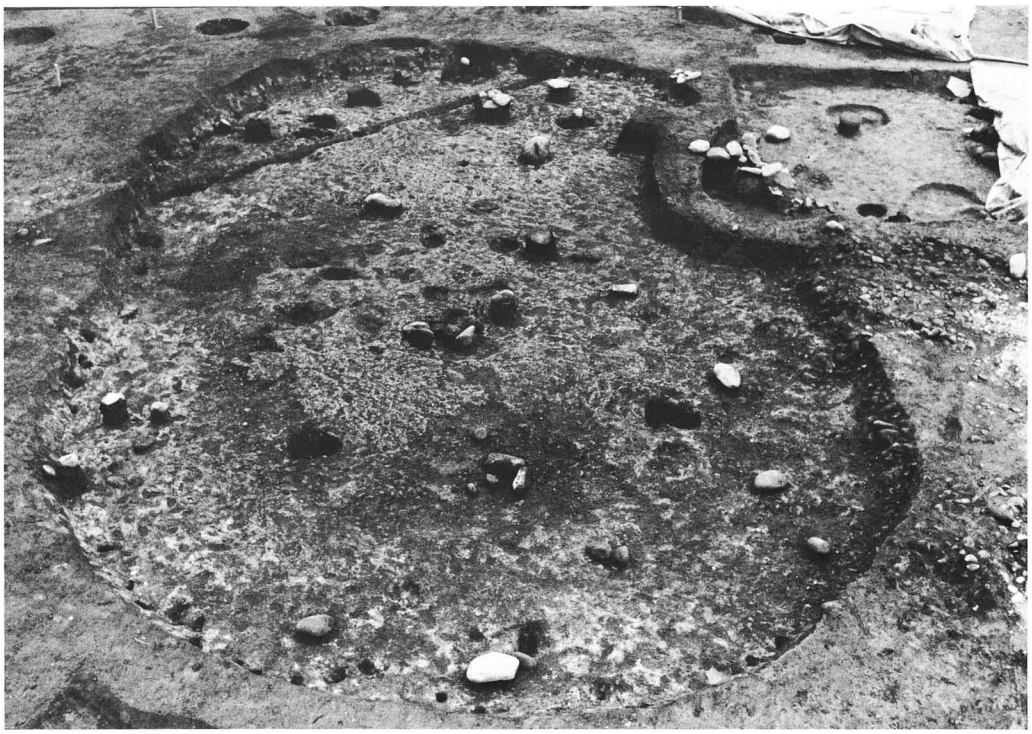
1　第1号住居址

2　三角壔形土製品出土状態

1　第18号住居址

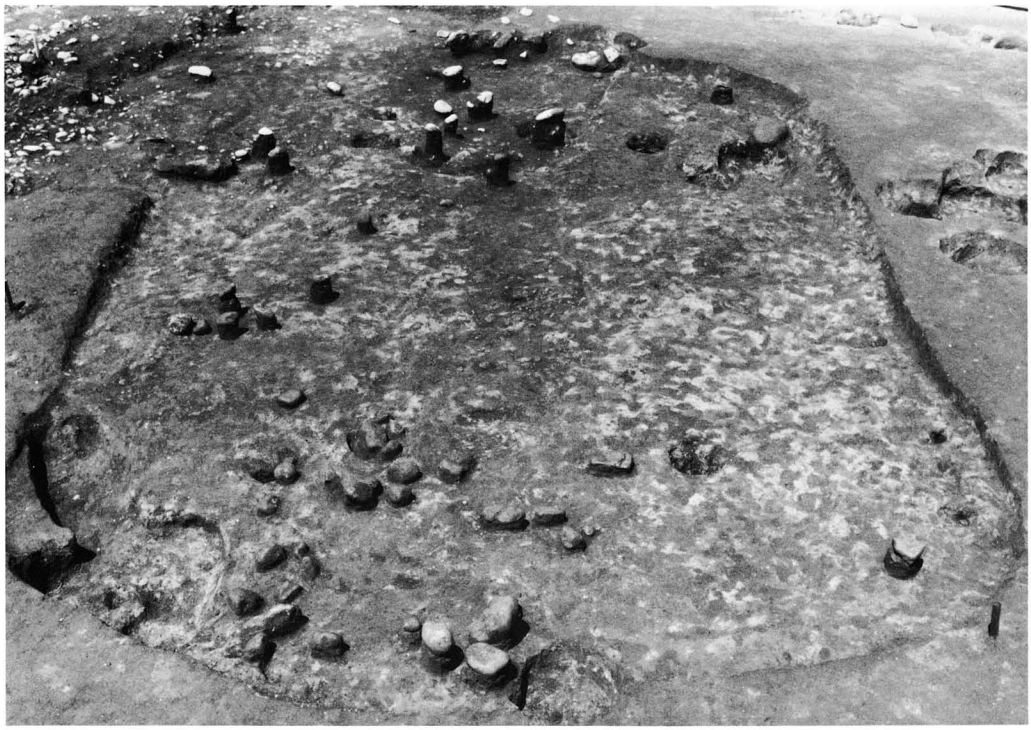


2　第20号住居址



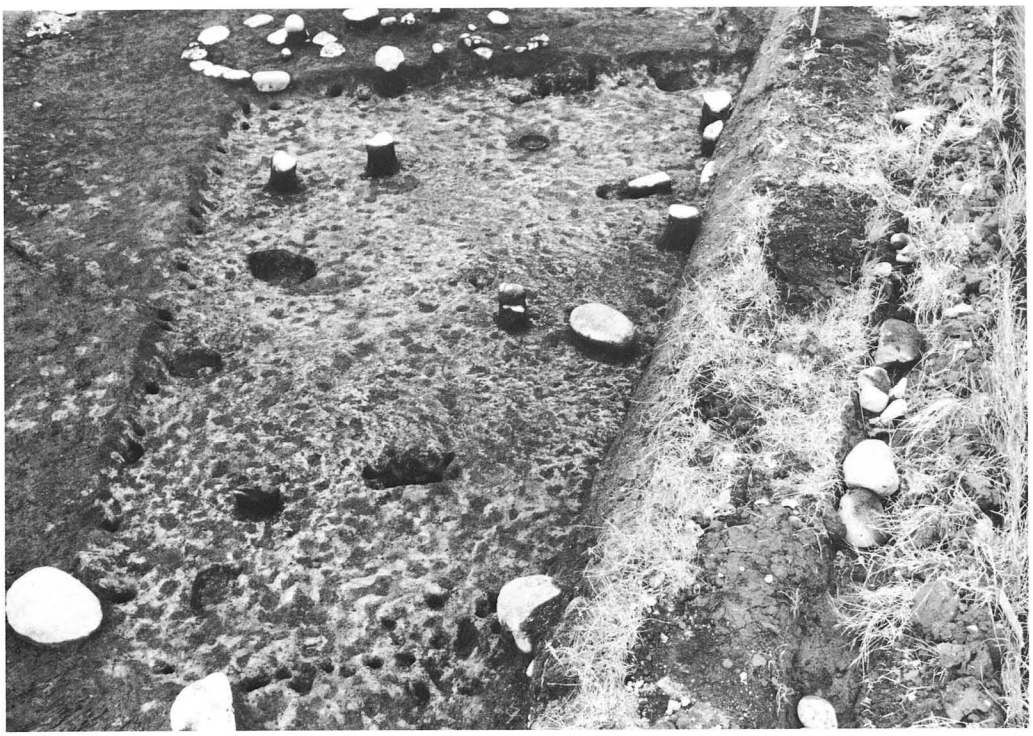
1　第4号住居址

2　第8号住居址



1　第12号住居址

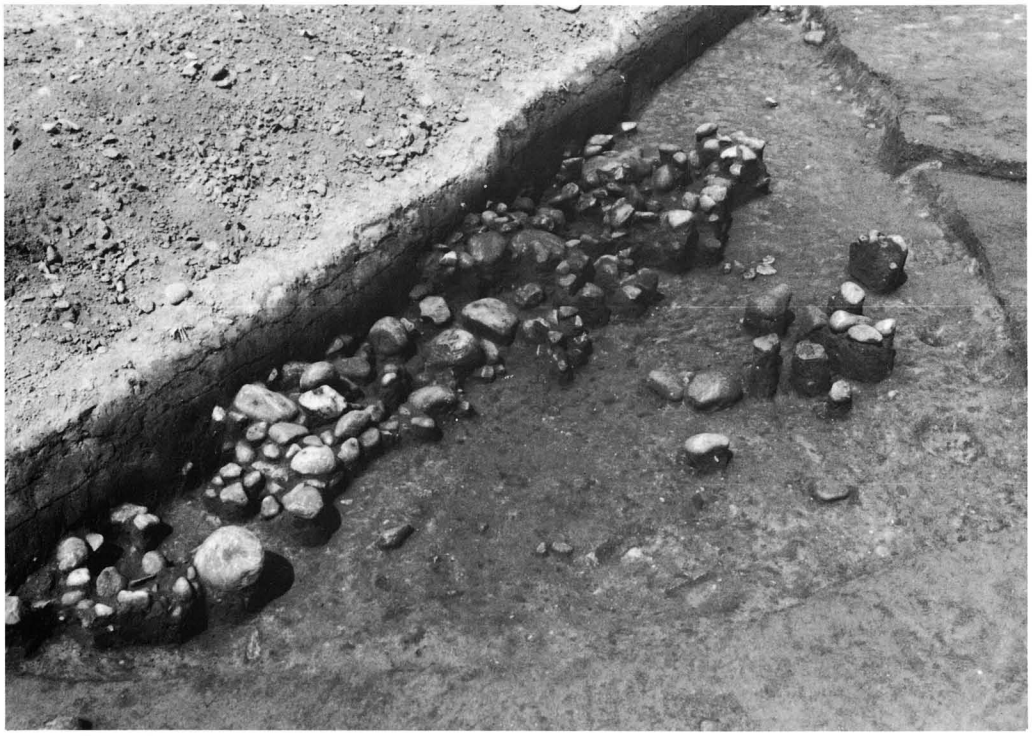
2　第16号住居址



1　第19号住居址

2　第23号住居址

1　第24号住居址

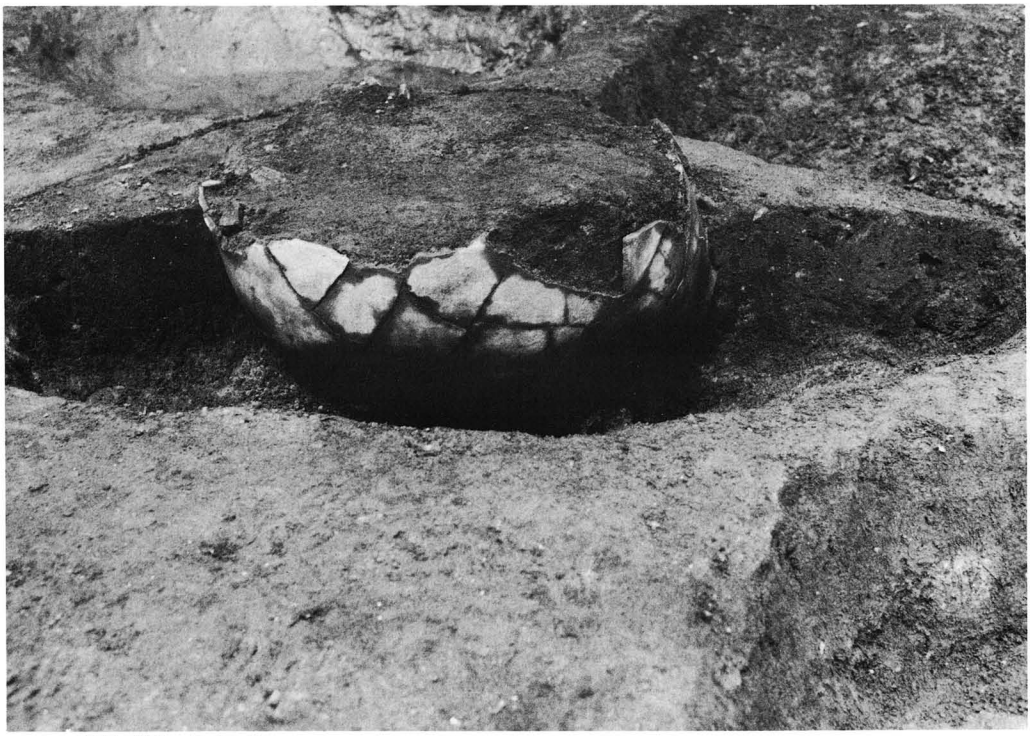


2　第26号住居址

1　第36号住居址

2　第37号住居址

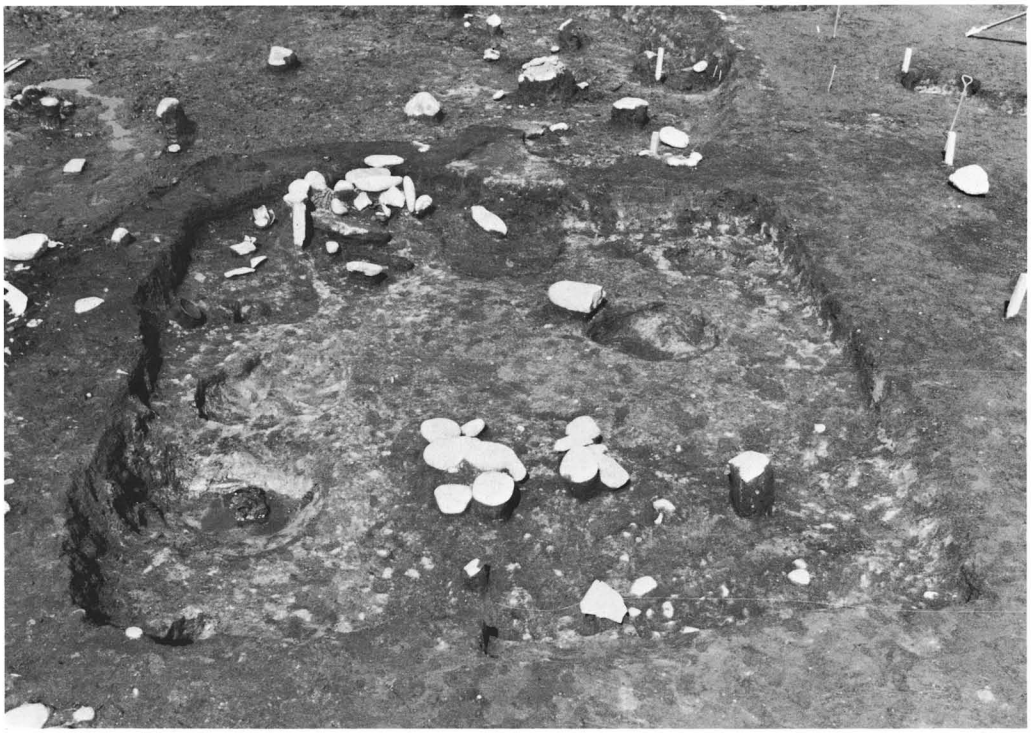
1　第37号住居址土器出土状態



2　壺棺（第２号土壙）

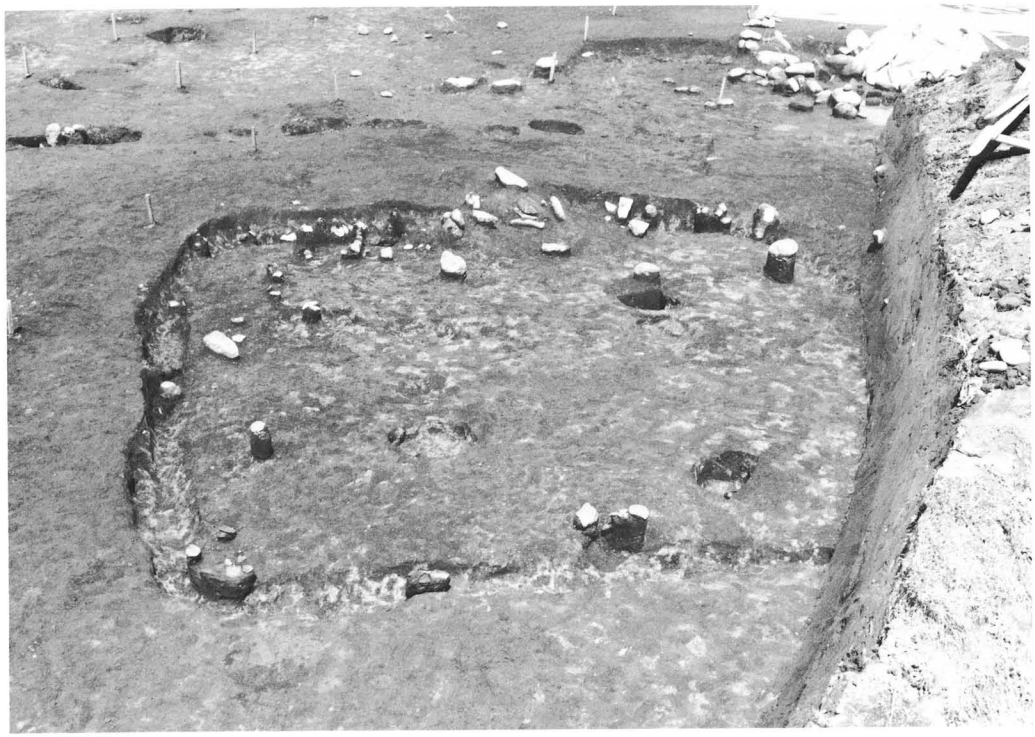
1　壺棺内土層状態

2　第2号住居址

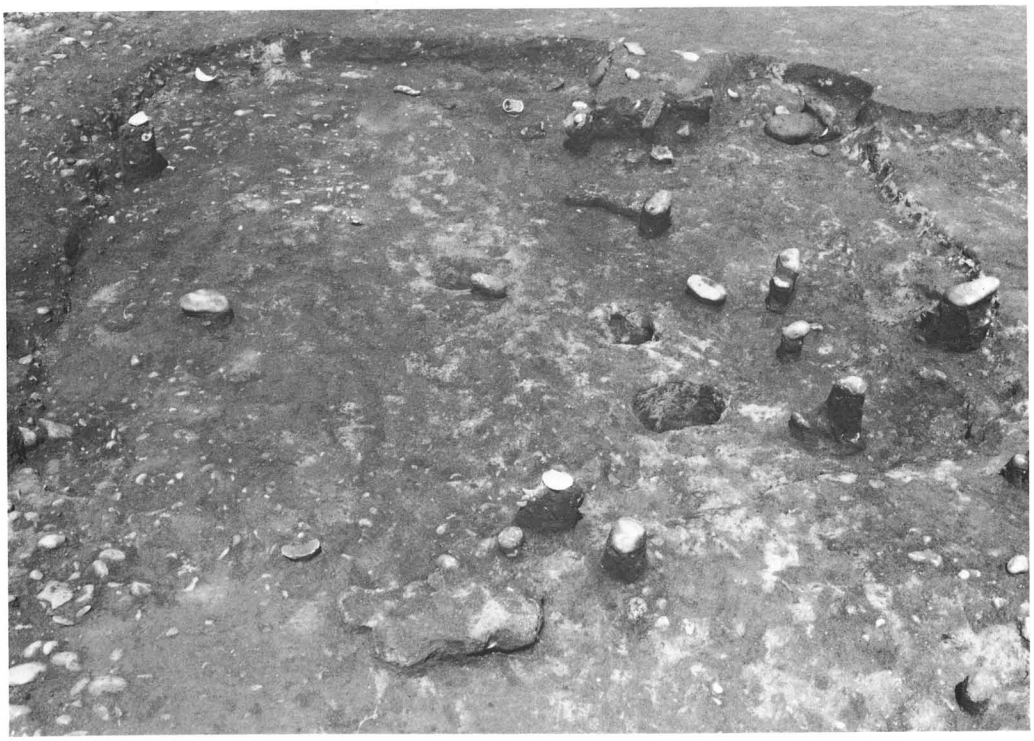


1　第3号住居址

2　第7号住居址

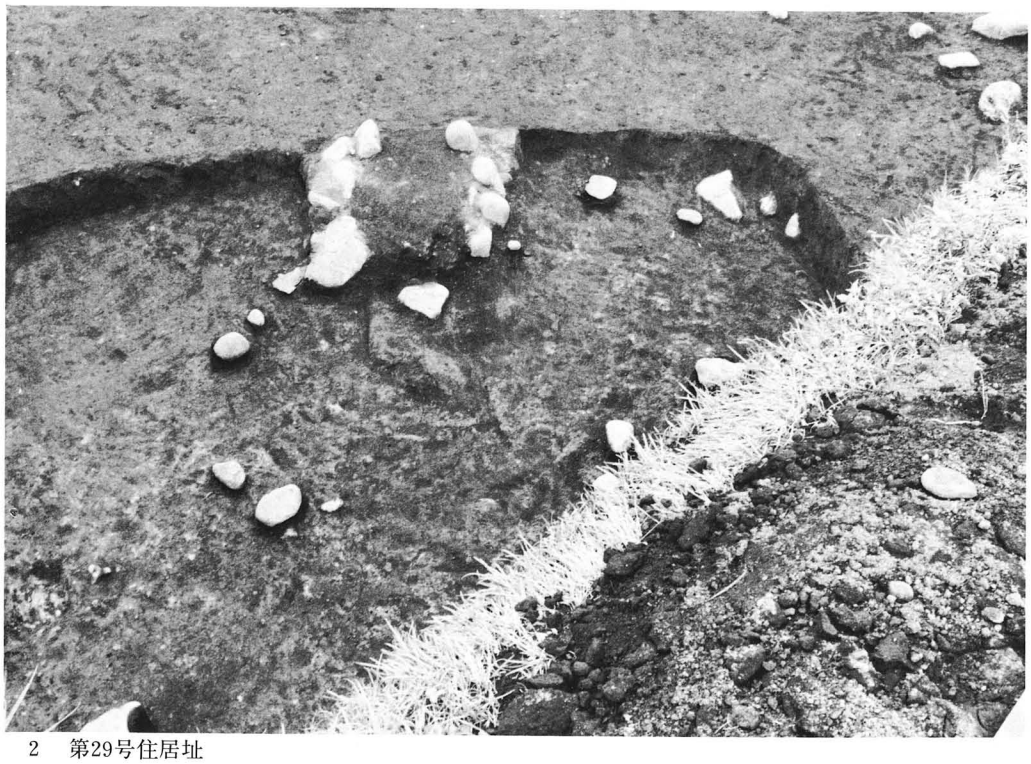


1　第10号住居址

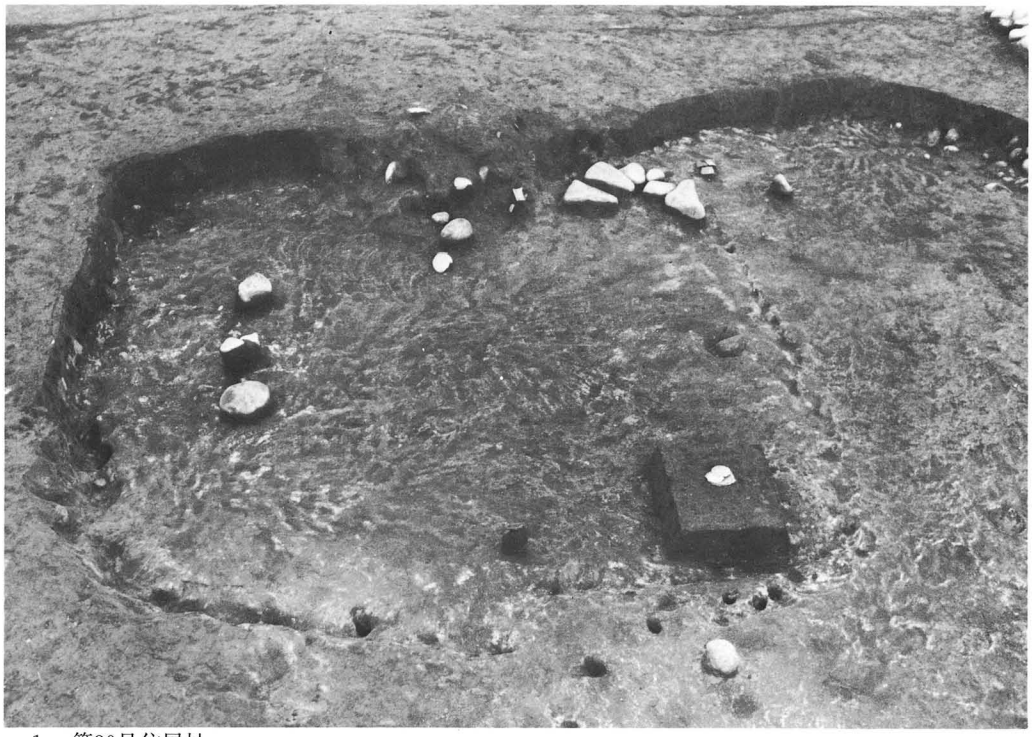


2　第11号住居址

1　第28号住居址



2　第29号住居址

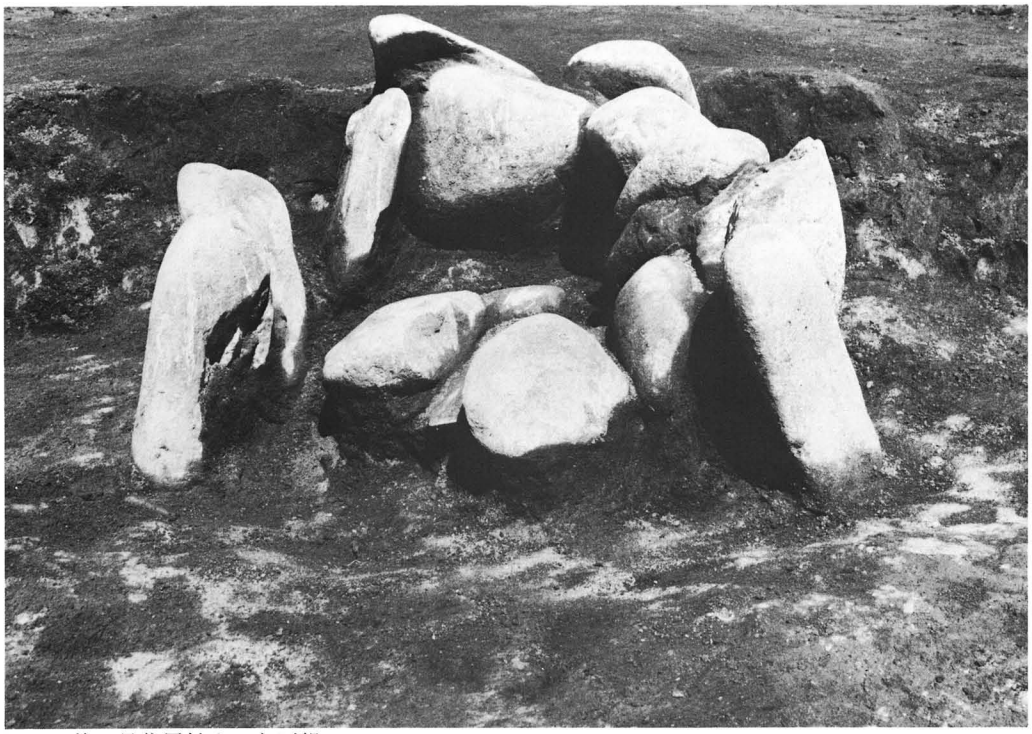


1　第30号住居址

2　第32号住居址

1　第33号住居址

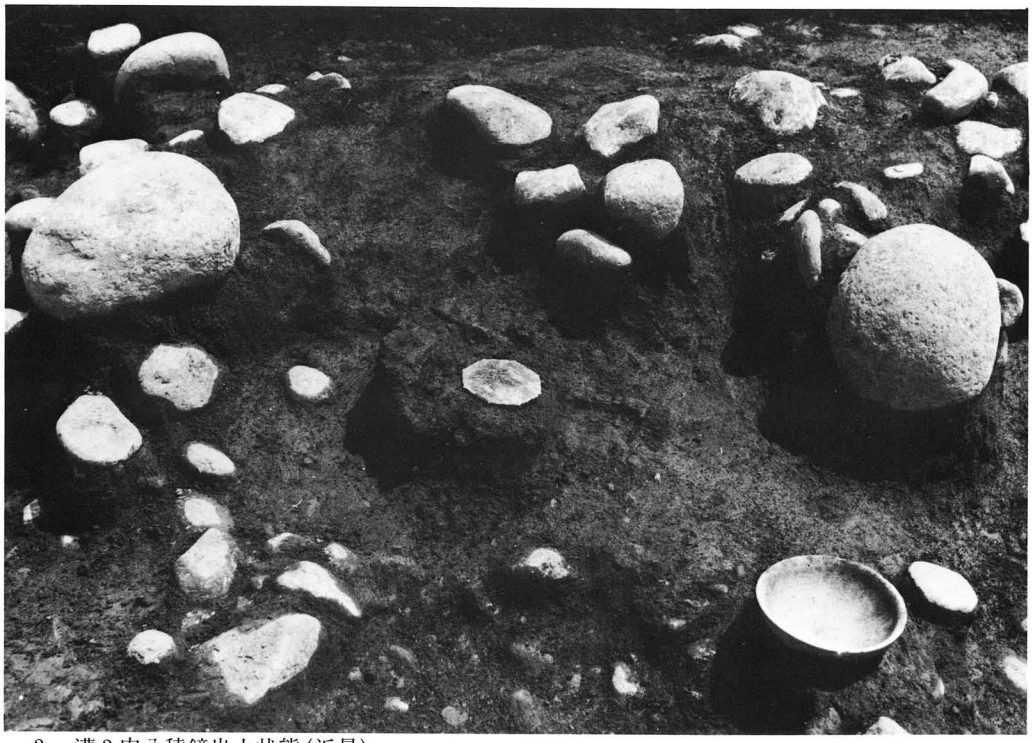
2　第34号住居址



1　第30号住居址カマド石組

2　第33号住居址カマド石組

1　溝2内八稜鏡出土状態(遠景)



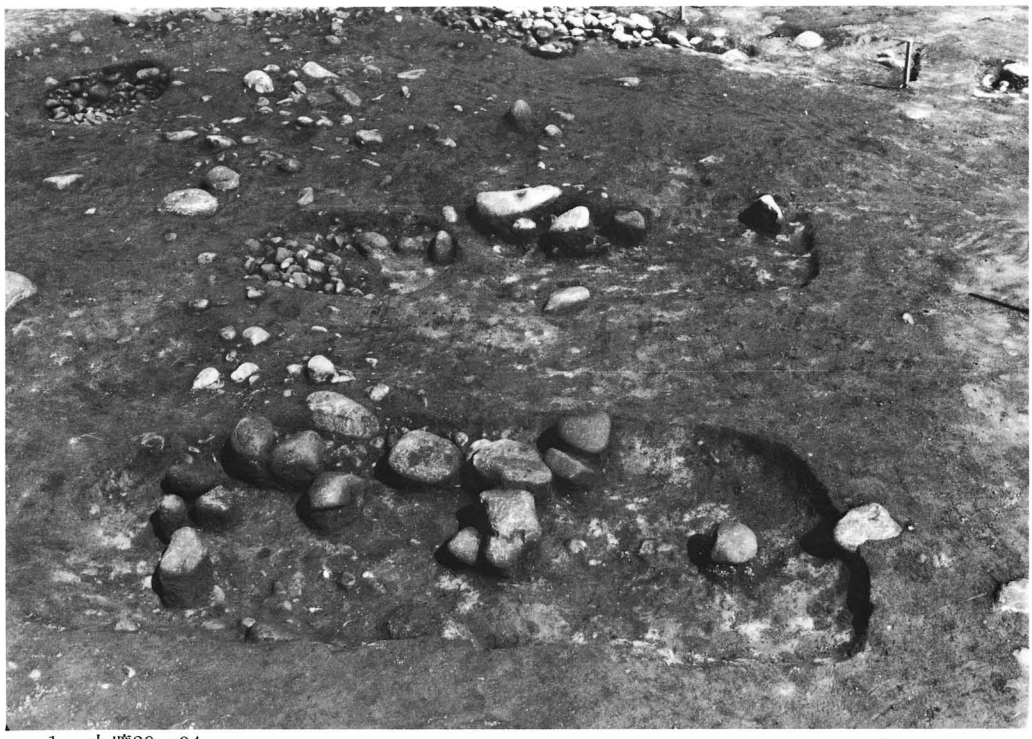
2　溝2内八稜鏡出土状態(近景)

1　第30号住居址内八稜鏡出土状態（近景）

2　溝２内礫検出の状態

1　溝3内礫検出の状態

2　建築址4

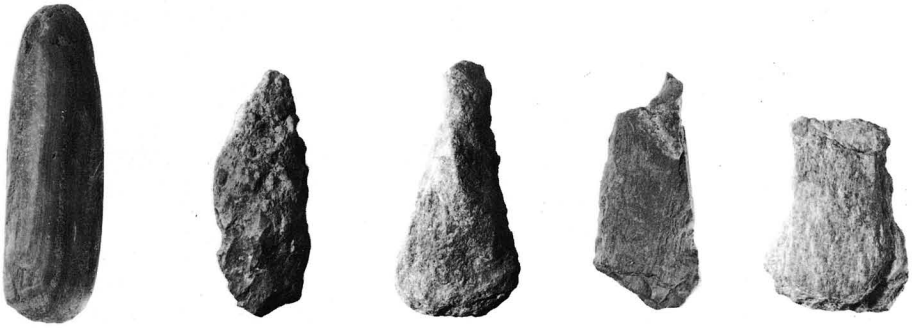


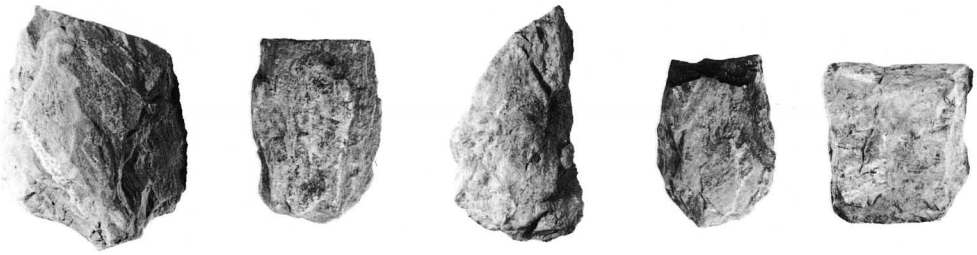
1　土壙29～34

2　構井第１号住居址

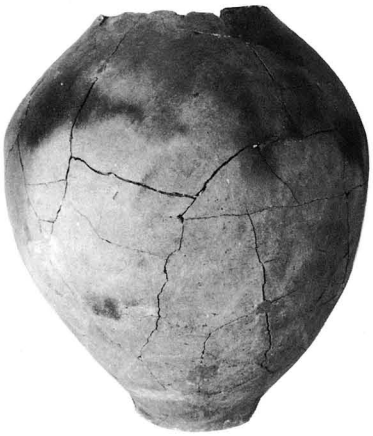
1　構井第3号住居址

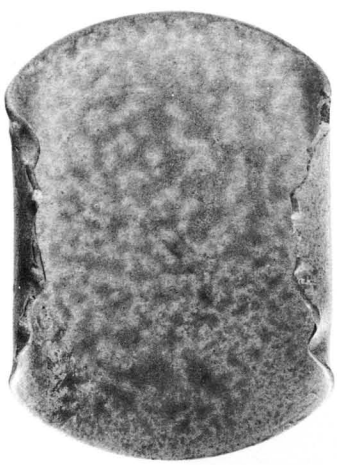
2　構井第4号住居址

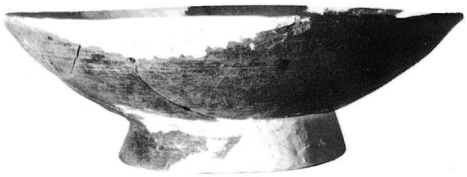




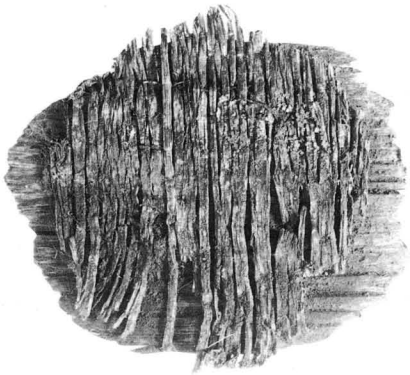
図版34

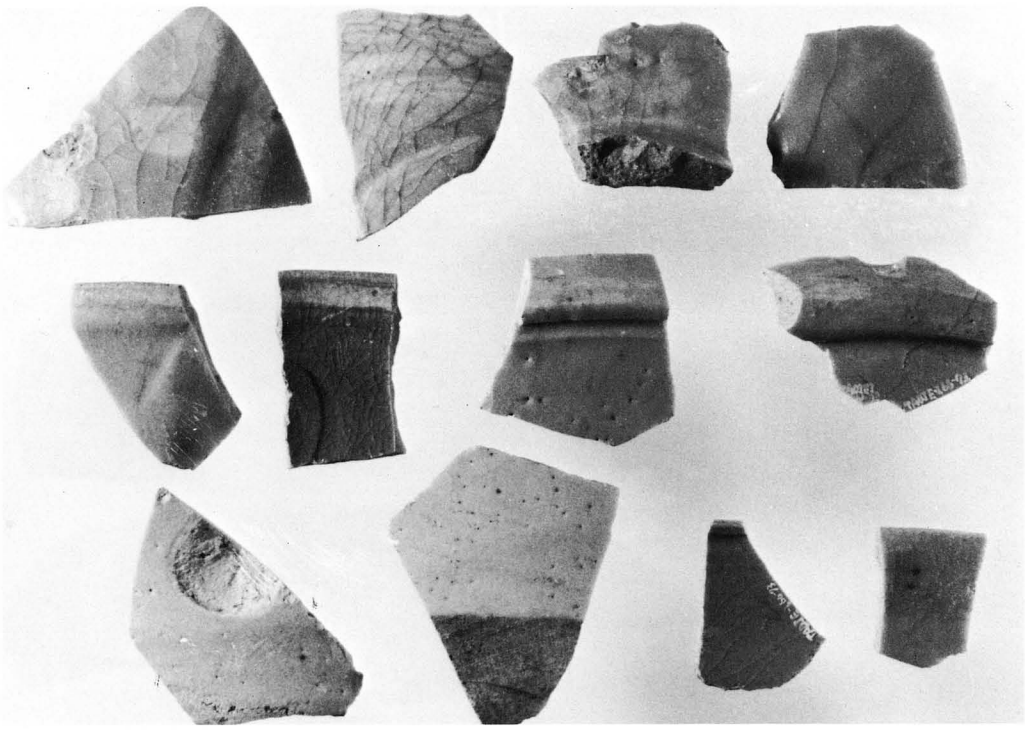




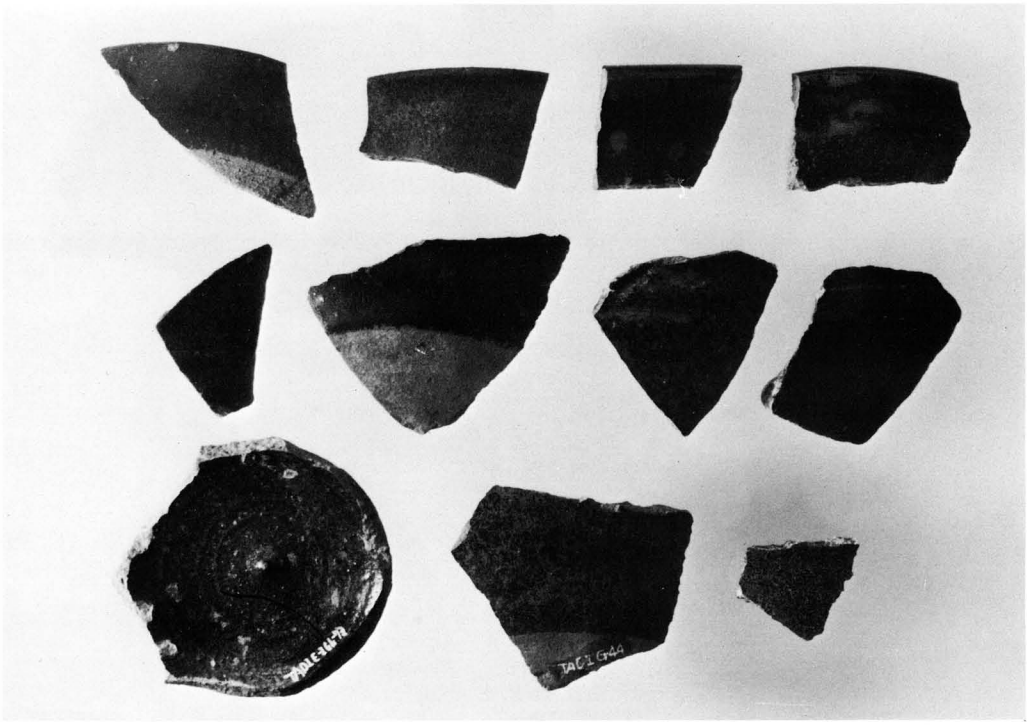


図版38

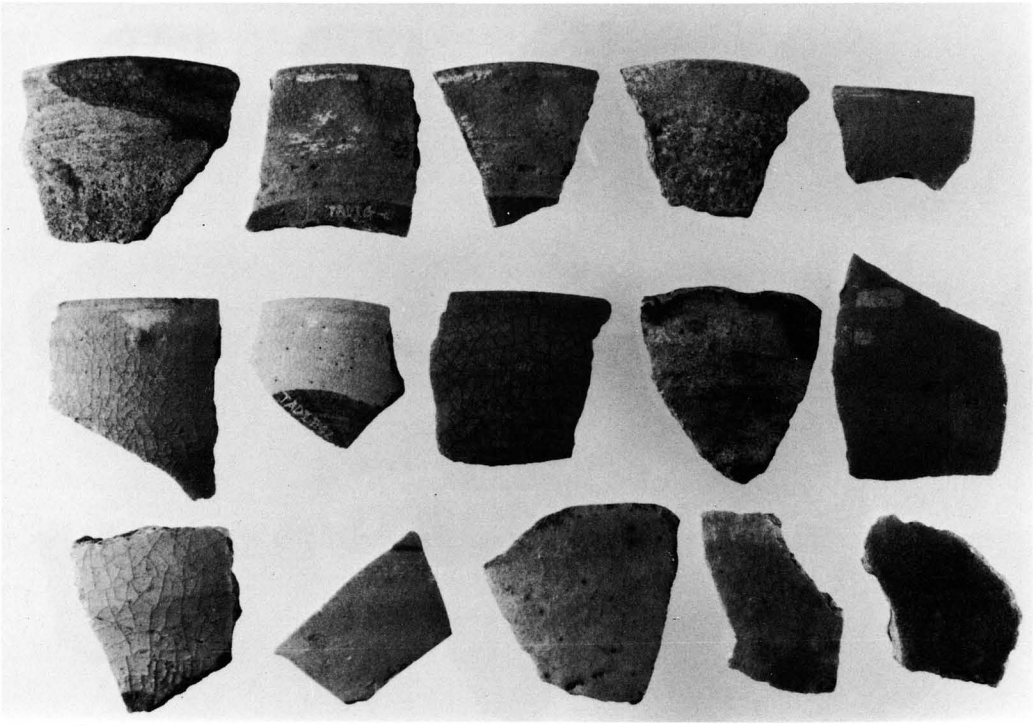




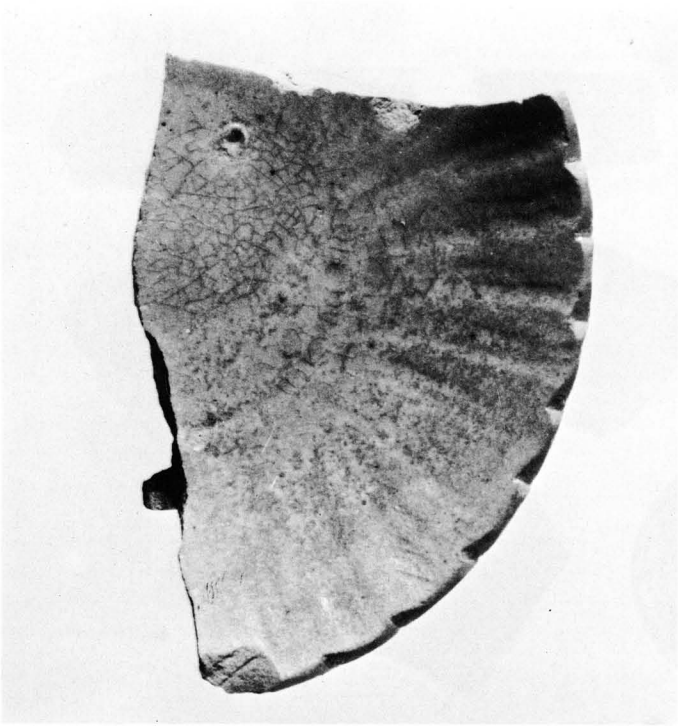
1　青白磁器片



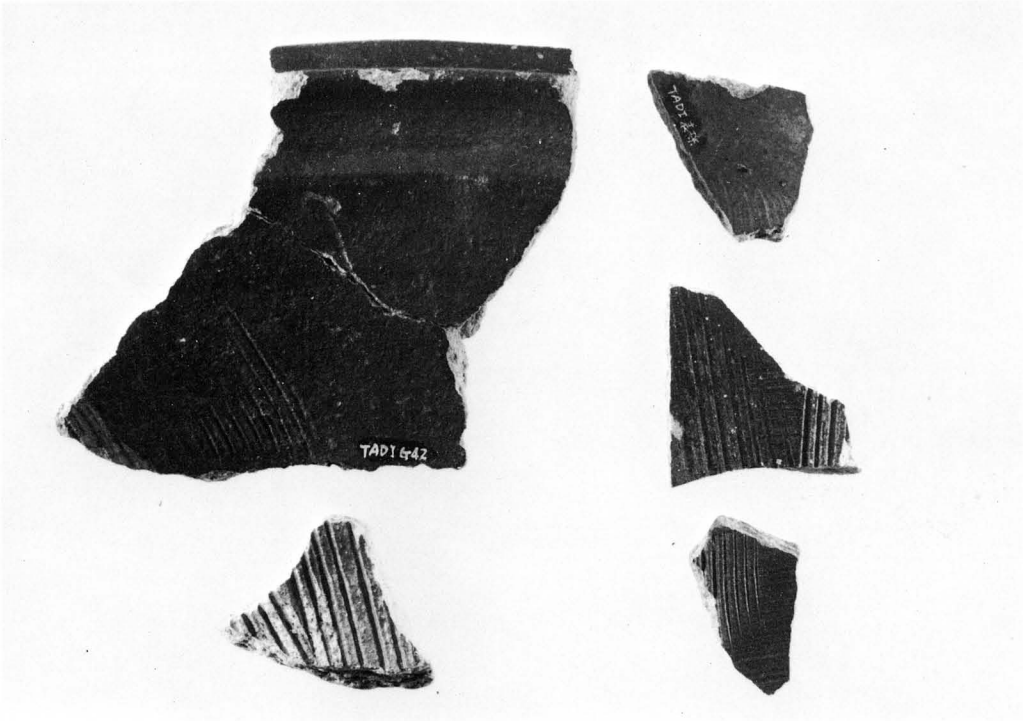
2　天目陶器片



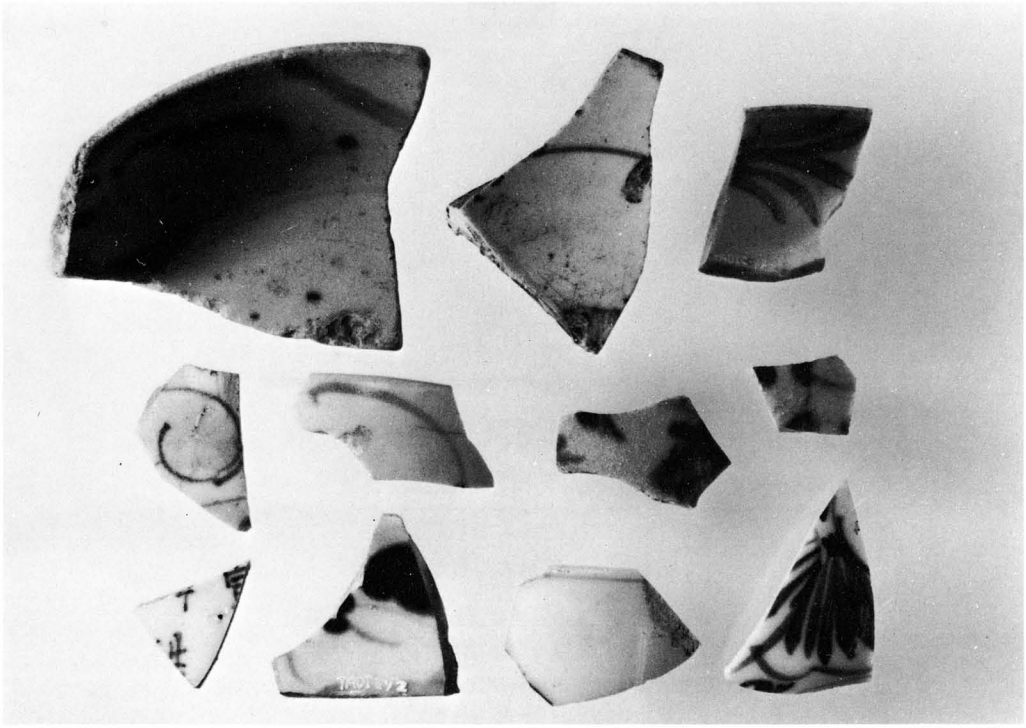
1　瀬戸系陶器片



2　菊花皿



1　櫺鉢片



2　近世磁器片

構井・阿弥陀堂遺跡

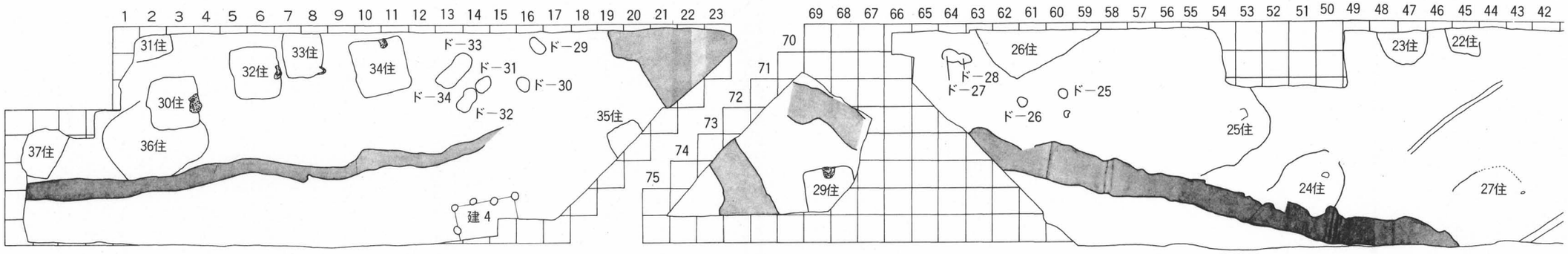
——茅野有料道路内埋蔵文化財発掘調査報告——

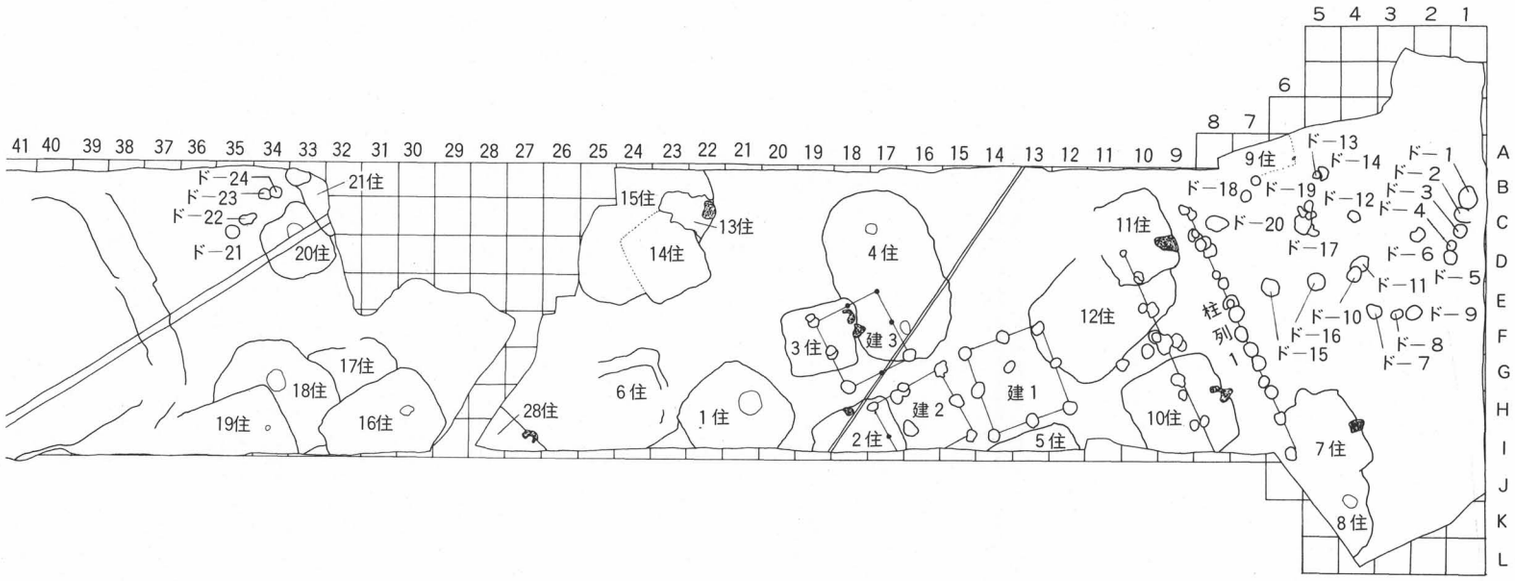
昭和58年3月25日　印刷
昭和58年3月31日　発行

編　集　　長野県茅野市塚原2丁目6番地1
発　行　茅野市教育委員会
印　刷　　長野県長野市中越293番地
ほおずき書籍株式会社

構井・阿弥陀堂遺跡遺構図

構井・阿弥陀堂遺跡遺構平面略図





1：100　NO.1

阿弥陀堂遺跡航空測量図

昭和57年9月測量　座標系 第VIII系

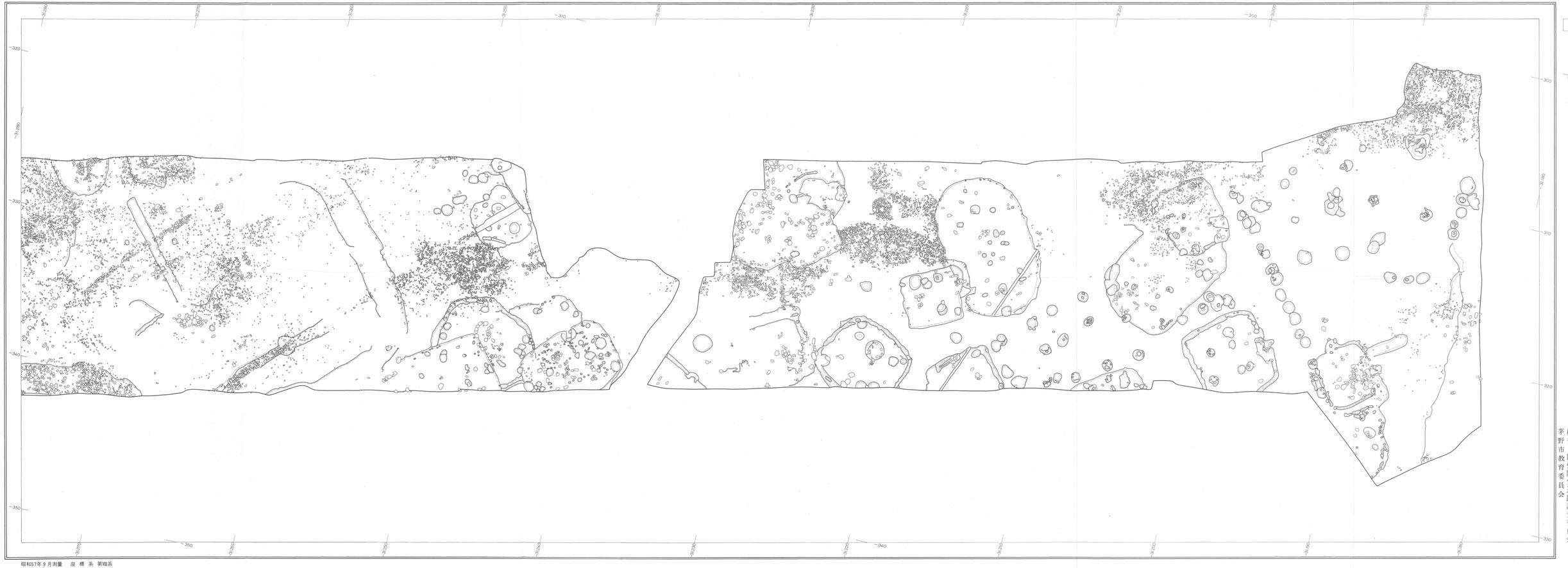
1：100

0　10　20m

構井・阿弥陀堂遺跡調査委員会
茅野市教育委員会

1：100 NO.2

阿弥陀堂遺跡航空測量図



昭和57年9月測量　座標系 第Ⅷ系

1：100

0　20m

1 | 2

構井・阿弥陀堂遺跡調査委員会
茅野市教育委員会